

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第492集

の ざと かみ の なか
野里上遺跡・野中遺跡発掘調査報告書

一般国道4号小鳥谷バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

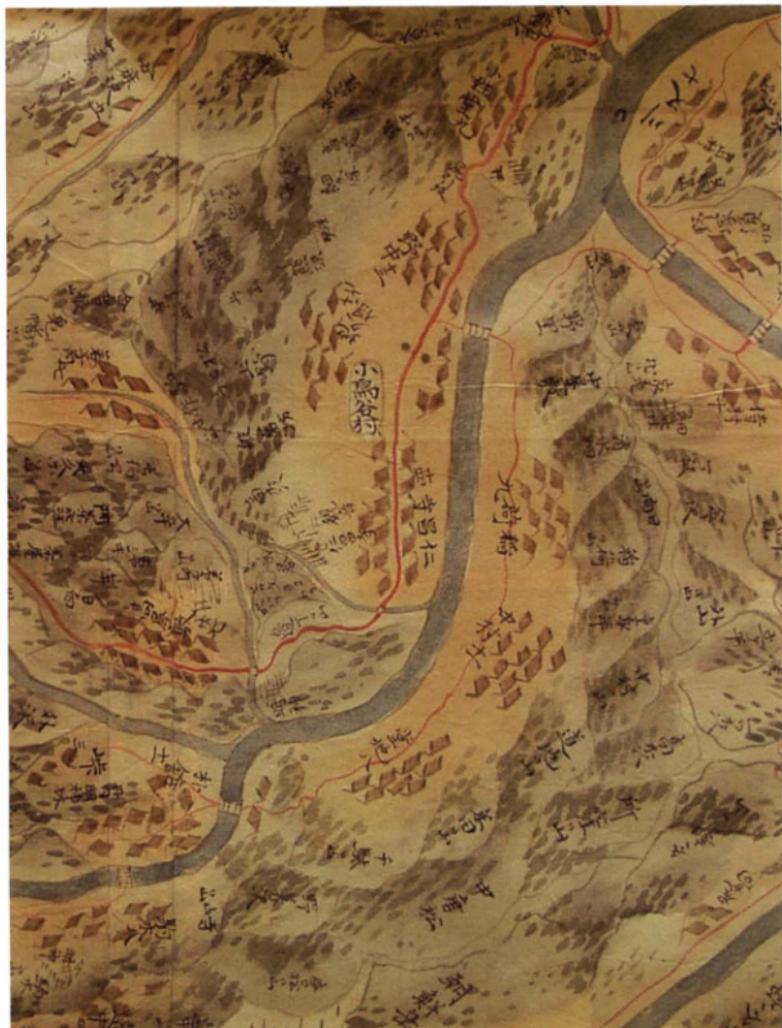
2007

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

(財) 岩手県文化振興事業団
埋 藏 文 化 財 センター

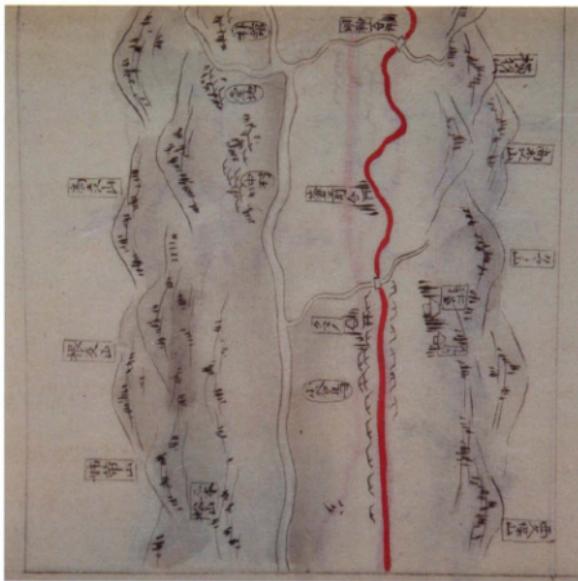
野里上遺跡・野中遺跡発掘調査報告書

一般国道4号小鳥谷バイパス建設事業関連遺跡発掘調査



「御旧領之内福岡通繪図」（盛岡市中央公民館蔵）江戸時代後期？

小鳥谷付近を抜粋。中央を流れる太い河川は平糸川、岡右上で馬淵川と合流する。平糸川の赤い太線は奥州街道である。野里上遺跡は「小鳥谷村」と書かれた付近および「地久保」集落の南東端部分にあたり、集落は山際に営まれ、街道沿いは空白地帯であったことが分かる。野中遺跡は、まさに「野中」集落の描かれた部分にあたり、その立地は現在と変わりない。



「北奥路程記」(写本・岩手県立図書館蔵) 江戸時代後期
江戸時代後期、盛岡藩士の漆戸茂樹により描かれた小鳥谷周辺の様子。左が北である。南北にのびる太い赤線は奥州街道(現在の国道4号)、その東に並行するは平郷川である。野里上邊跡は左回の街道西側「穴久保」と書かれた付近にある。「御旧領之内相岡通輸圖」(巻頭カラー写真図版1)と同じく、集落は山際に描かれている。いっぽう、街道付近を含め低丘部は「ハタ」とあり畑地であったことが窺える。また、野中邊跡は街道沿いの「野中」と書かれた付近にあたり、これも「御旧領」と共通する。



遺跡遠景（南から）



野里上遺跡調査区全景（西から）



野中遺跡調査区全景（西から）



2号耕作痕跡検出状況（東から）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道4号小鳥谷バイパス建設事業に関連して平成17年度に発掘調査された二戸郡一戸町野里上遺跡および野中遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査により、野里上遺跡では奈良時代の集落跡と平安時代の耕作域、中世の火葬関連遺構などが検出され、野中遺跡では中世～近世の建物跡などの存在が明らかとなりました。中でも、野里上遺跡における平安期の耕作痕跡（島作関連）は7区画を数え、当地域におけるTo-a降灰後の農耕、食糧事情などを考える上で重要です。また、中世の火葬関連遺構は検出例が少なく、該期における一戸地域の葬制に関わる様相を考える上で貴重な資料となるものであります。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、一戸町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年3月

財团法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県二戸郡一戸町小鳥谷字穴久保90-2ほかに所在する野里上遺跡と同字野中117-3ほかに所在する野中遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
- 2 両遺跡の調査は、一般国道4号小鳥谷バイパス建設事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳における遺跡番号および遺跡略号は次のとおりである。
野里上遺跡・・・J F 3 0 - 1 0 8 1 · N Z K - 0 5
野中遺跡・・・J F 3 0 - 1 0 3 3 · N N - 0 5
- 4 調査に関わる期間および面積は次のとおりである。
野里上遺跡
野外調査・・・期間 平成17年4月14日～8月31日
面積 12,230m²
室内整理・・・期間 平成17年11月1日～平成18年3月31日
野中遺跡
野外調査・・・期間 平成17年9月1日～9月29日
面積 1,685m²
室内整理・・・期間 平成17年11月1日～平成18年1月31日
- 5 野外調査は丸山浩治、荒谷伸郎、村木敬、藤原大輔が、整理作業は丸山、荒谷が担当した。報告書の執筆は、第Ⅰ章を国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、その他Ⅵ章以外は丸山と荒谷が担当し、執筆頁末に文責を記した。全ての編集、構成は丸山が担当した。
- 6 試料の分析・鑑定は次の機関・団体に委託した。
植物珪酸体分析・・・・・・・・・・・・佐瀬 隆（北方ファイトリス研究室）
土壤分析（植物珪酸体分析・花粉分析）・・・・吉川昌伸（古代の森研究会）
炭化種子・樹種同定・・・・・・・・・・・・吉川純子（古代の森研究会）
放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・株式会社 加速器分析研究所
骨類同定・・・・・・・・・・・・パリノ・サーヴェイ株式会社・金子浩昌
石器・石製品の石材鑑定・・・・・・・・・・・・花崗岩研究会
- 7 遺構図・コンター図作成等、野外調査に関わる図面類はすべて株式会社セビアスに委託した。
- 8 空中写真撮影は東邦航空株式会社に委託した。
- 9 調査および報告書作成にあたり、次の方々・機関から御指導・御協力をいただいた（順不同・敬称略）。
高田和徳・中村明央（一戸町教育委員会）、井上雅孝（滝沢村教育委員会）、菅原 修・小林弘卓（岩手町教育委員会）、東本茂樹（八幡平市教育委員会）、坂本真弓（青森県埋蔵文化財調査センター）、小保内裕之（青森県八戸市教育委員会）、岩手県立博物館、盛岡市中央公民館
- 10 発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。
- 11 調査成果は現地公開資料、調査概報等に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

凡　　例

1　遺構実測図の用例は下記のとおりである。

- (1)　遺構実測図の縮尺は基本的に次のとおりである。ただし一部異なるものもあるため各図にスケールおよび縮尺を付した。

堅穴住居跡	1/60
掘立柱建物跡	1/60
耕作痕跡	1/80
溝跡	1/100
焼土遺構・炭化物廃棄遺構	1/40
土坑	1/40
柱穴状土坑	1/100

なお、基本土層（1/60）を除き断面はすべて1/40である。

- (2)　推定線は破線で示した。

- (3)　層位の表記には、基本土層にローマ数字、各遺構埋土にアラビア数字を使用した。

- (4)　土層色調の観察には、農林水産省農林水産技術會議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。混入物量（%）の目安もこれを参考にした。

- (5)　図面中の上器は「p」、石器および礫は「s」の略号で表記した。

- (6)　挿図中で使用した網掛けおよびスクリーントーンの主な用例は凡例図のとおりである。これ以外の使用箇所については各図に用例を表記した。

2　遺物実測図の用例は下記のとおりである。

- (1)　各遺物の縮尺は基本的に次のとおりである。ただし一部異なるものもあるため各図にスケールおよび縮尺を付した。

縄文土器	1/3
剥片石器・石核	2/3
土師器	1/3
鉄製品	1/2
銭貨	1/1
木製品	1/6

- (2)　遺物の計測位置およびスクリーントーンの用例は凡例図のとおりである。計測値は、残存値の場合（　）で表記した。

3　本文の一部、ならびに挿図中で用いたテフラ名称は『新編　火山灰アトラス』（町田洋・新井房夫 2003）に従い、次のように略称を用いて表している。

白頭山・苦小牧テフラ → B-Tm

十和田aテフラ → To-a

十和田中振テフラ → To-Cu

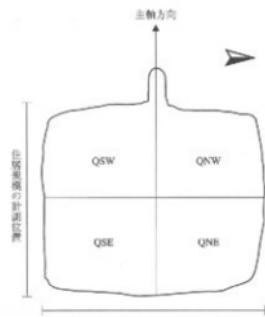
4　国土地理院発行の地形図を転載したものは、図中に図幅名と縮尺を付した。

5　引用・参考文献は各章末に記した。

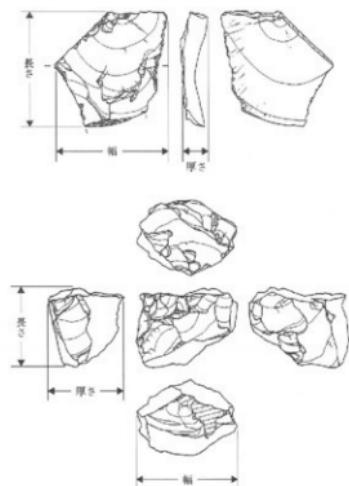
遺構図網掛け用例



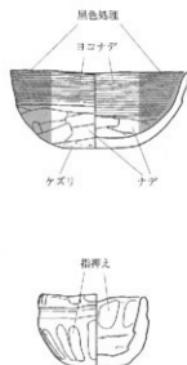
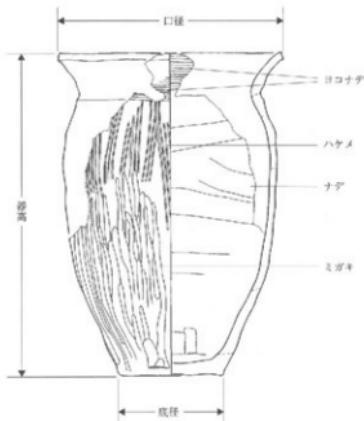
竪穴住居の主軸方向および規模計測用例と平面区割名称例



石器計測位置用例



土師器実測図用例



凡例図

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	1
1 遺跡の位置	1
2 地形と地質	1
3 基本土層	5
4 歴史的環境と周辺の遺跡	5
III 調査と整理の方法	13
1 野外調査	13
2 室内整理	18
IV 野里上遺跡	19
1 検出遺構	19
2 出土遺物	78
V 野中遺跡	103
1 検出遺構	103
2 出土遺物	133
VI 自然科学的分析	137
1 野里上遺跡放射性炭素年代測定	137
2 野里上遺跡の耕作痕跡の花粉化石群と植物珪酸体化石群	139
3 野里上遺跡低湿地試掘トレンチ粘土層の植物珪酸体分析	143
4 野里上遺跡・野中遺跡より出土した炭化種実	154
5 野里上遺跡より出土した木製品および加工材の樹種	157
6 野里上遺跡出土骨同定	159
VII 総括	161
1 まとめ	161
2 考察	163
報告書抄録	218

図版目次

第1図	遺跡の位置	2	第36図	柱穴状土坑群、杭（3）	73
第2図	周辺の地形と水系	3	第37図	S X01	74
第3図	基本土層（1）	6	第38図	S X02~09	75
第4図	基本土層（2）	7	第39図	S X10~13	76
第5図	基本土層（3）	8	第40図	S X14~16	77
第6図	周辺の遺跡（半径10m圏内）	11	第41図	土器形態分類模式図	82
第7図	グリッド設定図	15	第42図	縄文土器（1）	85
第8図	試掘トレンチ位置	16	第43図	縄文土器（2）	86
第9図	野里上遺跡遺構配置とIV層面の標高	46	第44図	縄文土器（3）	87
第10図	野里上遺跡北側遺構配置図	47	第45図	石器（1）	88
第11図	野里上遺跡南側遺構配置図	48	第46図	石器（2）	89
第12図	S I01	49	第47図	石器（3）	90
第13図	S I02（1）	50	第48図	土器形（1）	91
第14図	S I02（2）	51	第49図	土器形（2）	92
第15図	S B01	52	第50図	土器形（3）	93
第16図	S B02, S A01, S D15（1）	53	第51図	土師器（1）	94
第17図	S B02, S A01, S D15（2）	54	第52図	土師器（2）	95
第18図	S K01~04~08	55	第53図	鐵製品、銭貨	96
第19図	S K05~07~09~10	56	第54図	木製品（1）	97
第20図	1号耕作痕跡	57	第55図	木製品（2）、磁器	98
第21図	2号耕作痕跡	58	第56図	野中遺跡遺構配置とVI層面の標高	116
第22図	3号、5号耕作痕跡	59	第57図	S X01	117
第23図	4号耕作痕跡	60	第58図	S K01~06	118
第24図	6号耕作痕跡、7号耕作痕跡（1）	61	第59図	S K07~11	119
第25図	7号耕作痕跡（2）	62	第60図	S K12~16	120
第26図	S D01~02（1）	63	第61図	K17~21	121
第27図	S D01~02（2）、S D03~05~06	64	第62図	K22~27	122
第28図	S D04	65	第63図	K28~33	123
第29図	S D07~09	66	第64図	S K34~38	124
第30図	S D10~14（1）	67	第65図	柱穴状土坑群 第1群	125
第31図	S D10~14（2）	68	第66図	柱穴状土坑群 第3~5群	126
第32図	S D16~18	69	第67図	柱穴状土坑群 断面（1）	127
第33図	S D17~19	70	第68図	柱穴状土坑群 断面（2）	128
第34図	柱穴状土坑群、杭（1）	71	第69図	縄文土器、石器	129
第35図	柱穴状土坑群、杭（2）	72	第70図	鐵製品、錢貨	130

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	10	第14表	縄文土器觀察表	101
第2表	土壤採取地点とフローテーション・セパレーター	10	第15表	石器採取表	101
第3表	S I01~02~04~05~06~07~08~09~010~011~012~013~014~015~016~017~018~019~020~021~022~023~024~025~026~027~028~029~030~031~032~033~034~035~036~037~038~039~040~041~042~043~044~045~046~047~048~049~050~051~052~053~054~055~056~057~058~059~060~061~062~063~064~065~066~067~068~069~070~071~072~073~074~075~076~077~078~079~080~081~082~083~084~085~086~087~088~089~090~091~092~093~094~095~096~097~098~099~0100	10	第16表	縄文土器採取表	102
第4表	S I01~02~04~05~06~07~08~09~010~011~012~013~014~015~016~017~018~019~020~021~022~023~024~025~026~027~028~029~030~031~032~033~034~035~036~037~038~039~040~041~042~043~044~045~046~047~048~049~050~051~052~053~054~055~056~057~058~059~060~061~062~063~064~065~066~067~068~069~070~071~072~073~074~075~076~077~078~079~080~081~082~083~084~085~086~087~088~089~089~090~091~092~093~094~095~096~097~098~099~0100	10	第17表	縄文土器採取表	100
第5表	S B01~02~03~04~05~06~07~08~09~010~011~012~013~014~015~016~017~018~019~020~021~022~023~024~025~026~027~028~029~030~031~032~033~034~035~036~037~038~039~040~041~042~043~044~045~046~047~048~049~050~051~052~053~054~055~056~057~058~059~060~061~062~063~064~065~066~067~068~069~070~071~072~073~074~075~076~077~078~079~080~081~082~083~084~085~086~087~088~089~089~090~091~092~093~094~095~096~097~098~099~0100	10	第18表	縄文土器採取表	100
第6表	S D01~02~03~04~05~06~07~08~09~010~011~012~013~014~015~016~017~018~019~020~021~022~023~024~025~026~027~028~029~030~031~032~033~034~035~036~037~038~039~040~041~042~043~044~045~046~047~048~049~050~051~052~053~054~055~056~057~058~059~060~061~062~063~064~065~066~067~068~069~070~071~072~073~074~075~076~077~078~079~080~081~082~083~084~085~086~087~088~089~089~090~091~092~093~094~095~096~097~098~099~0100	10	第19表	縄文土器採取表	100
第7表	S D01~02~03~04~05~06~07~08~09~010~011~012~013~014~015~016~017~018~019~020~021~022~023~024~025~026~027~028~029~030~031~032~033~034~035~036~037~038~039~040~041~042~043~044~045~046~047~048~049~050~051~052~053~054~055~056~057~058~059~060~061~062~063~064~065~066~067~068~069~070~071~072~073~074~075~076~077~078~079~080~081~082~083~084~085~086~087~088~089~089~090~091~092~093~094~095~096~097~098~099~0100	10	第20表	縄文土器採取表	100
第8表	S D01~02~03~04~05~06~07~08~09~010~011~012~013~014~015~016~017~018~019~020~021~022~023~024~025~026~027~028~029~030~031~032~033~034~035~036~037~038~039~040~041~042~043~044~045~046~047~048~049~050~051~052~053~054~055~056~057~058~059~060~061~062~063~064~065~066~067~068~069~070~071~072~073~074~075~076~077~078~079~080~081~082~083~084~085~086~087~088~089~089~090~091~092~093~094~095~096~097~098~099~0100	10	第21表	縄文土器採取表	100
第9表	S D01~02~03~04~05~06~07~08~09~010~011~012~013~014~015~016~017~018~019~020~021~022~023~024~025~026~027~028~029~030~031~032~033~034~035~036~037~038~039~040~041~042~043~044~045~046~047~048~049~050~051~052~053~054~055~056~057~058~059~060~061~062~063~064~065~066~067~068~069~070~071~072~073~074~075~076~077~078~079~080~081~082~083~084~085~086~087~088~089~089~090~091~092~093~094~095~096~097~098~099~0100	10	第22表	縄文土器採取表	100
第10表	柱穴状土坑杭（1）	99	第23表	縄文土器採取表	100
第11表	柱穴状土坑杭（2）	99	第24表	縄文土器採取表	100
第12表	石器地點別出上量	99	第25表	縄文土器採取表	100
第13表	石器地點別出上量	99	第26表	縄文土器採取表	100

写真図版目次

写真図版1	調査前風景、基本土層（1）	175	写真図版23	縄文土器（3）	197
写真図版2	基本土層（2）	176	写真図版24	石器（1）	198
写真図版3	S I01	177	写真図版25	石器（2）	199
写真図版4	S I02	178	写真図版26	土師器（1）	200
写真図版5	B01~02~S A01, S D15	179	写真図版27	土師器（2）	201
写真図版6	B01~02~S D15, S K01~02~180	180	写真図版28	土師器（3）	202
写真図版7	K03~06~181	181	写真図版29	鐵製品	203
写真図版8	K07~10~182	182	写真図版30	木製品	204
写真図版9	1号耕作痕跡	183	写真図版31	調査前風景、基本上層	205
写真図版10	2号耕作痕跡	184	写真図版32	S X01, S K01	206
写真図版11	3号、4号耕作痕跡	185	写真図版33	S K02~06	207
写真図版12	5号、7号耕作痕跡	186	写真図版34	S K07~11	208
写真図版13	S D01~04~187	187	写真図版35	S K12~15	209
写真図版14	S D04~09~188	188	写真図版36	S K18~22	210
写真図版15	S D10~14~189	189	写真図版37	S K23~26	211
写真図版16	S D16~18~190	190	写真図版38	S K27~31	212
写真図版17	柱穴状土坑群、杭	191	写真図版39	S K33~38	213
写真図版18	S X01~07~192	192	写真図版40	柱穴状土坑群 第1・2・4・5群	214
写真図版19	S X08~12~193	193	写真図版41	柱穴状土坑群 第3群	215
写真図版20	S X13~16~194	194	写真図版42	縄文土器、石器	216
写真図版21	縄文土器（1）	195	写真図版43	鐵製品、銭貨	217
写真図版22	縄文土器（2）	196			

I 調査に至る経過

「野里上遺跡」および「野中遺跡」は、小鳥谷バイパス改良工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道4号は、東京都中央区を起点として青森県青森市に至る延長約858kmのわが国最長の国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

小鳥谷バイパスは、二戸郡一戸町大字小鳥谷字中村を起点とし同町大字岩館字子守を終点とした国道4号の人家密集、幅員縮小による交通混雑と急カーブの連続、冬季間の凍結、降雪等による交通険路の解消を図り、交通安全の確保、沿道環境の改善を図ると共に周辺市町村と連携を強化して地域活性化の支援を目的とする道路として、延長約4.3kmとして昭和63年度に事業着手し、平成7年度に用地着手、平成16年度に工事着手し平成17年度は、起点側の新稻荷橋（仮称）に工事着手した。

平成19年度に起点から野中橋までの約2.6kmを暫定2車線供用を目指し鋭意事業を進めている。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が平成元～2年度に分布調査を実施し、「野里上遺跡」および「野中遺跡」を確認している。

同遺跡の試掘調査は平成16年度に実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会は岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成17年4月1日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長と受託契約を締結し、「野里上遺跡」および「野中遺跡」の発掘調査に着手した。その結果、遺構、遺物等の確認がなされた。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

II 遺跡の立地と環境

1 遺跡の位置（第1図）

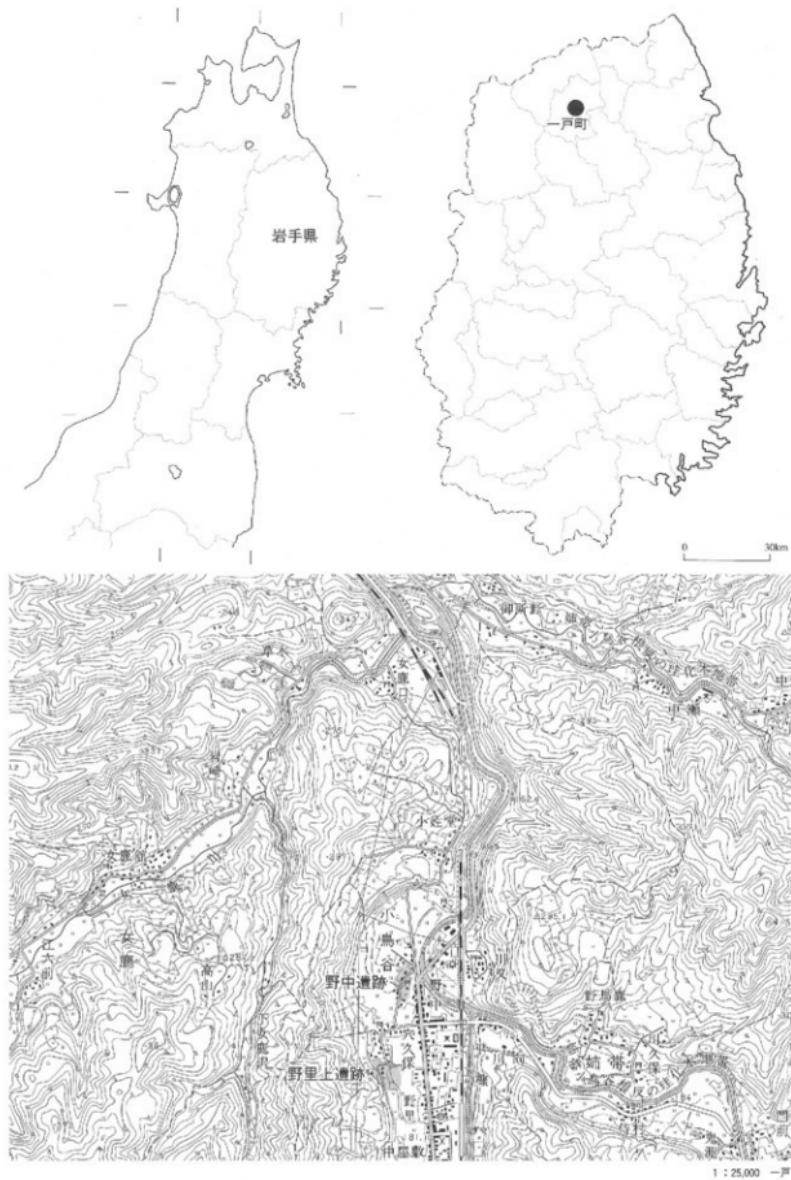
野里上遺跡・野中遺跡は岩手県二戸郡一戸町小鳥谷に所在する。地形図上では、国土地理院発行の1:25,000地形図「一戸」図幅に含まれ、いわて銀河鉄道小鳥谷駅の北西約500～800mに位置する。野里上遺跡の緯度・経度は北緯40度10分27秒、東經141度18分14秒を測る。

2 地形と地質

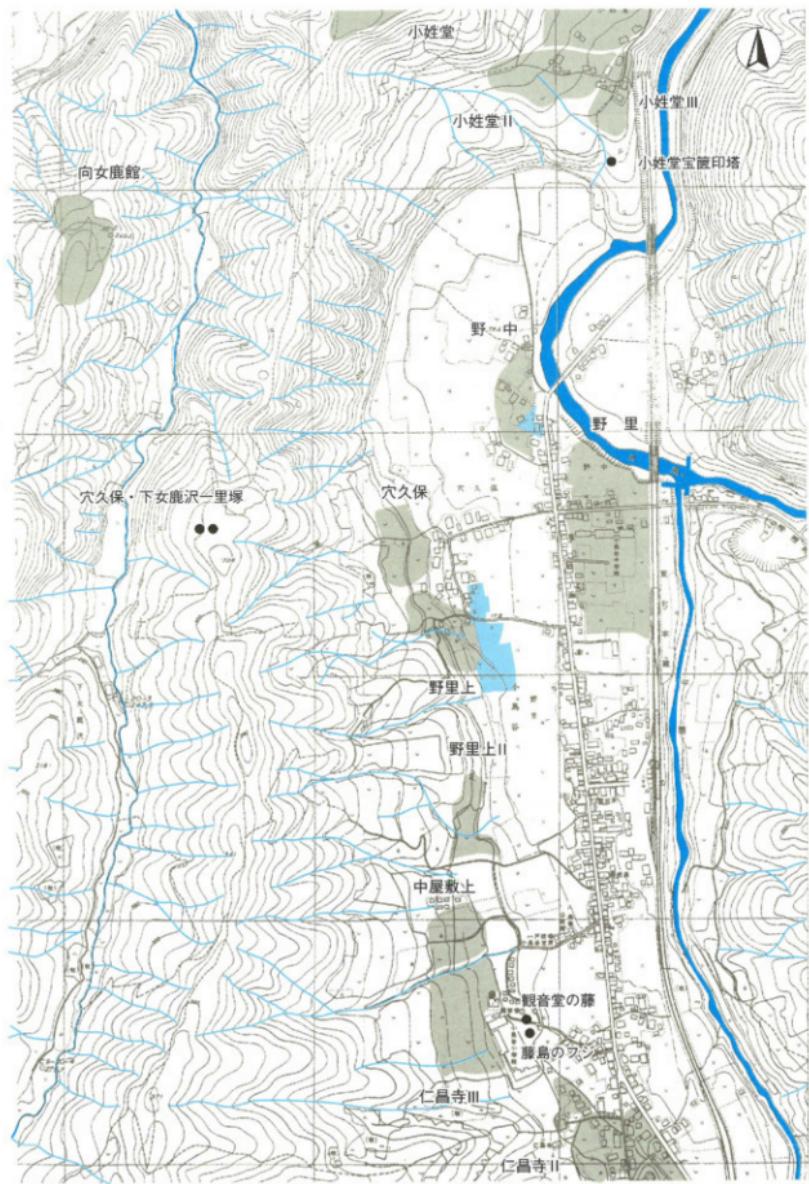
（1）地理的環境と調査区の微地形（第2図）

一戸町の東部には北上山地、西部には奥羽山脈があり、南は国道4号およびJR東北本線の路線上最も標高が高く南北の分水嶺ともなっている奥中山高原（十三本木峠）が存在する、東・南・西を山地によって囲まれた地形を呈している。町域の約80%が山林原野である。奥中山高原を水源地とする主な河川には、南流する北上川と、北流し一戸町内を通る平穏川、小繁川、女鹿川、小滝川があり、後4者は馬瀬川と合流してさらに北流する。基本的に馬瀬川流域の標高は南高北低で、二戸市、青森県三戸町へと続いている。馬瀬川は県北部第一の規模を誇る河川であり、その流域開析規模も最も大

1 遺跡の位置



第1図 遺跡の位置



第2図 周辺の地形と水系

一戸町道跡地図（1995年度）より転載・一部改変

きい。これは一戸町内でも例外ではなく、町中心部の子守付近から北部の小井田付近にかけて比較的大規模な河岸段丘が数段形成され、ここを中心に現在の市街地が営まれている。いっぽうで、町南部の河川は令流前の支流であり、小規模であるため平坦面があまり発達せず細長い。とくに平糠川の中山～小鳥谷南部間は流路距離約12～3kmに対し高低差が約400mもある急流で、水平方向への開析が発達していない。このため町南部の集落および耕地は、各河川流域の狭い平坦面とその高位側縁部に沿うように発達している。

遺跡の所在する小鳥谷地区は、平糠川によって形成された最大の開析地で、また同流域中最大の集落が形成されている。東西には小丘陵が南北に連なる。現況において、野中遺跡は小鳥谷地区の北端、平糠川が馬淵川と合流する地点のすぐ西側にあたる平坦面に立地している。また、野里上遺跡は西側丘陵から続く東向き緩斜面とその東に広がる平坦面によって構成されるが、同遺跡の所在する穴久保付近は丘陵の切れ目に当たり、ここから東流して平糠川に注いでいた旧河川が存在していたことから扇状地地形を呈する。両遺跡所在地の段丘区分は大半が砂礫段丘（小鳥谷段丘）に相当し、野里上遺跡の南西部が火山灰砂段丘崖にかかっている（一戸町誌編纂委員会1982）。調査区の標高は、野里上遺跡が176～181m、野中遺跡が172～174mで、平糠川・馬淵川現河床面との比高差は数mである。

また、調査における堆積土観察の結果、野里上遺跡の南東部および野中遺跡のほぼ全域が南北方向の微高地状を呈していたことが判明している。いずれも砂疊層の検出レベルが他に比して高い。方向的に考えて平糠川によって形成された自然堤防と推定される。これ以西から火山灰砂段丘崖までの間に砂疊層形成レベルが低く、前述の旧河川など西側丘陵～火山灰砂段丘崖から雨水等が流入する環境にあり、かつ排水性が低く停滞しやすいことから後背湿地を呈していたようである。

現在、自然堤防上は国道4号とJR東北本線、およびこれに沿うように居住域が形成され、後背湿地は水田、火山灰砂段丘は居住域として利用されている。当該地域における選地のあり方については、以下の2資料により近世まで遡ること可能である。1つは江戸時代後期に描かれたとされる『御用領之内福岡通輪図』（巻頭図版1）で、ここには地名、主要道路および川・橋、集落名と戸数が記載されている。野里上遺跡の調査区は「地久保」集落の東端から奥州街道までの間で、何の表記もない部分に当たる。野中遺跡の調査区はまさに「野中」集落が描かれた部分である。もう1つは同じく江戸時代後期に盛岡藩上塗戸茂樹により著された『北奥路程記』（巻頭図版2）で、奥州街道沿いの風景が簡略な文章とともに描かれている。本資料においても集落位置は基本的に前者と変わりないが（集落名については前者で「地久保」「仁昌寺」であったものが「穴久保」「小谷鳥」と表記されている）、野里上遺跡の調査区付近に「ハタ」という記載があり、畑作耕地として利用されていた場所だったことがわかる。一戸町誌によれば、明治40年代の小鳥谷村（当時）における耕地面積は、水田が明治42年で90町2反歩、同44年で66町歩などに對し、畑は254町6反歩、578町8反歩を数え、明治44年における水田率は11.4%とされる（一戸町誌編纂委員会 1982）。このように、農耕の中心は近代以来も畑作であり、少なくとも近世から近代の選地はほぼ変わらないことが窺い知れる。

（2）地 質

小鳥谷地区の基盤は大半が砂岩で、そのほか泥岩、安山岩質岩石、珪岩質岩石、輝綠凝灰岩で形成される。平糠川流域には砂礫が広く発達し、朴館から稻荷付近までは東岸に、ここから野中付近までは西岸に広がる。本遺跡群はこの砂礫上に立地する。また、さらに西側には小丘陵頂部までの間に碎屑物が広がり、これは朴館から野中付近まで続いている。前述のように西岸は扇状地地形を呈しており、これに起因するものであろう。

3 基本土層(第3~5図、写真図版1・2・31)

調査した2遺跡は近接し、地形的にも連続している。土層観察の結果、地点により欠落する層は生じるもの的には一連の堆積過程で形成されたものと判断された。ただし、野里上遺跡調査区東部は後背湿地で堆積が異なり、別途断面図を作成した。なお、一戸町域においては十和田火山起源とされる複数種のテフラの堆積が確認されているが、両遺跡で確実に判別されたものは十和田aテフラのみであり、これは遺構埋土および低位面に堆積している。

I a層：現表土（耕作土）。

I b層：昭和に行なわれた耕地造成時の盛土。

II 層：10YR3/1 黒褐色 シルト 粘性中・しまり中。

III 層：10YR2.5/1 黒～黒褐色 シルト 粘性中・しまり中。

IV 層：2.5Y7/1 灰白色 テフラ 粘性なし・しまり強。

III層下位に堆積。十和田aテフラ（以降、To-aと表記）。

V 層：10YR3/3 暗褐色 シルト 粘性中・しまり中。

礫・破碎礫（～5cm）少量混入。水成堆積による礫の多量混入地点あり。

VI 層：10YR2/1 黒色 シルト 粘性中・しまりや弱。

礫・破碎礫（～3cm）少量混入。

VII 層：10YR3.5/3 暗褐色～ぶい黄褐色 シルト 粘性中・しまり中。

礫・破碎礫（～3cm）少量混入。水成堆積による礫の多量混入地点あり。

VIII 層：10YR5.5/2 灰黃褐色 砂質シルト 粘性中・しまり強。

水成堆積。ラミナ顯著。

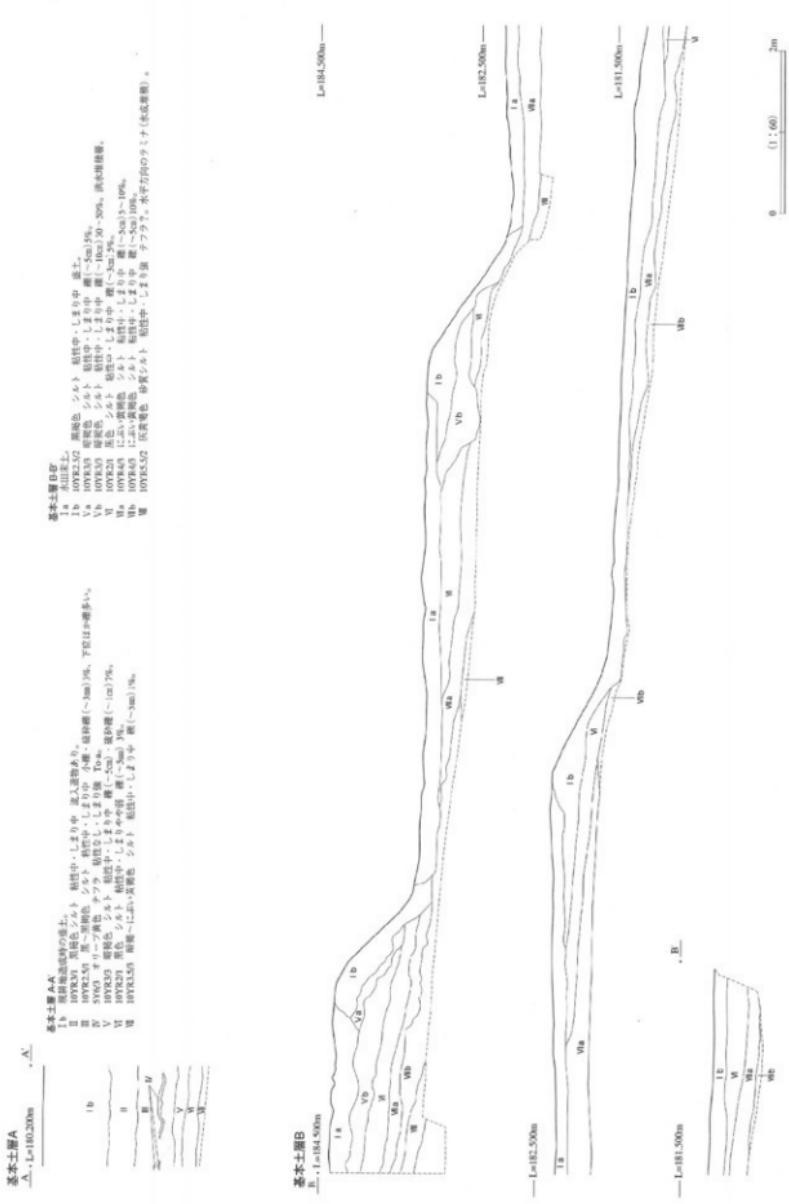
遺構検出面はIV～VII層である。V層は色調が褐色土主体で、上下のIII層、VI層が黑色土主体であることから一般的な自然堆積とは異なる要因が働き形成された層と捉えられる。同層は局所的な堆積ではなく、野里上・野中両遺跡に共通して認められることから、その要因は大規模であったことが窺われる。なお、同層は西側斜面部にも同様に認められることから西側丘陵～火山灰砂段丘から流入した可能性が高く、To-aが降下するよりも前の一期間に、おそらく前述した扇状地付近を中心に一定期間連続して堆積したものと推定される。

戦後に行なわれた耕地造成および宅地造成により、元々高位であった野里上遺跡西部と野中遺跡東半部は削平され、I層直下でV層以下が露出する箇所が多い。

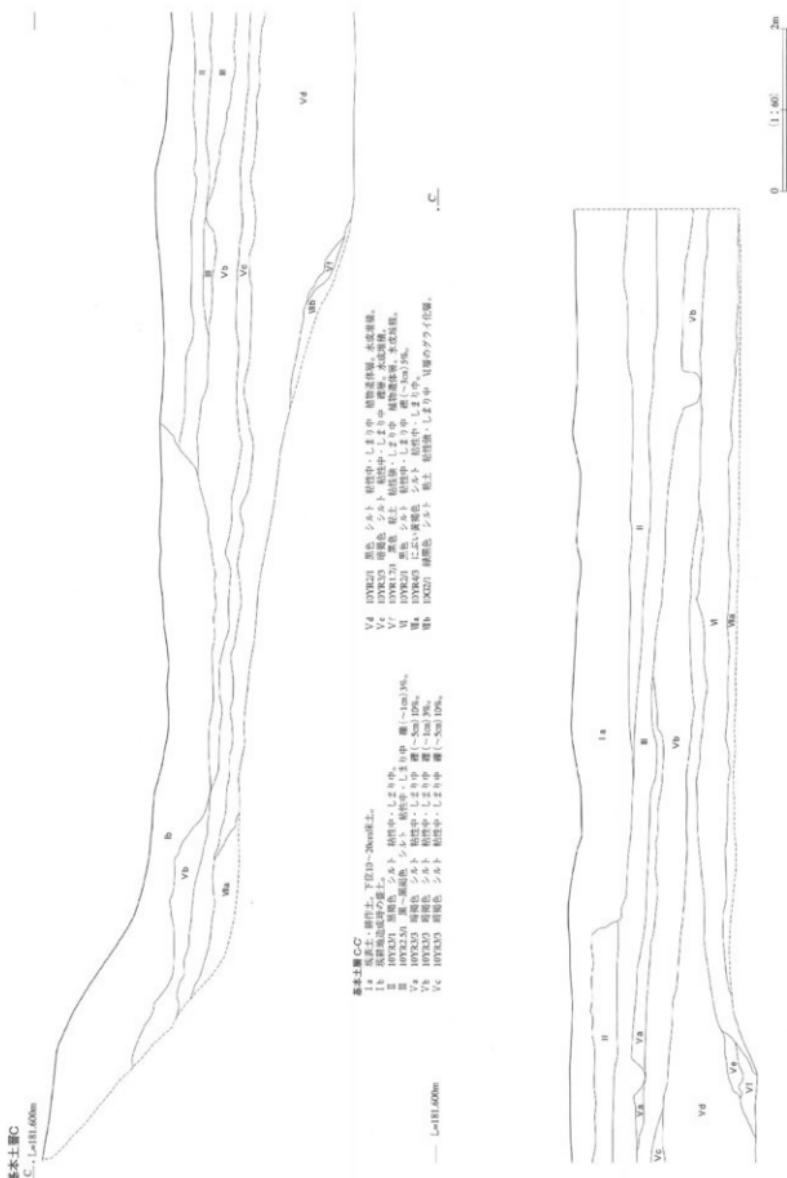
4 歴史的環境と周辺の遺跡(第6図、第1表)

野里上・野中両遺跡で検出された主な遺構の構築・使用時期と推定される古代～近世に絞り、周辺地域、とくに小鳥谷の歴史的環境を概観する。これに関連して、野里上・野中遺跡を中心とした半径10kmの同心円内に所在する該期遺跡を第6図・第1表に示した。この範囲内には、二戸市（旧二戸市・淨法寺町）と九戸村の一部も含まれる。

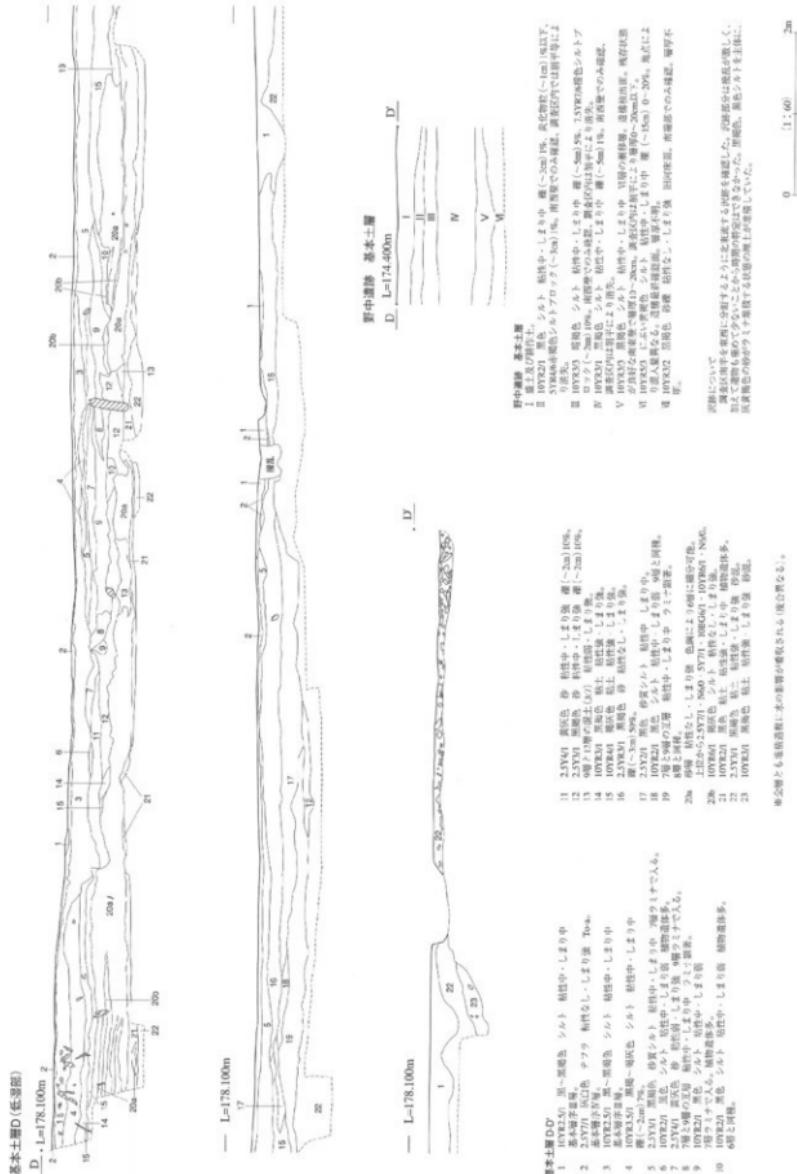
古代に所属する遺跡は281箇所存在する。このうち、発掘調査により居住域が確認されたものは、一戸町子守A(No24 以下「No」省略)・御所野(25)・田中(27)・田中III(28)・田中IV(29)・田中V(30)・上野(37)・北館B(64)・一戸城跡(65)・小井田V(69)・川原田平(143)・二戸市火行塚(203)・大向II(208)・大向上平(211)・旧淨法寺町天台寺跡(226～230)・九戸村黒穴の昔穴(241)の各遺跡で、いずれも半径2km圏外である。一戸町内の11遺跡はすべて馬鹿川流域に立地しており、とくに同川右



第3図 基本土層 (1)



第4図 基本土層（2）



第5図 基本土層 (3)

岸の岩館から一戸にかけては一大集落の存在が確認されている。このほか、未調査ながら該期の痕跡が確認されている遺跡の立地は、馬瀬川とその右岸支流の姉帶川・小井田川、左岸支流の女鹿川・小友川・ニッ石川・竜頭川の各河川流域に見られ、とくに左岸支流（ニッ石川右岸）における密集度が高いようである。いっぽう、十三本木峰から流れる平塚川と小弊川の流域では、上流の中山（図外）で幾分まとまりが見られるもののそれ以降馬瀬川との合流地点までほとんど見られない。前述のように中山から小鳥谷南部までの間は急流で水平方向への開析が発達せず、これに起因するものであろう。しかし、開析の進んだ小鳥谷地内においても該期の遺跡は小姓堂II(11)以外登録されておらず、遺構は野里上遺跡の検出例が初見となる。今回の調査では、検出数は少ないものの居住域の存在が明らかとなっており、一辺8m強の大形住居跡の存在から本地域における中心的な場所であった可能性が高い。

中世に比定される遺跡は58箇所存在し、そのほとんどは城館跡である。よって立地は河川流域の高台に集中する。小鳥谷では本遺跡群の南方約1kmに五月館(8)があり、字名は異なるが半径2km圏内には北西約1.3kmに女鹿館(13)、東方約1.5kmに発掘調査が実施された姉帶城(18)がある。五月館は延暦・弘仁頃のチャシとされるがはっきりしない。一戸町誌では天正頃に「小鳥谷撰津（小治屋攝津とも）」が居住した小鳥谷館は五月館を指したものとしている（一戸町誌編纂委員会1982）。中世の当地域は天正19年の九戸の乱まで一戸南部氏の支配下であったとされ、文献資料も幾分存在し領主階級以上の様子は比較的窺い知り易い。いっぽうで、城館跡関連以外の「一般集落」に関わる遺構検出遺跡は仁昌寺II、田中、上野、西火行塚墓群(183)、そして今年度発掘調査した野里上II(3)と決して多くない。これらの立地も比較的高位の安定した河岸段丘上に多い。遺構種はいずれも掘立柱建物跡、堅穴建物跡などである。野里上・野中の両遺跡では墓域が検出されており、特に野里上における火葬関連遺構の存在は特筆される。

近世に比定される遺跡は16箇所存在する。現存しないため未登録であるが、小鳥谷字野中の奥州街道筋に一里塚があったとされており、『北奥路程記』によると穴久保集落と野里集落の間、「姉帶道」の南側に描かれている。近世の奥州街道は五月館の西側を通り、野中まで現国道4号沿いに進み、そのまま渡河せず馬瀬川左岸を走って小姓堂へと続く。野中遺跡は一里塚の北側、街道西側に隣接していた。該期の遺跡で発掘調査されたものは少なく、文献資料が豊富な反面、埋蔵文化財面ではほとんど未知であるといってよい。町内で調査が成されているのは仁昌寺IIのみで、掘立柱建物跡のほか、寺院の門前ということもあってか墓坑群が検出されている。

(丸山)

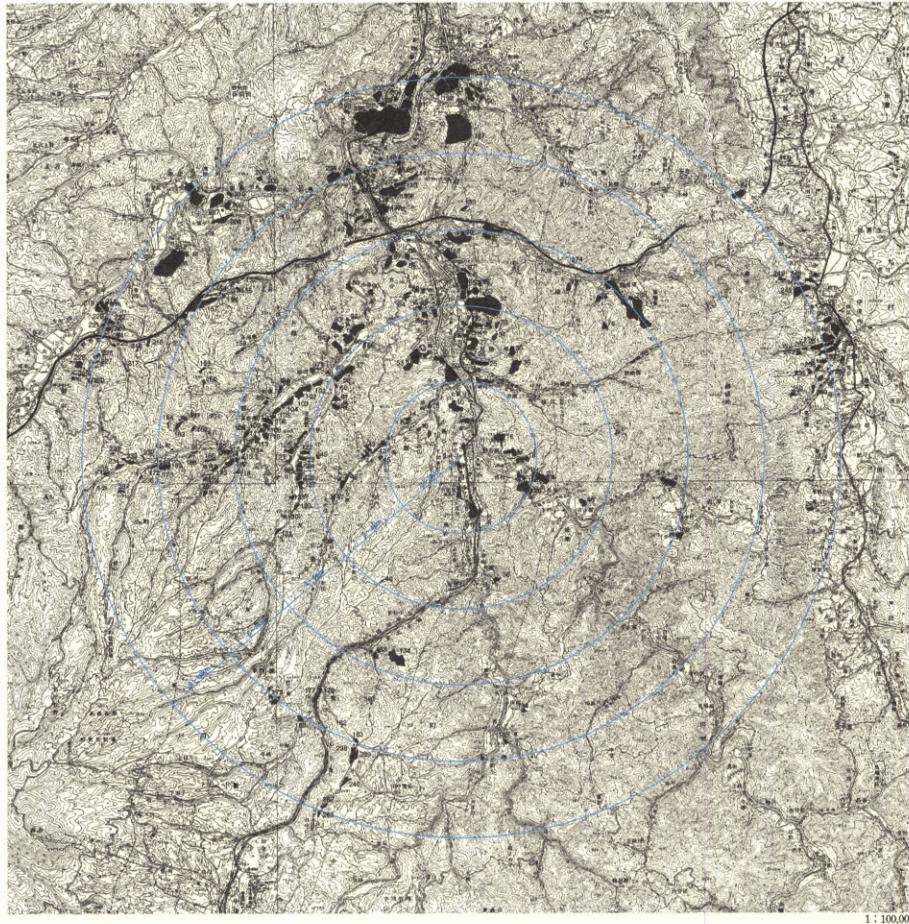
引用・参考文献

- 一戸町教育委員会 1996 『一戸町遺跡地図（1995年版）』
- 一戸町誌編纂委員会 1982 『一戸町誌（上巻）』
- 一戸町誌編纂委員会 1986 『一戸町誌（下巻）』
- 岩手県教育委員会 2005 『岩手県遺跡台帳』（CD-ROM版）
- 後戸茂樹 江戸時代後期 『北奥路程記 壇』（写本）
- （財）岩手県文化振興事業団蔵文化財センター 2002 『仁昌寺II遺跡・仁昌寺遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書第100集

第1表 周辺の遺跡一覧

面積	No.	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	面積	No.	遺跡名	遺構	時代	遺構・遺物
1	野草上	集落跡	韓文、奈良・近世			72	下幡山	集落跡	奈良、平安	平安(土師器)	
2	対中	集落跡	韓文、リ~近世			73	日ノ上丘	散布地	鷦鷯文、平安	奈良土器	
3	野草上・Ⅱ	集落跡	韓文、平安、中世			74	小木田邱	城跡跡	中世		
4	小幡散上	散布地	鷦鷯文			75	野所跡	散布地	平安	土師器	
5	仁高寺	散布地	韓文			76	東原村	散布地	平安	土師器、須恵器	
6	仁高寺Ⅱ	集落跡	韓文、中~近世			77	深津	散布地	弥生、平安	須恵器	
7	昌子山・Ⅲ	集落跡	韓文、平安			78	中庄散	散布地	鷦鷯文、古代	土師器	
8	五月畠	城跡跡	中世			79	中野	散布地	平安	土師器、土製品	
9	久次久・下女廻	近傍	塚			80	野瀬駒	散布地	平安	土師器	
~2 km	一里塚	土	塚			81	一本木	散布地	平安	土師器	
10	女郷口Ⅱ	散布地	平安			82	足利門型	城跡跡	古代~	土師器	
11	小野口Ⅱ	散布地	古氏			83	度谷	散布地	平安	土師器	
12	向山御塚	散布地	古代			84	牛屋敷	散布地	平安	土師器	
13	女郷船	城跡跡	古代、中世			85	猪ノ口	散布地	奈良、平安	土師器	
14	女郷船	散布地	平安			86	猪ノ口Ⅰ	散布地	奈良、平安	土師器	
15	石崎	散歩地	平安			87	猪ノ口Ⅱ	散布地	平安	土師器	
16	野鳥塚Ⅱ	散歩地	奈良、平安			88	猪ノ口Ⅲ	散布地	中世	土師器、須恵器、青銅、三郎	
17	野鳥塚	散布地	平安			89	小瀧川	散布地	平安	土師器	
18	野鳥塚跡	城跡跡	中世			90	小瀧川Ⅱ	城跡跡	中世	鐵切、平場、立堀	
19	鬼丸	散布地	平安			91	袖子川	散布地	平安	土師器、須恵器、鐵切	
20	鬼丸Ⅱ	散布地	平安			92	袖子川Ⅱ	散布地	平安	土師器	
21	門前	散布地	奈良			93	猪ノ口Ⅲ	散布地	平安	土師器	
22	根岸船	城跡跡	中世			94	馬糞跡Ⅱ	散布地	平安	土師器	
23	津佐	散布地	平安			95	袖子	散布地	平安	土師器	
24	子守人	散布地	平安			96	馬糞野	散布地	平安	土師器、須恵器	
25	朝時跡	散布地	平安			97	塙	散布地	古代	土師器、須恵器	
26	猪	散歩地	鷦鷯文、古代			98	猪	散布地	平安	土師器	
27	田中	散歩地	中世			99	小瀧川	城跡跡	中世	鐵切、平場、立堀	
28	田中Ⅱ	散歩地	平安			100	金葛	散布地	奈良、平安	土師器、須恵器	
29	田中Ⅳ	散歩地	平安			101	愛宕山	散布地	平安	土師器、須恵器	
30	田中Ⅴ	散歩地	平安			102	丹波船(泉田曲輪)	城跡跡	中世	二重堀、平場、土師器	
31	一ノ門中	散歩地	奈良、平安			103	猪	散布地	古代		
32	一ノ門中Ⅱ	散歩地	奈良、平安			104	猪	散布地	平安	土師器	
33	芦戸中Ⅲ	散歩地	奈良、平安			105	浦上	散布地	平安	土師器	
34	上原切口Ⅱ	散歩地	古代(平安)			106	浦上	散布地	平安	土師器	
35	上原切口	散歩地	平安			107	丹羅山坪Ⅱ	城跡跡	中世	土師器、陶器類、草鞋、土	
36	鶴見野原Ⅱ	散布地	平安			108	月潟中坪	散歩地	奈良、平安	土師器、陶器類	
37	上野	畜糞跡	古代、中世			109	葛	散布地	奈良、平安	土師器、陶器類	
38	剣本	散布地	鷦鷯文、塚			110	鳥居山	散布地	平安	土師器、須恵器	
39	川原一里塚	一里塚	近世			111	内ノ川	散歩地	奈良、平安	土師器、須恵器	
40	葉舟子・上方面	星塚	近世			112	内ノ川	散歩地	奈良、平安	土師器、須恵器	
41	中村町	散歩地	平安			113	内ノ川	散歩地	中日		
42	中村町	散歩地	平安			114	只見跡	集落跡	奈良、平安	土師器、陶器類	
43	中村Ⅱ	散歩地	平安			115	只見町	散歩地	奈良、平安	土師器、陶器類	
44	中村	散歩地	平安			116	吉田	散歩地	奈良、平安	土師器、陶器類	
45	久留川内線	城跡跡	中世			117	横原	散歩地	奈良、平安	土師器	
46	上ノ丸	散歩地	平安			118	船形城跡久保	散歩地	奈良、平安	土師器、陶器類	
47	大字座N	散歩地	平安			119	安世船	散歩地	平安	土師器	
48	月花	散歩地	平安			120	半井	散歩地	平安	土師器	
49	半井・素姫	城跡跡	中世			121	半井裏Ⅱ	散歩地	奈良	土師器	
50	若ノ船	城跡跡	中世			122	半井裏Ⅲ	散歩地	奈良	土師器	
51	閑院	散歩地	奈良			123	半井裏Ⅳ	散歩地	平安	土師器	
52	大平	散歩地	平安			124	在原V	散歩地	平安	土師器	
53	大平Ⅱ	散歩地	平安			125	秋ノノ	散歩地	平安	土師器	
54	西ノ山田Ⅱ	散布地	中世			126	秋ノノ下	散歩地	平安	土師器	
55	西ノ山田	城跡跡	中世			127	秋ノノ上	散歩地	平安	土師器	
56	小菅木	散歩地	平安			128	栗ノノ下	散歩地	平安	土師器	
57	武水字	散歩地	古代			129	栗ノノ上	散歩地	平安	土師器、須恵器	
58	武水原Ⅱ	散歩地	平安			130	栗ノノ木	散歩地	古代	土師器	
59	中村船	城跡跡	中世			131	山田Ⅱ	散歩地	古代	土師器	
60	下川原目	散歩地	平安			132	佛子	散歩地	平安	土師器	
61	下川原目Ⅱ	散歩地	奈良、平安			133	新宿林範II	城跡跡	中世		
62	小丸船	城跡跡	中世			134	新宿林範Ⅲ	城跡跡	中世		
63	北嶋G	散歩地	平安			135	松原	城跡跡	中世		
64	北嶋D	散歩地	奈良、平安			136	野ノ内蔵	集落跡	平安	土師器	
65	一ノ城跡	城跡跡	中世			137	野ノ内蔵Ⅱ	散歩地	平安	土師器	
66	北嶋F	散歩地	陈子・近世			138	森越跡	城跡跡	中世	内蔵、外蔵、塹	
67	大入原	散歩地	平安			139	中野	散歩地	平安	土師器	
68	大入原	散歩地	平安			140	上ノ平	散歩地	平安	土師器	
69	小丸原V	集落跡	平安			141	白壁	散歩地	奈良	土師器	
70	下川向	散歩地	古代			142	川原田平Ⅱ	散歩地	台原、平安	土師器	
71	猪山點	城跡跡	中世			143	川原田平Ⅲ	散歩地	台原	土師器	

順位	No.	遺跡名	種別	時代	遺傳・遺物
150	伊豆ノ島	敷布施地	台原・土師器		
151	八戸沢郷	敷布施地	台原・土師器	平安・中世	土師器、平場
152	大字ノ島	敷布施地	台原	古代	
153	大字A	敷布施地	台原	古代	
154	大字B	敷布施地	台原	古代	
155	野坂ノ島	敷布施地	台原	古代	
156	大字B	敷布施地	台原	古代	
157	仲口	敷布施地	台原	古代	
158	赤井敷	敷布施地	台原	古代	
159	新右衛門	敷布施地	台原	古代	
160	新左衛門	敷布施地	台原	古代	
161	鍛冶屋	敷布施地	台原	古代	
162	良賀口	敷布施地	台原	古代	
163	良賀屋	敷布施地	台原	古代	
164	良賀屋	敷布施地	台原	古代	
165	沢田	敷布施地	台原	古代	
166	東山町	城館跡	六代～中世		
167	家内ノ島	敷布施地	台原・土師器		
168	御前屋	敷布施地	台原	平安	土師器
169	御前屋	敷布施地	台原	平安	土師器
170	山田ノ島	敷布施地	台原	平安	土師器
171	山田ノ町	敷布施地	台原	平安	土師器
172	丹ノ島	敷布施地	台原	平安	土師器、清水質器
173	丹ノ島水呑人	敷布施地	台原	平安	土師器
174	岩木本館	城館跡	六代～中世		車軸、三絃縄
175	日影	敷布施地	台原	古代	
176	武波津	敷布施地	台原	古代	
177	武波津又ノ又	敷布施地	台原	古代	
178	西ノ島	敷布施地	台原	古代	
179	船ノ島	敷布施地	台原	平安	
180	西ノ島	敷布施地	台原	平安	土師器、陶器器
181	一里塚	敷布施地	台原	平安	
182	一里塚	敷布施地	台原	平安	塚
183	西行門高野	古墓	中世		古鏡、人骨
184	寛鏡	敷布施地	台原	古代	土器
185	平野館	城館跡	平安		鐵劍、平場
186	野原	敷布施地	台原	平安	
187	村ノ瀬	城館跡	中世		
188	柿ノ平	敷布施地	台原	平安	土師器
189	天保下	敷布施地	台原	平安	
190	天保下日	敷布施地	台原	平安	
191	天保下日	敷布施地	台原	平安	
192	八戸下	敷布施地	台原	平安	
193	在野小路	城館跡	中世		環列、陶器器
194	丸ノ瀬(白瀬)	城館跡	中世		石垣、漁網、石垣、筒
195	使場	城館跡	中世		土蔵(瓦破壊)
196	上ノ遺跡跡	敷布施地	中世		大須佐原、フツココモ堀、船形土器、人骨、土器
197	差所	城館跡	中世		平場
198	土坂ノ島	敷布施地	六代		土師器
199	石舟所	城館跡	中世		平場、空廻、瓶壺
200	音ノ木	敷布施地	六代		土師器
201	音ノ木	城館跡	中世		輪郭、石垣、石柱
202	因ノ瀬	敷布施地	平安		土師器、平場、石垣
203	火ノ瀬	敷布施地	六代		土師器、居住跡、土加藤
204	合川	敷布施地	六代		純文土器、土器
205	佐久間	城館跡	中世		空廻
206	佐久間	城館跡	中世		土器
207	大畠	敷布施地	六代		土師器
208	大畠	敷布施地	平安		土師器
209	大畠	敷布施地	古代		土師器
210	大畠	敷布施地	古代		土師器
211	上平	敷布施地	平安		土師器
212	上平	敷布施地	平安		土師器、陶器器
213	幅原	城館跡	古代・中世		土師器、空廻、平場
214	大穴ノ瀬	敷布施地	古代		土器
215	大穴ノ瀬	敷布施地	古代		土器
216	孫子島I	敷布施地	古代		土師器
217	船原平I	敷布施地	古代		土師器
218	大穴ノ瀬	敷布施地	古代		土師器、陶器器
219	工ノ瀬	敷布施地	中世		
220	長波原上平	敷布施地	中世		
221	長波原上平	敷布施地	古代		
222	上平	敷布施地	古代		



第6図 周辺の遺跡（半径10km圏内）

III 調査と整理の方法

1 野外調査

(1) 調査経過

野里上遺跡

- 4月14日 調査開始。
4月14～26日 試掘。
4月18日 重機稼動開始（バックホー0.4 1台・キャリアダンプ6t 1～2台）。8月31日まで隨時。
4月25日 遺構検出開始。
4月27日 基準杭打設。
5月10日 遺構精査開始。
6月1日 県立一戸高等学校生徒4名職場体験学習。
6月23日 町道穴久保線下、SD02延長分、KⅢ～KⅣグリッド付近（当初調査区外だった低湿部）の調査に係る現地協議。これによりSD02東側230m²とKⅢ～KⅣグリッド付近2,000m²（トレンチ調査による確認）が追加範囲となる（第8図）。
7月14日 水田跡確認を目的とした植物珪酸体分析のための試料採取（佐瀬隆氏）。
7月25日 KⅢ～KⅣグリッド付近2,000m²に係る現地協議。これにより同範囲はトレンチ調査のみで終了となる。
8月1日 村木・藤原両調査員合流（村木調査員は11日まで、藤原調査員は18日まで）。
8月5日 現地公開。参加者28名。
8月9日 空撮実施。
SK10より出土した人骨供養（仁昌寺）。
8月29日 終了確認。
8月31日 調査終了、撤収。

野中遺跡

- 9月1日 調査開始。
9月1～2日 試掘。
9月5～8日 重機稼動（バックホー0.4・キャリアダンプ6t 各1台）。
9月6日 基準杭打設。
検出開始。
9月7日 遺構精査開始。
9月22日 空撮実施。
9月28日 終了確認。
9月29日 調査終了、撤収。

(2) グリッド設定 (第7図)

今年度の小鳥谷バイパス関連調査は、野里上、野中および野里上Ⅱ、中屋敷上の計4遺跡で実施しているが、すべてを共通のメッシュで括るため国上座標を使用しこれを基準軸としてグリッドを設定した。座標の選定に当たっては、小鳥谷バイパス関連事業では一貫して平面直角座標第X系を使用しており、以前に実施された同事業関連調査（仁昌寺遺跡・仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺Ⅲ遺跡・五月館跡）においても同様であることからこれに倣い、世界測地系ではなく平面直角座標第X系を用いた。グリッドは北西起点とし、規模は大グリッド50m角で北から南へ向かってA～Mのアルファベット大文字、西から東へ向かってI～VIのローマ数字を付した。各大グリッド内をさらに5m角で100分割し、北西隅から東へ、続いて南へ1～100のアラビア数字を付し、小グリッドを設定した。小グリッドの呼称方法は、大・小グリッドの組み合わせにより「A I 01」、「F IV 37」のようになる。報文中のグリッド呼称は基本的に小グリッド名を用いている。

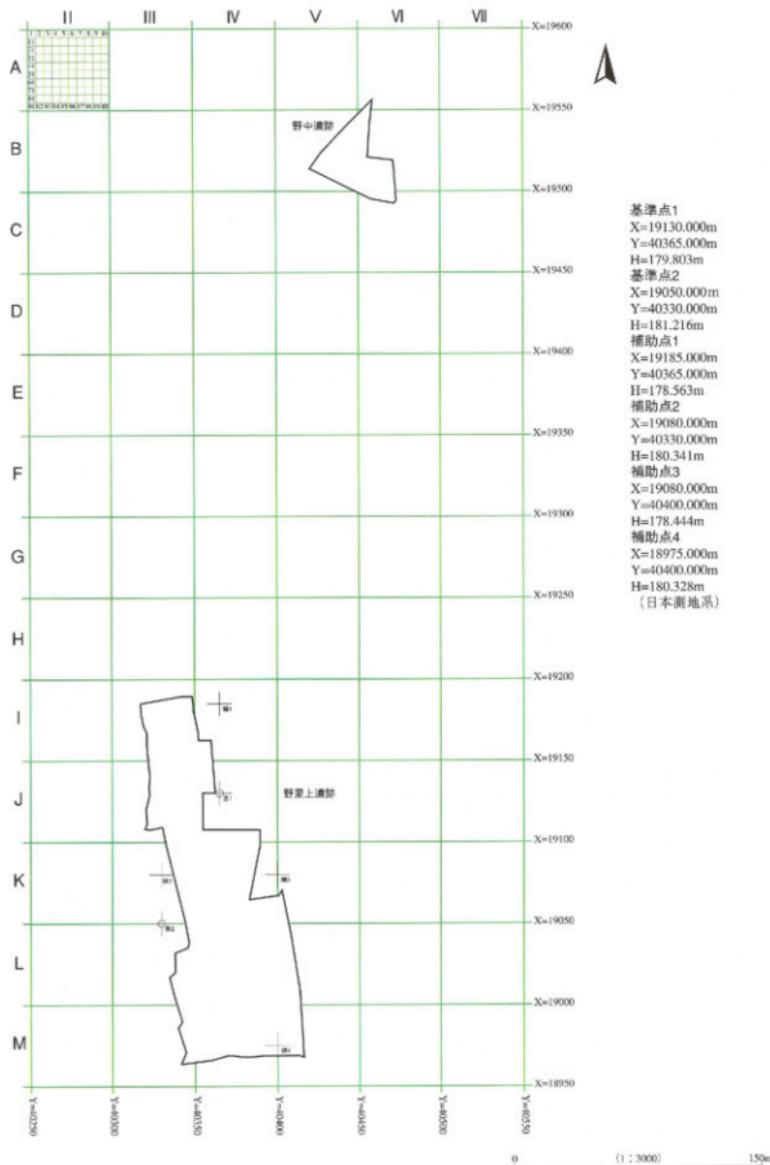
グリッド設定には3級基準点2本、補助点4本の計6本を基準として用いた。カッコ内の数値は世界測地系に変換した際の値である。

基準点1	X = 19,130.000	Y = 40,365.000	H = 179.803m	(X = 19,437.166	Y = 40,066.001)
基準点2	X = 19,050.000	Y = 40,330.000	H = 181.216m	(X = 19,357.168	Y = 40,031.001)
補助点1	X = 19,185.000	Y = 40,365.000	H = 178.563m	(X = 19,492.166	Y = 40,066.002)
補助点2	X = 19,080.000	Y = 40,330.000	H = 180.341m	(X = 19,387.167	Y = 40,031.002)
補助点3	X = 19,080.000	Y = 40,400.000	H = 178.444m	(X = 19,387.166	Y = 40,100.997)
補助点4	X = 18,975.000	Y = 40,400.000	H = 180.328m	(X = 19,282.167	Y = 40,100.995)

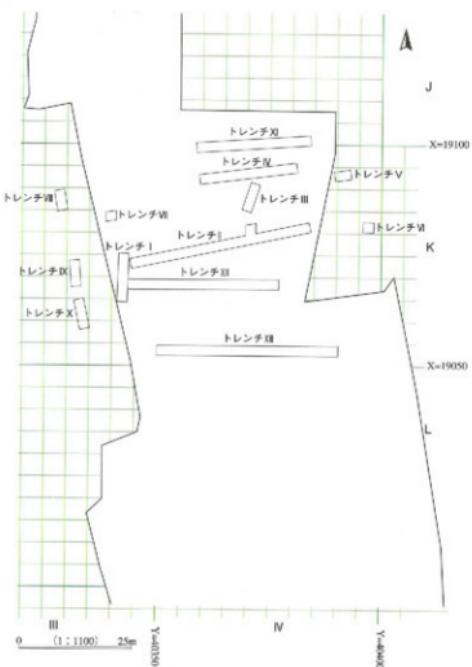
なお、野中遺跡の基準杭打設は、野里上遺跡の基準点1、補助点1を使用し、調査員自らが実施した。これらの方で定めたグリッド中で、野中遺跡はA～C・V～VIの範囲に、野里上遺跡はI～M・III～Vの範囲に収まる。

(3) 粗掘・遺構検出

最初に、岩手県教育委員会生涯学習文化課により実施された試掘結果に基づき、主として遺構・遺物既検出の試掘坑を掘削し、その検出層位と状態、および堆積土層の確認と把握を行った。同作業を実施したトレチは、野里上遺跡ではT 4・6・7～9・11・12・15・16・18・26・28～30・32～34・46～48の合計20本、野中遺跡ではT 6～9の合計4本である。(トレチ名はいずれも生文課命名)。作業に際しては、遺構・遺物検出付近はその検出面まで、それ以外の部分は地山と想定される褐色土をめやすに掘り下げ、層理面にて検出を順次行った。褐色上面到達後はさらに30cm下まで掘り抜き、より下位に黒色土層がないか確認している。結果、野里上遺跡では調査区東側（T12一帯）以外の範囲に、前節で記述のとおり現地表面から続く厚い黒色土（Ⅲ層）→部分的にTo-a（Ⅳ層）→褐色土（V層）→黒色土（VI層）→褐色土（VII層）の順に堆積しており、褐色土と黒色土が交互に堆積する特異な状態を呈することが明らかとなった。この堆積状況を受けて、主たる検出面はⅣ層上面（残存部のみ）、V層上面、VI層上面、VII層上面の4面とし、それぞれ検出・精査を実施している。いっぽう、T12の位置する東側低位部はTo-aが比較的厚く堆積しており、以下はV層が次第にグライ化してその下位は疊層となる。ここに關しては、Ⅳ層上面およびV層上面にて検出・精査を行い、以下はまず面積比の50%のみ掘削対象として疊層まで掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認している。結果、いずれも検出されず、同部分についてはこの時点で調査終了とした。また、野中遺跡ではTo-aは確認さ



第7図 グリッド設定図



第8図 K III～K IV グリッド付近低湿地試掘トレンチ位置

れず、V層下が疊層となる。検出はV層上面にて実施している。

(4) 遺構の調査方法・遺物の取り上げ方

堅穴住居跡の調査は四分法で、その他の遺構については二分法を原則として、それぞれ堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。この際、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に写真撮影および実測を順次行った。

なお、野外調査に関する実測は、平面図・断面図・センター図等すべてをデジタルカメラ撮影画像による写真測量とし、株式会社セビアスに委託した。撮影自体は調査員が行っている。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については遺構名と出土層位名または相対的層位（上位、中位、下位、床・底面直上、床・底面）を記し、このうち床・底面直上以下出土分については平面的出土位置も記録した。遺構外出土分はグリッド毎に層位を記して取り上げた。

(5) 遺構の名称

遺構種別の名称（冠名）は、4遺跡統一する意味で共通の略号を用い、これに検出順に01～の連番を付した。各遺構種別名は以下のとおりである。

堅穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・ S I

掘立柱建物跡	S B
柱列	S A
土坑	S K
溝跡	S D
焼土遺構 骨片・焼土・炭化物廃棄遺構 炭化物集中	S X
堅穴状遺構	S X

なお、同方式に該当しない遺構様（耕作痕跡）については略号を用いていない。また、柱穴状土坑については小グリッド単位での連番とし、グリッド名に連番を付して「A I 11 P 1」のように呼称した。

個々の遺構名については、野外調査時に欠番が生じたもの等に対し室内整理時に連番となるよう名称変更したばあいがある。変更した遺構の新旧名称の対応は以下のとおりである。

野里上遺跡		野中遺跡		
旧→新	旧→新	旧→新	旧→新	旧→新
S D04→S K06	S D12→S D11	S K09→S X01	S K20→S K19	S K31→S K30
S K09→S K08	S D13→S D12	S K10→S K09	S K21→S K20	S K32→S K31
S K10→S K09	S D14→S D13	S K11→S K10	S K22→S K21	S K33→S K32
S K11→S K10	S D15→S D14	S K12→S K11	S K23→S K22	S K34→S K33
S D05→S D04	S D16→S D15	S K13→S K12	S K24→S K23	S K35→S K34
S D06→S D05	S D17→S D16	S K14→S K13	S K25→S K24	S K37→S K35
S D07→S D06	S D18→S D17	S K15→S K14	S K26→S K25	S K38→S K36
S D08→S D07	S D19→S D18	S K16→S K15	S K27→S K26	S K39→S K37
S D09→S D08		S K17→S K16	S K28→S K27	S K40→S K38
S D10→S D09		S K18→S K17	S K29→S K28	
S D11→S D10		S K19→S K18	S K30→S K29	

(6) 遺構内土壤の採取とフローテーション

野里上遺跡 S I 02カマド燃焼部直上堆積土、耕作痕跡作土層および溝内堆積土、S X 墓土、野中遺跡 S X 墓土をサンプリングし、ウォーターフローテーション・セバレーション法による微細自然遺物の回収を行った。土壤は一度袋から出して乾燥させた後、10リットルのバケツ中で水洗した。炭化浮遊物を0.5mmメッシュのフルイで回収する作業を数回繰り返した後、沈殿物を0.5mmメッシュおよび0.3 mmメッシュのフルイで回収した。浮遊物はアルミホイル上にのせ保管・乾燥した後、肉眼あるいは15倍のルーペ下で自然遺物の1次選別を行った。なお、サンプル採取地点およびフローテーション・セバレーション実施土壤量は以下のとおりである（第2表）。

第2表 土壤採取地点とフローテーション・セバレーション実施量

遺跡名	採取地点	土壤量(t)	遺跡名	採取地点	土壤量(t)
野里上	S I 02カマド燃焼部東端堆積土（焚鬥）	3.5	野里上	7号耕作痕跡 1層溝内堆土（土壤サンプルNo.1）	3.5
野里上	1号耕作痕跡 1層溝内堆土（土壤サンプルNo.1）	3.5	野里上	7号耕作痕跡 1層溝内堆土（土壤サンプルNo.2）	3.5
野里上	2号耕作痕跡 1層耕築頂部（土壤サンプルNo.2）	3.5	野里上	S X05 墓土1層	7
野里上	2号耕作痕跡 15号溝内堆土（土壤サンプルNo.3）	3.5	野里上	S X12 墓土2層	7
野里上	4号耕作痕跡 1層溝内堆土（土壤サンプルNo.1）	3.5	野中	S X01 墓土城下壁	14

(7) 写 真 摄 影

写真撮影にあたっては、35mmモノクローム・カラーリバーサル、および6×9判モノクロームの3種のフィルムを使用し、さらにデジタルカメラをモの的に使用した。撮影にあたっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。その他、調査終了間際にセスナ機による航空写真撮影を遺跡ごとに各1回実施している（平成17年8月9日、同9月28日）。

2 室 内 整 理

(1) 遺物整理の方法

遺物は、各種別に分類したのち出土地点ごとに重量計測を行い、接合作業を実施して掲載分・要観察分と不掲載分に細分類し、前者については仮番号を付し登録を行った。登録にあたっては、種別ごとに異なる冠名の番号を付している。その後、報告書掲載分をさらに抽出し、これらについては新たにアラビア数字の連番による掲載番号を付した。

なお、掲載遺物の選択に際しては、各遺物種別共通してまず第1に出土地点を優先し、I層あるいは擾乱出土遺物は基本的に除外した。遺構別および遺物種別毎の出土量については次章に詳しく述べている。各遺物種別の掲載基準は下記のとおりである。

本報告書では、出土遺物量の記載をすべてgあるいはkg単位での重量表記とした。石器、鉄製品、木製品については点数記載を主とし、これに重量記載を併記している。石器類に関しては、事前にトゥールと剥片および素材に分類し、トゥールについては個々に仮番号を付して登録台帳作成と計量を行っている。剥片および素材については個々の計量はせず、母岩別分類を実施した後、上器と同様に出土地点単位で計量し、また遺物数を数えて出土地点および母岩別分類結果と重量・点数を記載した台帳を作成している。

縄文土器・土師器

a. 掲載遺物の選択基準…形態変化が集中するため口縁部が残存するものを優先している。平面5×5cm以上且つ重量20g以上という基準に適うものを掲載した。胴部は器形を復元できるもののみ、底部は底径が復元できるもの、底面に調整痕が残存するものに限定して掲載している。

b. 実測…径の推定可能なもの（1/4以上残存）は復元実測を行った。

石器

a. 掲載遺物の選択基準…点数が少ないため、円形跡を除く全点を掲載した。

b. 実測…調整部位や打面・打点など、最低限必要と判断した部位のみ展開し、省力化に努めた。

鉄製品・銅貨・木製品

a. 掲載遺物の選択基準…点数が少ないとこと、および遺物の希少性を鑑み全点掲載した。

b. 実測…鉄製品は定型的であるため展開を最小限とした。木製品は全面実測し、柱材・杭についてでは調整の明瞭な面を中心に展開した。

(2) 写 真 摄 影

当センター写真室において、専属の期限付職員が35mmカメラを用いモノクロームフィルムで撮影した。

(3) 遺 構 図 面

前述のとおり、平面図・断面図・センター図等野外調査に関わるすべてをデジタルカメラ撮影画像による写真測量とし、株式会社セビアスに委託した。

（丸山）

IV 野里上遺跡

1 検出遺構(第9~11図)

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡2棟、柱列1列、土坑10基、耕作痕跡7区画、溝跡18条、柱穴状土坑26個、杭1本、焼土造構・炭化物廃棄遺構16基である。

(1) 竪穴住居跡

S I 01竪穴住居跡

遺構(第12図、写真図版3)

[位置・検出状況] J III 16・17・26・27グリッドに位置する。本付近は現在宅地として利用されており、その造成時に削平され他所より上層残存状態が悪い。検出層位はI層直下のV層中で、黒褐色土の広がりとして確認された。

[微地形] 削平され旧地形を留めないが、東側に緩く傾斜していたものと思われる。現況はほぼ平坦である。

[重複関係] なし。東側にS I 02がある。

[規模・平面形・主軸方向] 南側半分程度が床面下まで削平され、全容は不明である。残存辺長は東—西4.2mで、平面形は隅丸方形と推定される。住居主軸方向はN=101°—Wである。

[埋土] 5層に分層される。黒色から暗褐色のシルトで構成され、下位層は礫を比較的多く含む。全体的に斜面上位にあたる西側から流入堆積した状態を呈している。なお、北西側埋土中位から凝灰岩の板状礫および破片が多量に出土した。カマド芯材を一括廃棄したものと考えられる。

[壁・床面] 住居構築時の掘削はVI層中まで及んでいる。床面の状態を確認したところ、以下の掘削痕跡がほとんどなく、掘削底面をほぼそのまま床面とし貼り床は構築されていない。残存床面範囲はほぼ平坦で、場所による硬度差は確認されない。壁は西・北・東の3壁が残存しており、西・東壁はほぼ直立、北壁は45°程度で外傾している。検出面から底面までの深さは、最も残存する東壁で26cmを測る。

[カマド] 東壁の中央に設置されている。袖の芯材には板状の凝灰岩が立位状態で設置され、暗褐色シルトで構築されている。芯材下半は床面下に埋め込まれており、深さ12~13cmの掘り方が確認された。また、焚口東側から約30×20×5cmの凝灰岩も出土しており、おそらく天井石あるいは構成材と推定される。煙道は検出面下17cmまで掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。煙出し部分は柱穴状にさらに深く掘り込まれ、深さは検出面下44cmを測る。煙道長は1.2m、幅は30cm、断面は半円形である。燃焼部は47×35cmの梢円形で、厚さは最厚部で6cmを測る。

[柱穴・ピット] 柱穴は四隅近くから各1個計4個検出された。開口部径は30cm程度で、深さは削平されていないPit 3および4で24~32cmを測る。Pit 4は断面観察で径約15cmの柱痕が確認されている。

[その他] 床面中央で南北に細長い不整形の焼土が検出された。焼成が弱く、厚さ1cmに満たない。遺物(第42・49・50・53図、写真図版21・26・29)

[土師器] 2,542.99g出土した。内訳は、床面、床面直上、カマド上1,739.55g、埋土803.44gである。

第3表 S I 01ピット計測値

遺構名	床面標高(cm)	床面からの深さ(cm)
Pit1	180.430	20.7
Pit2	180.323	18.7
Pit3	180.394	24.3
Pit4	180.306	31.7

このうち12点・1,671.47 gを掲載した（73～84）。

〔鉄製品〕床面直上から1点・44.82 g出土し、掲載した（118）。

〔縄文土器・石器〕土器は242.88 g出土した。内訳は、床面128.77 g、埋土114.11 gである。このうち床面出土の1点・36.44 gを掲載した（1）。石器は床面から貞岩の素材1点・151.23 gが出土した。不掲載である。

時期 床面出土遺物から7世紀後葉～8世紀前半頃と推定される。

S I 02堅穴住居跡

遺構（第13～14図、写真図版4）

〔位置・検出状況〕I III 98・99、J III 08・09・18・19グリッドに位置する。本付近は現在宅地として利用されており、その造成時に削平され他所より土層残存状態が悪い。検出層位はI層直下のV～VI層中で、黒褐色～暗褐色土の広がりとして確認された。

〔微地形〕削平され旧地形を留めないが、東側に緩く傾斜していたものと思われる。現況はほぼ平坦である。

〔重複関係〕なし。西側にS I 01がある。

〔規模・平面形・主軸方向〕東一西6.95m、南一北7.93mで、平面形は隅丸長方形を呈する。住居主軸方向はN-93°—Wである。

〔埋土〕堆積土は主として色調と礫の混入状態の相違から9層に分層される。おもに黒色、黒褐色、暗褐色のシルトで構成されており、これらは基本層序V・VI層起源と考えられる。中位から下位に堆積する2・3層はテフラで、2層は明褐色を呈し極めて断続的な層状堆積を成す。3層は灰黄色を呈し最大厚16cmで厚く成層する。その下位数mmは粒子が大きく（火山豆石？）一次堆積と見られ、上位はラミナの顕著な水成二次堆積である。全層とも自然堆積と考えられる。

〔壁・床面〕住居構築時の掘削はVI層中まで及んでおり、おもに斜面下方にあたる東半に貼り床（10層）が施されている。元地形の傾斜と並行に掘削を行い（6～7°）、水平になるよう東半に偏って貼り床を施した結果であろう。結果構築された床面は全体的に堅緻で、東側にごく緩く傾斜しており、その角度は約3°である。壁は西・北の2壁がほぼ直立しており、東壁は段状を呈する。南壁は残存状態が悪く判然としない。検出面から底面までの深さは、最も残存する西壁で29cmを測る。

〔カマド〕東壁の中央に設置されている。袖の芯材および煙道側壁には板状に加工された凝灰岩が用いられている。袖のばあい、基礎となる板状礫を貼り床構築と同時に立位状態で設置し、その上部は数cmに碎けた破片を核としててぶい黄褐色～褐色シルトで固めて構築されている。また、燃焼部上から約60×30×5cmの板状礫も出土しており、おそらく天井石あるいは構成材と推定される。煙道は意図的に破壊し埋めたのか、凝灰岩およびチャート、頁岩の礫などが多量に堆積している。同部の構築は側壁の礫設置状況から掘り込みによるものといえ、底面は外側にあたる西へ向かって約7°の上り勾配を呈する。側壁部分は一段低く掘り込まれ、板状の凝灰岩が設置されている。煙出し部分は柱穴状に検出面下77cmまで掘り込まれ、煙道底面西端より35cm程度下がる。煙道長は1.18mで、幅は掘削時約60cm、使用時（側壁礫設置時）約45cmを測る。断面形は、底面が半円形で、両側面はほぼ直立する。燃焼部は85×80cmのほぼ円形で、厚さは最厚部で12cmを測る。

〔柱穴・ピット〕柱穴は四隅近くから各1個計4個検出された（Pit 1～4）。開口部径は50～60cm程度と広いが、内部径は25～30cm程度である。深さは最大約55cmである。Pit 4は断面観察で径約20cmの柱痕が確認されている。Pit 3西側の西壁際で検出されたPit 5は、開口したまま使用された穴と推

定され、土師器壺（94・98）が出土している。開口部径は約35cmで、断面は楕形を呈する。

なお、Pit 4 の南西側に不整形の落ち込みが確認された。これは住居廃棄後、5・6層が堆積したのちの人为掘削で、用途は不明である。3層To-aに被覆されていることから、その降下以前の所産といえる。

【挖溝・間仕切り溝】東壁から北壁・南壁の東端にかけて隙溝が掘削されている。底面幅・床面からの深さともに10cm以下である。東壁には確認されなかった。また、Pit 1 から南壁へ、Pit 3 から北壁へそれぞれ直角に間仕切り溝が掘削されている。規模は、前者が長さ90cm・底面幅7~13cm・床面からの深さ4cm以下、後者が同70cm・5cm前後・6cm以下である。

【その他】Pit 2 東側の東壁際床面で白色粘土塊が検出された。長さ85cmで細長く広がっている。

遺物（第42・46・50・51・53図、写真図版21・24・26~29）

【土師器】5,837.86g 出土した。内訳は、床面・床面直上、カマド構築土内4,102.19g、貼り床内3.36g、埋土1,732.31gである。このうち17点・2,923.75gを掲載した（85~102）。

【鉄製品】床面から1点・55.73g（119）、埋土から1点・22.17g（120）出土し、いずれも掲載した。

【縄文土器・石器】土器は埋土中から242.88g出土し、1点・31.73g（2）を掲載した。石器は床面から台石1点・198.86g（53）、剥片1点・3.79gが出土し、前者を掲載した。

【動・植物遺体】カマド燃焼部手前焚き口堆積土に対しフローテーションを実施し、骨類2.33g、炭化種子・実7点を検出した。同定結果は、前者がサケ・マス類の椎骨椎体片、魚類の鱗鱗等、鳥類/小中型獸類の破片、ニホンジカの基節骨、獸類の破片等および歯骨の針状加工品、後者がキビ、オニグルミである（VI章4・6節参照）。

時期 床面出土遺物から7世紀後葉~8世紀前半頃と推定される。

（2）掘立柱建物跡

S B01掘立柱建物跡

遺構（第15図、写真図版5・6）

【位置・検出状況】J III47・48グリッドに位置する。V層上面で検出された。

【微地形】約4°で南東側に下る。

【重複関係】なし。

【平面形式・規模】平面形式は縦柱式掘立柱建物跡であり、9個の柱穴から構成されると考えられるが、6個の柱穴のみ確認している。規模は2間×2間であり、桁行き（南北）が4.66m、梁間（東西）が4.2mである。面積は19.57m²である。建物方位はN-17°-Wである。柱間寸法は210cmを基本とし、P 4~5間が256cmと広い。

【柱穴規格】掘り方の形状はすべて円形で、開口部径は26~33cmと概ね30cm前後である。検出面からの深さは18~52cmを測る。

第5表 S B01ピット計測値と土層記

遺構名	土層記	底面標高(m)	床面からの深さ(cm)
Pit1	JYVR212黒褐色シルト・粘性中・しまり中・液限強（～3m）1%	179.80	39.5
Pit2	第14層	179.54	43.8
Pit3	JYVR212黒褐色シルト・粘性中・しまり中・液限強（～3m）1%	178.998	31.6
Pit4	JYVR212黒褐色シルト・粘性中・しまり中・液限強（～3m）3%	178.740	27.8
Pit5	JYVR212黒褐色シルト・粘性中・しまり中・液限強（～3m）5%・炭化物粒1%	179.554	18.9
Pit6	JYVR212黒褐色シルト・粘性中・しまり中・液限強（～3m）5%	179.273	22.4

[埋土] Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体である。柱痕部分は黒色で、色調・しまり状態などが異なる。

遺物 P 1 埋土から土師器が15.40g出土した。細片のため不掲載である。

時期 検出層位から古代の可能性が高いが、詳細については不明である。

S B02掘立柱建物跡

遺構（第16・17図、写真図版5・6）

[位置・検出状況] K IV93・94、L IV03～05・14～15グリッドに位置する。Ⅲ層下位～V層上面で検出された。

[微地形] ほぼ平坦だが約1～2°でごく緩く北東側に下る。

[重複関係] 4号耕作痕跡、S D12・13と重複し、前者を切り後二者に切られる。

[平面形式・規模] 2間×4間の8本柱で、桁行き6.8m、梁間4.2mである。面積は約31m²である。建物方位はN=47°～Wである。柱間寸法は梁間の両端に当たるP 1～5間およびP 4～8間、桁行きの北側に当たるP 1～2間およびP 5～6間で210cmを基本とし、中央の桁行きP 2～3間およびP 6～7間が230cm、梁間P 2～6およびP 3～7が400cm、南側に当たる桁行きP 3～4間およびP 7～8間が240cmである。また、P 6と7の東側100cmに直径25cm以下の小穴が2基検出された（P 10・11）。出入り口？あるいは庇の可能性がある。

[柱穴規模] 掘り方の形状はすべて円形で、開口部径は概ね40cm前後である。検出面からの深さは21～58cmを測る。

第6表 S B02ピット計測値と土層記記

遺構名	土層記記	底面標高(cm)	底面からの深さ(cm)
Pit 1	[0YR21]黒褐色シルト 粘性中・しまり中	177.739	31.4
Pit 2	「底に[0YR21]黒褐色シルト、下部に[0YR21]黒褐色シルト、細断中・しまり 中央部を含むブロックが上部約6%、下部約9%	177.631	27.5
Pit 3	「底に[0YR21]黒褐色シルト、下部に[0YR21]黒褐色シルト、粘性中・しまり 中央部を含むブロックが上部約6%、下部約9%	177.553	47.4
Pit 4	「底に[0YR21]黒褐色シルト、下部に[0YR21]黒褐色シルト、粘性中・しまり 中央部を含むブロックが上部約6%、下部約9%	177.511	42.2
Pit 5	第18回参考	177.492	47.0
Pit 6	第18回参考	177.652	30.5
Pit 7	第16回参考	177.365	58.1
Pit 8	第16回参考	177.630	32.6
Pit 9	[0YR21]黒褐色シルト 粘性中・しまり中	177.537	31.6
Pit 10	[0YR21]黒褐色シルト 粘性中・しまり中	177.563	25.3

[埋土] P 5・7の1・2層は柱痕で、径15cm程度である。3層は柱設置時の埋土で、V層が混入する。

[闇連施設] 本遺構と軸方向を同じくし北西側に並ぶS A01、および本遺構と軸を同じくし方形に取り囲むように巡るS D15は本遺構の闇連施設と推定される。S A01からS D15北西辺までの間は何も検出されず、空白地帯となっている。

遺物 出上していない。

時期 検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以降）といえる。なお、本遺構と同面で検出され、軸線を同じくするS A01のP 3に残存していた柱材のAMS法による放射性炭素年代測定値が¹⁴C年代で940±40yrBP、較正曆年代は95.4%の信頼度で1010AD～1190ADの可能性があると出ており（VI章1節参照）、この結果は層位的見地とも調和的である。

(3) 柱 列

S A01柱列

遺構（第16・17図、写真図版5）

[位置・検出状況] L IV03・04、K IV94グリッドに位置する。Ⅲ層下位～V層上面で検出された。

[微地形] ほぼ平坦だが約1~2°でごく緩く北東側に下る。

[重複関係] なし。

[平面形式・規模] 3個の柱穴が柱間295cmで一列に並ぶ。軸方向はN=44°—Eである。

[柱穴規模] 掘り方の形状はすべて円形で、開口部径は概ね30cm前後である。検出面からの深さは13~25cmを測る。

第7表 S A01ピット計測値と土層記記

遺構名	土層記記	表面標高(m)	床面からの深さ(cm)
Pit 1	IYR3/2黒褐色シルトとIYR2/2黒色シルトの混土。粘性中・しまり中 混め度:土。	177.799	17.7
Pit 2	IYR3/2黒褐色シルトとIYR2/2黒色シルトの混土。粘性中・しまり中 混め度:土。	177.613	24.6
Pit 3	IYR3/2黒褐色シルトとIYR2/2黒色シルトの混土。粘性中・しまり中 混め度:土。	177.655	13.4

[埋土] 黒褐色シルトと黒色シルトの混土。人為堆積である。P 3には柱材が残存していた(125)。

[関連施設] 本遺構と軸方向を同じくするS B02、S D15は本遺構の関連施設と推定される。

遺物(第51図、写真図版30)

[柱材] P 3の底面上に柱材の一部が残存していた(125)。樹種はクリである(VI章5節参照)。

時期 検出層位から平安時代前期以降(To-a降下以降)といえる。なお、P 3に残存していた柱材(125)に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施している。これによる年代値は¹⁴C年代で940±40yrBP、較正曆年代は95.4%の信頼度で1010AD~1190ADの可能性があるとしている。(VI章1節参照)。この結果は層位的見地とも調和的である。

(4) 土 坑

S K01土坑

遺構(第18図、写真図版6)

[位置・検出状況] J IV71グリッドに位置する。IV層上面~V層上面で、黒色土の円形プランとして検出された。

[微地形] ほぼ平坦だが約3°で緩く東側に下る。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 開口部径173×169cmのはば円形を呈する。

[埋土] III層起源の黒色シルトおよび粘土質シルト主体で、中位に炭化物粒が多量に混入する。下位にはTo-aがブロック状に混入する。

[壁・底面] 底面は丸く、各壁とも椀状に外傾して立ち上がり上半は外反する。掘削はVII層中まで行われており、検出面からの深さは最深部で60cmを測る。

遺物 繩文土器が埋土中位の2層から30.76g出土した。細片のため不掲載である。

時期 検出層位から平安時代前期以降(To-a降下以降)といえるが、詳細および下限については不明である。

S K02土坑

遺構(第18図、写真図版6)

[位置・検出状況] J III78グリッドに位置する。VII層上面で、黒色土の円形プランとして検出された。

[微地形] ほぼ平坦だが約3°でごく緩く東側に下る。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 開口部径130×109cmのはば円形を呈する。

[埋土] 黒~黒褐色シルト主体で、自然堆積と思われる。7層は壁面の崩落土である。

【壁・底面】底面は平坦で、各壁とも直立気味に立ち上がり断面形はビーカー状を呈する。掘削はⅦ層中まで行われており、検出面からの深さは最深部で38cmを測る。

遺物（第42図、写真図版21）

〔縄文土器〕埋土5層などから841.83g出土し、2点・385.93gを掲載した（3・4）。

〔土師器〕埋土巾から8.82g出土した。細片のため不掲載である。

時期 層位的に古代以前の構築であることは確実だが、詳細な比定要素に欠ける。出土遺物から縄文時代後期以降の遺構と推定される。

S K03土坑

遺構（第18図、写真図版7）

〔位置・検出状況〕L IV81グリッドに位置する。Ⅶ層上面で、黒褐色土の長楕円形プランとして検出された。

〔微地形〕西から東に約5°で下る緩斜面である。

〔重複関係〕なし。

〔規模・平面形〕開口部径169×82cmの長楕円形を呈する。

〔埋土〕黒褐色シルト主体で、礫および炭化物粒の混入状態で分層した。おもに斜面上方から流入する形の自然堆積と思われる。

〔壁・底面〕各壁とも緩く外傾して立ち上がり断面形は振り鉢状を呈する。掘削はⅦ層中で止まっており、検出面からの深さは最深部で31cmを測る。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

S K04土坑

遺構（第18図、写真図版7）

〔位置・検出状況〕L III88・89グリッドに位置する。Ⅶ層上面で、黒色土の円形プランとして検出された。

〔微地形〕ほぼ平坦だが約3°でごく緩く東側に下る。

〔重複関係〕なし。

〔規模・平面形〕開口部径72×60cmのほぼ円形を呈する。

〔埋土〕上半が黒色シルト、下半が黒褐色シルトで構成される。自然堆積と思われる。

〔壁・底面〕底面は丸く、各壁とも緩く外傾して立ち上がり断面形は皿状～椀状を呈する。掘削はⅨ層中で止まっており、検出面からの深さは最深部で16cmを測る。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

S K05土坑

遺構（第19図、写真図版7）

〔位置・検出状況〕M IV32グリッドに位置する。I層直下のVI～VII層中で、S K06とともに黒褐色土の長楕円形プランとして検出された。

〔微地形〕付近は耕地造成時の地形変更により原形を留めていない。本遺構付近がちょうど区画境に

あたり、東側がⅦ層中まで大きく削平されている。原形は北東へ下る緩斜面だったと推定される。

〔重複関係〕 北東側がSK06と重複し、これに切られる。

〔規模・平面形〕 削平および重複により不明であるが、残存値は開口部径140×78cmで長楕円形を呈する。

〔埋土〕 黒褐色シルト主体で、礫の混入状態で分層した。自然堆積と思われる。

〔壁・底面〕 底面は丸く、斜面上方の南西壁ほど緩やかに立ち上がる。同方向からの流水により削られた結果と推定される。掘削はⅧ層中で止まっており、深度は最深部で検出面下43cmを測る。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

S K06土坑

遺構（第19図、写真図版7）

〔位置・検出状況〕 M1V33グリッドに位置する。I層直下のVI～VII層中で、SK05とともに黒褐色土の長楕円形プランとして検出された。

〔微地形〕 付近は耕地造成時の地形改変により原形を留めていない。本遺構付近がちょうど区画境にあたり、東側がⅦ層中まで大きく削平されている。原形は北東へ下る緩斜面だったと推定される。

〔重複関係〕 南西側がSK05と重複し、これを切る。

〔規模・平面形〕 北東側の大半が削平され規模・平面形ともに不明である。残存する開口部長は180cmを測る。

〔埋土〕 黒褐色シルト主体で、礫の混入状態で分層した。自然堆積と思われる。

〔壁・底面〕 底面は丸く、北壁は直立気味に立ち上がる。これ以外は緩く外傾する。掘削はⅧ層中で止まっており、検出面からの深さは最深部で50cmを測る。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

S K07土坑

遺構（第19図、写真図版8）

〔位置・検出状況〕 I IV81グリッドに位置する。V層上面で、黒色土の長楕円形プランとして検出された。

〔微地形〕 ほぼ平坦だが約3°でごく緩く東側に下る。

〔重複関係〕 SD01と重複し、これに切られる。

〔規模・平面形〕 開口部径134×77cmの長楕円形を呈する。

〔埋土〕 III層起源の黒色シルトの単層である。

〔壁・底面〕 底面は丸く、各壁とも椀状に外傾して立ち上がる。掘削はⅧ層中まで行われており、検出面からの深さは最深部で36cmを測る。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から平安時代前期以前（To-a降下以前）といえるが、詳細および上限については不明である。

S K08土坑

遺構（第18図、写真図版8）

1 検出遺構

【位置・検出状況】 L III48・49グリッドに位置する。V層上面で、黒褐色土の長楕円形プランとして検出された。西側は調査区外へ延びており未調査である。

【微地形】 西から東に約7°で下る緩斜面である。

【重複関係】 なし。

【規模・平面形】 短軸155cm、長軸360cm以上で、長楕円～溝状を呈するものと推定される。

【埋土】 VI層起源の黒褐色シルト主体で構成される。中～下位の層はV層がブロック状に混入し、人為堆積の様相を呈する。他は自然堆積と思われる。

【壁・底面】 底面、壁ともに凹凸が多く不整形である。掘削はV層中まで行われており、検出面からの深さは最深部で80cmを測る。

遺物（第42図、写真図版21）

【縄文土器】 墓上位から27.22g出土しており、掲載した（5）。

【石器】 墓上位から頁岩2製の素材が1点・25.01g出土した。

時期 層位的に古代以前の構築であることは確実だが、詳細な比定要素に欠ける。出土遺物から縄文時代中期以降の遺構と思われる。

S K09土坑

遺構（第19図、写真図版8）

【位置・検出状況】 L IV52グリッドに位置する。V層上面で、黒褐色土の楕円形プランと灰オリーブ色のテフラの堆積によって検出された。

【微地形】 ほぼ平坦だが約3°でごく緩く東側に下る。

【重複関係】 なし。

【規模・平面形】 開口部径239×184cmの楕円形を呈する。

【埋土】 III層起源の黒褐色シルト主体で構成される。2層はTo-aの水成堆積で、ラミナが顕著である。4・5層にもブロック状に混入する。3～5層は幾分動いた形跡があるが、他は自然堆積と思われる。

【壁・底面】 底面は凹凸が多い。北東壁は段状を呈し、他は緩く外傾している。掘削はV層中まで行われており、検出面からの深さは最深部で35cmを測る。

遺物 出土していない。

時期 墓土の状態からTo-a降下前の平安時代前期頃と推定される。

S K10土坑（近世墓）

遺構（第19図、写真図版8）

【位置・検出状況】 K III29・30グリッドに位置する。V層上面で加工材が出土したことにより検出された。

【微地形】 ほぼ平坦だがごく緩く東側に下る。

【重複関係】 なし。

【規模・平面形】 開口部径100×85cmのはば円形を呈する。

【埋葬状態】 北方向に背を向けて座した状態の副葬である。

遺物 人骨（頭蓋、大腿など）のほか、漆塗りの椀4点、曲物1点、櫛1点、錢貨（寛永通寶）5枚、断面六角形の加工材3本、クルミの種実1点などが出土した。

時期 副葬品から近世といえる。

(5) 耕作痕跡

耕起の痕跡を示す遺構で、2号の事例からいざれも畠作によるものと推定される（Ⅶ章2節2項で詳述）。埋土が基本層序Ⅲ層主体で構成されるためⅢ層中での検出が極めて困難で、大半がⅣ層To-aテフラ上面で確認された。ただし構築面はⅢ層中にあると推定される。

1号耕作痕跡

遺構（第20図、写真図版9）

【位置・検出状況】J IV31・41グリッドに位置する。Ⅲ層下位からV層上面において黒褐色土の筋状プラン群として検出された。南東部の溝①～③付近では検出面にTo-aがブロック状に堆積しており、これを掘り込んで構築されている。

【微地形】ほぼ平坦だが約1～2°でごく緩く南東側に下る。

【重複関係】なし。

【範囲・溝の条数・配列・規模】検出範囲は18.7m²である。条数は18（溝①～⑯）で、等高線と直交するように東西方向に延びる。検出長は3.3m以下、幅は上端が6～54cm、下端が6～31cm、検出面からの深さは2～27cm。条間の心心距離は28～64cmで、断面形は大半が皿状で一部漏斗状を呈する。

【埋土】Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体で、To-aおよび礫の混入状態から9層に分層され、条単位では最多で2層に分けられる。礫は大半が破碎状態である。溝②・③埋土にはTo-aがブロック状に混入している。

遺物 埋土1層から上師器が63.54g出土した。細片のため不掲載である。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、土壤サンプルNo.1からフローテーションにより抽出された炭化物に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施している。これにより得られた年代値は¹⁴C年代で2430±40yrBP（VI章1節参照）、層位的見地と相容れない。

2号耕作痕跡（畠跡）

遺構（第21図、写真図版10）

【位置・検出状況】調査区西端のL III48・49・58グリッドに位置する。Ⅲ層下位からIV層上面において平面観察により黒褐色土の筋状プラン群として、また断面A-A'においてIV層上面に載る断面カマボコ状の高まりと凹みの連続として検出された。前者と後者の位置は必ずしも一致しない。この一帯はTo-aが成層～ブロック状に堆積しており、遺構の下位はこれを掘り込んで構築されている。

【微地形】約5～6°で北東側に下る。

【重複関係】なし。SD05が東側に隣接する。

【範囲・溝の条数・配列・規模】検出範囲は13.0m²であるが、遺構自体は調査区外西側へ続いている。平面で検出した黒褐色土の筋状プラン群の調査区内における確認条数は13（溝①～⑯）で、溝①～⑪は等高線と直交するように東西方向に延びる。溝⑫・⑬はこれらと軸方向が異なり、南西～北東方向に延びており別区画の可能性がある。検出長は1.65m以下、幅は上端が7～53cm、下端が3～35cm、深さは6～20cm、条間の心心距離は36～122cmで、断面形は大半が皿状で一部漏斗状を呈する。

断面A-A'で検出した凸部（11層）は、確実なもので13箇所ある。この間に凹部（10層）が12箇所存在する。各凹部間の心心距離は35～91cmである。平面範囲は不明である。なお、この凸凹と筋状

プランの位置は一部が一致するもののすべては対応せず、同時に構築されたものとはいえない。

【埋土】 調査区断面により表土からの連続した観察が可能である。基本土層Ⅱ層以下にあたる8層は西側斜面上方からの流入土で、礫が多量に混じる。短期間での崩落、土石流と推定される。10層は平面検出の際に筋状プランとして捉えたTo-a層を切る黒褐色土、11・12層はTo-aが攪拌された状態で混じる黒褐色土、13層は10層の下位に位置し断面椀状の形態を呈する層、14層はTo-aである。以上のような状態から、①To-a降下・堆積→②15層までの耕起と土壤攪拌および歓立て→③放置（放棄）→④歓間埋没→⑤土石流の堆積、という時間的経過が推定される。②の段階で攪拌土である11層が断面波状・平面筋状を呈することから、本遺構はこれを作土とした畠跡と認定することが可能で、その凸部が歓、凹部が歓間、検出段階で筋状に認識した10層が歓間埋土となる。13層は歓立て前の土壤攪拌（天地返しなど）の一部と推定される。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、11層内歓頂部付近で採取した土壤サンプルNo2からフローテーションにより抽出された炭化物に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施している。これにより得られた年代値は¹⁴C年代で 1190 ± 40 yrBPである（VI章1節参照）。層位的見地と比して、¹⁴C年代は合わないものの較正暦年代は7.8%の信頼度で690AD～750AD、87.6%の信頼度で760AD～970ADの可能性があるとされ、To-a降下年代を915年と仮定すればそれ以降～970年（10世紀代）という年代観が導き出される。

3号耕作痕跡

遺構（第22図、写真図版11）

【位置・検出状況】 K IV91・92、L IV02・12グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面において、To-aを掘り込む黒褐色土の不連続な筋状プラン群として検出された。途切れ途切れの検出であり、本来の範囲を表してはいない。

【微地形】 ほぼ平坦だが約1～2°でごく緩く北東側に下る。

【重複関係】 なし。S D10・11間にあたる。

【範囲・溝の条数・配列・規模】 検出範囲は6.3m²である。条数は5（溝①～⑤）で、等高線とはほぼ並行するように南一北方向に延びる。検出長は1.4m以下、幅は上端が10～30cm、下端が3～15cm、検出面からの深さは5cm以下、条間の心心距離が計測できるのは1箇所しかなく、溝①～②間で78cmである。断面形は皿状を呈する。

【埋土】 Ⅲ層起源の黒褐色シルトで、To-aがブロック状に混入している。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、同一面上に立地する7号耕作痕跡と同時もしくは近接時期の所産と推定される。

4号耕作痕跡

遺構（第23図、写真図版11）

【位置・検出状況】 K IV83・93・94、L IV03～05グリッド付近に位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面において黒褐色土の筋状プラン群として検出された。この一帯はTo-aが成層しており、最下位にバミスを含んだ1次堆積が確認されるほかはすべて水成の再堆積である。遺構はこれを掘り込んで構築されている。

【微地形】 ほぼ平坦だが約1～2°でごく緩く北東側に下る。

【重複関係】 SD12・13と重複し、これらに切られる。また、SB02範囲とも重複するが、直接の切りあいはない。

【範囲・溝の条数・配列・規模】 検出範囲は59.9m²である。条数は19（溝①～⑯）で、いずれも等高線と並行するように北東一南西方向に延びる。検出長は5.34m以下、幅は上端が10～30cm、下端が3～19cm、検出面からの深さは3～10cmを測り、断面形は皿～椀状を呈する。条間の重心距離は24～220cmとさまざまであるが、溝①～③は110cm前後、溝⑭～⑯は50cm前後と比較的の等間隔に並列する。

【埋土】 III層起源の黒褐色シルトで、V層がブロック状に混入する。溝⑯のみ分層でき、下位に暗褐色シルトの堆積が確認された。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、同一面上に立地する7号耕作痕跡と同時もしくは近接時期の所産と推定される。

5号耕作痕跡

遺構（第22図、写真図版12）

【位置・検出状況】 K IV83・84グリッドに位置する。III層下位からIV層上面において黒褐色土の筋状プラン群として検出された。この一帯はTo-aが成層しており、最下位にバミスを含んだ1次堆積が確認されるほかはすべて水成の再堆積である。遺構はこれを掘り込んで構築されている。

【微地形】 ほぼ平坦だが約1～2°でごく緩く東側に下る。

【重複関係】 なし。

【範囲・溝の条数・配列・規模】 検出範囲は8.8m²である。条数は7（溝①～⑦）で、溝①～⑥は等高線とほぼ並行するように南一北方向に延びる。溝⑦は本群に含めたが、東西方向に延びて溝④と重複しこれに切られる。大きな時間差は有さないと推定されるが、本来的には別群として捉えるべきものである。

検出長は2.2m以下、幅は上端が10～35cm、下端が5～24cm、検出面からの深さは2～6cm、条間の重心距離は62～137cmで、断面形は皿状を呈する。

【埋土】 III層起源の黒褐色シルト主体である。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、同一面上に立地する7号耕作痕跡と同時もしくは近接時期の所産と推定される。

6号耕作痕跡

遺構（第24図）

【位置・検出状況】 L IV13・15グリッドに位置する。III層下位からIV層上面においてTo-aを掘り込む黒褐色土の筋状プラン群として検出された。

【微地形】 ほぼ平坦だが約1～2°でごく緩く北東側に下る。

【重複関係】 なし。

【範囲・溝の条数・配列・規模】 条数は8（溝①～⑧）で、ほぼ1グリッド分の空白地帯を挟み、西側に3条（溝①～③）、東側に5条（溝④～⑧）がまとまる。検出範囲はそれぞれ4.6m²、4.3m²である。いずれも軸方向は等高線とほぼ並行するように南一北方向に延びる。検出長は1.95m以下、幅は上端

が12~40cm、下端が3~17cm、検出面からの深さは5cm以下、条間の心心距離は40~170cmで、断面形は皿状を呈する。なお、溝⑥は南半が二又に分かれており、重複している可能性がある。また、溝⑦はL字形を呈する。

【埋土】Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体である。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a層下以後）といえる。なお、同一面上に立地する7号耕作痕跡と同時もしくは近接時期の所産と推定される。

7号耕作痕跡

遺構（第24・25図、写真図版12）

【位置・検出状況】K IV95、L IV05~07・15~18・25~27グリッド付近に位置する。IV層上面からV層上面において黒~黒褐色土の筋状プラン群として検出された。この一帯はTo-aが成層しており、最下位にバミスを含んだ1次堆積が確認されるほかはすべて水成の再堆積である。遺構はこれを掘り込んで構築されている。

【微地形】ほぼ平坦だが約1~3°でごく緩く北東側に下る。

【重複関係】S D16と重複し、これに切られる。

【範囲・溝の条数・配列・規模】検出範囲は107.2m²である。条数は34（溝①~⑭）で、いずれも等高線と並行するように北~南方向に延びる。検出長は6.02m以下で、幅は2条重複するもの（溝④・⑫）を除き、上端が10~47cm、下端が3~19cm、検出面からの深さは3~12cmを測り、断面形は基本的に皿~椀状で、凹凸が激しく不整な箇所が多い。条間の心心距離は30~292cmと多様で重複するものもあるが、溝⑪~⑭および溝⑬~⑭は35~40cm、溝⑮~⑯は55~60cm、溝⑮~⑯・⑰~⑲は50~70cm程度で等間隔に並列する。

【埋土】Ⅲ層起源の黒~黒褐色シルトで、V層がブロック状に混入する。また、To-aがブロック状に少量混入する。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a層下以後）といえる。土壤サンプルNo2（埋土1層）より採取した炭化物に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施している。これにより得られた年代値は¹⁴C年代で990±30yrBP、較正暦年代は56.8%の信頼度で980AD~1060AD、38.6%の信頼度で1070AD~1160ADの可能性があるとしている（VI章1節参照）。この結果は層位的見地と調和的である。

（6）溝 跡

埋土が基本層序Ⅲ層主体で構成されるためⅢ層中での検出が極めて困難で、大半がIV層To-aテフラ上面あるいはV層上面で確認された。ただし構築面はⅢ層中にあると推定される。

S D01溝跡

遺構（第26・27図、写真図版13）

【位置・検出状況】I III50・60・70・80、I IV71・81・91、J IV01・11・22グリッド付近に位置する。V層上面で黒~黒褐色シルトの広がりとして検出された。

【微地形】約4°で緩く東側に下る。

〔重複関係〕なし。S D02が東側約2mに並行している。

〔規模・平面形・断面形〕等高線にはほぼ並行して北一南北方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いているものと推定される。確認できた長さは46.4mで、上幅は82cm以下、検出面からの深さは31cm以下である。断面形は皿～椀状を呈する。I III 70グリッド付近の底面は2条に分かれている。

〔埋土〕Ⅲ層起源の黒～黒褐色シルト主体で、下位にはV層が混入する。検出面にはTo-aがブロック状に堆積している。いずれも自然堆積の様相を呈する。

遺物 墓土最上位の検出面で縄文土器が9.65g、墓土中で土器495.26gが出土した。いずれも細片のため不掲載である。

時期 検出層位から平安時代前期頃（To-a降下直前）といえる。

S D02溝跡

遺構（第26・27図、写真図版13）

〔位置・検出状況〕I III 50・60、I IV 61・71・81・82・92、J IV 02・12・22・33グリッド付近に位置する。IV層上面からV層上面で黒～黒褐色シルトの広がりとして検出された。To-aがブロック状に混入する層を切り込む。

〔微地形〕約4°で緩く東側に下る。

〔重複関係〕なし。S D01が西側約2mに並行している。

〔規模・平面形・断面形〕等高線にはほぼ並行して北一南北方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いているものと推定される。確認できた長さは50.2mで、上幅は118cm以下、検出面からの深さは20cm以下である。断面形は椀状を呈する。I III 60グリッド付近は2条に分かれている。

〔埋土〕Ⅲ層起源の黒～黒褐色シルト主体で、下位にはV層が混入する。自然堆積の様相を呈する。

遺物 底面、底面直上から土器が82.43g出土した。細片のため不掲載である。

時期 検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以後）である。隣接するS D01とはTo-a堆積イベントに関する時間差を介在するが、大きく乖離するものではない。

S D03溝跡

遺構（第27図、写真図版13）

〔位置・検出状況〕M IV 51～53グリッドに位置する。V層上面およびI層直下のVI層中で黒褐色シルトの広がりとして検出された。

〔微地形〕付近は耕作成時の地形変更により原形を留めていない。元は東へ下る緩斜面だったと推定されるが、平坦化目的で段々に削平されており各平坦面とも西側がⅣ層以下まで大きく削られている。

〔重複関係〕なし。S D04が南側約3mに並行する。

〔規模・平面形・断面形〕等高線にはほぼ直交して西一東方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いているものと推定される。確認できた長さは13.3mで、上幅は108cm以下、検出面からの深さは52cm以下である。断面形は一様ではないが、比較的の残存状態のよい部分は逆台形状を呈する。

〔埋土〕黒褐色シルト主体で、混入物から5層に分層される。下位の4層は砂主体層である。自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土していない。

時期 検出層位からTo-aテフラ降下以前といえるが、詳細および上限については不明である。

S D 04溝跡

遺構（第28図、写真図版13・14）

【位置・検出状況】M III 70・M IV 46・47・54～56・61～63グリッドに位置する。V層上面およびI層直下のⅣ層中で黒褐色シルトの広がりとして検出された。

【微地形】付近は耕地造成時の地形改変により原形を留めていない。元は東へ下る緩斜面だったと推定されるが、平坦化目的で段々に削平されており各平坦面とも西側がⅣ層以下まで大きく削られている。

【重複関係】なし。S D 03が北側約3mに並行する。

【規模・平面形・断面形】等高線にはば直交して西一東方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと推定される。確認できた長さは35.9mで、上幅は1.75m以下、検出面からの深さは110cm以下である。断面形は一様ではないが、深い部分は漏斗状を呈する。

【埋土】黒褐色シルト主体で、色調のはか穢・砂の混入量と状態などで7層に分層される。下位の2層には比較的砂が多い。自然堆積の様相を呈する。

遺物 埋土から繩文土器が38.85g出土した。細片のため不掲載である。

時期 検出層位からTo-aテフラ降下以前といえるが、詳細および上限については不明である。

S D 05溝跡

遺構（第27図、写真図版14）

【位置・検出状況】L III 49・58・59グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒褐色シルトの広がりとして検出された。

【微地形】北東に約5～6°で下る緩斜面である。

【重複関係】なし。西側に2号耕作痕跡が、東側にS D 06が近接する。2号耕作痕跡の区画溝である可能性がある。

【規模・平面形・断面形】等高線に斜行する形でほぼ北一南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと推定されるが、北側はまもなくS D 06と重複するため、合流もしくは切りあつていたはずであるが詳細不明である。確認できた長さは7.8mで、上幅は55cm以下、検出面からの深さは10cm以下である。断面形は皿状を呈する。

【埋土】黒褐色シルトが堆積しており、炭化物の有無で2層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。2号耕作痕跡と同時期の可能性がある。

S D 06溝跡

遺構（第27図、写真図版14）

【位置・検出状況】L III 39・49・50グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒～黒褐色シルトの広がりとして検出された。

【微地形】北東に約5～6°で下る緩斜面である。

【重複関係】なし。西側にS D 05と2号耕作痕跡が近接する。

【規模・平面形・断面形】等高線にはば並行して北西一南東方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと推定される。確認できた長さは9mで、上幅は70cm以下、検出面からの深さ

は14cm以下である。断面形は椀状を呈する。

〔埋土〕 Ⅲ層起源の黒～黒褐色シルト主体で、To-aおよび礫の混入状態から4層に分層される。斜面上位の南西側から流入した自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえるが、下限は特定できない。

S D07溝跡

遺構（第29図、写真図版14）

〔位置・検出状況〕 L V91・MV01・11・21・31・41グリッドに位置する。IV層上面～V層上面で黒褐色シルトの広がりとして検出された。

〔微地形〕 約4°で緩く東側に下る。

〔重複関係〕 なし。東側にS D08・09が近接しほば並行に走る。

〔規模・平面形・断面形〕 等高線にほば並行して北～南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いているものと思われる。確認できた長さは26.6mで、上幅は72cm以下、検出面からの深さは32cm以下である。断面形は椀状を呈する。底面には掘削痕と思われる小穴が多数確認された。底面幅に対し2個が互い違いに並列している箇所が多く、左右振り分けて掘削した痕跡と考えられる。

〔付属施設〕 溝の両側に2個ずつの柱穴状土坑が並行して確認された（Pit 1～4）。大きさは直径22cm以下、検出面からの深さは20cm以下である。溝を跨ぐ柱間距離（Pit 1～2および3～4）は1.25m、その群間（Pit 1～3および2～4）は1.75mである。

第8表 S D07ピット計測値と土層註記

遺構名	土層註記	底面標高(m)	底面からの深さ(cm)
Pit 1	第29回参考。	178.806	15.9
Pit 2	第29回参考。	178.706	16.0
Pit 3	未取得。	178.769	30.6
Pit 4	未取得。	178.786	17.8

〔埋土〕 溝、柱穴状土坑とともにⅢ層起源の黒褐色シルト主体である。溝はV層および礫の混入状態から3層に分層され、斜面上位の西側から流入した自然堆積の様相を呈する。Pit 1・2にはTo-aがブロック状に混入する。

遺物 墓上から繩文土器が59.70g出土した。細片のため不掲載である。

時期 検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえるが、下限は特定できない。

S D08溝跡

遺構（第29図、写真図版14）

〔位置・検出状況〕 L V93・MV03・13・23・33グリッドに位置する。V層上面で黒褐色シルトの広がりとして検出された。

〔微地形〕 約3°で緩く東側に下る。

〔重複関係〕 なし。すぐ東側にS D09が近接しほば並行に走る。

〔規模・平面形・断面形〕 等高線に並行してほば北～南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いているものと思われる。確認できた長さは25.4mで、上幅は85cm以下、検出面からの深さは25cm以下である。断面形は椀状を呈する。

〔埋土〕 Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体である。自然堆積の様相を呈する。

遺物（第42・46図、写真図版21・24）

〔縄文土器〕 埋土から283.28 g出土し、2点・111.1 gを掲載した（6・7）。

〔石器〕 埋土からスクレイパー1点・18.28 g（54）、石皿？1点・108.35 g（55）、剥片4.8 gが出土し、前2者を掲載した。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）である。下限は特定できない。

S D09溝跡

遺構（第29図、写真図版14）

〔位置・検出状況〕 L V93・MV03グリッドに位置する。IV層上面からV層上面で黒褐色シルトの広がりとして検出された。

〔微地形〕 約3°で緩く東側に下る。

〔重複関係〕 なし。すぐ西側にS D08が近接しほぼ並行に走る。

〔規模・平面形・断面形〕 等高線に並行してほぼ北—南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いているものと思われる。確認できた長さは6.35mで、上幅は79cm以下、検出面からの深さは14cm以下である。断面形は楕円状を呈する。

〔埋土〕 III層起源の黒褐色シルト主体で、一部上位にぼい黄褐色シルトが被覆する。自然堆積と思われる。

遺物 埋土から縄文土器が9.03 g、土師器が6.03 g出土した。いずれも細片のため不掲載である。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）である。下限は特定できない。

S D10溝跡

遺構（第30・31図、写真図版15）

〔位置・検出状況〕 K IV81・91、L IV01・11グリッドに位置する。III層下位からIV層上面でTo-aを切る黒色シルトの広がりとして検出された。

〔微地形〕 ほぼ平坦だが約1～2°でごく緩く東側に下る。

〔重複関係〕 なし。S D11が東側約2.5mに並行しており、その間に3号耕作痕跡が存在する。

〔規模・平面形・断面形〕 等高線にはほぼ並行して北—南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いているものと推定される。確認した規模は、長さ12.55m、上幅82cm以下、検出面からの深さ8cm以下である。断面形は楕円状を呈する。

〔埋土〕 III層起源の黒色シルトである。自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）である。3号耕作痕跡との関係および時期差は不明である。

S D11溝跡

遺構（第30・31図、写真図版15）

〔位置・検出状況〕 K IV82・92、L IV02・12グリッドに位置する。III層下位からIV層上面でTo-aを切る黒色シルトの広がりとして検出された。

〔微地形〕 ほぼ平坦だが約1～2°でごく緩く東側に下る。

〔重複関係〕なし。S D10が西側約2.5mに並行しており、その間に3号耕作痕跡が存在する。

〔規模・平面形・断面形〕等高線にはほぼ並行して北一南方向に直線的に延びる(①)。K IV92グリッド付近およびL IV02グリッド中央付近で二叉に分かれる(②)。前者はS D12として別個登録している。①②とも本来はさらに続く。確認した規模は、①が長さ12.7m、上幅88cm以下、検出面からの深さ8cm以下である。②が長さ3.3m、上幅50cm以下、検出面からの深さ8cm以下である。断面形はいずれも皿状を呈する。

〔埋土〕Ⅲ層起源の黒褐色シルトと黒色シルトの混土で構成される。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降(To-a降下以後)である。3号耕作痕跡との関係および時期差は不明である。

S D12溝跡

遺構(第30・31図、写真図版15)

〔位置・検出状況〕K IV92・93、L IV03・04・14・15グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒色シルトの広がりとして検出された。

〔微地形〕ほぼ平坦だが約1~2°でごく緩く東側に下る。

〔重複関係〕4号耕作痕跡、S B02と重複し、両者を切る。S D13が北東側約2.8mに並行している。

〔規模・平面形・断面形〕北西一南東方向に直線的に延びており、K IV92グリッド付近でS D11と合流している。南東側はさらに先へ続いているものと推定される。確認した規模は、長さ21.65m、上幅75cm以下、検出面からの深さ8cm以下である。断面形は皿状を呈する。

〔埋土〕Ⅲ層起源の黒褐色シルトと黒色シルトの混土で構成される。底面にはTo-aがブロック状に確認される。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および重複関係から11~12世紀以降と推定される。

S D13溝跡

遺構(第30・31図、写真図版15)

〔位置・検出状況〕K IV82・83・93グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒色シルトの広がりとして検出された。

〔微地形〕ほぼ平坦だが約1~2°でごく緩く東側に下る。

〔重複関係〕4号耕作痕跡、S B02と重複し、両者を切る。S D12が南西側約2.8mに並行している。

〔規模・平面形・断面形〕北西一南東方向に直線的に延びており、両方向へさらに続いているものと推定される。確認した規模は、長さ5.6m、上幅75cm以下、検出面からの深さ8cm以下である。断面形は皿状を呈する。

〔埋土〕Ⅲ層起源の黒色シルトである。自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および重複関係から11~12世紀以降と推定される。

S D14溝跡

遺構(第30・31図、写真図版15)

【位置・検出状況】 L IV11~14・24・25グリッドに位置する。Ⅲ層下位からV層上面で黒褐色シルトの広がりとして検出された。

【微地形】 約3°で緩く北東側に下る。

【重複関係】 なし。途中擾乱（生文課試掘）によって消失している。また、6号耕作痕跡が北側に隣接する。

【規模・平面形・断面形】 西一東方向に直線的に延びており、両方向へさらに続いているものと推定される。確認した規模は、長さ18.4m、上幅48cm以下、検出面からの深さ10cm以下である。断面形は椀状を呈する。

【埋土】 Ⅲ層起源の黒褐色シルトである。自然堆積と思われる。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。S D10~13と乖離しない時期であろう。6号耕作痕跡の区画溝である可能性がある。

S D15溝跡

遺構（第16・17図、写真図版5・6）

【位置・検出状況】 K IV93~94、L IV03・13・14グリッドに位置する。Ⅲ層下位からV層上面で黒色シルトの広がりとして検出された。

【微地形】 ほぼ平坦だが約1~2°でごく緩く北東側に下る。

【重複関係】 S D12・13と重複し、これらに切られる。また4号耕作痕跡の区画内にあたるが、これとの重複は確認できていない。

【規模・平面形・断面形】 「コ」の字形を呈し、軸方向は北西—南東およびこれに直交する方向である。これはS B02、S A01、4号耕作痕跡と同方向にあたる。確認した規模は、長さが南西辺9.2m、北西辺6.8m、北東辺2.2mで、南西辺および北東辺はさらに南東方向へ続いている可能性がある。上幅35cm以下、検出面からの深さ10cm以下である。断面形は椀状を呈する。

【埋土】 Ⅲ層起源の黒色シルトである。自然堆積と思われる。

【関連施設】 本遺構と軸方向が同一で重複のない南東側に並ぶS A01とS B02は本遺構の関連施設と推定される。

遺物 出土していない。

時期 検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、本遺構と同面で検出され、輪線を同じくするS A01のP 3に残存していた柱材のAMS法による放射性炭素年代測定値が¹⁴C年代で940±40yrBP、較正年代は95.4%の信頼度で1010AD~1190ADの可能性がある出ており（VI章1節参照）、この結果は層位的見地とも調和的である。

S D16溝跡

遺構（第32図、写真図版16）

【位置・検出状況】 K IV75・85・86・96、L IV06・16・26グリッドに位置する。Ⅲ層下位からIV層上面でTo-aを切る黒褐色シルトの広がりとして検出された。

【微地形】 ほぼ平坦だが約1~2°でごく緩く北東側に下る。

【重複関係】 7号耕作痕跡と重複し、これを切る。S D17が東側約10mに並行している。

【規模・平面形・断面形】 北一南方向に直線的に延びており、両方向へさらに先へ続いているものと

推定される。確認した規模は、長さ27.9m、上幅63cm以下、検出面からの深さ21cm以下である。断面形は逆台形状を呈する。

【埋土】色調から3層に分層されるが、すべてⅢ層起源である。斜面上方の西側から流入した自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および重複関係から、10世紀末～12世紀中葉以降と推定される。

S D 17溝跡

遺構（第33図、写真図版16）

【位置・検出状況】K IV77・87・97・98、L IV08・18・19・29・39・49・59・69・70グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒褐色シルトの広がりとして検出された。

【微地形】ほぼ平坦だが約1～2°でごく緩く北東側に下る。

【重複関係】なし。7号耕作痕跡が西側に隣接し、軸方向を同じくする。S D18が西側約10mに並行している。

【規模・平面形・断面形】北一南方向に直線的に延びており、両方向へさらに先へ続いているものと推定される。確認した規模は、長さ52.4m、上幅108cm以下、検出面からの深さ40cm以下である。断面形は薬研状を呈する。

【埋土】色調から4層に分層される。2層にV層が混入するほかはすべてⅢ層起源の黒色～黒褐色シルトである。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a陥落後以降）である。7号耕作痕跡の区画溝である可能性がある。

S D 18溝跡

遺構（第32図、写真図版16）

【位置・検出状況】L IV47・48グリッドに位置する。V層上面で黒褐色シルトの広がりとして検出された。

【微地形】S D10～17の存在する面から西側へ一段上がる途中の緩斜面上に位置している。傾斜は南西から北東に約7°で下る。

【重複関係】なし。

【規模・平面形・断面形】等高線にはほぼ並行して北西～南東方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いているものと推定される。確認できた長さは6.18mで、上幅は44cm以下、検出面からの深さは10cm以下である。断面形は皿状を呈する。

【埋土】Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体の単層である。自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土していない。

時期 比定要素が少なく不明であるが、埋土状態からS D10～17と大きく乖離しないものと思われる。

（7）柱穴状土坑群（第34図、第9表、写真図版17）

開口部径が約50cm以下で、明確な建物配置の判明しなかったものを柱穴状土坑として登録した。総数は26個で、J III26グリッド、J III78～K III30グリッド付近、K IV93・L IV03・04グリッドの3地点

に集中する。これらの集中を「群」とし、前者から第1群、第2群、第3群とした。以下、この単位ごとに記述する。

第1群

遺構（第35・36図）

【検出状況】2個検出された。検出面はP1がV層中、P2がS101床面である。

【微地形】削平され旧地形を留めないが、東側に緩く傾斜していたものと思われる。現況はほぼ平坦である。

【重複関係】P1はS101のカマド煙出しと、P2は同燃焼部と重複し、これらを切る。

【規模・平面形】いずれも開口部径30cm強の円形である。

【埋土】Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体の単層である。自然堆積の様相を呈する。

遺物 P2の埋土1層下位から土師器が11.16g出土した。細片のため不掲載である。

時期 重複関係から奈良時代以降といえるが、下限は不明である。

第2群

遺構（第35・36図）

【検出状況】20個検出された。検出面はIV層上面からV層上面である。

【微地形】約3°で緩く東側に下る。

【重複関係】なし。

【規模・平面形】開口部の長軸が20~50cmの円形あるいは梢円形で、検出面からの深さは25~69cmである。

【埋土】Ⅳ層起源の黒褐色シルト主体の単層である。自然堆積の様相を呈する。

遺物（第55図、写真図版30）

【柱材】KIII30P2に柱材が残存していた（126）。上端は欠損しているが下部は劣化がほとんどなく、直径19.1cm、残存長83.9cmを測る。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえるが、下限は不明である。

第3群

遺構（第35図）

【検出状況】4個検出された。検出面はIV層上面からV層上面である。

【微地形】ほぼ平坦だが約1~2°でごく緩く東側に下る。

【重複関係】なし。

【規模・平面形】開口部の長軸が23~56cmの円形あるいは梢円形で、検出面からの深さは30~35cmである。

【埋土】Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体の単層である。自然堆積の様相を呈する。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえるが、下限は不明である。

(8) 杠 (第34~36図、第10表、写真図版17)

KIII60グリッドのIV層To-a上面で杭を1本検出した。断面観察の結果、掘り方が確認されず、そのいっぽうで杭周囲の土層が下位にずれる打ち込み痕跡が認められたことから、杭と認定した。検出面は前記のとおりTo-a上面であったものの、杭上部に欠損痕が確認されることから、さらに上方へ延びていたはずであるが残存していない。打ち込み角度は垂直ではなく、約10°東側へ傾いている。杭の大きさは残存長71.2cm、直径約8cmで、樹種はムシカリである（VI章5節参照）。なお、検出本数が1本のみであるため、その用途・性格等は不明である。

(9) 焼土遺構・炭化物集中・火葬関連遺構

野外調査時、焼土および炭化物に関連する遺構を「SX」として括し連番で登録した。本群は状態により、単純な焼土遺構、炭化物のみ散在するいわゆる炭化物集中遺構、異地性の焼土・炭化物・骨片などが充填された浅い土坑（骨片・焼土・炭化物廃棄遺構）の3種に細分される。うち後者については分布が纏まる傾向が見られるほか、近接して現地性の焼土遺構が確認されており、これらは一連の遺構群といえるものである。同上坑出土遺物に対し、分析鑑定（炭化物に対するAMS法による放射性炭素年代測定、骨片同定）を実施した結果、これらは中世の火葬に関わる遺構（「火葬関連遺構」と呼称）と判明した。ここでは、焼土関連遺構という観点から野外調査時の大分類である「SX」のまま報告していくが、構築時期・性格ともに異なる可能性があるため上記の3種別を連番表記後に付記し、区別することとした。

なお、本報告ではあえて「火葬墓」と断定的に呼称することを避けた「火葬関連遺構」としたが、その理由は本遺構から出土する人骨量が全部ではなく一部であり、主体は別の場所に埋葬された可能性が高いことに起因する。あくまでも主体的・本来的な「墓」とは一線を画す。火葬行為に関わる付随遺構の1つと捉えたからである。

第9表 柱穴状土坑・杭計測値と土層註記

年 代	遺構名	土層註記	深さ(cm)	底面標高(m)	
第1群					
1	ⅣR26P1	第35回遺構	-	-	-
	ⅣR26P2	第35回遺構	-	-	-
第2群					
	ⅣR27P1	10YR25G 黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～1cm）・層1Bに10%・E2層・炭化物1%、	29.8	178.039	
	ⅣR27P2	10YR25G 黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）3%、炭化物1%、	51.8	177.875	
	ⅣR27P3	10YR25G 黒・黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～10cm）5%、炭化物1%、	29.0	178.059	
	ⅣR27P4	10YR25G 黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～10cm）3%、炭化物1%、	45.5	177.976	
	ⅣR29P1	10YR25L 黒・黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）5%、炭化物0.3%、	31.7	177.973	
	ⅣR27P1	10YR25G 黒・黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）5%、炭化物0.3%、	27.0	178.211	
	ⅣR27P2	10YR25G 黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）5%、炭化物1%、	31.4	178.168	
	ⅣS8P1	10YR25G 黒・黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）5%、炭化物1%、	40.4	177.591	
	ⅣS9P1	10YR25G 黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）5%、炭化物1%、	26.0	178.208	
	ⅣS8P2	10YR25G 黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）5%、炭化物1%、	36.8	177.859	
	ⅣT1P1	10YR25L 黒・黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）3%、炭化物1%、	71.4	176.695	
	K-N30P1	10YR25G 黑褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）3%、炭化物1%、	31.4	176.553	
	K-N30P2	第35回遺構	-	-	-
	K-N30P3	10YR25L 黑褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）5%、炭化物1%、	58.6	176.302	
	K-N30P4	10YR25L 黑褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）5%、炭化物1%、	14.2	176.994	
	K-N30P5	第35回遺構	-	-	-
	K-N30P2	10YR25G 黑褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）5%、炭化物1%、	52.8	176.397	
	K-N30P3	10YR25G 黑褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）5%、炭化物1%、下半に砂質、	52.0	176.724	
	K-N30P4	10YR25L 黑・黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）3%、下半に砂質、	24.6	176.990	
	K-N30P5	10YR25G 黑・黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）2%、炭化物1%、下半に砂質、	45.1	176.733	
	K-N31P1	10YR25L 黑・黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）3%、下半に砂質、	58.4	176.613	
	K-N31P2	10YR25G 黑・黒褐色・シルト・粘性中・しまり中・砂質層（～5cm）3%、下半に砂質、	55.0	176.748	
第3群					
	遺構名	土層註記	深さ(cm)	底面標高(m)	
3	K-N93P1	10YR3/2黒褐色シルトと10YR21黒褐色シルトの混土・粘性中・しまり中・砂質層	34.5	177.464	
	L-N03P1	10YR3/2黒褐色シルト・粘性中・しまり中・砂質層	30.2	177.637	
	L-N03P2	10YR3/2黒褐色シルト・粘性中・しまり中・砂質層	31.9	177.597	
	L-N04P1	10YR3/2黒褐色シルト・粘性中・しまり中・砂質層	31.5	177.504	
後					
	遺構名	土層註記	深さ(cm)	底面標高(m)	
	K-N60P1	第35回遺構	83.8	177.376	

S X01焼土遺構

遺構（第37図、写真図版18）

【位置・検出状況】 J III 47グリッドに位置する。県教委生涯学習文化課の試掘により確認されていたもので、Ⅲ層下位～V層上位で検出された。遺構北側が消失しているが、これは生文課トレンチによるものである。また、焼土の南東側に異地性の焼土ブロックや被熱磚、土器の集中が存在する。

【微地形】 北西から南東に約5～7°で下る緩斜面である。

【重複関係】 なし。

【規模・平面形】 残存最長部は108cmを測る。平面形は不明である。燃焼による変色層の厚さは24cmである。

遺物（第51・52図、写真図版28）

焼土に直接伴うものではなく、すべて南東側から散在状態で出土したものである。出土層位はⅢ層下位である。

【绳文土器】 5.61g 出土した。細片のため不掲載である。

【土師器】 1,139.11g 出土し、5点・568.46gを掲載した（103～107）。

時期 IV層が介在しないためテフラとの前後関係は不明であるが、層位的にはその降下時期と大きく変わらないものと思われる。

S X02焼土遺構（火葬関連）

遺構（第38図）

【位置・検出状況】 K III 10グリッド北部に位置する。V層上面で検出された。焼土と炭化物集中が東西に隣接する。

【微地形】 約2～3°で緩く東側に下る。

【重複関係】 なし。S X03・04と近接する。

【規模・平面形】 烧土の規模は25×15cmで、不整形を呈する。焼成が弱く厚さはごく薄い。炭化物集中の範囲は28×23cmで、不整形を呈する。堆積はごく薄く、掘り込みは確認されない。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および遺構状態が類似し近接するS X05と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

S X03焼土遺構（火葬関連）

遺構（第38図）

【位置・検出状況】 K III 10グリッド中央に位置する。V層上面で検出された。焼土と炭化物集中が南北に隣接する。

【微地形】 約2～3°で緩く東側に下る。

【重複関係】 なし。S X02・04と近接する。

【規模・平面形】 烧土の規模は22×17cmで、楕円形を呈する。焼成が弱く厚さはごく薄い。炭化物集中の範囲は27×18cmで、不整形を呈する。堆積はごく薄く、掘り込みは確認されない。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および遺構状態が類似し近接するS X05と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

S X04炭化物集中（火葬関連）

遺構（第38図）

【位置・検出状況】 K III 10グリッド南東部に位置する。V層上面で検出された。

【微地形】 約2～3°で緩く東側に下る。

【重複関係】 なし。S X02・03と近接する。

【規模・平面形】 38×22cmの楕円形である。堆積はごく薄く、掘り込みは確認されない。

遺物 出土していない。

時期 時期 検出層位および遺構状態が類似し近接するS X05と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

S X05骨片・炭化物廃棄遺構（火葬関連）

遺構（第38図、写真図版18）

【位置・検出状況】 J IV 81グリッドに位置する。IV層上面で検出された。小形の浅い土坑に焼上、炭化物、骨片などを廃棄した状態である。

【微地形】 約2～3°で緩く東側に下る。

【重複関係】 なし。S X06と近接する。

【規模・平面形】 土坑の規模は56×51cmのほぼ円形で、断面は皿状を呈する。検出面からの深さは最深部で6cmを測る。

【埋土】 III層起源の黒褐色シルト主体で、炭化物が多量に混入する。骨片も全体的に散在する。

遺物 骨片38.92gと炭化種子・実15点が出土している。いずれもフローテーションを実施し採取したものである。なお、両者について分析鑑定を行い、前者は約800°C以上で焼かれた人骨（肋骨や四肢骨含む）、後者はイネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、シロザ近似種、エノキグサ、オニグルミ、トチノキと同定された（VI章4・6節参照）。

時期 検出層位からは平安時代前期以降（To-a降下以降）といえる。埋土より採取した炭化物に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施しており、これにより得られた年代値は¹⁴C年代で430±40yrBP、較正暦年代は83.9%の信頼度で1410AD～1530AD、11.5%の信頼度で1570AD～1630ADの可能性があるとしている（VI章1節参照）。この結果から、中世後半（15～16世紀前半）に所属する可能性が高い。

S X06骨片・炭化物廃棄遺構（火葬関連）

遺構（第38図、写真図版18）

【位置・検出状況】 J III 80グリッドに位置する。IV層上面で検出された。小形の浅い土坑に炭化物、焼土、骨片などを廃棄した状態である。

【微地形】 約2～3°で緩く東側に下る。

【重複関係】 なし。S X05と近接する。

【規模・平面形】 土坑の規模は70×43cmの楕円形で、断面は皿状を呈する。検出面からの深さは最深部で5cmを測る。

【埋土】 III層起源の黒褐色シルト主体で、炭化物が多量に、焼土粒が局所的に混入する。

遺物 フローテーションを実施した結果、骨片が微量検出された。

時期 検出層位および遺構状態が類似し近接するS X05と同時期のものである可能性が極めて高く、

中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

S X07焼土・炭化物廃棄遺構

遺構（第38図、写真図版18）

【位置・検出状況】J III 30グリッドに位置する。V層上面で検出された。小形の浅い土坑に焼土、炭化物などを廃棄した状態である。

【微地形】ほぼ平坦だが約1～2°でごく緩く南東側に下る。

【重複関係】なし。1号耕作痕跡と近接する。

【規模・平面形】土坑の規模は49×36cmの楕円形で、断面は皿状を呈する。検出面からの深さは最深部で10cmを測る。

【埋上】Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体で、ブロック・粒状の焼土が多量に混入する。

遺物（第52図、写真図版28）

【土師器】本遺構の北東1.1mから土師器の球胴壺（P 1・108）と壺口縁部片（P 2・109）が出土した（698.27g）。いずれも掲載している。また、その北東側からカマドの芯材と思われる被熱した凝灰岩が出土した。検出面から本遺構と同時期のものと推定される。

時期 遺物から奈良時代前～中葉頃と推定される。

S X08炭化物集中遺構

遺構（第38図、写真図版19）

【位置・検出状況】I III 98グリッドに位置する。I b層直下のV層中に検出された。

【微地形】削平され原形を留めない。

【重複関係】なし。

【規模・平面形】200×173cmの不整形で、間に空白地帯を2箇所挟む。堆積はごく薄く、掘り込みは確認されない。

遺物 出土していない。

時期 不明である。

S X09炭化物集中遺構

遺構（第38図、写真図版19）

【位置・検出状況】L IV 82グリッドに位置する。V層上面で検出された。

【微地形】削平され原形を留めない。

【重複関係】なし。

【規模・平面形】220×217cmの不整形である。皿状を呈するが、掘り込みは確認されない。

【埋上】VI層起源の黒褐～暗褐色シルト主体で、炭化物粒が混入する。焼土は確認されない。堆積の厚さは最深部で17cmである。

遺物 出土していない。

時期 層位的に縄文時代と推定されるが、詳細については不明である。

S X10焼土遺構（火葬関連）

遺構（第39図、写真図版19）

[位置・検出状況] L III50グリッドに位置する。III層下位～V層上面で検出された。付近には所々にTo-aの堆積が確認され、これを切る。

[微地形] 約5～6°で東側へ下る。

[重複関係] なし。S X11・12・13と近接する。

[規模・平面形] 後世（現代ではない）の擾乱を受け、原形を留めていない。残存規模は105×46cmの楕円形である。燃焼による変色層の厚さは13cmである。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および構造状態が類似し近接するS X12と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

S X11焼土遺構（火葬関連）

遺構（第39図、写真図版19）

[位置・検出状況] L III39グリッドに位置する。III層下位～V層上面で検出された。付近には所々にTo-aの堆積が確認され、これを切る。

[微地形] 約5～6°で東側へ下る。

[重複関係] なし。S X10・12・13と近接する。

[規模・平面形] 北側が後世（現代ではない）の擾乱を受け、原形を留めていない。残存規模は103×93cmの楕円形である。燃焼による変色層の厚さは14cmである。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および構造状態が類似し近接するS X12と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

S X12骨片・炭化物廃棄遺構（火葬関連）

遺構（第39図、写真図版19）

[位置・検出状況] L III40・L IV31グリッドに位置する。III層下位～V層上面で検出された。付近には所々にTo-aの堆積が確認され、これを切る。小形の深い土坑に炭化物、骨片などを廃棄した状態である。

[微地形] 約5～6°で東側へ下る。

[重複関係] なし。S X10・11・13と近接する。

[規模・平面形] 七坑の規模は90×50cmの楕円形で、断面は台形状を呈する。検出面からの深さは最深部で19cmを測る。また、底面に浅い凹みが4箇所確認された。掘削痕と思われる。

[埋土] III層起源の黒色シルト主体で、炭化物が多量に混入する。骨片も全体的に散在する。

遺物 フローテーションを実施した結果、骨片4.11gが検出された。

時期 検出層位からは平安時代前期以降（To-a層以下）といえる。埋土より採取した炭化物に対し、AMS法による放射性炭素年代測定を実施しており、これにより得られた年代値は¹⁴C年代で390±30yrBP、較正暦年代は69.2%の信頼度で1440AD～1530AD、26.2%の信頼度で1550AD～1640ADの可能性があるとしている（VI章1節参照）。この結果から、中世後半（15～16世紀前半）に帰属する可能性が高い。なお、この結果はS X05採取試料の数値とも極めて近いもので、同時期の所産といえる。

S X13焼土遺構（火葬関連）

遺構（第39図、写真図版20）

【位置・検出状況】L III 40グリッドに位置する。II層下位～V層上面で検出された。付近には所々にTo-aの堆積が確認され、これを切る。

【微地形】約5～6°で東側へ下る。

【重複関係】なし。S X10・11・12と近接する。

【規模・平面形】後世（現代ではない）の擾乱を受け、原形を留めていない。残存規模は121×64cmの長辺円形である。燃焼による変色層の厚さは7cmである。

遺物 出土していない。

時期 検出層位および遺構状態が類似し近接するS X12と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

S X14炭化物廃棄遺構

遺構（第40図、写真図版20）

【位置・検出状況】M IV 44グリッドに位置する。I層直下のVI層中で検出された。この周辺は耕作造成時の地形変更が激しく、II～V層は残存しない。不整形の土坑に炭化物などを廃棄した状態である。

【微地形】東へ下る緩斜面だが、詳細は不明である。

【重複関係】なし。

【規模・平面形】検出層位から推定して、上部が相当失われているものと思われる。土坑の規模は242×77cmの長辺円形で、南西端が浅く張り出す。底面は狭く、断面は焼状を呈する。検出面からの深さは最深部で26cmを測る。

【埋土】To-a、炭化物、黒褐色シルトで構成される。最上位（1層）には水成堆積のTo-a層が確認され、その下層にテフラのブロック堆積層（6層）、炭化物ブロックの多量混入層（7層）が介在し、さらに下層にふたたびTo-aの水成層（8層）が堆積する。6・7層は人為堆積である。成層するTo-aは流水による上部からの流れ込みによるものと推定される。

遺物 埋土から繩文土器が7.40g出土した。細片のため不掲載である。

時期 遺構の構築は、埋土状態から平安時代前期頃（To-a降下直前）といえる。To-aが降下・堆積した直後、炭化物を伴う何らかの行為がなされ、さほど時間差なくふたたびTo-aが流入したものと推定される。

S X15焼土廃棄遺構

遺構（第40図、写真図版20）

【位置・検出状況】M V 02グリッドに位置する。V層上面で検出された。不整形の土坑に焼土、炭化物などを廃棄した状態である。

【微地形】約4°で東側へ下る。

【重複関係】なし。S D 08と近接する。

【規模・平面形】土坑の規模は190×53cmの不整形で、断面は台形状を呈する。検出面からの深さは最深部で77cmを測る。

【埋土】III層起源の黒褐色シルト主体で、1層に焼土が多量に混入する。

遺物 埋土中から頁岩6（5.69g）、赤色頁岩（25.85g）、チャート1（6.62g）の剥片が出土した。

不掲載である。

時期 検出面から古代の可能性があるが、詳細は不明である。

S X16焼土・炭化物廃棄遺構（火葬関連）

遺構（第40図、写真図版20）

[位置・検出状況] L IV42グリッドに位置する。V層上面で検出された。不整形の土坑に焼土、炭化物などを廃棄した状態である。

[微地形] 約3°で東側へ下る。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 土坑の規模は157×111cmの椭円形で、底面が狭く、断面形は漏斗状に近い。検出面からの深さは最深部で85cmを測る。

[埋土] 4層に分層される。Ⅲ層起源の黒色～黒褐色シルト主体で、各層に焼土粒や炭化物が混入する。2層は焼土が大半を占め、V層あるいはⅦ層が混在する。全層とも人為堆積である。

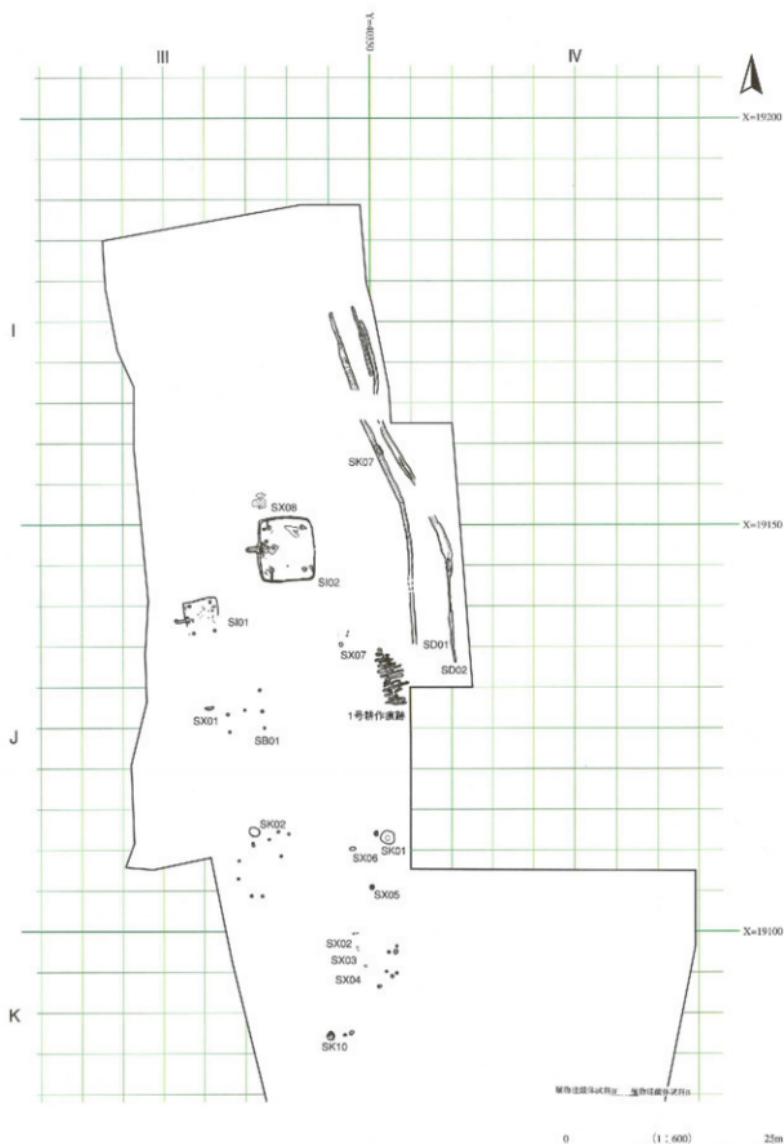
遺物 埋土中から貝岩3の剥片が6.16g出土した。不掲載である。

時期 検出層位および造構状態が類似し近接するS X12と同時期のものである可能性が高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

(丸山)

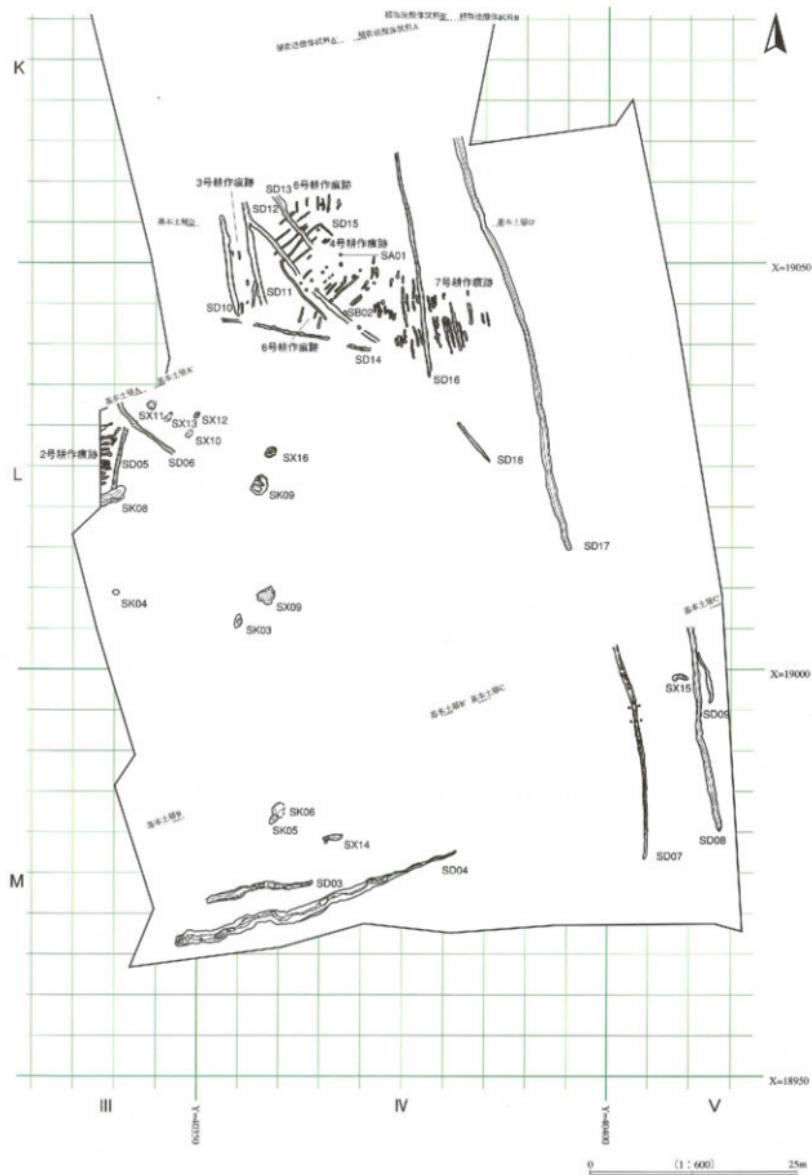


第9図 野里上遺跡遺構配置とIV層面の標高

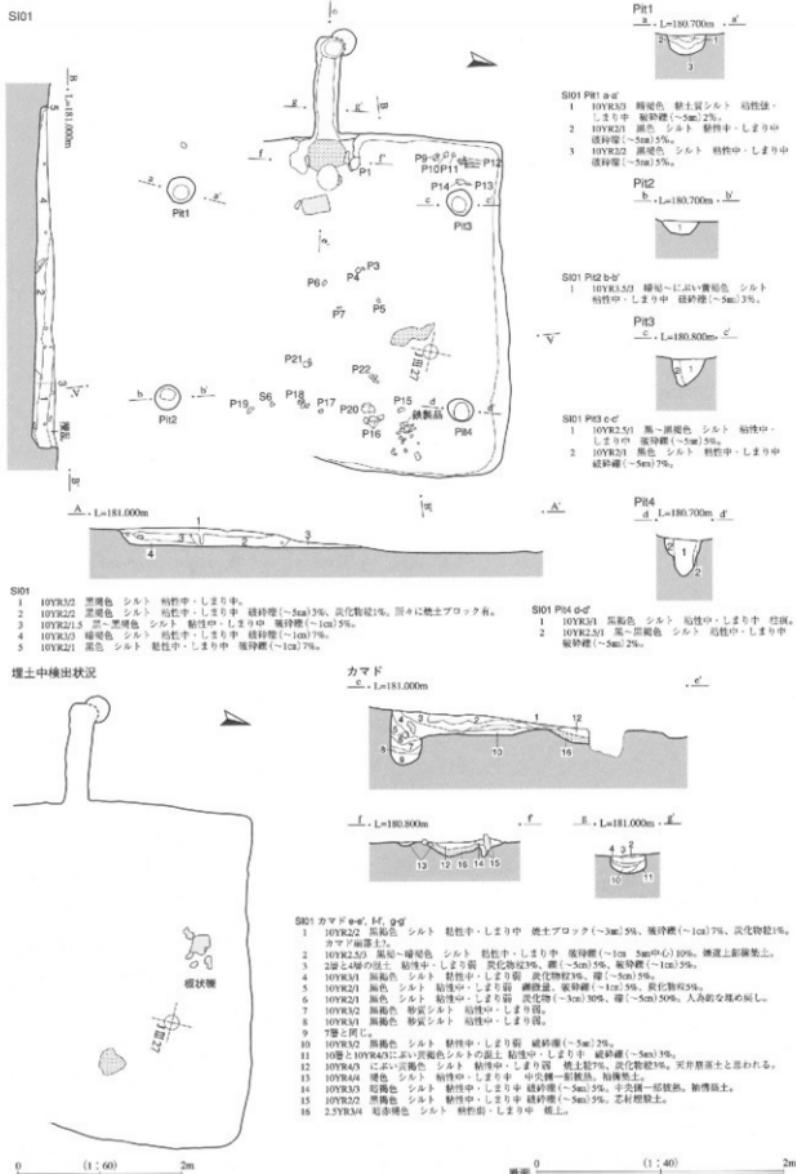


第10図 野里上遺跡北側遺構配置図

1 検出遺構

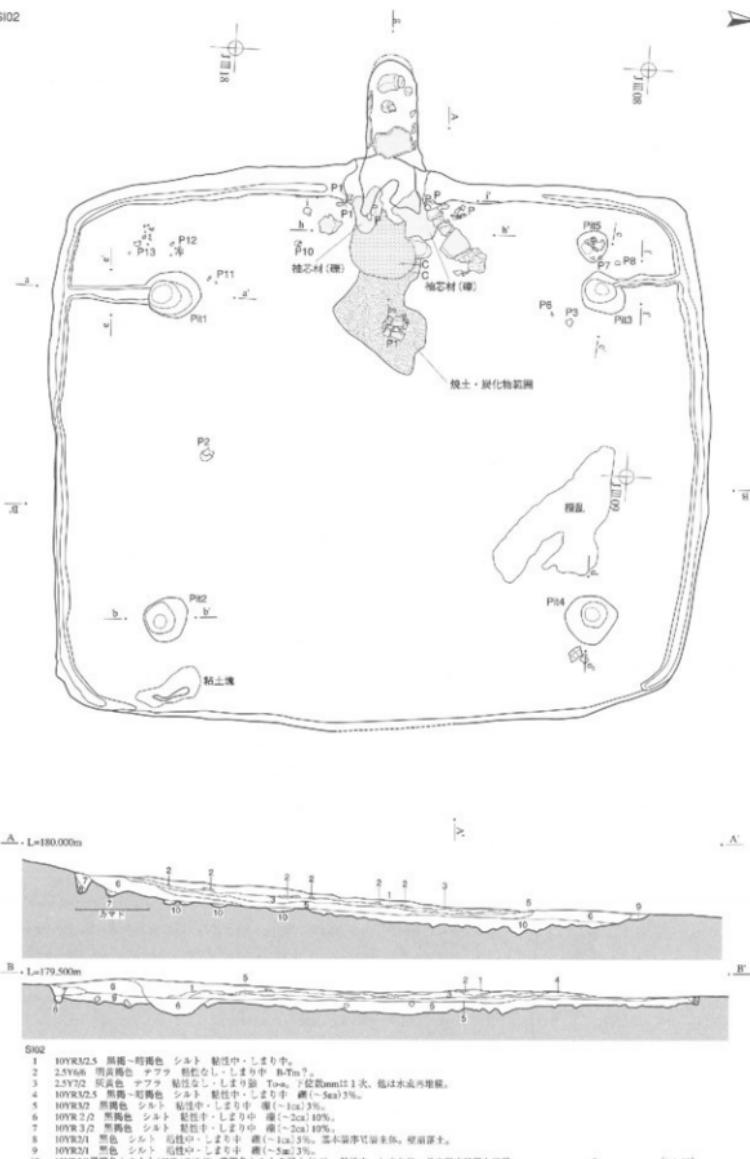


第11図 野里上遺跡南側造構配置図

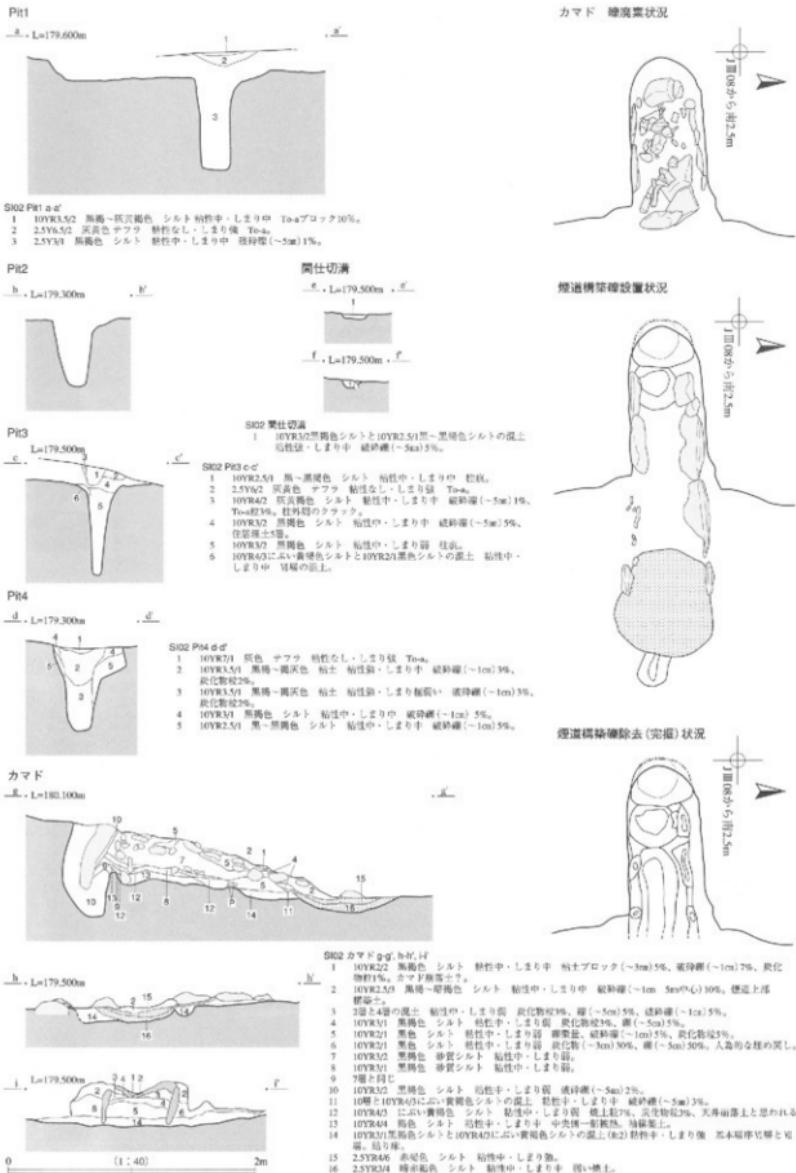


第12図 S I 01

SI02



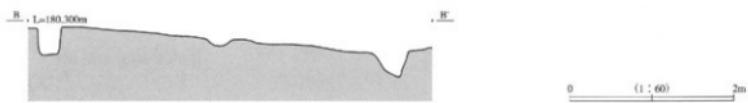
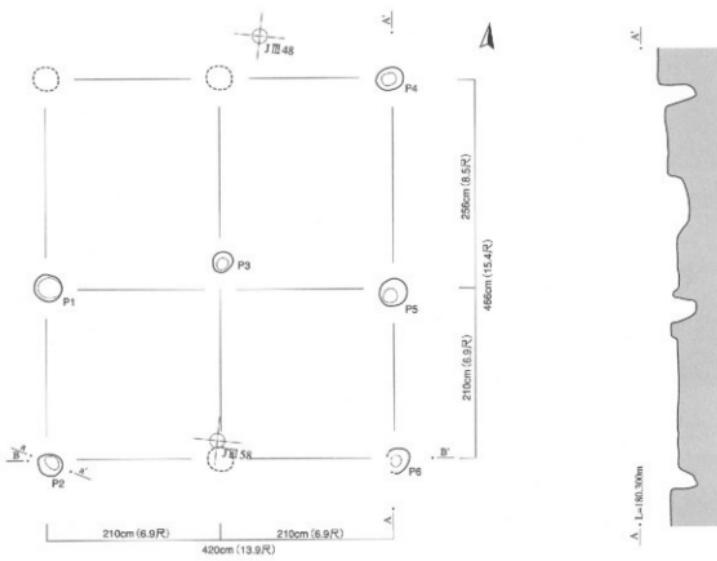
第13図 SI 02 (1)



第14図 S 02 (2)

1 検出造構

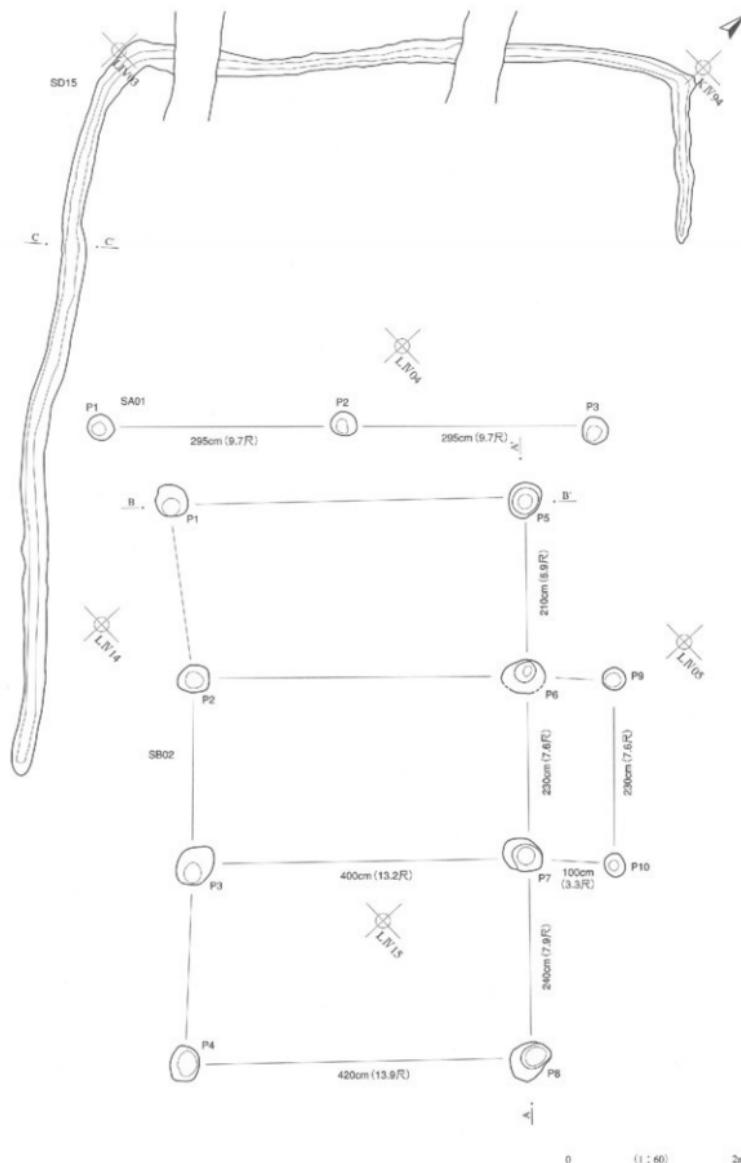
SB01



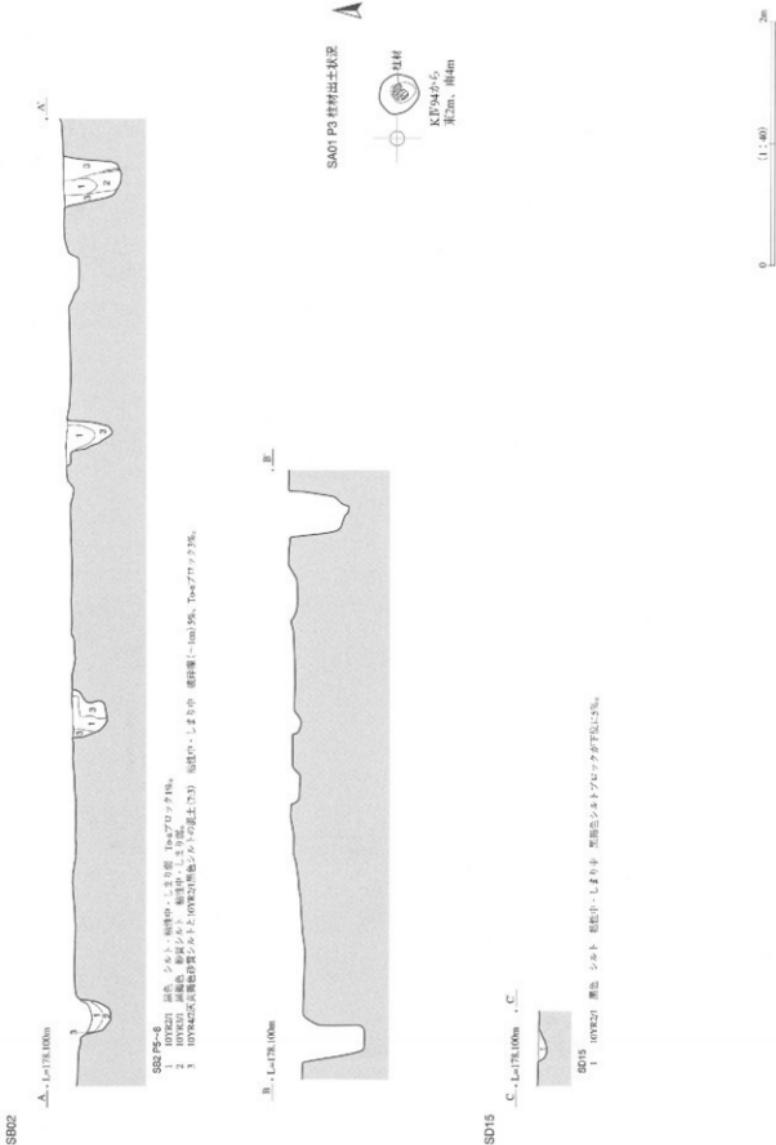
- P2
- 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中・しまり弱 硫鉄礦(-5m)3%、炭化物鉱(-2m)3%。柱状。
 - 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中・しまり中 硫鉄礦(-5m)3%、ロームブロック(-1m)5%。
 - 10YR2/2 黒褐色 シルト 粘性中・しまり中 炭化物鉱(-3m)1%。



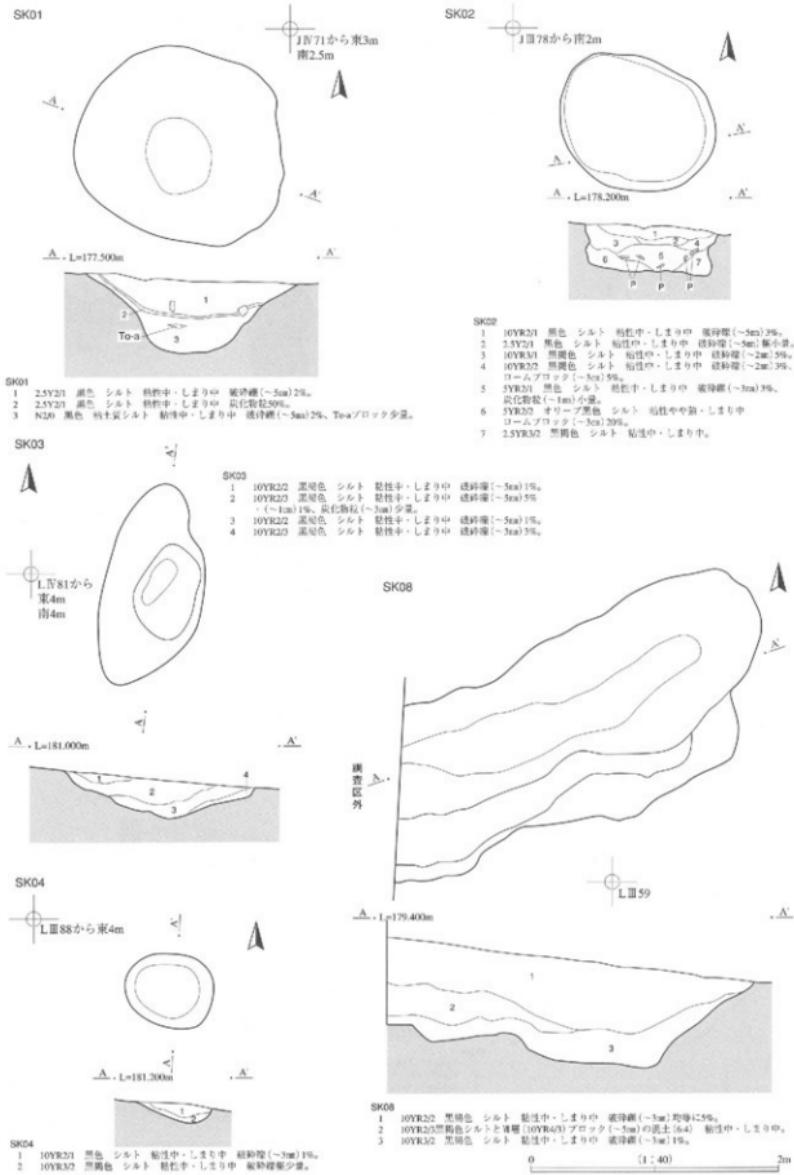
第15図 SB01



第16図 SB02、SA01、SD15 (1)

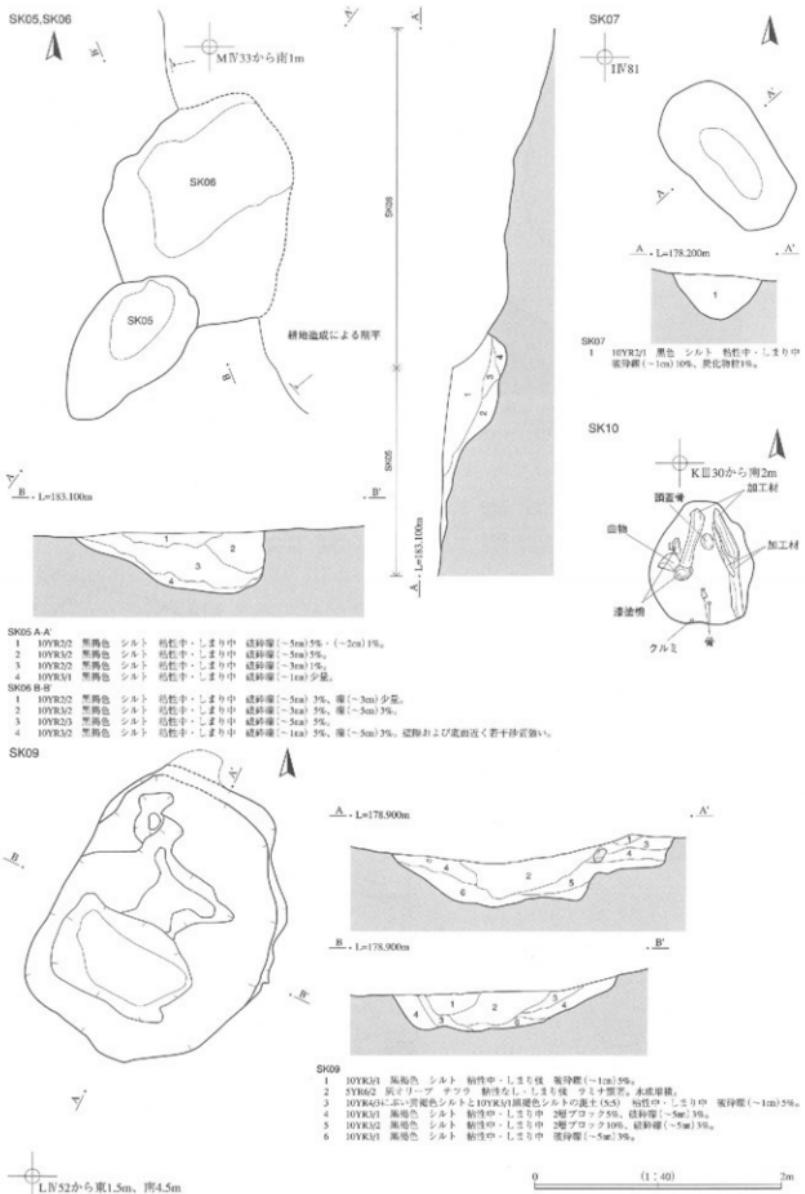


第17図 SB02、SA01、SD15（2）



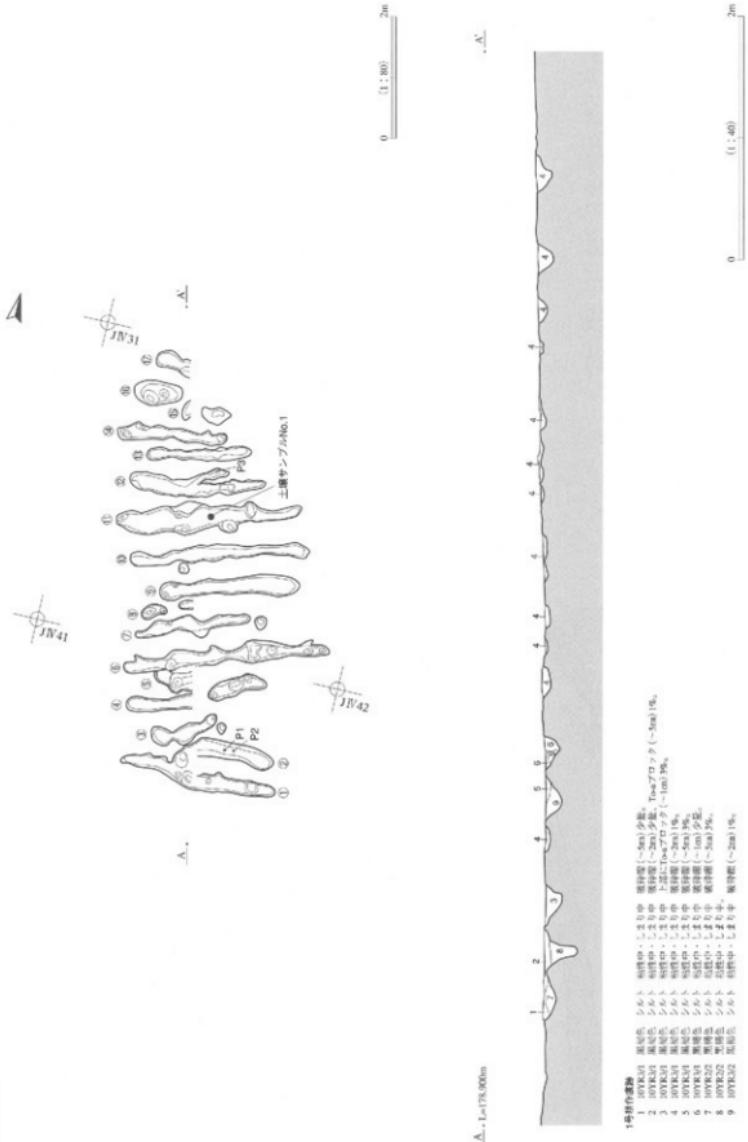
第18図 SK01~04・08

1 検出遺構

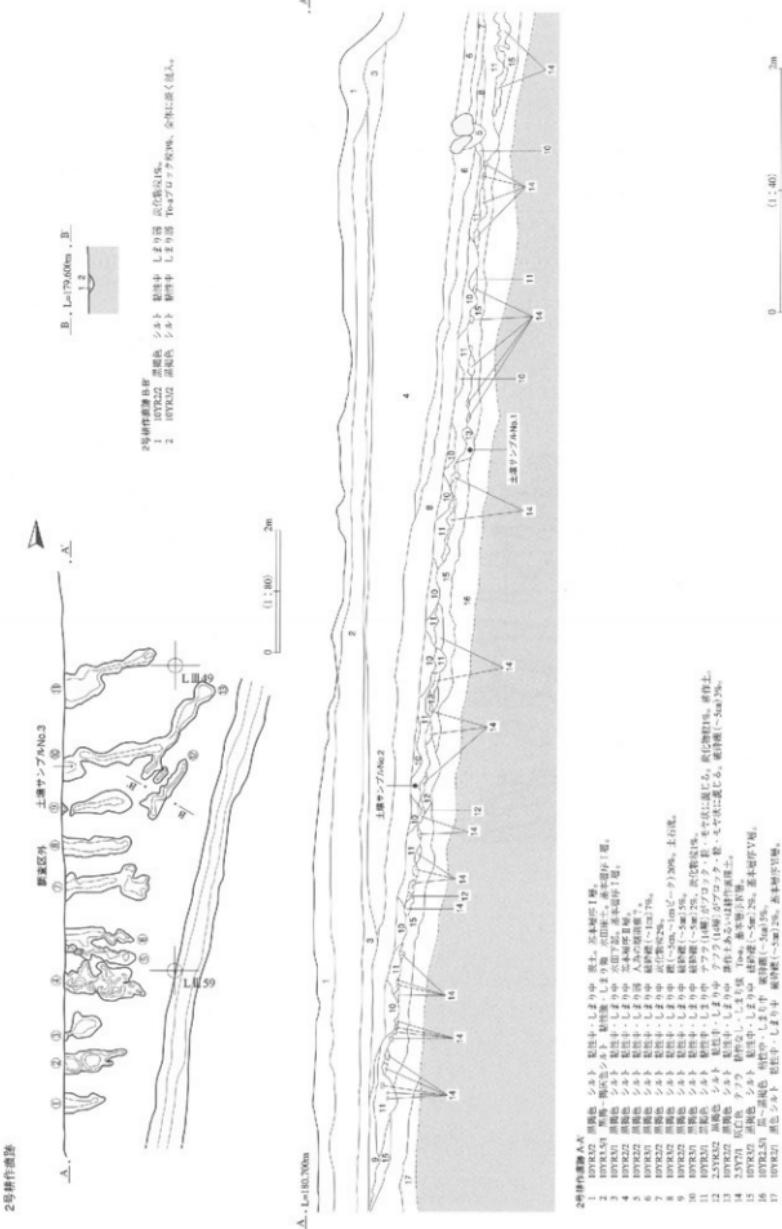


第19図 SK 05~07・09・10

1号耕作痕跡

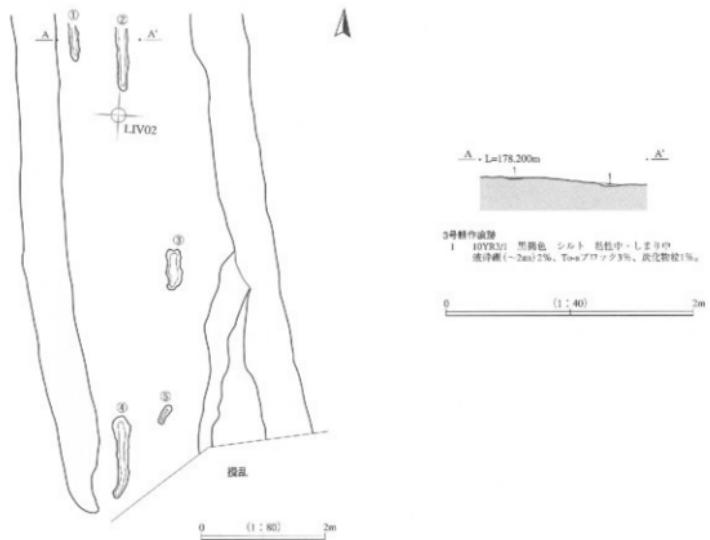


第20図 1号耕作痕跡

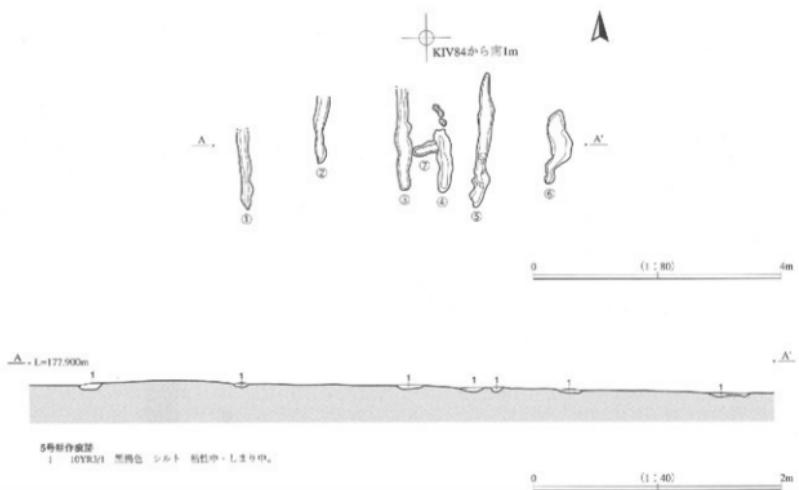


第21図 2号耕作痕跡

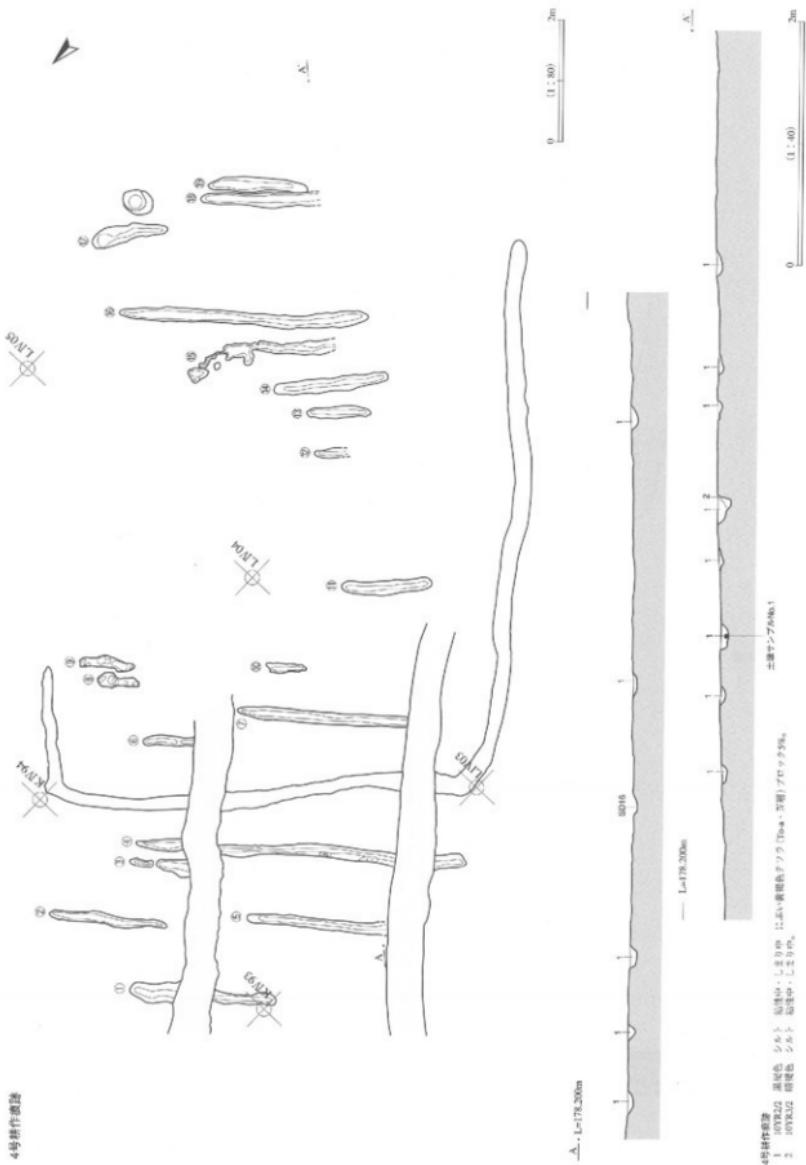
3号耕作痕跡



5号耕作痕跡

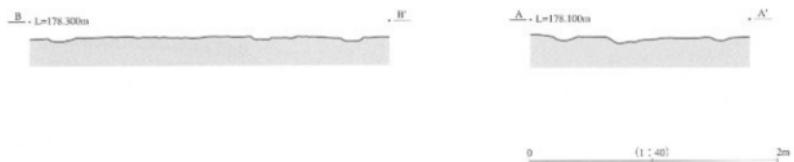


第22図 3号・5号耕作痕跡

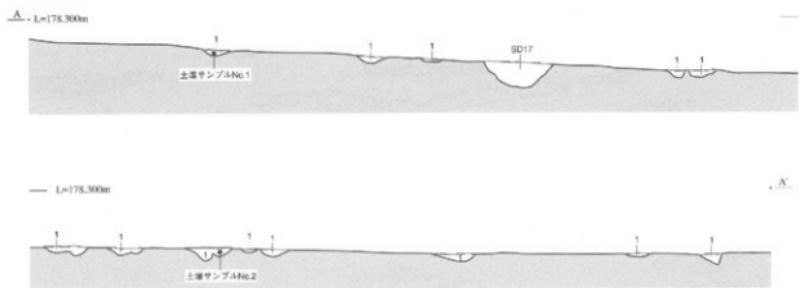


第23図 4号耕作痕跡

6号耕作痕跡



7号耕作痕跡

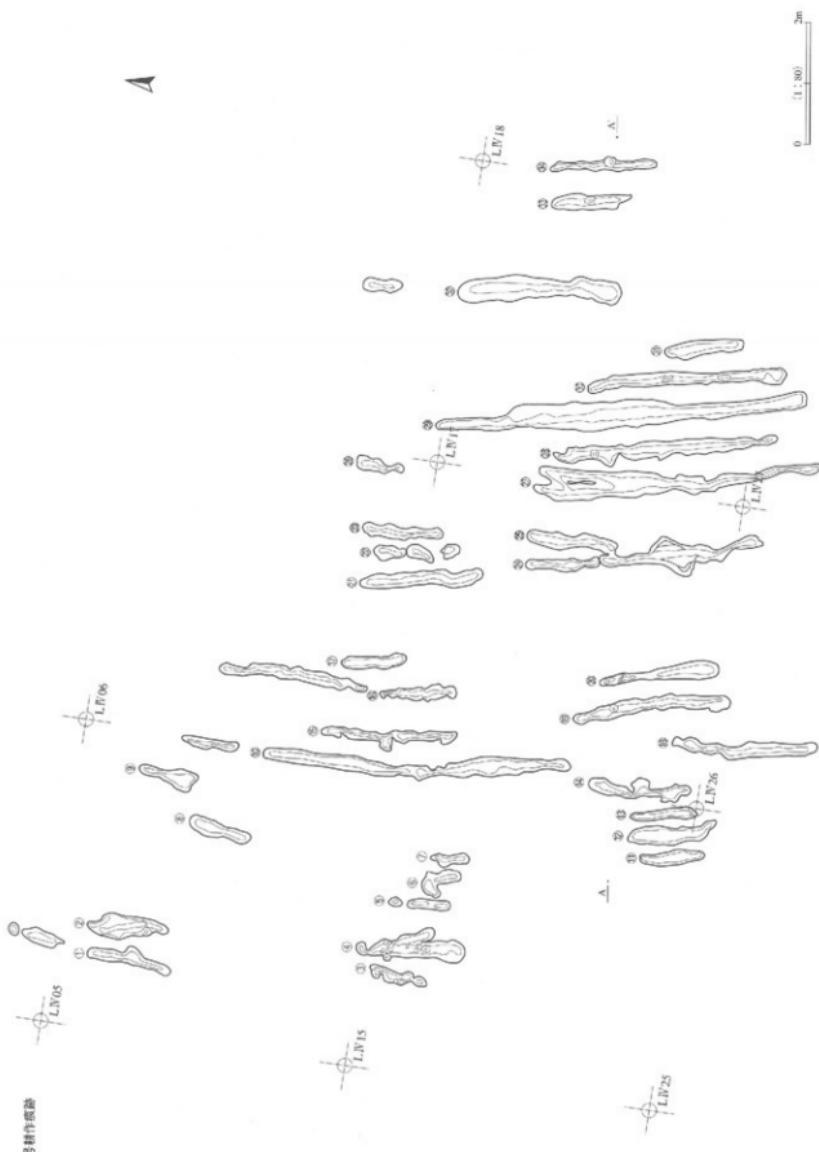


7号耕作痕跡

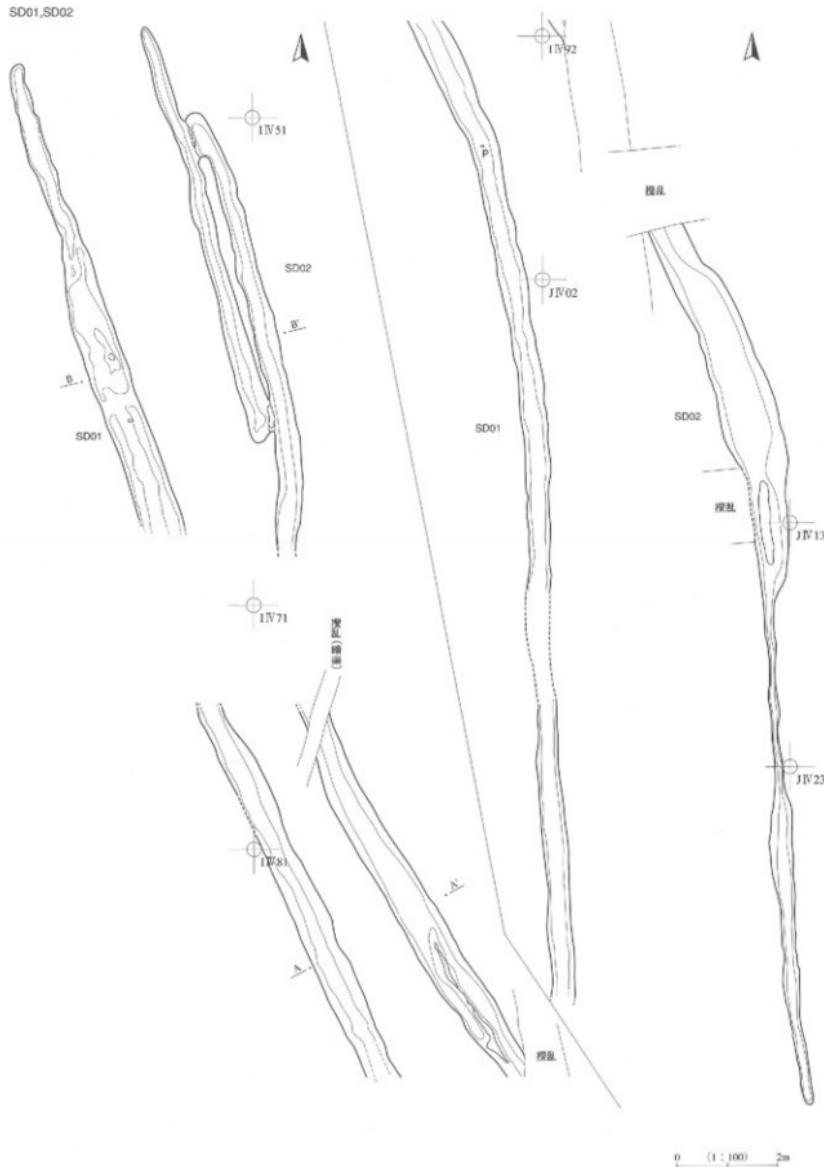
1 IOYR2.51 黒～黒褐色 シルト 热性半・しまり中 坚實褐色シートブロック (V型割合) 5%、砂砾塊 (~5mm) 3%、炭化物粒 1%、To-aブロック 1%、@To-aを切る



第24図 6号耕作痕跡、7号耕作痕跡 (1)

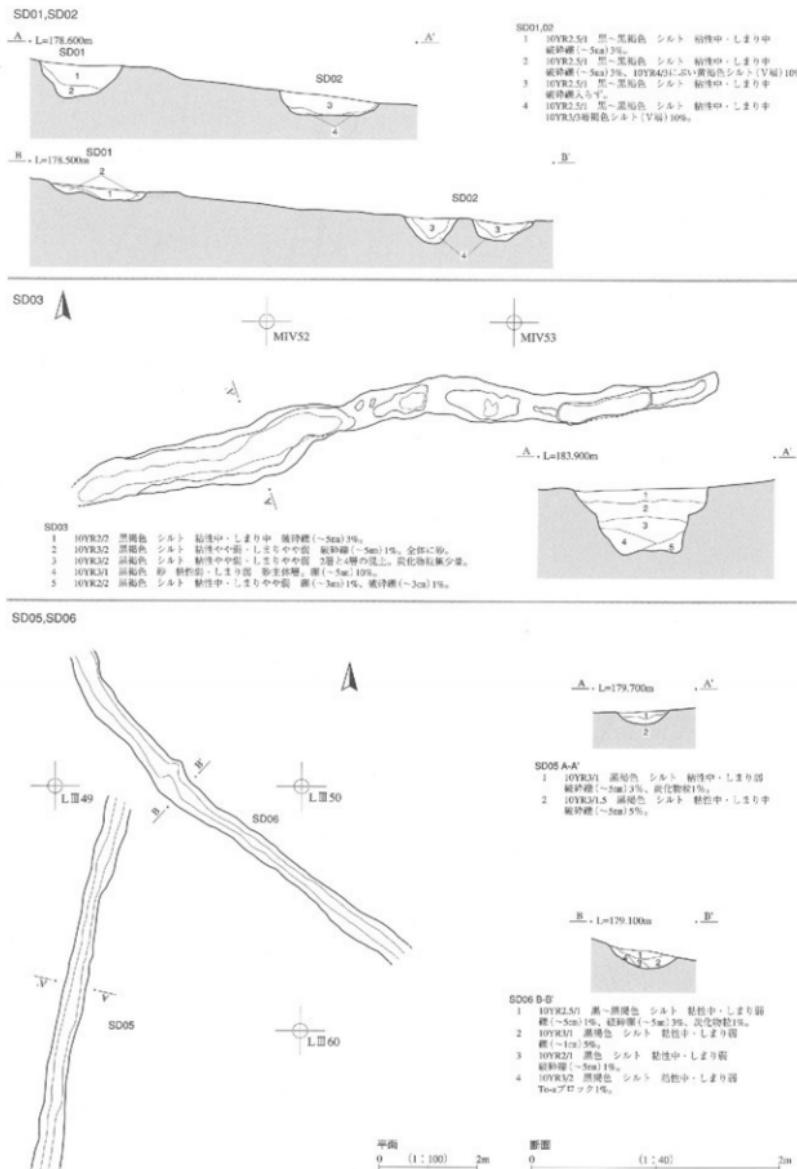


第25図 7号耕作痕跡 (2)



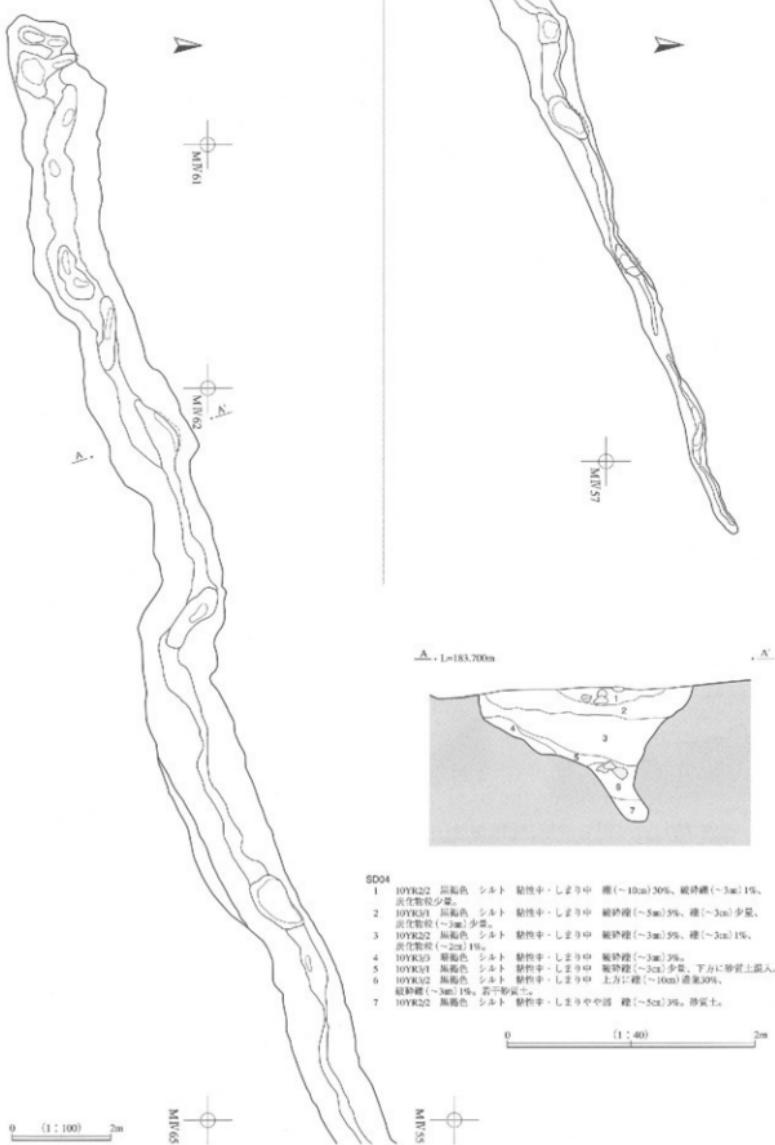
第26図 SD01・02 (1)

1 検出遺構



第27図 S D 01・02 (2)、S D 03・05・06

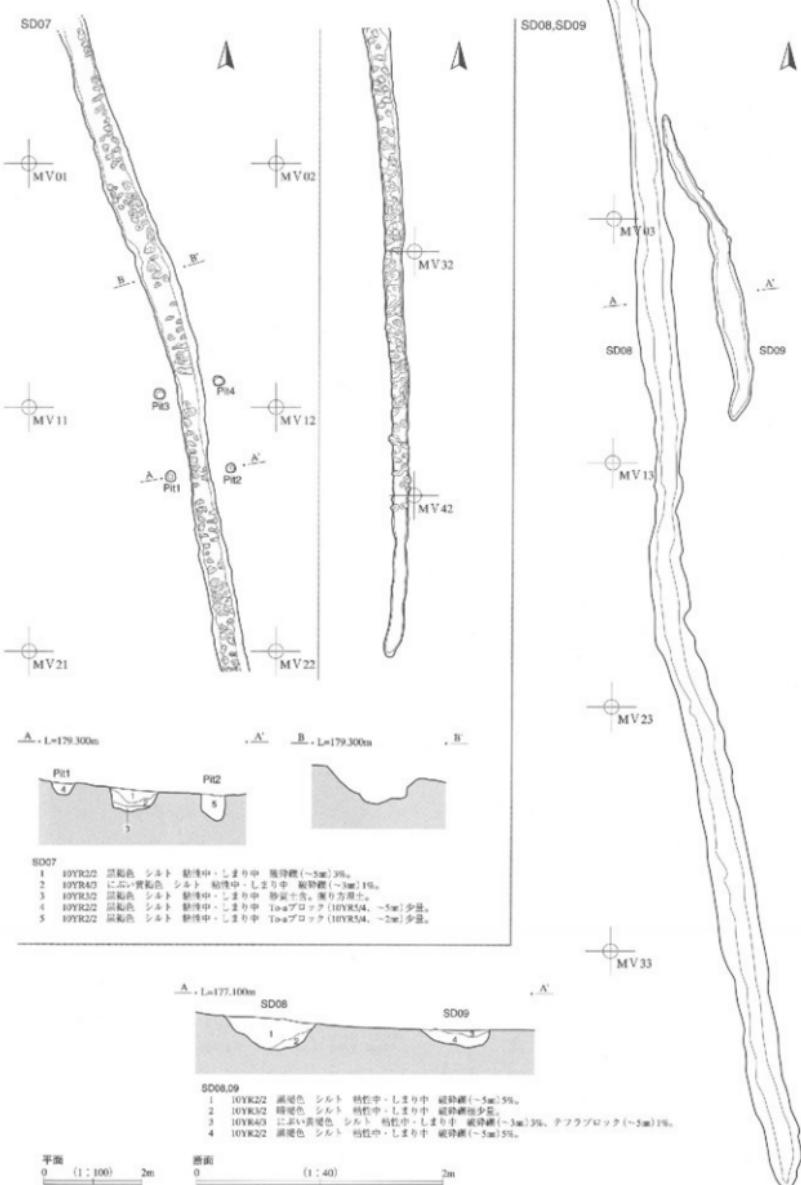
SD04



- SD04
- 1 IOYR22 黄褐色 シルト 硬性中・しまり中 粘 (~10cm) 20%, 砂鉄鉱 (~3cm) 1%、炭化物鉱少量。
 - 2 IOYR31 黄褐色 シルト 硬性中・しまり中 砂鉄鉱 (~5cm) 5%, 粘 (~3cm) 少量、炭化物鉱 (~3cm) 少量。
 - 3 IOYR22 黄褐色 シルト 硬性中・しまり中 砂鉄鉱 (~3cm) 5%, 粘 (~3cm) 1%、炭化物鉱 (~3cm) 少量。
 - 4 IOYR33 黄褐色 シルト 硬性中・しまり中 砂鉄鉱 (~3cm) 3%。
 - 5 IOYR31 黄褐色 シルト 硬性中・しまり中 砂鉄鉱 (~3cm) 少量、下方に砂質土混入。
 - 6 IOYR32 黄褐色 シルト 硬性中・しまり中 上方に砂 (~10cm) 過量30%、炭鉄鉱 (~3cm) 1%, 若干砂質土。
 - 7 IOYR22 黄褐色 シルト 硬性中・しまりやや弱 粘 (~5cm) 3%、砂質土。

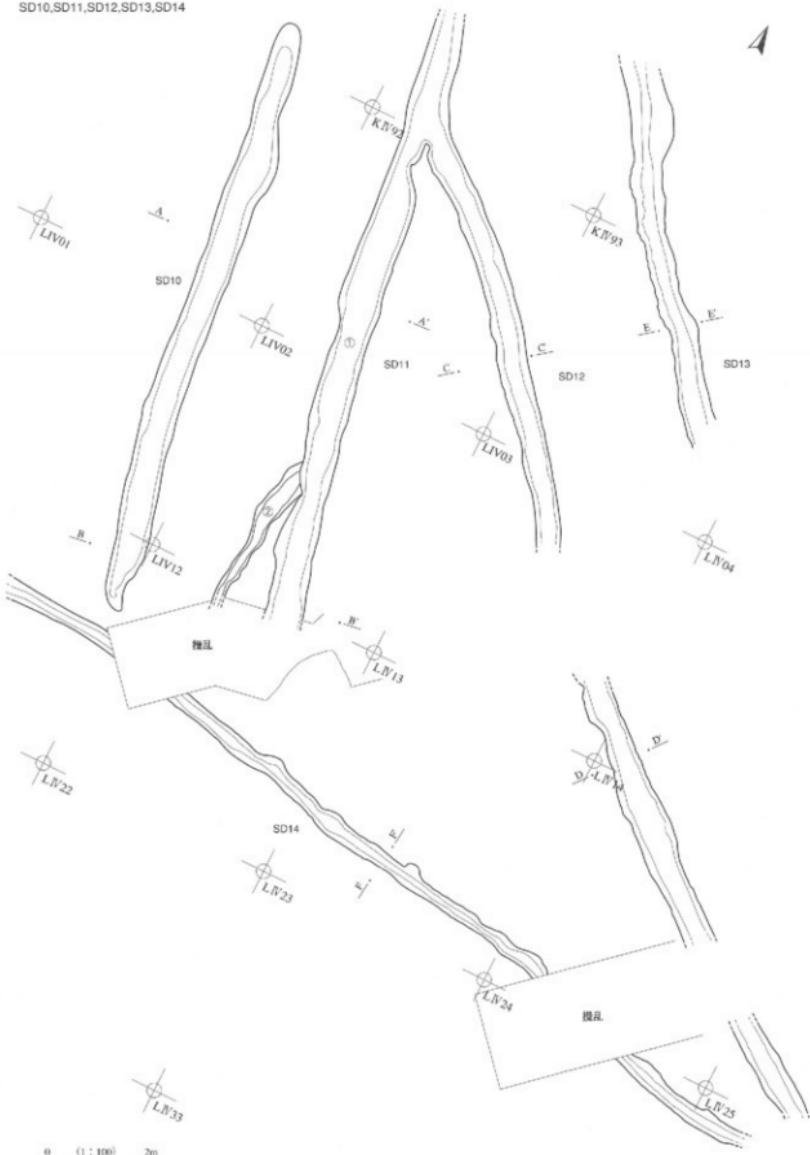
第28図 S 04

1 検出遺構



第29図 S D 07~09

SD10, SD11, SD12, SD13, SD14



第30図 SD10~14 (1)

1 検出道標

SD10,11



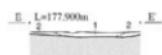
- SD10,11
 1 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中 従容面(～2mm) 2%
 2 10YR4/5/7 黒褐色シルト(粘性強・しまり強)と10YR2/1黒褐色シルト(粘性中・しまり中)の混土 従容面(～2mm) 2%

SD12



- SD12
 1 10YR2/1 黒色シルトと10YR3/2 黑褐色シルトの混土 粘性中・しまり中 表面にTo-aブロック被覆される。
 2 10YR4/7/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中 3号耕作面地盤上。

SD13



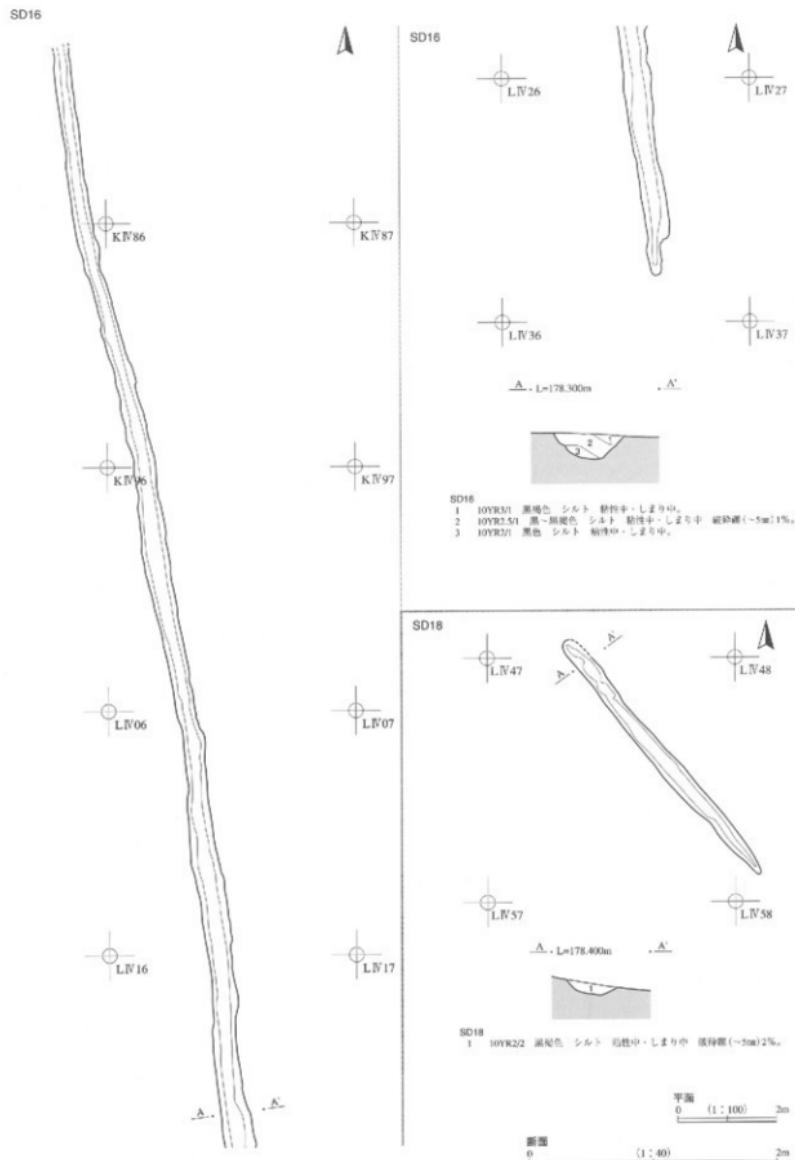
- SD13
 1 10YR2/1 黒色 シルト 粘性中・しまり中。
 2 10YR4/7/1 褐色 シルト 粘性中・しまり中 3号耕作面地盤上。

SD14



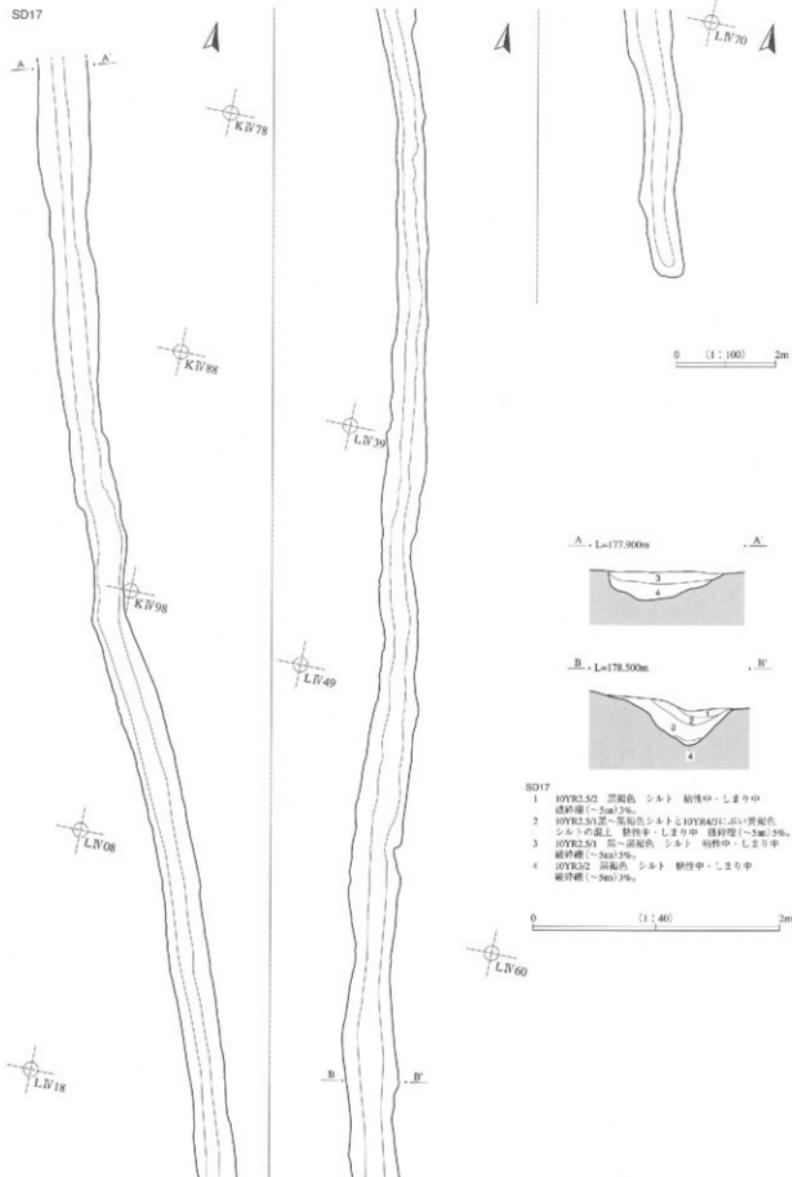
0 (1 : 40) 2m

第31図 SD10~14 (2)

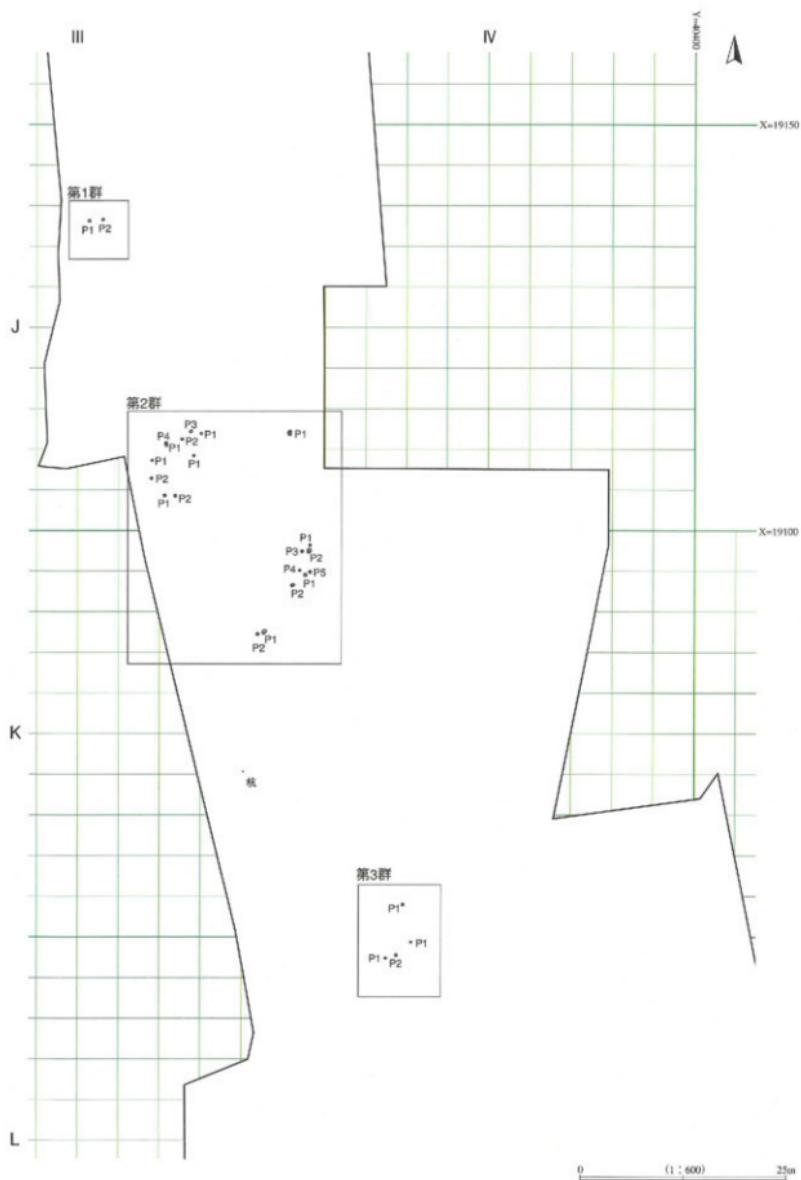


第32図 S D 16・18

1 検出遺構

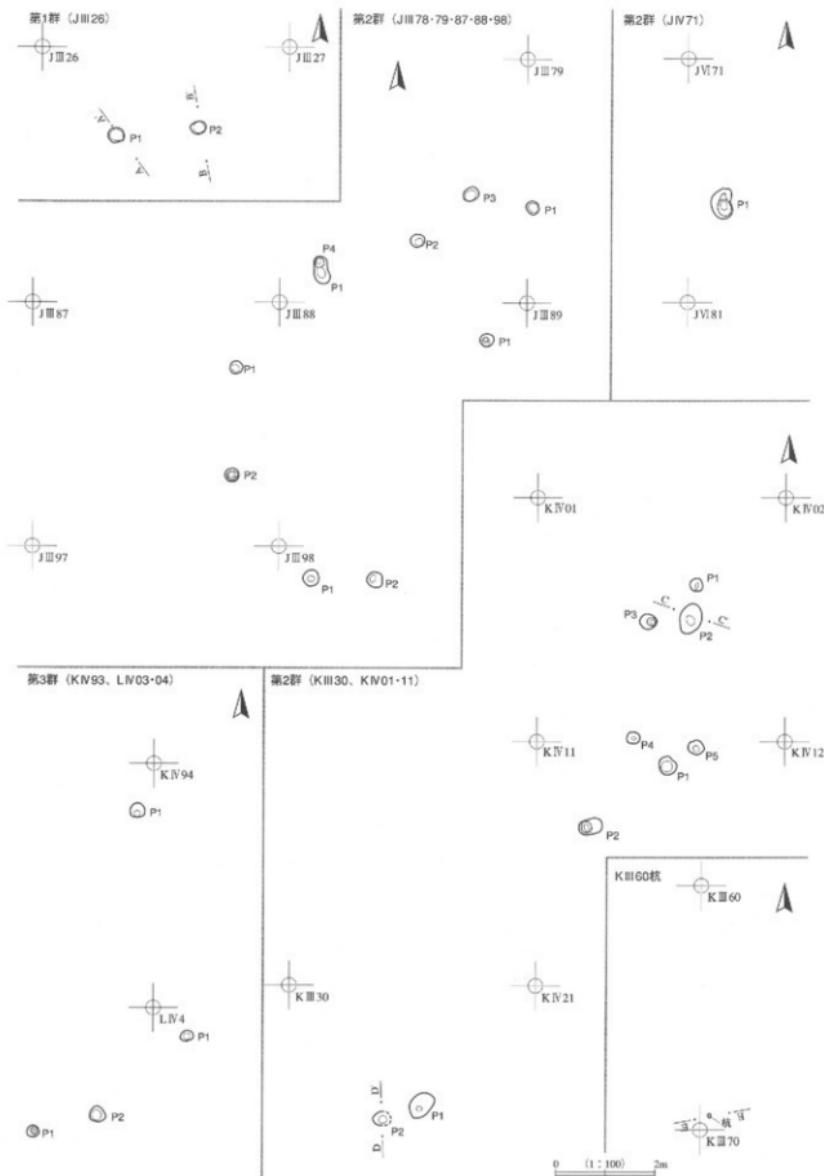


第33図 SD17



第34図 柱穴状土杭群、杭(1)

1 検出遺構



第35図 柱穴状土杭群、杭 (2)

JIII 26 P1



JIII 26 P1

- 1 IOYR22 黒褐色 シルト 粒性中・しまり中
粒状ブロック (~2cm) 5%、結晶漂 (~1cm) 7%、
炭化物粒 1%。S101カット底部上。
- 2 IOYR23 黒褐色 シルト 粒性中・しまり中
結晶漂 (~1cm) 2%、S101
結晶漂底部上。
- 3 2号と4号の間に 粒性中・しまり中 炭化物粒 3%、
漂 (~5cm) 5%、結晶漂 (~1cm) 5%。

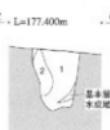
JIII 26 P2



JIII 26 P2

- 1 IOYR32 黒褐色 シルト 粒性中・しまり中
結晶漂 (~1cm) 2%、
- 2 IOYR232 黒褐色 シルト 粒性中・しまり中
基本層付近層ベース。炭化ブロック 10%、
S101結晶漂底部上。

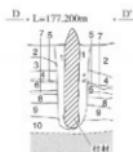
KN01 P2



KN01 P2

- 1 To-a/177.5m 黒褐色 シルト 粒性中・しまり中
To-aブロック 1%、漂浮層 (~5cm) 1%、炭化物粒 1%、
- 2 1層と10YR4/1層黒褐色の間に 結晶漂 (~1cm) 5%。

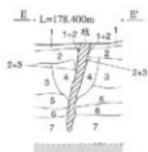
KIII 30 P2



KIII 30 P2

- 1 IOYR4/1 黑褐色 粘土 粒性強・しまり中 2~6号層ブロック 10%、To-a/ブロック 1%、
- 2 IOYR3/2 黑褐色 粘土 粒性強・しまり強 小漂 (~3cm) 10%、
- 3 2.5Y5/4 黄褐色 粘土 粒性弱・しまり強 小漂 (~3cm) 10%、炭化物粒多量。
- 4 5B4/1 黑褐色 粘土 粒性弱・しまり強 小漂 (~5cm) 5%、
- 5 10G4/1 黑褐色 粘土 粒性強・しまり強 小漂 (~5cm) 5%、
- 6 10G4/0 黑褐色 粘土 粒性強・しまり強 小漂 (~5cm) 5%、
- 7 10G4/1 黑褐色 粘土 粒性強・しまり強 小漂 (~5cm) 5%、
- 8 N4/1 黄色 粘土 粒性強・しまり中、
- 9 2.5Y3/1 黄白色 粘土 粒性弱・しまり中、
- 10 IOYR4/1 黑褐色 粘土 粒性強・しまり中、漂浮。

KIII 30 杖



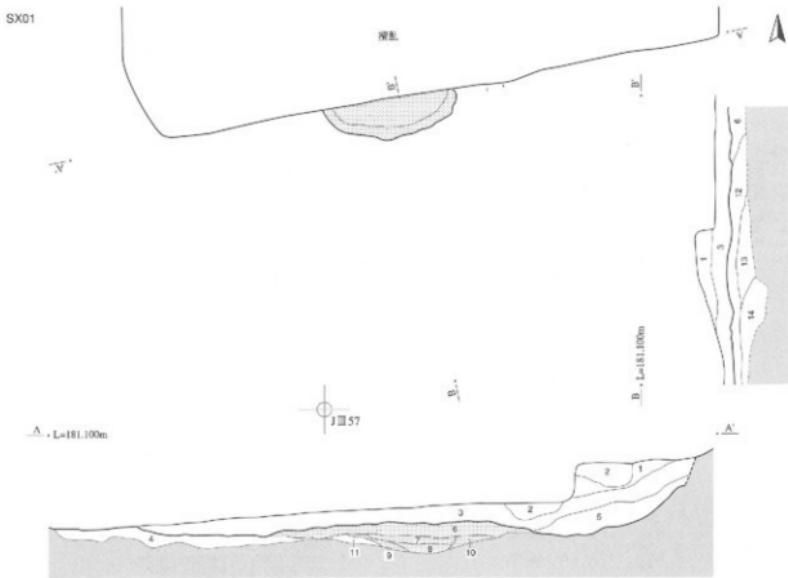
KIII 30 杖

- 1 2.5Y3/1 黄白色 テツラ 粒性なし・しまり強 To-a/ 漂浮層付近層。
- 2 10YR3/1 黑褐色 粘土 粒性強・しまり強、
- 3 IOYR3/2 黑褐色 粘土 粒性強・しまり強 漂 (~3cm) 10%、
- 4 N3/0 黑褐色 粘土 粒性強・しまり強 漂 (~3cm) 10%、
- 5 2.5Y3/1 黄褐色 粘土 粒性弱・しまり強、
- 6 N3/0 黑褐色 粘土 粒性強・しまり強、
- 7 N3/0 黑褐色 粘土 粒性弱・しまり中、

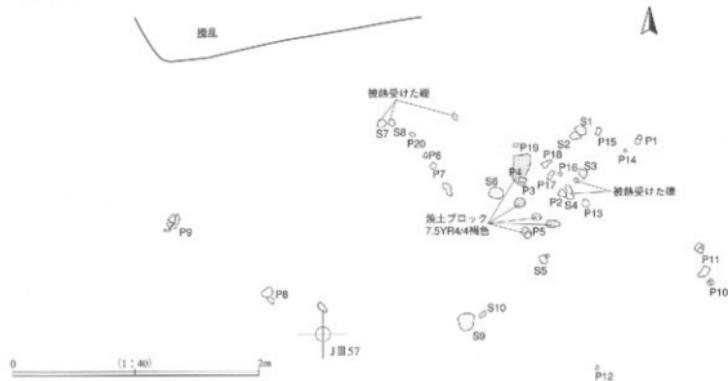
0 (1 : 40) 2m

第36図 柱穴状土杭群、杭 (3)

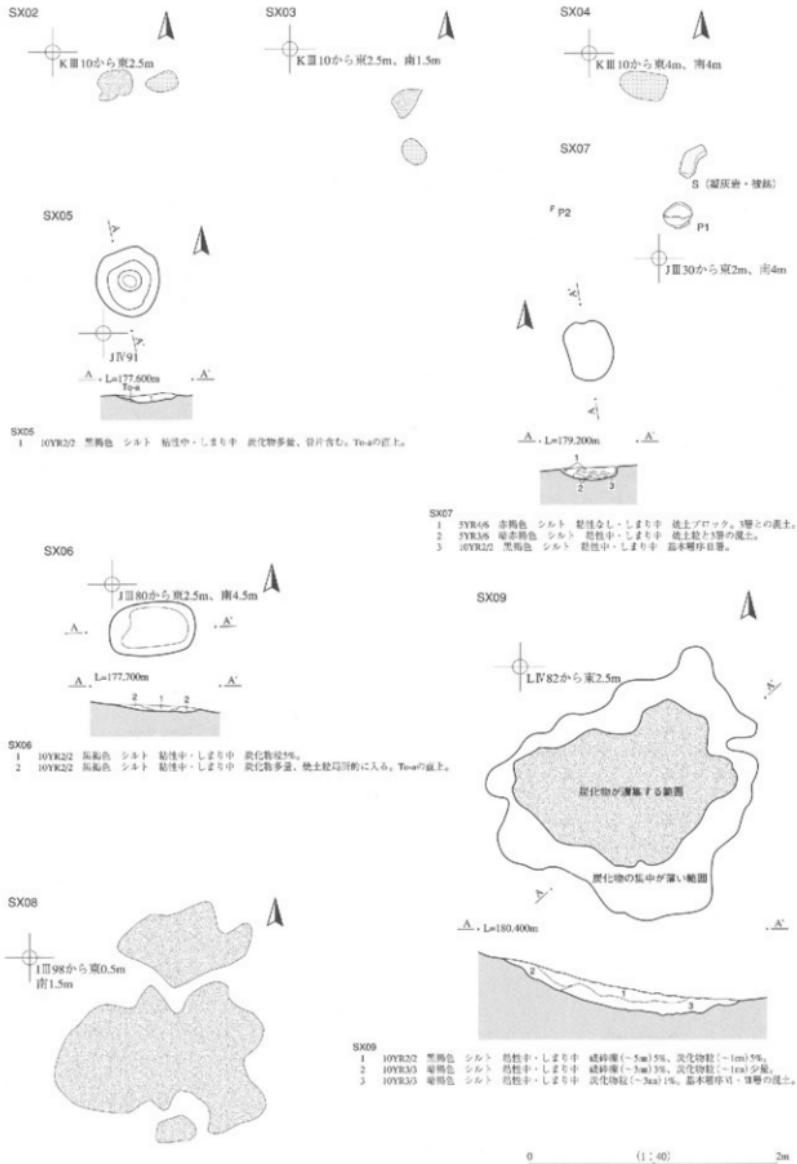
1 掘出遺構



遺物出土状況

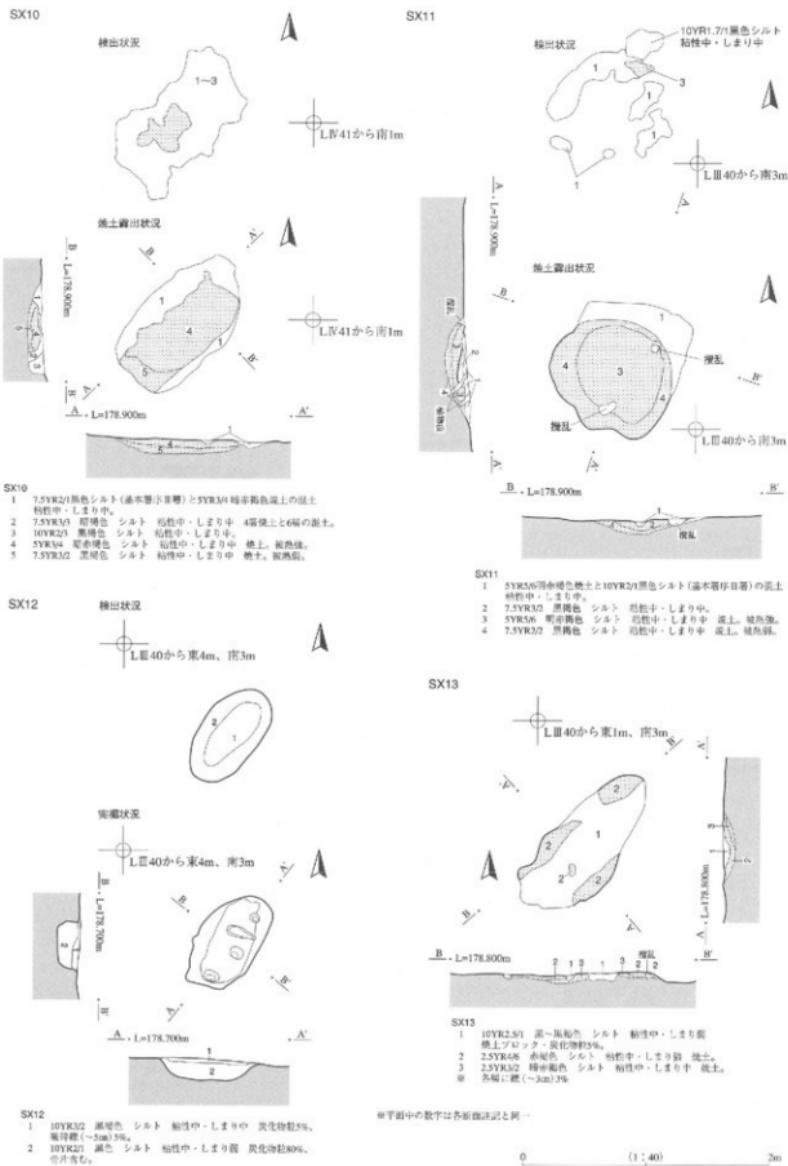


第37図 S X01

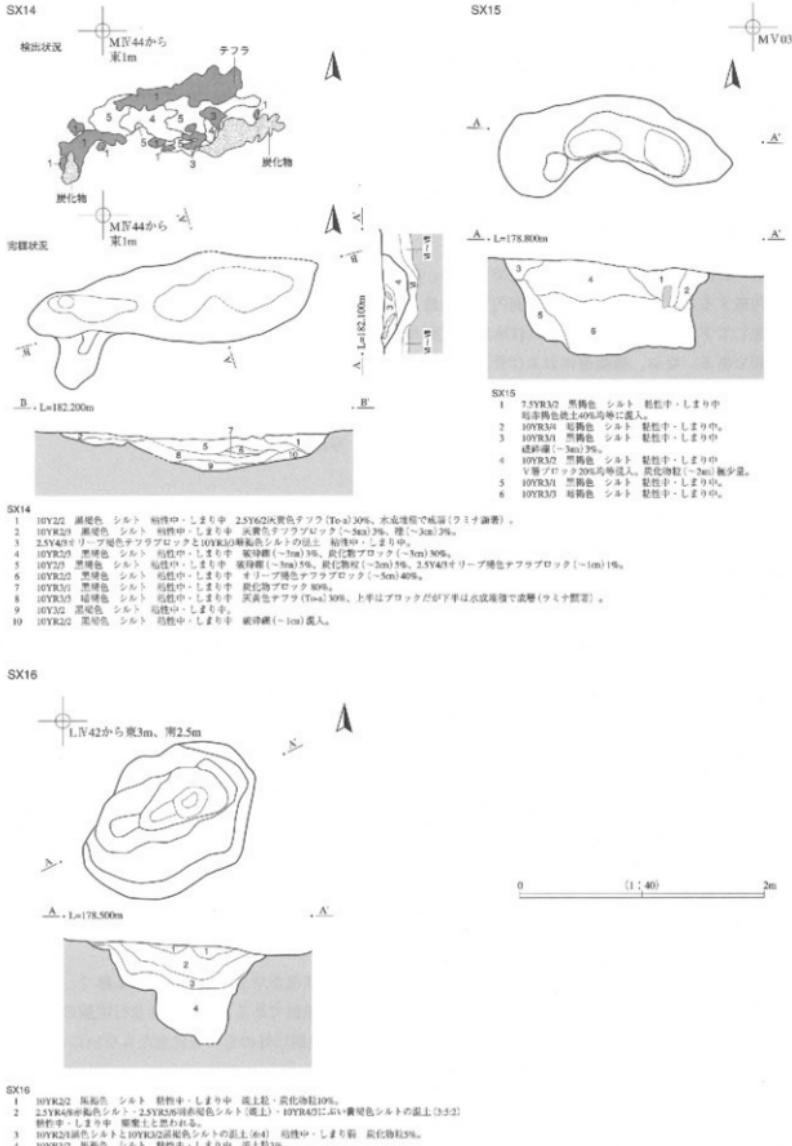


第38図 S X 02~09

1 検出造構



第39図 SX10~13



第40図 S X 14~16

2 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器約14.8kg（中コンテナ…42×32×20cm³換算約1.1箱）、石器（剥片・素材含む）58点・約1.8kg（中コンテナ換算約0.1箱）、土師器13.4kg（中コンテナ換算約1箱）、鉄製品3点（122.72g）・銭貨4点（9.67g）、木製品4点、磁器1点（18.19g）、針状骨製品1点、人骨片、獸・魚骨片、植物遺体である。

以下、図の掲載方法について述べておく。なお、掲載基準については、Ⅲ章2節1項「遺物整理の方法」を参照いただきたい。

掲載順序

第一に出土地点を問わず遺物種別で分類し、縄文土器→石器→土師器→鉄製品・銭貨→木製品の順に掲載することとした。次に各種別内で出土地点（遺構内・外）ごとに分類し、それぞれ出土層位を優先して下位から（遺構内であれば床面・底面から）順に掲載した。遺構の掲載順は、IV章1節の記述順である。なお、植物遺体および骨片についてはVI章「自然科学的分析」の4節および6節で写真を掲載している。

（1）縄 文 土 器（第42～45図、第10・14表、写真図版21～23）

a) 概 要

出土総量14,791.64gのうち遺構内出土分は1,613.68gで、さらに遺構に伴う可能性のあるものはSK02出土分の841.83gのみである。このほか、遺構外分13,177.96gも含め、すべての地点別出土量を第10表に示した。

既存の土器型式から比定される時期は、縄文時代前期初頭～前葉、同後期、同晩期～弥生時代初頭である。

本報告書では、総量の35.9%にあたる5,302.90g・52点を掲載している。個々の遺物についての記載は第14表の遺物観察表に記載してあるのでそちらを参照いただきたい。ここでは各遺構・遺構外別に特徴的・代表的な遺物に絞って詳細を記載し、遺構外分については出土地点の概要についても記す。

b) 詳 紹 の 記 載

遺構内（1～7）

S K02の3・4はいずれも粗製の深鉢である。3は非結束の羽状縄文、4は口唇部が無文となる。後期の所産と考えられる。このほか、1・2・5～7は古代以降の遺構に混入したものである。1はS I 01床面出土であるが、床面=縄文遺物包含層であったことの結果と思われる。口縁部が無文で外反する深鉢であり、後期前葉頃のものと思われる。6はB突起を有する晩期の鉢？である。2・5・7は地紋のみの胴部で、2は後期に比定される。

遺構外・VI層（8～12）

集中ではなく、各地点で散見された。数量自体少ない。8は底部が窄まり上げ底となる鉢で、口唇部に11単位の大刻目が廻る。9は突き起こし状の刺突列が廻る深鉢である。11・12は並行沈線の廻る深鉢頭部である。これら5点は後期後葉に属するものが多く、後期以外のものも見当たらないことから、本層は該期の堆積と考えてもよさそうである。

遺構外・V層（13～16）

集中ではなく、各地点で散見された。数量自体少ない。13は口縁部に並行沈線の施される大洞C 2式の鉢、14は台部を有し、羊齒状文の施される大洞B C式の鉢である。

遺構外・Ⅲ層 (17~52)

調査区東際中央のLV区で集中して出土した。が、IV層To-aより上位にあたり、遺物時期も前期初頭から弥生初頭まで混じることから二次堆積である。17~41は胎土に纖維を含む土器を一括した。17~28は器厚が厚く、凹凸が著しい。17~18は口縁部に結節回転文が施される。28は尖底である。これらは前期初頭~前葉の早稻田第6類相当と考えられる。20はループ文が入り、表鉢式風である。29~41は胎土が17~28に比べ緻密で、砂粒の混入が目立つ。大木系の影響を受けたものと考えられ、型式的には大木2a~b式の範疇に含まれる。29~31は組紐回転文が施されるもので、唯一の底部である31は平底である。口縁部が未出土のため判断に苦しむが、35のような口唇部に刻目列の付されるものに施される例が知られている。32~35、37~39は横位の結節回転文が施されるもので、胴部にも及ぶ。42~52は胎土に纖維を含まない土器を一括し、口縁部・胴部・底部の順に載せた。42~44は後期初頭~前葉と考えられ、42は口縁部突起と肥厚、並行沈線、43はS字状沈線が施文されている。45は三叉文が施されており中葉以降と推定される。46は3条の並行沈線による変形工字文と粘土瘤が施されており、弥生時代前期初頭の砂沢式に比定される。

(2) 石 器 (第46~48図、第11・12・15表、写真図版24・25)

a) 概 要

石器の出土総数・量は58点・1797.16gで、その内訳はトゥール21点・906.35g、剥片および素材38点・890.81gである。これらの地点別出土量を第11表に示した。遺構内出土点数は12点であるが、実際に遺構に伴うと考えられるものはS I 02出土の1点のみである。また、遺構外出土分のうちI層もしくは擾乱出上分は1点のみで、45点(全体の約76%)は遺構外II層以下出上分である。中でも調査区東際中央のLV区III層で集中して出土した。が、IV層To-aより上位にあたることから縄文土器と同様に二次堆積である。

なお、本報告書ではトゥール21点のうち円形縫を除く20点を掲載した。これは出土総数の約33%にあたる。

b) 石 材 分 類

石材分類の結果と出土点数・重量は第12表のとおりである。頁岩(7種)、赤色頁岩、チャート(3種)、デイサイト、瑪瑙、安山岩、閃綠岩の7石材15母岩が存在する。比率は頁岩が大半である。

c) 器 種 分 類

前述のとおり、S I 02出土のNo 1以外ははつきりと縄文時代以外の所産といえるものがないため、これらはすべて一括して器種分類を行った。おそらく縄文石器と考えて差し支えない。以下、まずNo 1について記載し、他は器種ごとに解説していく。

S I 02堅穴住居跡(1)

カマド左袖の左側床面から出土した。安山岩製の台石で、4分の3が欠損している。

石 鐵 (57)

1点のみで、III層から出土した。石材は頁岩4で、凸基の有茎鐵である。

石錐 (58)

1点のみで、III層から出土した。石材は頁岩4で、刃部が嘴状を呈する。

尖頭器 (59)

1点のみで、III層から出土した。石材は赤みのほとんどない赤色頁岩で、長さ12.99cm・厚さ1.68cmと大形で厚い。先端・末端ともに丸みを帯びる。

石匙 (60・61)

Ⅲ層から 2 点出土した。60は斜型で尖頭状を成す。石材は頁岩 1 である。61は刃部調整が右側縁に限られており、製作途中と推定される。石材は頁岩 4 である。

スクレイパー (54・62・63)

調整縁・面を問わず、連続する剥離調整が 1 辺の 2 分の 1 以上におよぶものをスクレイパーとして登録した。刃部角は 60° 以下であり削器といえるものである。S D08から 1 点、Ⅲ層から 2 点出土した。54・62 の石材は頁岩 1 で、54は縱長剥片の右側縁全域に調整が入る。62は欠損しており形態不明である。63の素材は頁岩 2 製の寸詰まりの剥片で、右側縁腹面側に刃部が形成されている。

二次加工ある剥片 (64・65)

刃部調整と思われる剥離が 1 辺の 2 分の 1 に満たないもの、もしくは連続しないものをここに登録した。Ⅲ層から 2 点出土している。64は瑪瑙製で、石鎚未成品の可能性がある。65は頁岩 1 製で、右側縁に抉入状の調整が入る。

使用痕ある剥片 (66・67)

剥離調整とは異なる微細剥離のみが確認されるものである。Ⅲ層から 2 点出土しており、石材はいずれも頁岩 4 である。66は不整形の小形剥片で、1 辺の両面に微細剥離が連続する。67は規則的な剥片剥離により作出された剥片で、右側縁の両面全域に微細剥離が連続する。

石核 (68~71)

Ⅲ層から 4 点出土した。石材は 68~70 が頁岩 2 、71 は頁岩 5 である。いずれも両極剥離を多用している。69 と 70 は接合するが、破局的な失敗剥離と考えられる。

磨製石斧 (72)

Ⅲ層から 1 点出土した。片面には剥離調整痕が多く残存する。安山岩製である。

石皿 ? (55)

S D08から 1 点出土した。円錐岩製で、磨痕が顕著である。破片であり形態は不明である。

円形礫

Ⅲ層から 1 点出土した。直径約 5 cm のほぼ円形である。図・写真は掲載していない。

(3) 土 師 器 (第41・49~52図、第13・16表、写真図版26~28)

a) 概要と分類の意味

出土総量は 13,391.28 g で、この地点別出土量を第13表に示した。遺構内出土分は 10,900.87 g で、全体の 81.4% を占める。大半は S I 01・S I 02 の両竪穴住居跡から出土したものである。なかでも床面等出土遺物の重量は 5,841.74 g で、これは土師器総量の 43.6% を占める。遺構検出数、遺物出土総量は少ないものの、良好な資料といえよう。なお、本報告書では全体の 56.1% にあたる 7,515.52 g ・ 45 点を掲載している。

以下、壙および甕に対しての分類を行う。といっても、前述のとおり少数量かつ少遺構数で、同時性を有する一括資料が主体であるため、従来の編年観的には大きく 2 時期に分かれるのみで、住居床面出土分にいたっては 1 時期に収まるものである。ただし、より細かい属性を設定することにより細分は可能で、それが共時的な空間検討の観点からは決して無意味ではないと判断し、細別を実施することとした。

b) 分 類

壙

まず、全個体が有する共通属性について記載する。

- ・ 体部から口縁部へかけて内湾する器形である。
- ・ 体部外面に段あるいは沈線を有する。(75はあてはまらず。ただし口縁部上位破片で下位の様相不明のため対象外。)

また、底部形については残存するものが3点しかなく(85・114・115)、分類属性として抽出することができない。これら3点の形態は、85と115が体部と底部の境目の稜線が明瞭でない平底(いわゆる「平底風丸底」)、114が平底である。85はS I 02床面出土で、住居跡の年代決定指標足りえるものである。

分類に用いる属性と分類結果

段および沈線の状態を用いた。段であるのか沈線であるのか、施される部位、条数、状態により分類している。形態模式を第41図に示した。なお、各分類に該当する個体の器面調整方法を付記した。

A…体部中央に明瞭な沈線が1条施されるもの(87・115・116)。内・外面ともにヘラミガキ。前述のよう115は「平底風丸底」である。

B…体部中央に太く棱の不明瞭な沈線の施されるもの(73)。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。なお、坏ではないが88の手づくね土器も同様の沈線が施される。

C…口唇下に浅い沈線が1条、体部中央に浅い段が1条施されるもの(111)。内・外面ともにヘラミガキ。大形で、サラダボール状の鉢の可能性がある。

D…口縁部に浅く不明瞭な沈線および段差が3条施されるもの(86)。中央の1条は沈線であるが、上下の2条は屈曲は確認されるもごく浅く、段とも沈線とも区別できない。立ち上がり方が他に比して直線的である。外面調整は劣化が激しく不明、内面はヘラミガキである。

E…体部中央に浅い段が1条施されるもの(85・101)。口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。前述のように85は「平底風丸底」で、外面の一部にヘラケズリが認められる。

F…口縁部から体部にかけて浅い段が2条施されるもの(74)。調整の判別は摩滅が激しく困難であるが、口縁部にヨコナデ、内面にヘラミガキが確認される。

G…体部下位に明瞭な沈線が施されるもの(114)。底部のみの破片で、上位の状態は不明であることをお断りしておく。調整の判別は摩滅が激しく困難であるが、内面にヘラミガキが確認される。前述のよう平底である。

甕

今まで多くの研究事例では、甕は全体形によって長胴型、樽型、球胴型、小型に大別され、さらにそれぞれが最大径の位置により細分されてきた。後者の属性は時期差を示す指標として用いられるばかりある。しかし今回の資料では、残存状態の関係上この属性を取得できるものが一部に限られるため、全体の分類基準とはせず、概要を述べるにとどめる。なお、前者の3分類は器種の組み合せ・セット関係から年代を考える上での基本的な指標足りえる属性であり、ぎやくにこれが判別できなければより細部の属性を用いた分類を実施しても意味を成さないと思われることから、分類対象資料は全体形が復元されたものおよび長胴型、樽型、球胴型、小型の4分類が推定可能なものの(胴部上半以上が残存するもの)とした。なお、今回は口縁部から頸部にかけての形態から看取された属性を用いて分類を試みるため、同部の残存は必須となる。以上のことを踏まえ、口縁部から胴部上半まで残存している資料を対象とし分類を実施した。なお、全個体に共通する属性はない。ここで付け加えておくが、全体形が復元された個体の特徴として、長胴型・小型に関しては体部最大径の位置が上半にあること、底径が大きく、体部最大径との比が小さめであることが言える。

分類に用いる属性と分類結果

前述のとおり、口縁部から頸部にかけての形態を用いた。大分類から小分類に至る属性の優先順位は次のとおりである。

- ① 口縁部の長さ。相対的に、長いもの…A、短いもの…Bの2種に分類した。
- ② 口唇部から口縁部上位にかけての形態。口唇部断面が山形を呈するもの…I、口唇部が受け口状を呈するもの…II、口唇部が曲線的に内湾しながら薄化するもの…III、口縁部上位に段が1条施されるもの…IV、口縁部上位に段が1条、口唇部に沈線が1条施されるもの…V、口唇部が丸いもの…VI、口唇部が平坦なもの…VII、口唇部が薄く尖るもの…VIII、口唇部に沈線が1条施されるもの…IXの8種に分類した。
- ③ 頸部の状態。段状を呈するもの…a、沈線の施されるもの…b、単純に屈曲するもの…cの3種に分類した。

分類結果はこれらの組み合わせにより「A I a」のように表記し、模式を第41図に示した。以下に各分類に該当する個体の器形、器面調整方法、底部の残存するものについてはその状態を記す。

A I a (76) …口唇部断面が山形を呈する。IIと類似するが、口唇先端が受け口状か否かで分離している。器形は長胴型で、胴部最大径を上位にもつ。調整は外面口縁ヨコナデ、胴部ヘラミガキ。内面口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ。

A I b (91) …口唇部形態はA I aと同様で、頸部に明瞭な沈線が入る。器形は長胴型で、胴部最大径を上位にもつ。調整は外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。

A II a (77・89・90) …口唇部断面が山形を呈し、口唇先端は摘み上げたように受け口状に先細る。胴部最大径を最上位にもつ。77は底部が張り出す。調整は口縁内外面ヨコナデ、胴部は77が外面ヘラナデとハケメ、内面ハケメ。89・90が外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。

A III a (108) …口唇部の薄化調整は曲線的で、内・外面とも連動して直立することから摘み上げ的な手法と考えられる。器形は球胴型である。調整は口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ、ハケメ。

A IV b (95) …口縁部上位に段があり広く薄化する。器形は樽型である。調整は外面ヘラミガキ、内

	A	B	C	D	E	F	G	
杯								
甌	A I a	A I b	A II a	A III a	A IV b	A V a	A VI a	A VII a
	B VI c	B VII c	B IX c					

第41図 土師器形態分類模式図

面ヘラナデ、ヘラミガキ。

A VI a (96) …口唇部に沈線、口縁部上位に段があり広く薄化する。器形は球胴型である。調整は口縁ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。焼成が良く、他に比して異質である。

A VII a (117) …小型（壺）で、胴部最大径を中央にもつ。調整は口縁ヨコナデ、胴部外面ヘラナデ、ハケメ、内面ヘラナデ。

A VIII a (112) …口唇断面が山形を呈さない。器形は長胴型で、胴部最大径を上位にもつ。調整は口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ。

A VIII a (94) …口縁は強く外反し、口唇が薄く尖る。器形は長胴型である。調整は口縁部ヨコナデで、胴部は不明。

B VI c (82・83) …口縁は短く、口唇が丸い。立ち上がり方が異なり、82は直立気味である。調整は82はヘラナデ、83はヨコナデ、胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。

B VII c (80) …口縁は短く強く外反し、口唇が薄く尖る。調整は口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ。

B IX c (103) …口縁が短く、口唇に沈線が施される。器形は厚さが薄いことから小型と推定される。調整は口縁ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。

なお、製作時期的な検討については羅章で行う。

(4) 鉄 製 品（第53図、第17表、写真図版29）

いずれも堅穴住居跡内から出土したものである。

板状鉄製品（118）

S I 01床面中央付近から1点出土した。破片のため詳細不明だが、鍋の可能性がある。

刀子（119・120）

S I 02のカマド左側西壁床面と埋土から1点ずつ出土した。119は4つに折損しているがほぼ完形である。120は基部側が欠損している。

(5) 銭 貨（第53図、第18表、写真図版29）

紹聖元寶1点、洪武通寶1点、寛永通寶2点が出土した。いずれも径が小さい、薄いなどの点から模鋳錢と思われる。

紹聖元寶（121）

造構外のJ IV 41グリッドⅢ層から出土した。北宋銭で初鑄造年は1094年である。篆書である。

洪武通寶（122）

市道穴久保線以北で表採された。明銭で初鑄造年は1368年である。

寛永通寶（123・124）

124は市道穴久保線以北で表採、123は出土地点不明である。劣化が激しく、古・新の別は不明である。

このほか、SK 10近世墓から寛永通寶5枚が出土した。図示はしていない。

(6) 木 製 品（第54・55図、第19表、写真図版30）

木材3点と製品1点が出土した。

柱材（125・126）

2点出土した。125はSA 01 P 3に残存していたもので、最下部のみである。劣化が激しく、正確

な径は不明。12.1cm以上である。樹種はクリで、AMS法による放射性炭素年代測定結果は¹⁴C年代で940±40yrBP、較正暦年代は95.4%の信頼度で1010 A.D.~1190 A.D.の可能性があるとされた（VI章1節参照）。126はK III 30P 2に残存していたもので、IV層To-aを掘り込んでいる。面取りしてあり、多角形（十角形ほど）を呈する。上端は欠損・収縮しているが下部は劣化がほとんどなく、直徑19.1cm、残存長83.9cmを測る。

杭（127）

K III 60グリッドのIV層To-a上面で検出された。欠損しており、残存長71.2cm、直徑8.2cmを測る。樹種はムシカリである。

掘り棒状木製品（128）

K IV 21グリッドから出土した。当初、IV層To-a以下から出土したものと思われたが、SK 10近世墓プランと隣接しており、この土坑埋土に含まれていた可能性がある。両面とも調整されており、先端部は尖頭状に、基部は筒状に整形されている。形態から掘り棒状としたが、用途は不明である。墓標の可能性も考えられる。樹種はクリで、AMS法による放射性炭素年代測定結果は¹⁴C年代で130±40yrBP、較正暦年代は39.8%の信頼度で1660 A.D.~1780 A.D.、55.6%の信頼度で1790 A.D.~1950 A.D.の可能性があるとされた（VI章1節参照）。この結果もSK 10近世墓に伴うという可能性を強化するものである。

このほか、SK 10近世墓から漆塗りの椀4点、曲物1点、櫛1点、断面六角形に加工された木材3点が出土した。図示はしていない。

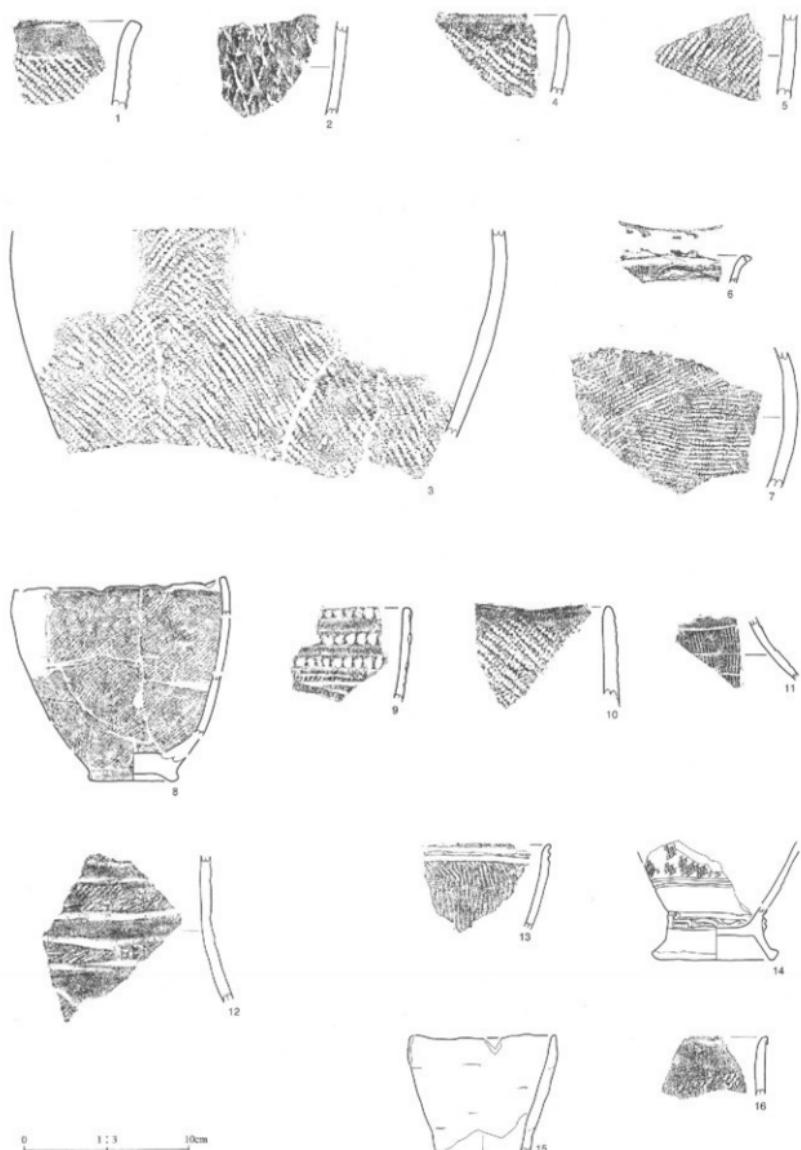
（7）磁 器（第55図、第20表、写真図版29）

129は町道穴久保線北側において表採された中国産青磁皿の底部破片である。底径は5.3cm、残存高は1.0cmである。底部は円周の約1/4が残存する。釉薬は7.5GY6/1緑灰色の色調を呈し、器内面と高台内部を除く外面全体に施されている。釉の厚さは0.8mm程度で、全体に細かい貫入が入る。高台の疊付にも釉が施されている。胎上は非常に緻密で硬く、N 6/灰色を呈する。見込みには、釉で埋もれて明瞭ではないが、線彫りの花文が認められる。この花文と残存している器形等から、本品は口縁部が輪花で腰部が折れる、「青磁劃花文棱花皿」と判断できる。

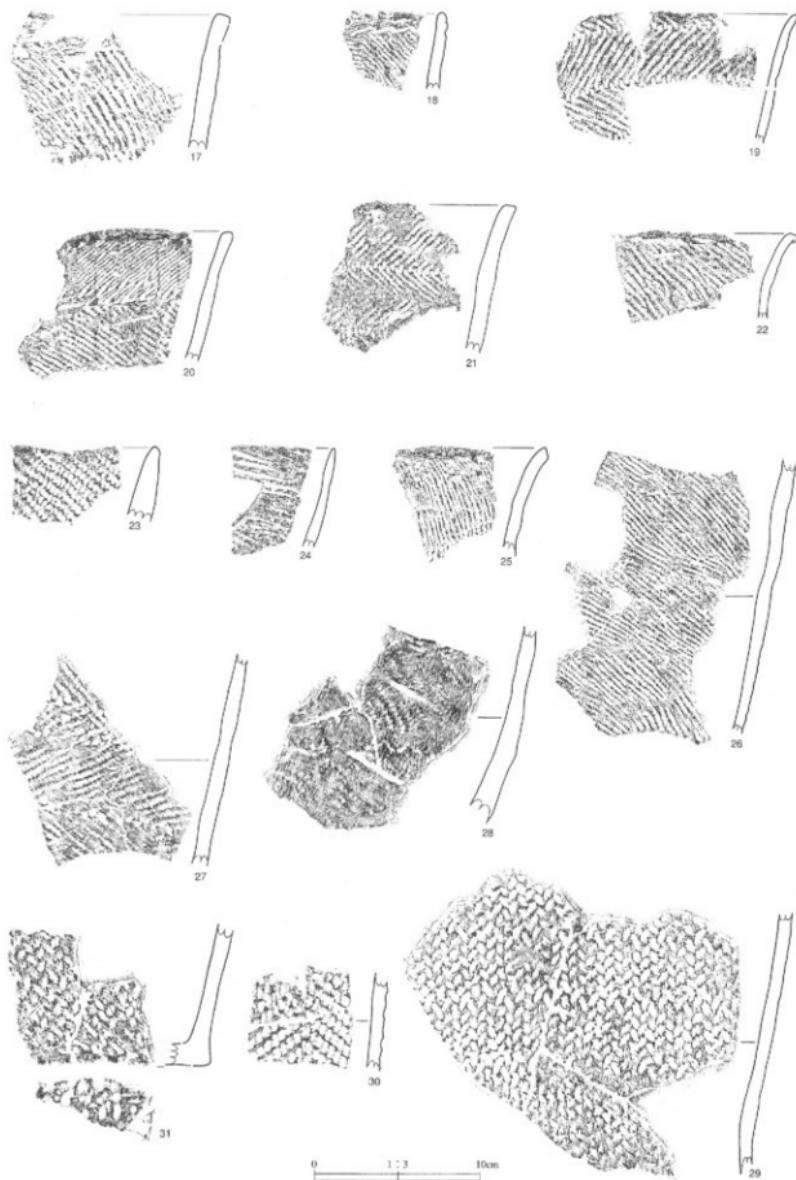
（8）植 物 遺 体

SI 02カマド燃焼部上堆積土からキビ、オニグルミ、SX 05・SX 06壇上からイネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、オニグルミ、トチノキ等が検出された。詳細はVI章4節を参照いただきたい。このほか、SK 10近世墓からクルミ1点が出土した。図示はしていない。

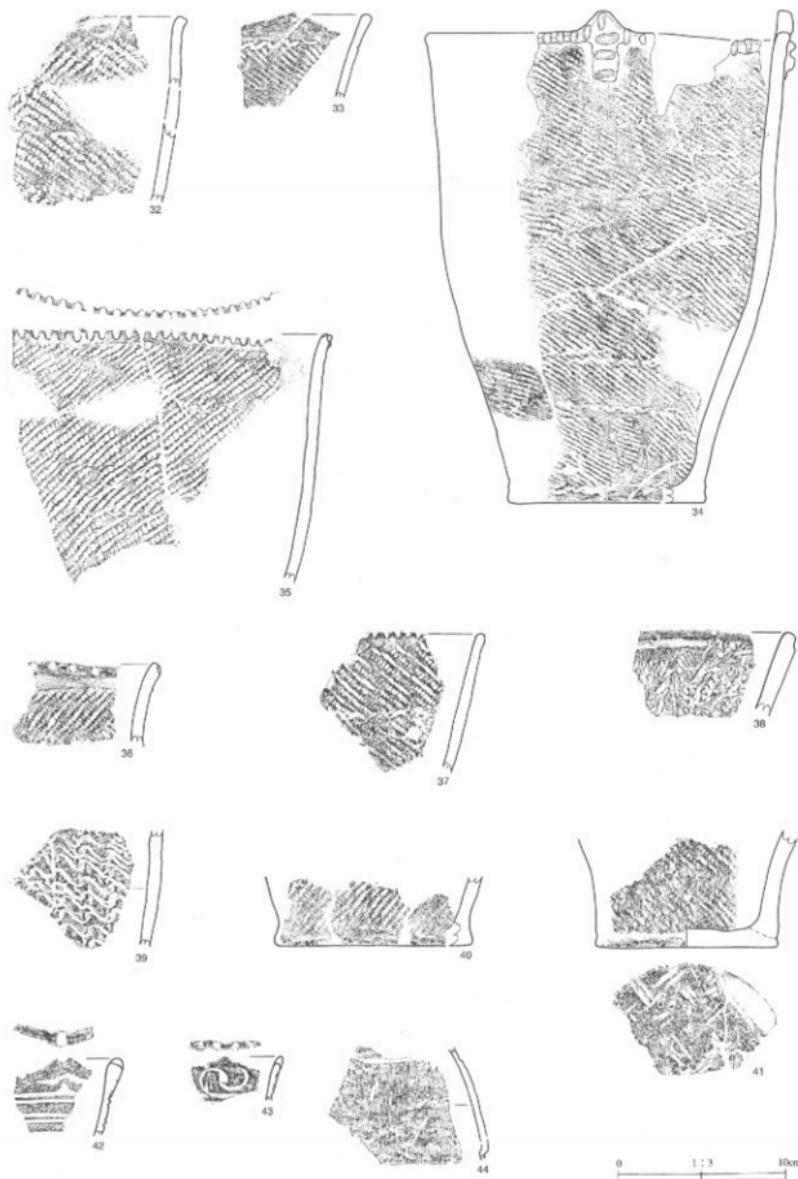
（丸山）



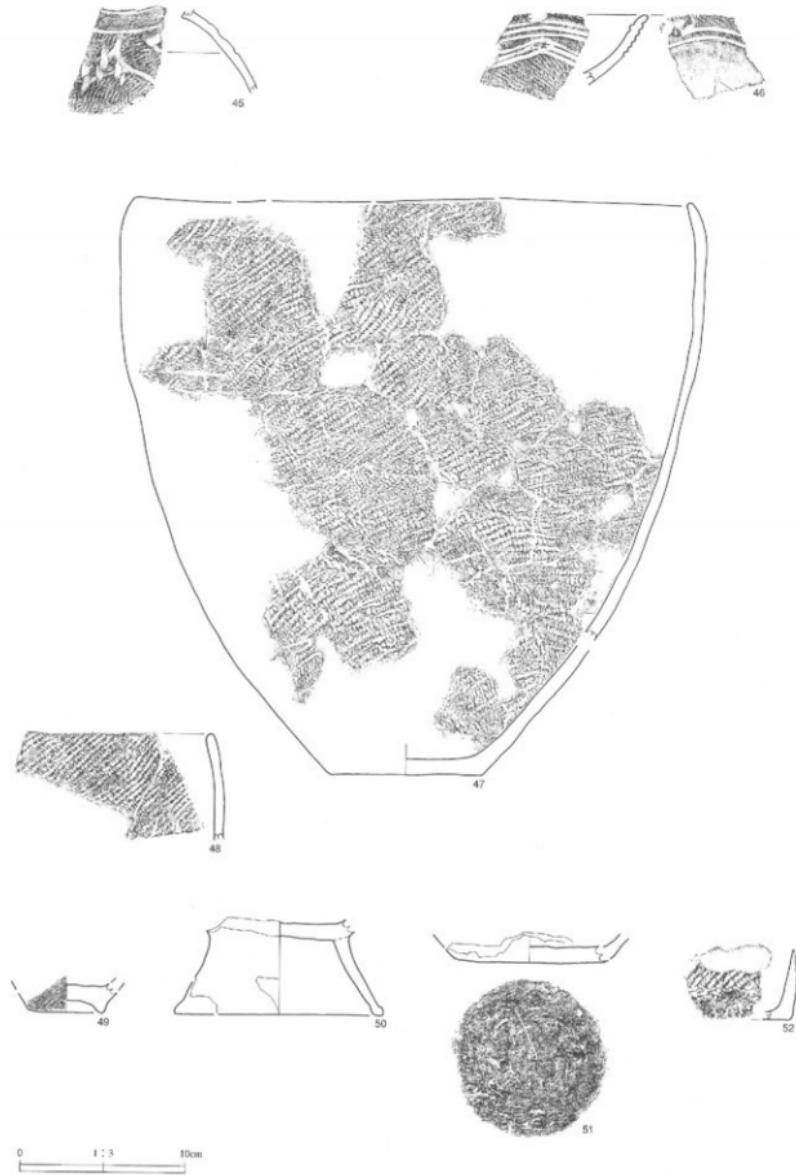
第42図 繩文土器（1）



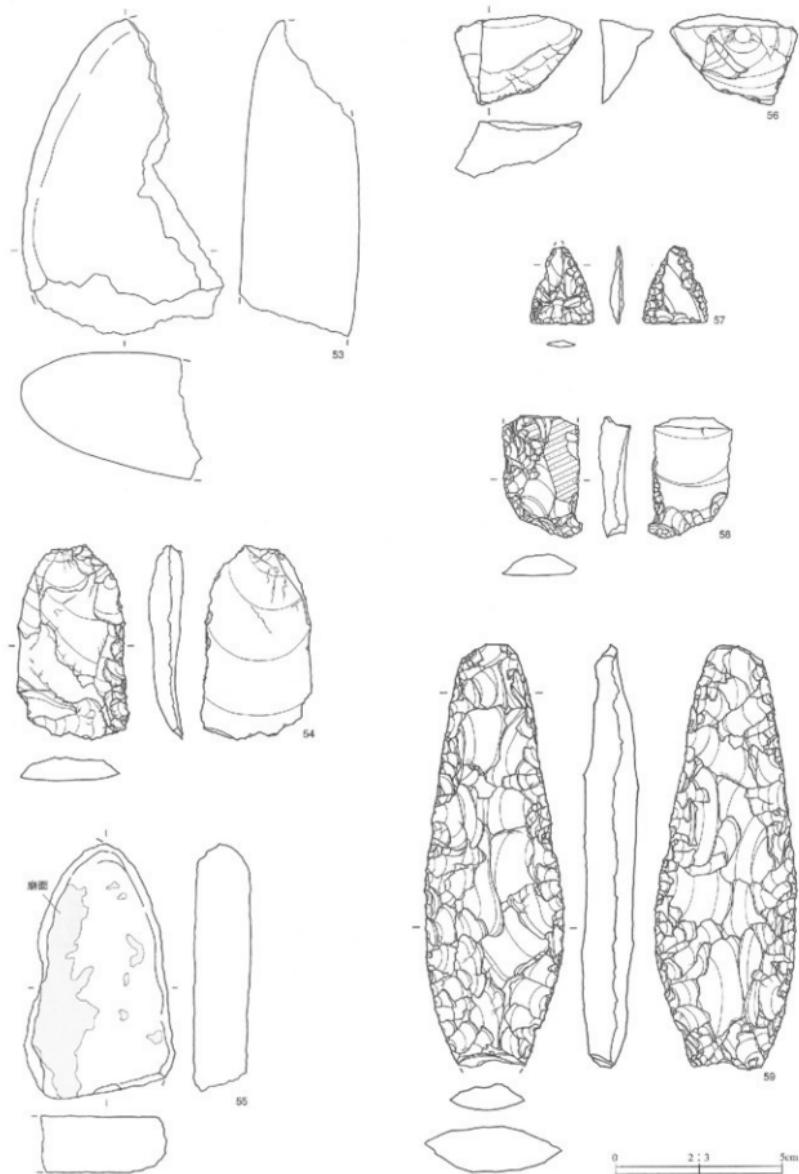
第43図 繩文土器（2）



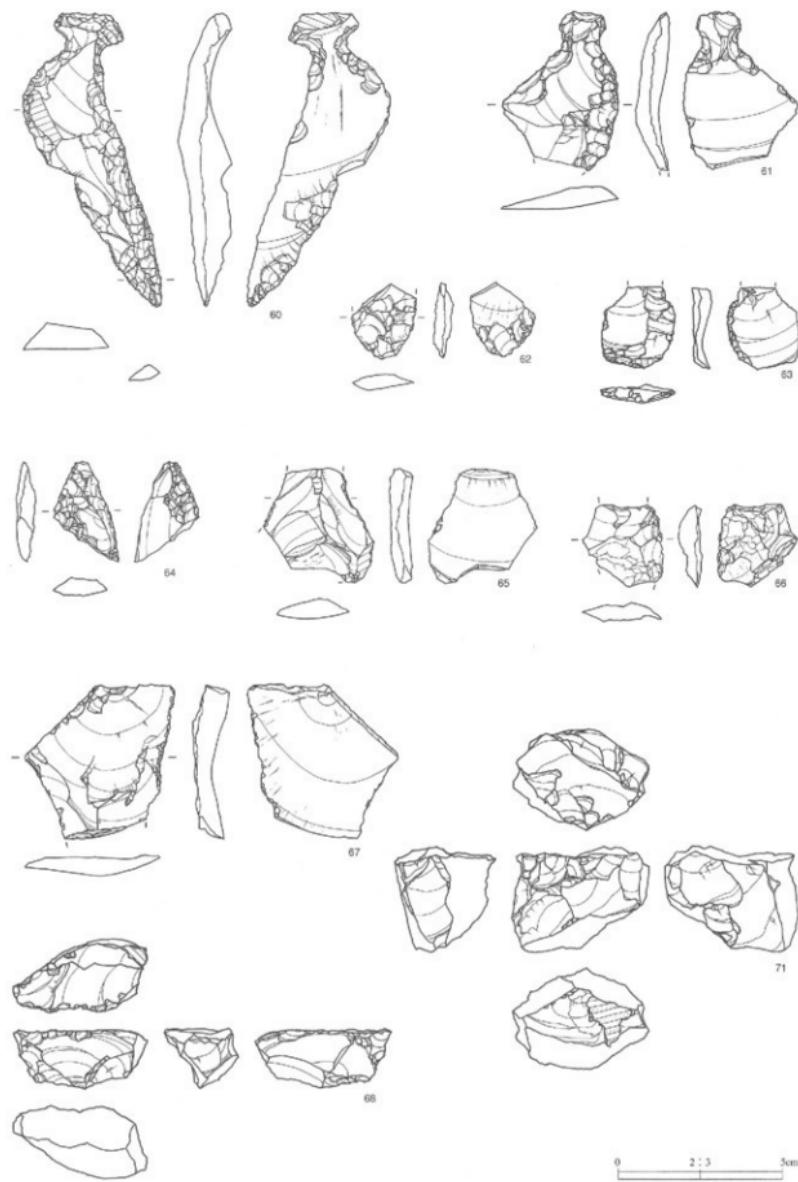
第44図 桶文土器 (3)



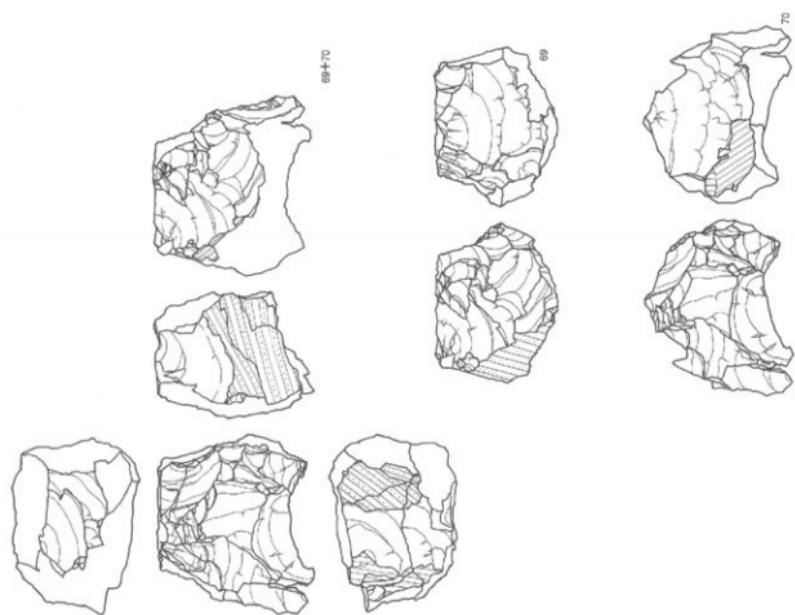
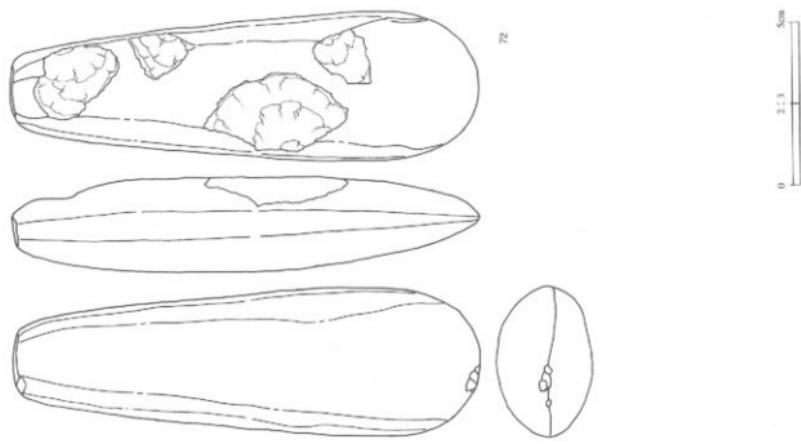
第45図 繩文土器（4）



第46図 石器（1）



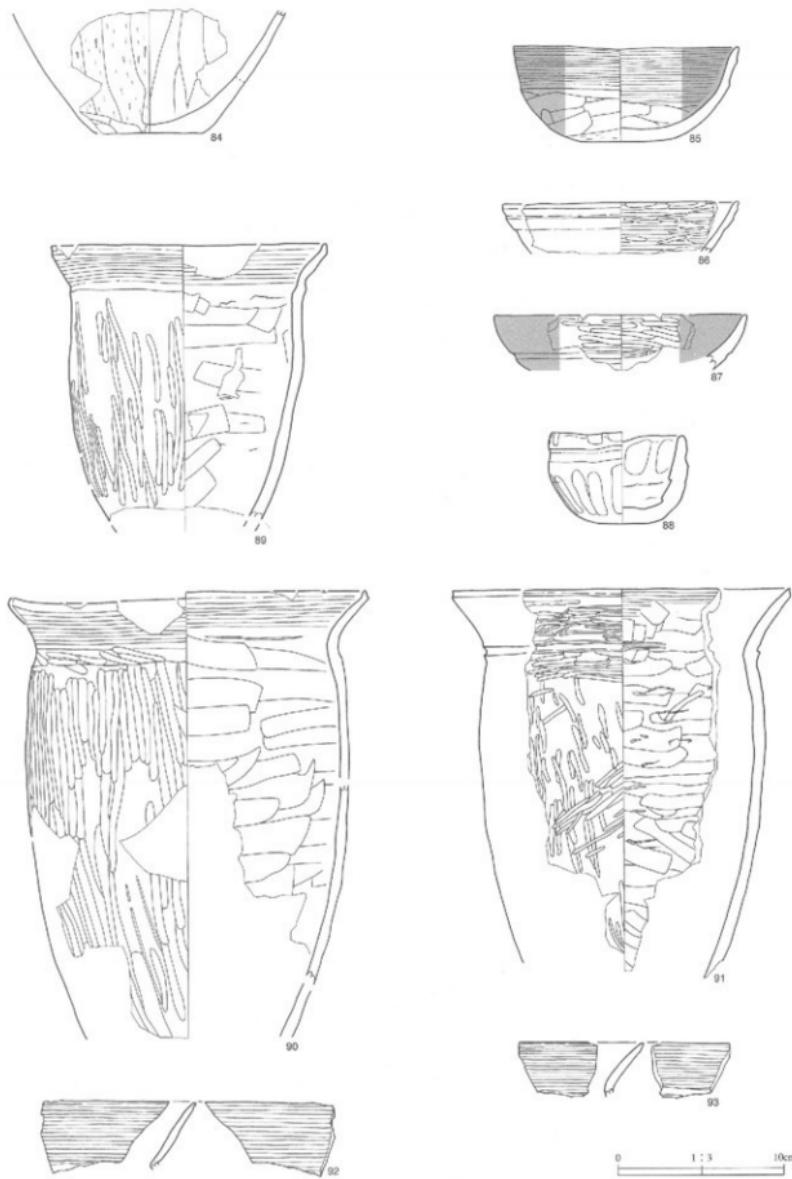
第47図 石器（2）



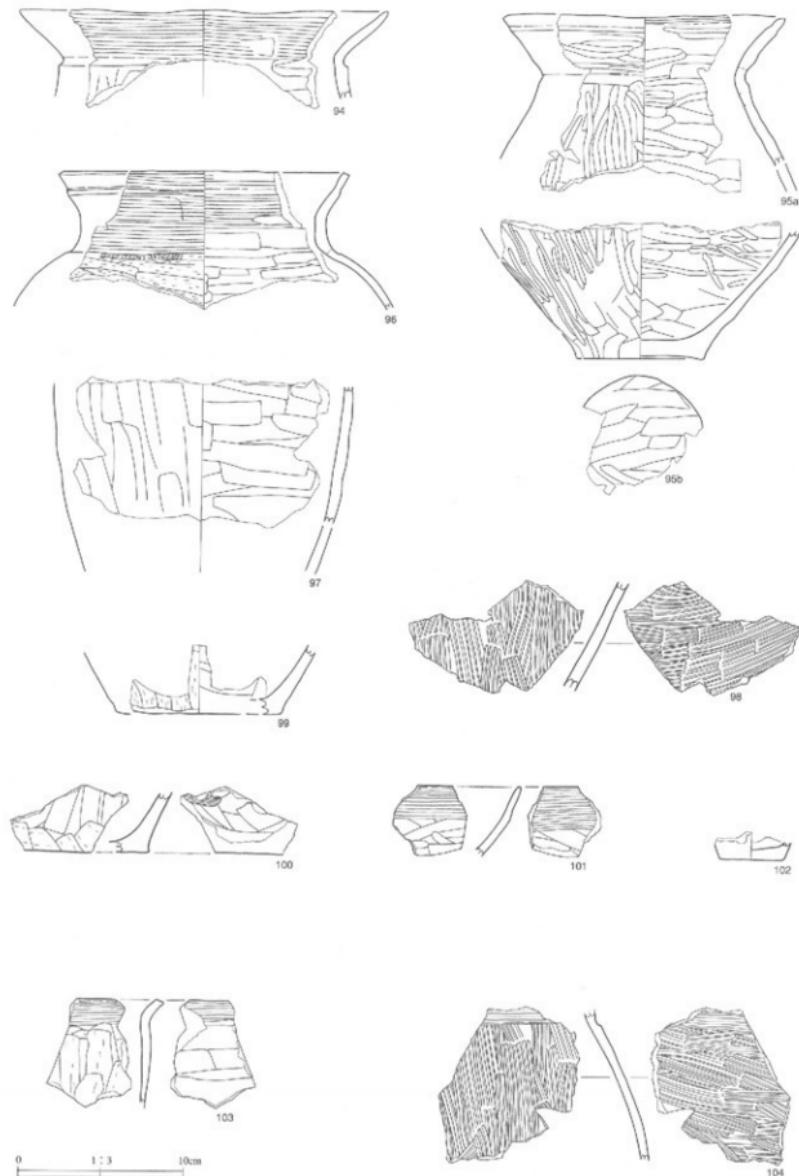
第48図 石器（3）



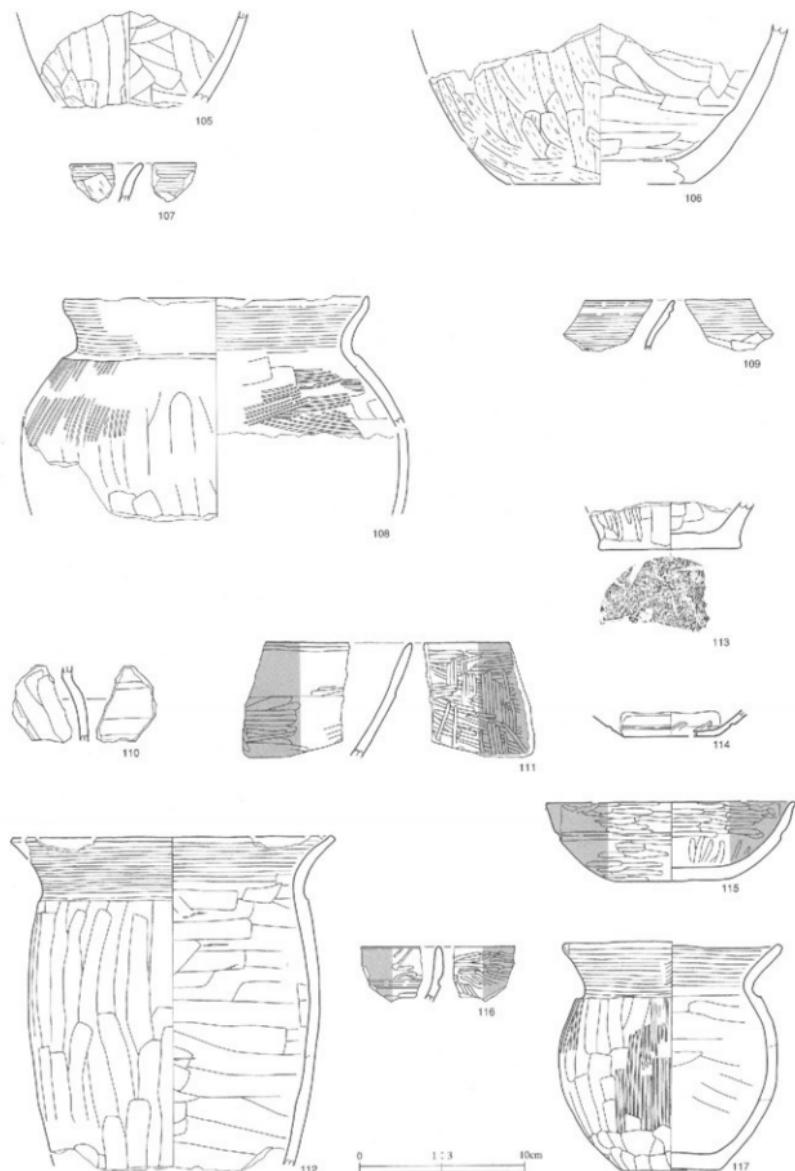
第49図 土器 (1)



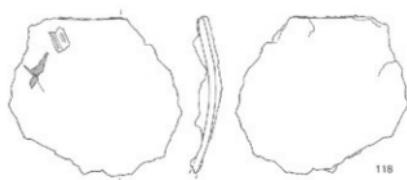
第50図 土器器 (2)



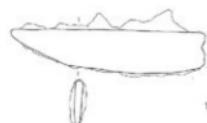
第51図 土師器（3）



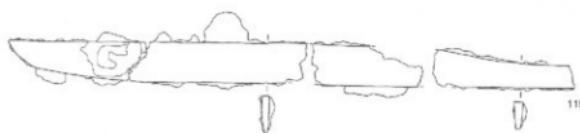
第52図 土師器 (4)



118

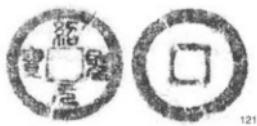


120

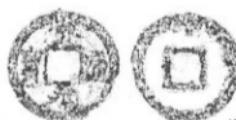


119

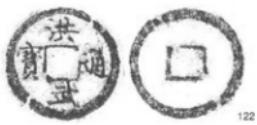
0 1 : 2 5cm



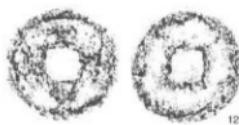
121



123



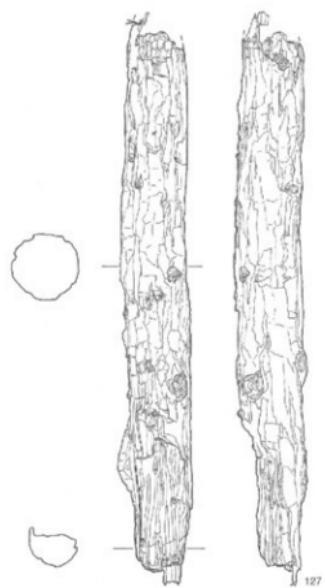
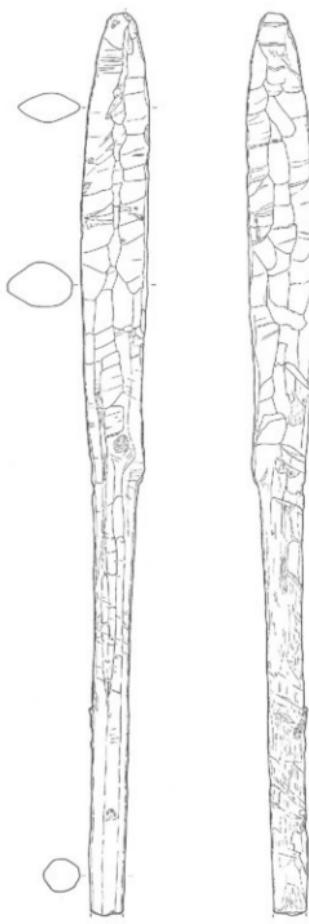
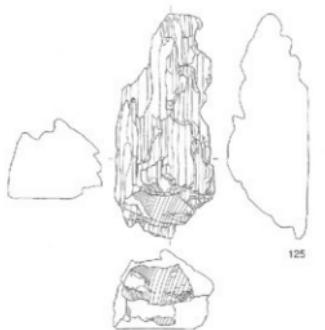
122



124

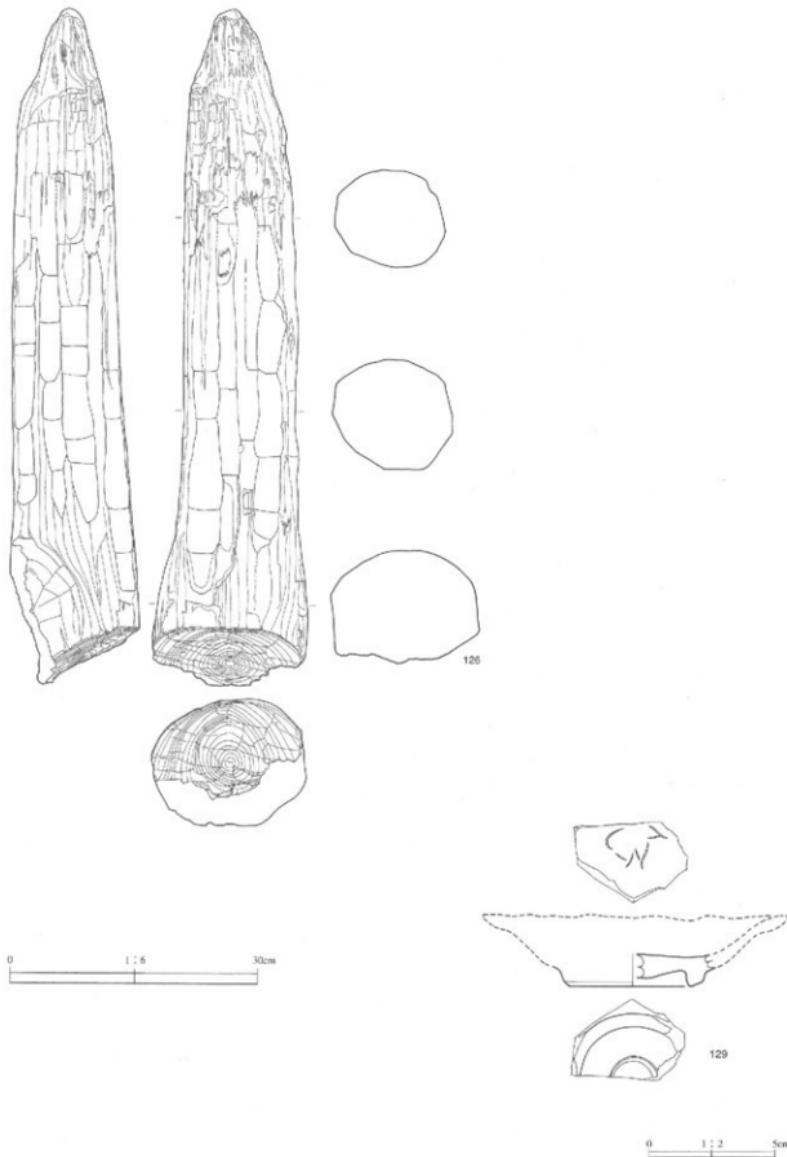
0 1 : 1 5cm

第53図 鉄製品、銭貨



0 1:6 30cm

第54図 本製品（1）



第55図 木製品（2）、磁器

第10表 繩文土器地点別出土重量

出土地点	層位	その他の	重量(g)	出土地点	層位	その他の	重量(g)	出土地点	層位	その他の	重量(g)
S-101 Nベント3層			3.39	LV51	Ⅳ層		40.64	LV08	Ⅲ層		242.37
S-101 P16			38.22	IV-VI	Ⅳ層		16.04	LV19	Ⅲ層		21.81
S-101 P7			35.74	III-VI	Ⅳ層		12.10	LV21	Ⅲ層		17.27
S-101 地下P4			34.81	II-VI	Ⅳ層		19.80	LV21	Ⅲ層		124.34
S-101 QNH-2層	4層		3.86	LV20	Ⅲ層		31.09	LV21	Ⅲ層		422.41
S-101 QNW-2層	4層		87.20	II-VI	Ⅳ層		88.71	LV21	V層		59.91
S-101 QSW-2層	4層		9.19	IV-VI	Ⅳ層		14.83	LV31	V層		57.36
S-101 ONE-2層	1層		1.77	IV-VI	Ⅳ層		3.62	LV50	Ⅳ層相当砂質		786.27
S-101 OSE-2層	1層		8.60	IV-VI	Ⅳ層		8.01	LV02	Ⅲ層		15.07
S-102 QNH-面③P4-埋土2層			18.99	IV-VI	Ⅳ層		4.13	LV11	Ⅲ層		98.22
S-102 QSW-5層	1層		7.41	IV-VI	Ⅳ層		95.27	LV12	Ⅲ層		2,294.14
S-102 ONE-1層			31.07	IV-VI	Ⅳ層		396.29	LV22	Ⅲ層		293.21
S-K01 地上	2層		30.76	IV-VI	Ⅳ層		45.07	LV23	Ⅲ層		28.50
S-K02 P2(5層)			79.75	IV-VI	Ⅳ層		32.14	LV32	Ⅲ層		946.82
S-K02 P3(5層)			42.92	IV-VI	Ⅳ層		10.20	LV33	Ⅲ層		3,087.14
S-K02 P4(5層)			24.45	IV-VI	Ⅳ層	(To-a面)	36.16	LV42	Ⅲ層		119.51
S-K02 P6(6層)			33.75	IV-VI	Ⅳ層	(To-aより上)	12.76	LV43	Ⅲ層		452.38
S-K02 墓上			661.14	IV-VI	Ⅳ層		26.94	LV52	Ⅲ層		64.11
S-K03 墓上			27.22	IV-VI	Ⅳ層		33.22	LV53	Ⅲ層		524.10
S-D01 滑望地-2層			9.63	IV-VI	Ⅳ層	(To-aより上)	6.20	LV54	Ⅲ層		894.98
S-D04 墓上			38.85	IV-VI	Ⅳ層	(To-aより上)	21.42	T47	埋め戻し		23.74
S-D07 墓上			59.70	KⅢ-08	Ⅳ層		15.40	T28	墓土		31.11
S-D09 墓上			283.28	KⅨ-89	Ⅳ層		115.45	T33			294.12
S-D09 墓土			9.03	KⅨ-93	褐色透作層トレンチ②		81.72	T33	埋め戻し		150.90
S-X01 14層			5.61	KⅧ-81	Ⅳ層		28.79	Tb	墓土		78.23
S-X14 墓上			7.40	LII-49	Ⅳ層		16.24	Tc			23.87
IIE95 V層			66.46	LII-50	Ⅳ層		25.98	云母 北区			56.51
IIE98 V層			26.78	LII-59	Ⅳ層		66.23	表表			97.66
IIE99 V層			13.16	LII-69	Ⅳ層		33.24	合計重量			14,791.64
IIE100 V層			416.30	LIV-02	Ⅳ層相当	(To-a下)	6.57				

第11表 石器地点別出土量

出土地点	層位	その他の	点数	重量(g)	出土地点	層位	その他の	点数	重量(g)
S-101 地上			1	151.25	L-V22	Ⅱ層		2	138.10
S-102 地上			2	202.65	L-V32	Ⅱ層		8	136.45
S-K08 墓土			1	25.01	L-V33	Ⅲ層		19	304.75
S-D08 墓土			4	131.42	L-V43	Ⅲ層		4	11.23
S-X15 墓上			3	38.16	L-V53	Ⅲ層		1	12.41
S-X16 墓上			6	6.16	L-V54	Ⅲ層		2	6.33
L-V21 II層			1	20.33	L-V20	Ⅳ層相当透視		2	8.28
L-V20 Ⅱ層			1	14.60	地元不刷	V層		1	6.70
IIE99 Ⅲ層			1	247.49	IIE99 Ⅲ層			1	1.41
KⅢ-20 Ⅲ層			1	273.37	L-V21 Ⅲ層			1	11.62
KⅢ-88 Ⅲ層			1	21.66	牛文透T46 埋め戻し			1	35.18
					合計			59	1,804.56

第12表 石器母岩別出土量

母岩名	産地等	色調等分類基準	出土点数	重量(g)	
			標高	不掲載	計
貝殻1	波瀬山脈・新古代期 第二紀	7.5YR3.5/1黒褐色・暗灰色	4	47.95	0.00 47.95
貝殻2	葛羽山脈・新古代期 第二紀	10YR4/2に近い黄褐色・鮮やか分高い	23	104.64	167.01 271.65
貝殻3	葛羽山脈・新古代期 第二紀	10YR4/2褐色	2	0.00	41.34 41.34
貝殻4	葛羽山脈・新古代期 第二紀	N26褐色	7	36.97	7.00 43.97
貝殻5	葛羽山脈・新古代期 第三紀	10YR4/2褐色・マーブル・不透明で2より透質分低い	3	38.89	152.61 191.53
貝殻6	葛羽山脈・新古代期 第二紀	2.5YR6/0灰赤色べースに黑色膚・透質分高い	2	0.00	9.08 9.08
貝殻7	葛羽山脈・新古代期 第二紀	2.5YR7/0褐色	2	0.00	11.66 11.66
赤玉髓1	日本山脈・中生代後期・シルル	2.5YR7/0褐色	2	94.91	25.85 120.76
チート1	支那山脈・中生代後期・シルル	HJR3/3-4/0暗褐色・暗赤色	3	0.00	28.95 28.95
チート2	支那山脈・中生代後期・シルル	10YR4/4赤褐色・透質分高い	2	0.00	3.64 3.64
チート3	支那山脈・中生代後期・シルル	N7/0紅色	1	0.00	123.40 123.40
ダイサイト	波瀬山脈・新古代期 第二紀	2.5YR3-4/0暗褐色・赤褐色	1	0.00	8.80 8.80
奥羽羽山脈・新古代期 第二紀		10YR7/1灰白色、黒化部分は2.5YR6/0褐色	2	2.41	63.95 66.36
安石岩	奥羽羽山脈・新古代期 第二紀		3	472.23	247.49 719.72
閃綠岩	奥羽羽山脈・新古代期 第二紀		1	108.35	0.00 108.35
合計			58	906.35	890.81 1797.16

第16表 土師器觀察表

通 鑑 號 同 時 間	出土地點	種類	器形	部位	分類	測量 (cm)			備考
						外 面	内 面	口徑 : 深 度 : 壁 厚 (g)	
73 49 26 S 101 床面P 9	土師器	环	口~側	B	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ~ヘラミ ヘラミガキ ガキ 頂:ヘラミガキ	(15.0)	--	--	20.02 内面黒色絞
74 49 26 S 101 床面P 10	土師器	环	口	F	ヨコナデ	ヨコナデ~ヘラミガキ	--	--	20.49
75 49 26 S 101 床面P 12	土師器	环?	口		ヘラミガキ	ヘラミガキ	--	--	17.62 内外黒色絞
76 49 26 S 101 床面P 1~15~1	土師器	瓶	口~底	A I a	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ 脇:	(17.0)	8.0	29.5	604.40
77 49 26 S 101 床面P 18~19	土師器	壺	口~底	A II a	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ 脇:	(15.0)	15.7	6.8	222.00
78 49 26 S 101 床面P 9~11~1	土師器	壺?	瓶~底		ヘラミガキ	ヘラナデ	--	--	(9.0) 408.76 縫跡少?
79 49 26 S 101 床面P 21	土師器	壺			ヘラナデ~ヘラミガキ キ 頂:ヘラミガキ	ナデ	--	6.6	112.63
80 49 26 S 101 QSW 1番	土師器	壺	口~側	B IV	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ 脇:	(15.0)	--	--	16.39
81 49 26 S 101 四ベルト4管	土師器	壺	底		ヘラタケリ~ヘラミ ガキ	ナデ	--	(7.2)	37.35 通常内面縫
82 49 26 S 101 3管	土師器	壺	口~側	B VIc	口:ヘラナデ	ヘラナデ	--	--	23.78
83 49 26 S 101 QNW 3管	土師器	壺	口~側	B VII	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ 脇:	(19.0)	--	--	106.09
84 50 26 S 101 QNW 3管	土師器	壺	瓶~底		ヘラタケリ	ヘラナデ	--	--	(6.6) 82.04 通常内面縫
85 50 26 S 102 床面P 2	土師器	环	輪形	E	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ 脇:	(13.6)	6.0	5.8	208.20 内外黒色絞
86 50 26 S 102 床面P 4	土師器	环	口	D	7 (化粧)	ヨコナデ~ヘラミガキ	(14.4)	--	27.44 外面剥離不明
87 50 26 S 102 床面P 11~12	土師器	环	口	A	ヨコナデ~ヘラミガキ	ヨコナデ~ヘラミガキ	(15.2)	--	30.21 内外黒色絞
88 50 26 S 102 カマド左端上	土師器	大型			ヨコナデ	ヨコナデ	8.1	5.6	4.5 178.67 手づくね
89 50 27 S 102 床面P 1~S 101 QNW 3管	土師器	壺	口~側	A II a	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ 脇:	(16.6)	--	--	787.93 内外スコグ
90 50 27 S 102 QNB 1~6~1~ P 4~2管	土師器	壺	口~底		ヘラミガキ	ヘラナデ	(21.4)	--	--
91 50 27 S 102 カマド右袖付 側瓶(腹部2~5管)・ カマド右袖土位	土師器	壺	口~側	A II b	口:ヨコナデ~ヘラ ミガキ 頂:ヘラミガ キ	ヨコナデ	--	--	282.88
92 50 27 S 102 カマド右袖付 側瓶(腹部2~5管)・ カマド右袖土位	土師器	壺	口		ヨコナデ	ヨコナデ	--	--	23.91
93 50 27 S 102 カマド右袖付 側瓶(腹部2~5管)・ カマド右袖土位	土師器	壺	口		ヨコナデ	ヨコナデ	--	--	14.17
94 51 27 S 102 床面P 7	土師器	壺	口	A IV a	ヨコナデ	ヨコナデ	(22.6)	--	60.29
95 51 27 S 102 床面P 7	土師器	壺	口~底	A V a	口:ヨコナデ~ヘラ ミガキ 頂:ヘラミガ キ	ヨコナデ~ヘラミガ キ	(17.0)	--	121.14
96 51 27 S 102 床面P 7	土師器	壺	口~底	A VIb	ヘラナデ~ヘラミガ キ	ヘラナデ~ヘラミガ キ	--	--	206.69 平面ヘラタケ リ
97 51 27 S 102 カマド右袖付 側瓶(腹部2~5管)・ カマド右袖土位	土師器	壺	口~底		ヨコナデ	ヨコナデ	--	--	174.27
98 51 27 S 102 床面P 7	土師器	壺	口~底		ヨコナデ	ヨコナデ	--	--	55.33
99 51 27 S 102 床面P 12~13	土師器	壺	口~底		ヘラタケリ	ヘラナデ	--	--	36.81
100 51 28 S 102 カマド右袖付 側瓶(腹部2~5管)・ カマド右袖土位	土師器	壺	口~底		ヘラナデ~ヘラミガ キ	ヨコナデ~ヘラミガ キ	--	--	37.13
101 51 28 S 102 QNW 6管	土師器	环	口~側	E	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ 脇:	(15.0)	--	--	15.68
102 51 28 S 102 QNE 東壁床 5管	土師器	壺	口~底		ヘラミガキ	ヨコナデ	--	--	3.9 21.87
103 51 28 S X01 P15 (14管)	土師器	壺	口~側	B IXc	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ 脇:	--	--	--	21.12
104 51 28 S X01 P11 (14管)	土師器	壺	口~側		ヘラナデ	ヘラナデ	--	--	63.01
105 52 28 S X01付近 13管底P (直筒付)	土師器	壺	口~側		ヨコナデ~ヘラミガ キ	ヨコナデ~ヘラミガ キ	--	--	57.65
106 52 28 S X01 P 9 (4管)	土師器	壺	口~底		ヘラタケリ	ヘラナデ	--	--	(1.4) 421.58 健康
107 52 28 S X01 P 3 (3管)	土師器	?	口		ヨコナデ~ヘラタケリ	ヨコナデ	--	--	5.30 錫錫多量
108 52 28 S X07 北側P 1	土師器	壺	口~底	A III a	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ 脇:	(18.4)	--	--	680.39 球制器 内出 シゲ
109 52 28 S X07 北側P 2	土師器	壺	口		ヨコナデ	ヨコナデ	--	--	10.32
110 52 28 J III 26 P 2 (1層上位)	土師器	壺	口		ヨコナデ	ヨコナデ	--	--	11.21
111 52 28 J III 100 V層	土師器	陶片	口~底		ヘラミガキ	ヘラミガキ	--	--	43.13 内外黒色絞
112 52 28 J III 09 N層	土師器	壺	口~底	A VII a	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ 脇:	(19.6)	--	--	488.16
113 52 28 J III 09 N層	土師器	壺	底		ヘラミガキ	ヘラナデ	--	--	(8.6) 68.01
114 52 28 J III 09 N層 (To上4号)	土師器	壺	底	G	?	ヘラミガキ	--	--	5.3 7.82 健康
115 52 28 J IV 01 條孔 (生文様T)	土師器	壺	口~底	A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(15.0)	--	73.3 112.63 内外黒色絞
116 52 28 J IV 01 條孔 (生文様T)	土師器	壺	口	A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	--	--	8.62 内外黒色絞
117 52 28 J III 46 瓜棱	土師器	壺	完形	A VI a	口:ヨコナデ 脇: 口:ヨコナデ 脇:	(13.3)	14.0	6.0	594.72

V 野 中 遺 跡

1 検 出 遺 構 (第56図)

今回の調査で確認・精査した遺構は、堅穴状遺構1棟、土坑38基、柱穴状土坑243基である。調査範囲はほぼ全域において何らかの削平・改変・擾乱を受けており、遺存状態は良好とはいえない。

遺構はV層での検出に努めた。しかし、調査区内ではV層を欠落する箇所も多く、一部斑状に残存している部分もVI層との識別が困難な状況であった。その結果、VI層検出となった遺構が大多数を占めた。なお、本遺跡における確認層位は、遺構構築時の整地・改変あるいは後世の削平状況に大きな影響を受けていると考えられる。よって、確認した層位の違いは遺構の時期差を示すものではない。

(1) 堅 穴 状 遺 構

S K01堅穴状遺構

遺構 (第57図、写真図版32)

[位置・検出状況] B V38・39・48・49グリッドに位置する。VI層で確認した。

[重複関係] 北西壁がB V48 P 1に切られている。

[規模・平面形] 北東—南西 (長軸) 2.90m、北西—南東 (短軸) 2.48mの隅丸方形を呈する。

[埋土] 6層に分層される。4層を除き礫が多く混入している。堆積過程の観察から、埋土は南側から流入したものが主であり、自然堆積により埋没したと考えられる。

[壁・底面] 壁は約70°前後で立ち上がっている。最深部は北東壁で、確認面から74cmを測る。底面は、概ね平坦に作出されている。

遺物 埋土最下位 (底面上10cmまで) の土壤に対しフローテーションを実施した。その結果、炭化種子2点が得られ、分析の結果、コムギ、ヒエの2種と同定された (VI章4節参照)。

時期 人為遺物を欠くため詳細は不明である。しかし、埋土の土質・堆積状況の比較では、周辺の土坑・柱穴状土坑との間に大きな差は見出せない。したがって、これらは時間的にも近接している可能性が高いと考え、本遺構も中世から近世の時間幅に収まるものとしたい。

(2) 土 坑

径が概ね60cm以上で、平面形が円形基調のものを土坑とした。柱痕を残すものは分類上除外したが、これ以外にも柱穴として機能したものも含む可能性がある。よってここでは各論に注力し、建物跡の存在を考慮した配置の検討に関しては柱穴状土坑と合わせて次項で行った。

遺物を伴うものは、S K01・06・13・18・20のみと少ないため時期決定の要素を欠くものが多いが、形状、規模、埋土等の諸属性に関しては、相互の共通性が高い。そのため、これらは時間的にも近接している可能性が高いと考えている。

S K01土坑

遺構 (第58図、写真図版32)

[位置・検出状況] B V40グリッドに位置する。VI層で確認した。上部は削平を受けている。

[規模・平面形] 北東—南西 (長軸) 102cm、北西—南東 (短軸) 90cmの不整円形を呈する。

【埋土】 黒褐色シルトによる单層である。人为堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】 底面は丸く、壁もこれに連続して立ち上がる。底面東側は、さらに10cmほど窪む落ち込みがあり、こちらの底面も丸底である。

遺物 (第71図、写真図版43)

【銭貨】 無文銭 (8) が1枚出土している。

時期 出土遺物から、中世から近世に属すると考えられる。

S K 02土坑

遺構 (第58図、写真図版33)

【位置・検出状況】 B V39グリッドに位置する。VI層で確認した。

【規模・平面形】 北東—南西 (長軸) 85cm、北西—南京 (短軸) 73cmの楕円形を呈する。

【埋土】 2層に分層した。2層は礫が多く混入し、径が20cm前後の大形のものもみられる。人为堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】 底面は、平坦に作出されている。壁は、60°前後の一定角度を保ち、立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 03土坑

遺構 (第58図、写真図版33)

【位置・検出状況】 A VI92グリッドに位置する。VI層で確認した。西端を擾乱がかすめている。

【規模・平面形】 北東—南西 (長軸) 112cm、北西—南京 (短軸) 97cmの不整円形を呈する。

【埋土】 4層に分層した。2・3層は砂が混入するため粘性が弱い。自然堆積と考えられる。

【壁・底面】 底面は、平坦に作出されている。壁は急角度で立ち上がり、断面形は均整の取れた円筒形を呈している。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 04土坑

遺構 (第58図、写真図版33)

【位置・検出状況】 A VI92グリッドに位置する。VI層で確認した。S K05・06と近接して存在する。

【規模・平面形】 北西—南京 (長軸) 76cm、北東—南西 (短軸) 71cmの楕円形を呈する。

【埋土】 2層に分層した。黒褐色シルト主体で、2層は大形の礫を含む。自然堆積と考えられる。

【壁・底面】 底面は、丸底で平坦面は作出されない。壁も底面から連続して、曲線のまま立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 05土坑

遺構 (第58図、写真図版33)

【位置・検出状況】 A VI92グリッドに位置する。VI層で確認した。S K04・06と近接して存在する。

【規模・平面形】 北西—南京100cm、北東—南西92cmの円形を呈する。

[埋土] 3層に分層した。黒褐色シルト主体でいすれも礫を含むが、特に底面に近い部分に多く混入している。堆積上には壁からの崩落土が混入しており、自然堆積と考えられる。

[壁・底面] 底面は、平坦に作出されている。壁は急角度で立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K06土坑

遺構 (第58図、写真図版33)

[位置・検出状況] A VI92グリッドに位置する。VI層で確認した。S K04・05と近接して存在する。

[規模・平面形] 北西—南東（長軸）133cm、北東—南西（短軸）118cmの楕円形を呈する。

[埋土] 3層に分層した。黒褐色シルト主体で礫を多く含む。2・3層では、壁からの崩落土が多量に混入していると考えられることから、自然堆積の可能性が高い。

[壁・底面] 磁は、底面に近づくほど径が小さくなる不整な掘り方で作出されており、傾斜角も一定しない。底面は概ね平坦だが、開口部に比べ著しく小さい。

遺物 (第71図、写真図版43)

[銭貨] 埋土中から、寛永通寶（9）が1枚出土している。

時期 出土遺物から、近世に属すると考えられる。

S K07土坑

遺構 (第59図、写真図版34)

[位置・検出状況] B V40グリッドに位置する。VI層で確認した。

[規模・平面形] 北西—南東（長軸）72cm、北東—南西（短軸）62cmの楕円形を呈する。

[埋土] 黒褐色シルトの単層で、炭化物粒を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

[壁・底面] 底面は、平坦に作出されている。壁は急角度で立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K08土坑

遺構 (第59図、写真図版34)

[位置・検出状況] B V30グリッドに位置する。VI層で確認した。

[規模・平面形] 北西—南東（長軸）90cm、北東—南西（短軸）70cmの楕円形を呈する。

[埋土] 黒褐色シルトの単層である。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

[壁・底面] 底面は、若干丸みを帯びるが、概ね平坦に作出されている。西壁の傾斜が他所に比べ若干なだらかである。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K09土坑

遺構 (第59図、写真図版34)

[位置・検出状況] B V30に位置する。VI層で確認した。

1 検出遺構

〔重複関係〕 南西壁でB V30 P21を切っていて、中央ではP20に切られている。P18・19については、埋土が似通っていたため分層出来ず、前後関係を捉えられなかった。

〔規模・平面形〕 北東—南西82cm、北西—南東78cmの円形を呈する。

〔埋土〕 黒褐色シルトの単層で、灰ブロックを含む。灰ブロックは全体に混入するが、特に底面近くに多い。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

〔壁・底面〕 底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K10土坑

遺構（第59図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕 B V30に位置する。VI層で確認した。

〔重複関係〕 北西壁で、B V30 P25を切っている。

〔規模・平面形〕 北東—南西48cmの円形を呈する。

〔埋土〕 5層に分層した。黒褐色シルト主体で、礫、炭化物粒で分層できる。自然堆積と考えられる。

〔壁・底面〕 底面は、若干丸みを帯びるが、概ね平坦に作出されている。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K11土坑

遺構（第59図、写真図版34）

〔位置・検出状況〕 B V30に位置する。VI層で確認した。

〔重複関係〕 北西壁でB V30 P14と重複するが、本遺構完掘後にP14を確認したために、前後関係の把握は出来なかった。

〔規模・平面形〕 北西—南東（長軸）84cm、北東—南西（短軸）78cmの不整円形を呈する。

〔埋土〕 3層に分層した。黒褐色シルト主体で、いずれの層にも礫を含む。自然堆積と考えられる。

〔壁・底面〕 底面は概ね平坦に作出される。壁は北東壁が急角度に立ち上がるのに対し、南西壁は屈曲し、なだらかに立ち上がっている。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K12土坑

遺構（第60図、写真図版35）

〔位置・検出状況〕 B VI21グリッドに位置する。VI層で検出した。

〔規模・平面形〕 北西—南東（長軸）63cm、北東—南西（短軸）57cmの楕円形を呈する。

〔埋土〕 3層に分層した。黒色シルト主体で、いずれの層にも礫を含む。自然堆積と考えられる。

〔壁・底面〕 底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 13土坑

遺構（第60図、写真図版35）

【位置・検出状況】B VI73グリッドに位置する。VI層で確認した。

【規模・平面形】北東一南西60cm、北西一南東55cmの円形を呈する。

【埋土】黒色シルトに灰黄褐色シルトのブロックを混入する単層である。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物（第71図、写真図版43）

【錢貨】埋土から、寛永通寶（10）が1枚出土している。

時期 出土遺物から、近世に属すると考えられる。

S K 14土坑

遺構（第60図、写真図版35）

【位置・検出状況】B VI73グリッドに位置する。VI層で確認した。

【規模・平面形】北西一南東（長軸）79cm、北東一南西（短軸）76cmの楕円形を呈する。

【埋土】黒褐色シルトを主体に、黒色シルト、灰黄褐色シルトのブロックを混入する単層である。他の遺構と比較し、埋土のしまりが弱い。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】底面は、平坦に作出される。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 15土坑

遺構（第60図、写真図版35）

【位置・検出状況】B VI73グリッドに位置する。VI層で確認した。

【規模・平面形】北西一南東（長軸）59cm、北東一南西（短軸）52cmの楕円形を呈する。

【埋土】黒色シルトの單層である。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 16土坑

遺構（第60図）

【位置・検出状況】B VI73グリッドに位置する。VI層で確認した。

【重複関係】南壁でB VI73 P2と重複するが、埋土が似通っていたため分層出来ず、前後関係を捉えられなかった。

【規模・平面形】北西一南東（長軸）71cm、北東一南西（短軸）63cmの楕円形を呈する。

【埋土】2層に分層した。2層は灰黄褐色シルトブロックが混入ししまりも強く、人為的な埋め戻し土の可能性が高い。

【壁・底面】底面は丸底で、壁もこれに連続してなだらかに立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K17土坑

遺構（第61図）

【位置・検出状況】 B VI73・83グリッドに位置する。VI層で確認した。S K18と近接して存在する。

【規模・平面形】 北一南（長軸）73cm、東一西（短軸）56cmの楕円形を呈する。

【埋土】 黒色～黒褐色シルトの単層で、礫を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】 底面は、若干丸みを帯びるが、概ね平坦に作出されている。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K18土坑

遺構（第61図、写真図版36）

【位置・検出状況】 B VI73・83グリッドに位置する。VI層で確認した。S K17と近接して存在する。

【規模・平面形】 北一南（長軸）69cm、東一西（短軸）59cmの楕円形を呈する。

【理土】 2層に分層した。2層はVI層に近似した暗褐色シルトを多く含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

【壁・底面】 底面は、平坦に作出されている。壁は、80°前後の急角度で立ち上がる。

遺物（第70図、写真図版42）

【縄文土器】 埋土中から1点出土している（1）。

時期 縄文土器が出土しているが、これ以外に他の土坑と異なる属性は見出せない。したがって、本遺構も周囲と同様、中世から近世に属する可能性が高いと考える。

S K19土坑

遺構（第61図、写真図版36）

【位置・検出状況】 B VI83グリッドに位置する。VI層で確認した。

【規模・平面形】 北東一南西（長軸）72cm、北西一南東（短軸）48cmの楕円形を呈する。

【理土】 2層に分層した。1層は灰黄褐色シルトブロックを含み、しまりも強い。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】 底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K20土坑

遺構（第61図）

【位置・検出状況】 B VI83グリッドに位置する。VI層で確認した。

【規模・平面形】 北西一南東60cm、北東一南西58cmの円形を呈する。

【理土】 2層に分層した。黒色シルト主体で、2層は灰黄褐色砂砾ブロックが混入し、しまりも強い。人為的な埋め戻しの可能性がある。

【壁・底面】 底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物（第70図、写真図版42）

[縄文土器] 1層中から1点出土している（2）。

時期 縄文土器が出土しているが、これ以外に他の土坑と異なる属性は見出せない。したがって、本遺構も周開と同様、中世から近世に属する可能性が高いと考える。

S K21土坑

遺構（第61図、写真図版36）

[位置・検出状況] B VI93グリッドに位置する。VI層で確認した。

[規模・平面形] 北西—南東（長軸）67cm、北東—南西（短軸）58cmの楕円形を呈する。

[埋土] 3層に分層した。黒色シルトと灰黄褐色シルトにより構成され、いずれの層もしまりが強い。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

[壁・底面] 底面は、若干丸みを帯びるが、概ね平坦に作成されている。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K22土坑

遺構（第62図、写真図版36）

[位置・検出状況] B VI82グリッドに位置する。VI層で確認した。

[規模・平面形] 北西—南東69cm、北東—南西65cmの円形を呈する。

[埋土] 2層に分層した。黒色シルト主体である。2層は、灰黄褐色砂礫ブロックが混入し、1層に比べしまりが強い。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

[壁・底面] 底面は東側へ若干傾斜している。東壁は屈曲しており、階段状に立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K23土坑

遺構（第62図、写真図版37）

[位置・検出状況] B VI93グリッドに位置する。VI層で確認した。

[重複関係] 西壁で、B VI93 P1を切っている。

[規模・平面形] 北東—南西74cm、北西—南東69cmの円形を呈する。

[埋土] 3層に分層した。それぞれ黒褐色シルト主体で、灰黄褐色砂質シルトが混入している。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

[壁・底面] 底面は丸底で、壁もこれに連続して70°前後の角度で立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K24土坑

遺構（第62図、写真図版37）

[位置・検出状況] B V39グリッドに位置する。VI層で確認した。S K25と近接して存在する。上部は削平されている可能性が高い。

1 検出遺構

【重複関係】北西壁がB V39 P7と重複するが、本遺構完掘後に確認したために、前後関係の把握はできなかった。

【規模・平面形】北西—南東（長軸）74cm、北東—南西（短軸）58cmの楕円形を呈する。

【埋土】黒褐色シルトの單層で、破碎礫を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】底面は、平坦に作出されている。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K25土坑

遺構（第62図、写真図版37）

【位置・検出状況】B V39グリッドに位置する。VI層で確認した。S K24と近接して存在する。上部は削平されている可能性が高い。

【規模・平面形】北一南（長軸）75cm、東一西（短軸）62cmの楕円形を呈する。壁の崩落等の要因により、現況は不整円形を呈する。

【埋土】2層に分層した。黒褐色シルト主体で、いずれの層にも礫を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】底面は、傾斜をもって作出され、北側が低い。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K26土坑

遺構（第62図、写真図版37）

【位置・検出状況】B V39・49グリッドに位置する。VI層で確認した。

【規模・平面形】北西—南東62cm、北東—南西60cmの円形を呈する

【埋土】5層に分層した。礫の混入が多く、径が15cmを超える大形のものもみられる。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】底面は、若干丸みを帯びるが、概ね平坦に作出されている。壁は急角度で立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K27土坑

遺構（第62図、写真図版38）

【位置・検出状況】B VI82グリッドに位置する。VI層で確認した。

【規模・平面形】北西—南東59cm、北東—南西58cmの円形を呈する。

【埋土】3層に分層した。黒～黒褐色シルト主体で、にぶい黄褐色シルトと破碎礫が混入している。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】底面は、平坦に作出されている。壁は、70°前後の角度で直線状に立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 28土坑

遺構（第63図、写真図版38）

[位置・検出状況] B VI83グリッドに位置する。VI層で確認した。

[規模・平面形] 北西一南東54cm、北東一南西50cmの円形を呈する。

[埋土] 3層に分層した。2・3層は、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入し、1層は炭化物粒が少量混入している。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

[壁・底面] 底面は、平坦に作出されている。壁は、80°前後の急角度で直線状に立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 29土坑

遺構（第63図）

[位置・検出状況] B VI82グリッドに位置する。VI層で確認した。

[規模・平面形] 南一北52cm、東一西49cmの円形を呈する。

[埋土] 黒色シルト主体の単層で、灰黄褐色シルトブロック、礫・破碎礫を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

[壁・底面] 底面は丸底で、壁はなだらかに立ち上がる。全体的に不整に作出されている。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 30土坑

遺構（第63図、写真図版38）

[位置・検出状況] B VI72・82グリッドに位置する。VI層で確認した。

[規模・平面形] 北東一南西（長軸）81cm、北西一南東（短軸）58cmの不整円形を呈する。

[埋土] 2層に分層した。黒褐色シルト主体で、底面北側ではにぶい黄褐色シルトと混土を形成している。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

[壁・底面] 底面は、平坦に作出される。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 31土坑

遺構（第63図、写真図版38）

[位置・検出状況] B V66・76グリッドに位置する。VI層で確認した。

[規模・平面形] 北東一南西（長軸）140cm、北西一南東（短軸）110cmの楕円形を呈する。

[埋土] 4層に分層した。2・3・4層は自然堆積と考えられるが、1層はにぶい黄褐色シルトブロックを多量に含み、人為堆積の可能性がある。

[壁・底面] 底面は丸底で、壁もこれに連続して40°前後の角度を保ち、なだらかに立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 32土坑

遺構（第63図）

【位置・検出状況】B VI72グリッドに位置する。VI層で確認した。

【規模・平面形】北東—南西0.52m、北西—南東0.50mの円形を呈する。

【埋土】2層に分層した。黒色シルト主体で、2層は灰黄褐色シルトとの混土である。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】底面は、平坦に作出されている。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 33土坑

遺構（第63図、写真図版39）

【位置・検出状況】B VI61グリッドに位置する。VI層で確認した。攪乱により西側の大部分を欠く。

【規模・平面形】残存部は、北—南（長軸）95cm、東—西（短軸）71cmの稍円形を呈する。

【埋土】黒色シルト主体の単層である。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】底面は西側へ傾斜している。東壁も底面から連続してなだらかに立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 34土坑

遺構（第64図、写真図版39）

【位置・検出状況】B V47グリッドに位置する。VI層で確認した。

【規模・平面形】北—南60cm、東—西57cmの円形を呈する。

【埋土】6層に分層した。黒褐色シルト主体で、1・3・4・6層は疊を含む。東西方向から交互に土が流れ込んだ様子が取られ、自然堆積と考えられる。

【壁・底面】底面は、平坦に作出されている。壁は、75°前後の急角度で直線状に立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 35土坑

遺構（第64図）

【位置・検出状況】B V66グリッドに位置する。VI層で確認した。

【重複関係】B V66P3を切っている。

【規模・平面形】北東—南西56cm、北西—南東50cmの円形を呈する。

【埋土】2層に分層した。黒褐色シルト主体で、VI層に近似したにぶい黄褐色シルトを多量に含む。人為的に埋め戻された可能性がある。

【壁・底面】底面は、平坦に作出されている。壁は、80°前後の急角度で直線状に立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 36土坑

遺構（第64図、写真図版39）

【位置・検出状況】 B V20・B VI11グリッドに位置する。VI層で確認した。

【重複関係】 北東壁がS K37と重複する。検出段階で本遺構の正円形プランを明瞭に捉えたことから、本遺構がS K37を切る可能性が高い。

【規模・平面形】 北西—南東（長軸）99cm、北東—南西（短軸）91cmの楕円形を呈する。

【埋土】 3層に分層した。黒褐色シルト主体で、10cmを超える大形のものを含む多くの礫が混入している。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】 底面は丸い。南東壁はこの底面から連続してなだらかに立ち上がるが、階段状に屈曲してから再度立ち上がる。北西壁は、底面から急角度で立ち上がっている。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 37土坑

遺構（第64図、写真図版39）

【位置・検出状況】 B V20・B VI11グリッドに位置する。VI層で確認した。

【重複関係】 S K36土坑の項を参照。

【規模・平面形】 北西—南東（長軸）82cm、北東—南西（短軸）50cmの不整円形を呈する。

【埋土】 2層に分層した。黒褐色シルト主体で、2層は灰黄褐色砂質シルトとの混土である。いずれの層にも礫を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

【壁・底面】 底面は丸く、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

S K 38土坑

遺構（第64図、写真図版39）

【位置・検出状況】 B V40グリッドに位置する。VI層で確認した。

【重複関係】 北西壁がB V40 P 9と重複するが、前後関係は不明である。

【規模・平面形】 北西—南東（長軸）102cm、北東—南西（短軸）84cmの楕円形を呈する。

【埋土】 3層に分層した。いずれの層も、しまりが弱い。自然堆積と考えられる。

【壁・底面】 底面は丸く、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物 出土していない。

時期 不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

（3）柱穴状土坑群（第56図、第21表）

土坑としたものより規模が小さく、柱穴として機能した可能性が高いものを柱穴状土坑とした。柱の痕跡を残すものは、全てここに含めた。分布は、調査区北半から西端に集中し、沢跡を挟んだ西側にも分布する。沢跡付近は分布密度が薄いことから、ここを避けて選地したとも考えられる。

なお、以下の事実記載は、柱穴状土坑の集合である「群」ごとに進行。「群」は、縮尺1/100での掲載を念頭に、柱穴状土坑の大まかな分布域を捉えられるように任意の範囲で設定した（第56図）。

その上で、土坑も柱穴に見立て、改めて建物を想定した配置を検討した。

第1群

遺構（第58・59・62・64・65・68図、写真図版40）

【概要】 S X01を西端にして、南北24m、東西16mの範囲とした。北西側は調査区境界に接する。東側は宅地造成のため大幅に削平されており、遺構は存在しない。B V20・30・40グリッドに集中域があり、ここを境に北東側は約20cmの比高差を有して高位面となる。

【検出状況】前述の高位面は残存状態も比較的良好であったが、それでも表土除去段階でVI層の上面が露出した。これに対して南西側の低位面は、すでにVI層中まで削平がおよんでいた。そのため、高位面と低位面の遺構分布密度の差は、後世の削平深度に起因する可能性が高い。遺構検出面はVI層である。ここで確認したVI層は、遺跡の立地する自然堤防上でもより河川に近い地点のため、他地点よりも多くの礫が混入する。柱穴状土坑は124個検出した。範囲内には竪穴状遺構1基、土坑14基が含まれる。遺構の分布域は、調査区外の北西方向、現況の宅地方向へと拡がると考えられる。

【配置】S K36を北端に、S K36-S K11-S K08-S K38-S K01と5つの土坑が250cm間隔で均等に並ぶ。この軸線に直交して、南端のS K01から西方へS K01-(500cm)-S K25-(250cm)-S K02が並ぶ。この配置による建物の存在が推定される。

【埋土】黒色、または黒褐色シルトが主体となって堆積するものが多い。B V30を中心に灰黄褐色砂質シルトブロックが混入するものが目立つ。

遺物（第71図、写真図版43）

【鉄製品】B VI01P 5 埋土中から、釘が1点出土している（7）。

【銭貨】B V20P 6 墓土中から、淳熙元寶、洪武通寶、無文銭5枚の計7枚が一括して出土した（15~20）。銭貨は、S K01の無文銭1枚、遺構外の寛永通寶2枚を合わせると、範囲内から計10枚が出土している。

【時期】B V20P 6 出土遺物の流通年代から中世から近世までの広い時間幅が想定される。遺物を出土しない遺構も、形態、規模、堆積土の色調・土質等、相互の共通性が強い。加えて範囲内から寛永通寶が出土することを考慮し、こちらも同様に中世から近世に属するものと考えたい。

第2群

遺構（第64・66・68・69図、写真図版40）

【概要】B V38を北東端、B V75を南西端、B V78を南東端とする、南北24m、東西16mの範囲とした。擾乱が多く、B V38グリッド周辺とB V67の遺構空白域は、これにより生じたと考えられる。柱穴状土坑は、径が30cm前後と他の群のものに比べ規模が小さいものが多い。

【検出状況】遺構確認面は、調査区西端付近のB V65・75グリッドとB V66グリッドの一部ではV層、これ以外では、VI層で確認した。ここで確認したVI層は、自然堤防から後背湿地へと漸移する部分と考えられ、南西側ほど礫の混入量が少ない。柱穴状土坑は85個検出した。範囲内には土坑3基が含まれる。遺構の分布域は、調査区外の北西方向、現況の宅地方向へと拡がるものと考えられる。

【配置】規則的な配置は、看取できなかった。

【埋土】黒色、または黒褐色シルト主体で、色調や土質は第1群と差が見出せない。

遺物 出土していない。

【時期】出土遺物がなく不明である。しかし、検出レベルや埋土の土質・状態等に第1群との共通性

を見出せることから、本群も同様に中世から近世の時間幅に収まるものと考えたい。

第3群

遺構（第62・67・69図、写真図版41）

【概要】 沢跡の西側に位置し、B VI71P 1を西端、B VI64を北東端、B VI94を南東端とする、南北16m、東西16mの範囲とした。現行の国道4号に隣接する。本群の位置する沢跡西側は攪乱が非常に多く、相当数の消失が推定される。本群中では、土坑と柱穴状土坑の間の形態、規模の差が小さい。したがって、土坑としたものについても、柱穴として機能したものが多く含まれると考えられる。

【検出状況】 遺構検出面は、全城にてVI層である。同面は全体に堅緻であった。柱穴状土坑は24個検出した。範囲内には土坑16基が含まれる。

【配置】 柱間寸法220cmを核とする2つのまとまりを指摘できる。若干の角度の差はあるものの、お互い南北方向に主軸線を置く建物跡と考えられる。

【埋土】 黒色、または黒褐色シルトが主体となって堆積するものが多い。

遺物 柱穴状土坑からは出土していないが、SK13から寛永通寶が1枚出土している。また、SK18・20からは繩文土器が各1点出土している。

時期 土坑の出土遺物以外に時期を明示する遺物は無いが、検出レベルや埋土の土質・状態等が1、2群との共通性を有することから、本群も同様に中世から近世の時間幅に収まるものと考えたい。

第4群

遺構（第67・69図、写真図版40）

【概要】 B VI71グリッドの周囲、南北5.5m、東西4mの範囲とした。第1群の南側に位置し、一部を重複させて設定した。

【検出状況】 遺構検出面はVI層である。地形的特徴は第1群に準じる。柱穴状土坑を5個検出した。

【配置】 沢跡の落ち際に沿うように、柱穴状土坑が並ぶ。杭列、もしくは柵列の可能性がある。

【埋土】 黒色シルト主体で、灰黄褐色砂質シルトブロックが混入するものが多い。

遺物 範囲内から遺物は出土していない。

時期 不明であるが、周辺の土坑、柱穴状土坑と同時期、中世から近世に属するものと考えたい。

第5群

遺構（第67・69図、写真図版40）

【概要】 B V69・79グリッドを中心とする南北11m、東西6mの範囲とした。第2群の南東側に位置し、一部を重複させて設定した。

【検出状況】 遺構検出面はVI層である。地形的特徴は第2群に準じる。柱穴状土坑を5個検出した。

【配置】 規則的な配置は看取できなかった。

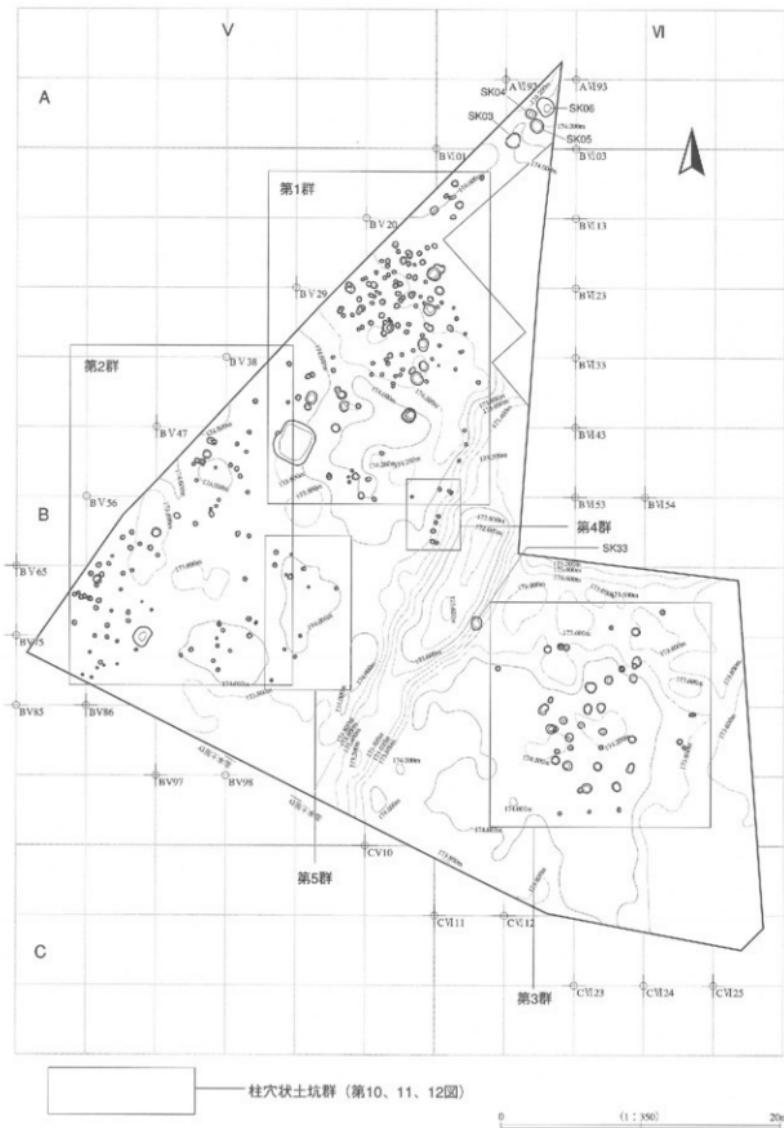
【埋土】 黒色シルトが主体に堆積している。

遺物（第70図、写真図版42）

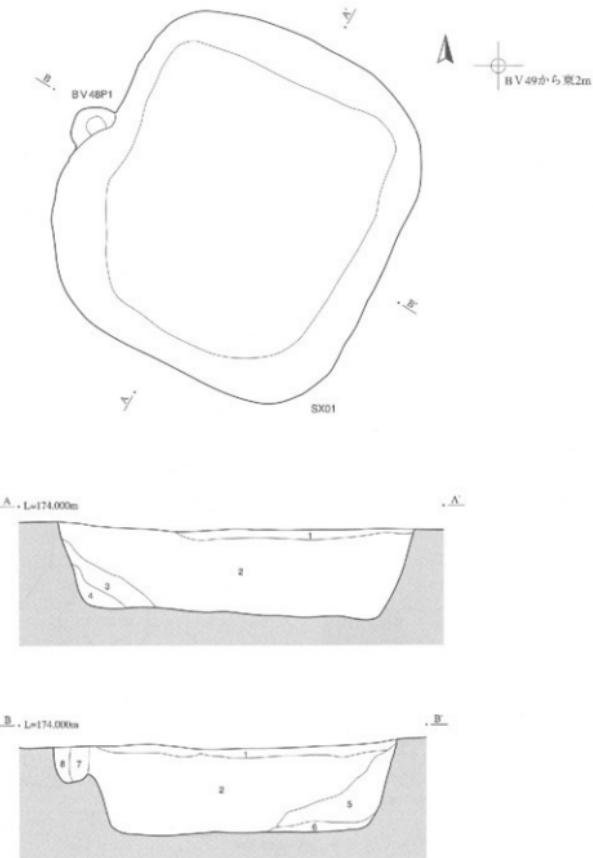
【繩文土器】 B V69P 2 塚土中から1点出土した（3）。

時期 不明であるが、周辺の土坑、柱穴状土坑と同時期、中世から近世に属するものと考えたい。

（荒谷）



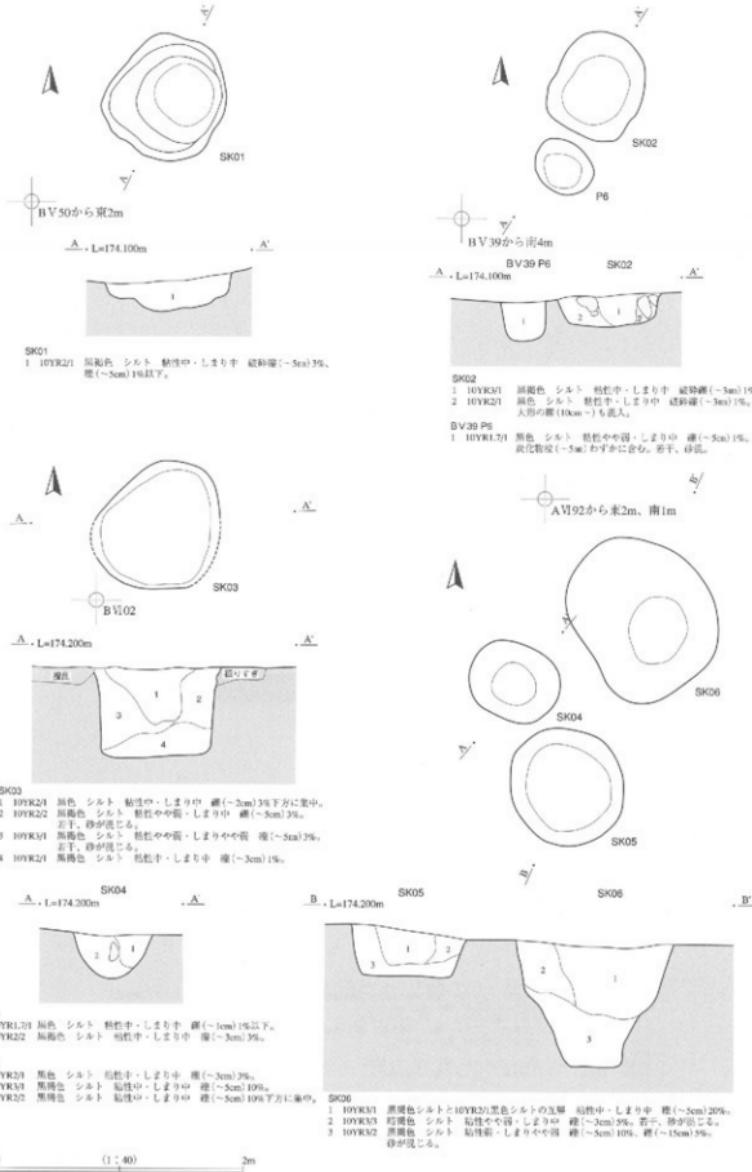
第56図 野中遺跡遺構配置とVI層面の標高



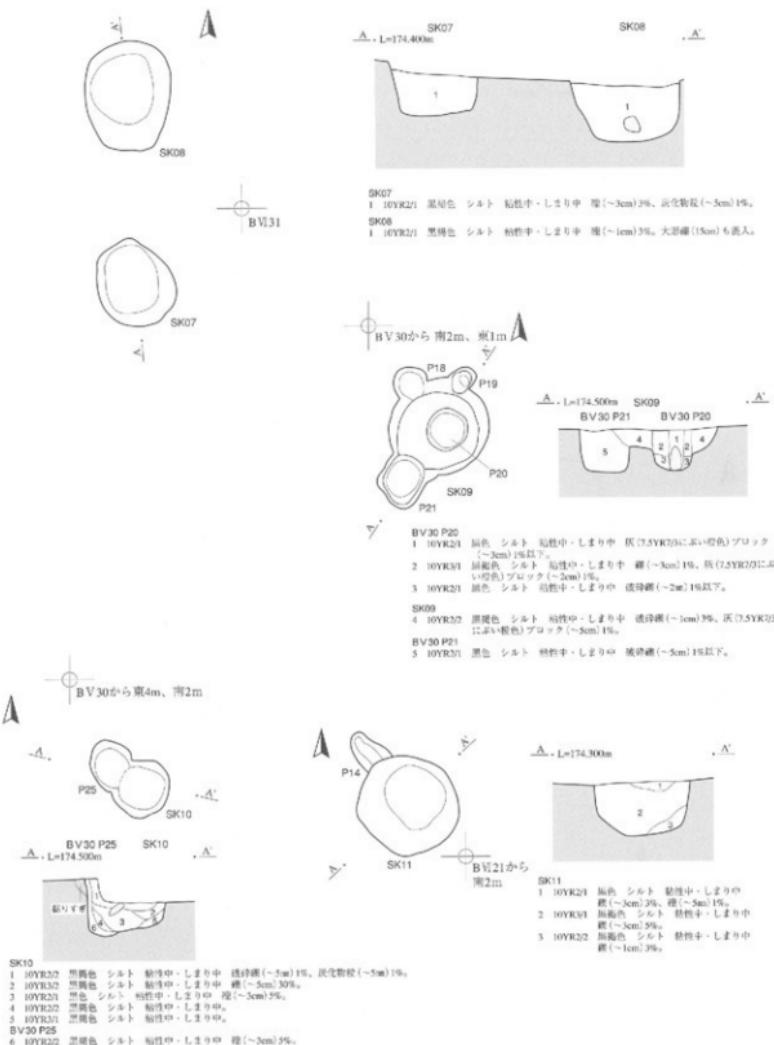
- SX01
 1 10YR1/2 黒褐色 シルト 粗粒半・しまり半 破砕殻(～3cm)5%、繊(～5cm)1%。
 2 10YR2/1 黒褐色 シルト 粗粒半・しまり半 堆積過程で度数10YR4/6褐色シルトの塊巣(厚さ1～2cm)が入る。大形礁多量。
 3 10YR2/1 黒色 シルト 粗粒半・しまり半 繊(～5cm)2%。
 4 10YR4/5 に近い黄褐色 シルト 粗粒半・しまり半 砂(～5cm)2%。
 5 10YR2/1 黒褐色 シルト 粗粒半・しまり半 繊(～5cm)10%、繊(～2cm)5%。
 6 10YR2/1 黒褐色 シルト 粗粒半・しまり半 繊(～5cm)1%。
 7 10YR3/1 黒色 シルト 粗粒半・しまり半 繊(～5cm)1%、砂混。
 8 10YR3/2 黑褐色 シルト 粗粒半・しまり半 繊(～5cm)5%。

0 (1 : 40) 2m

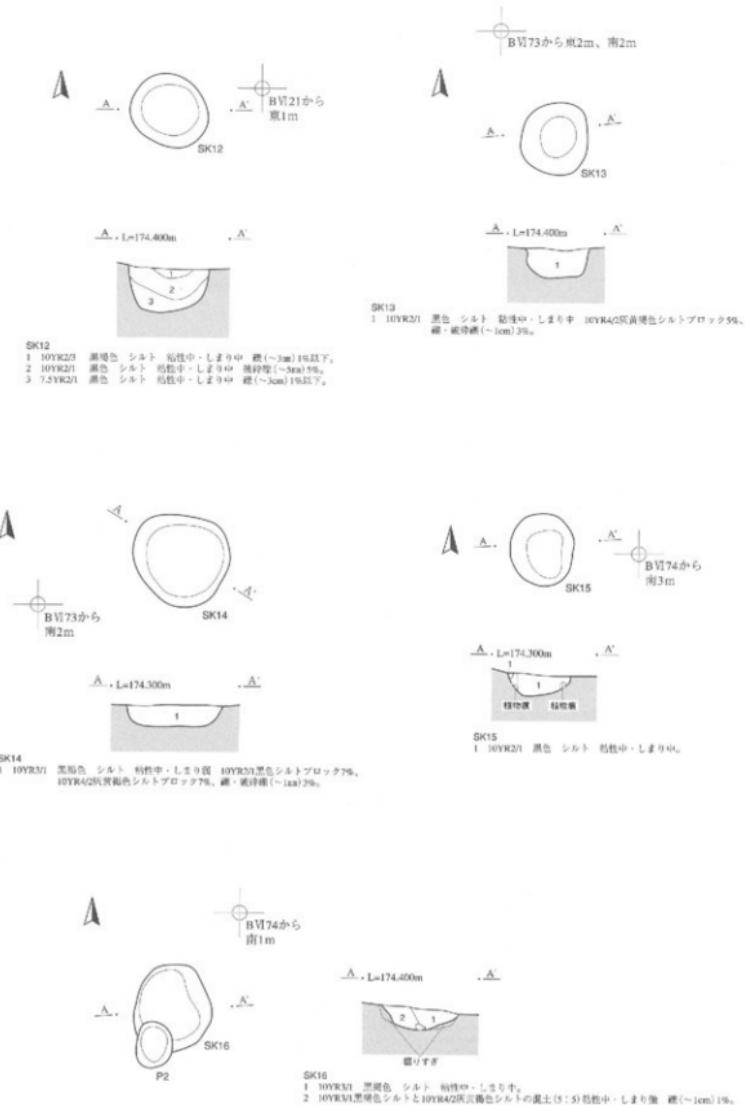
第57図 SX01



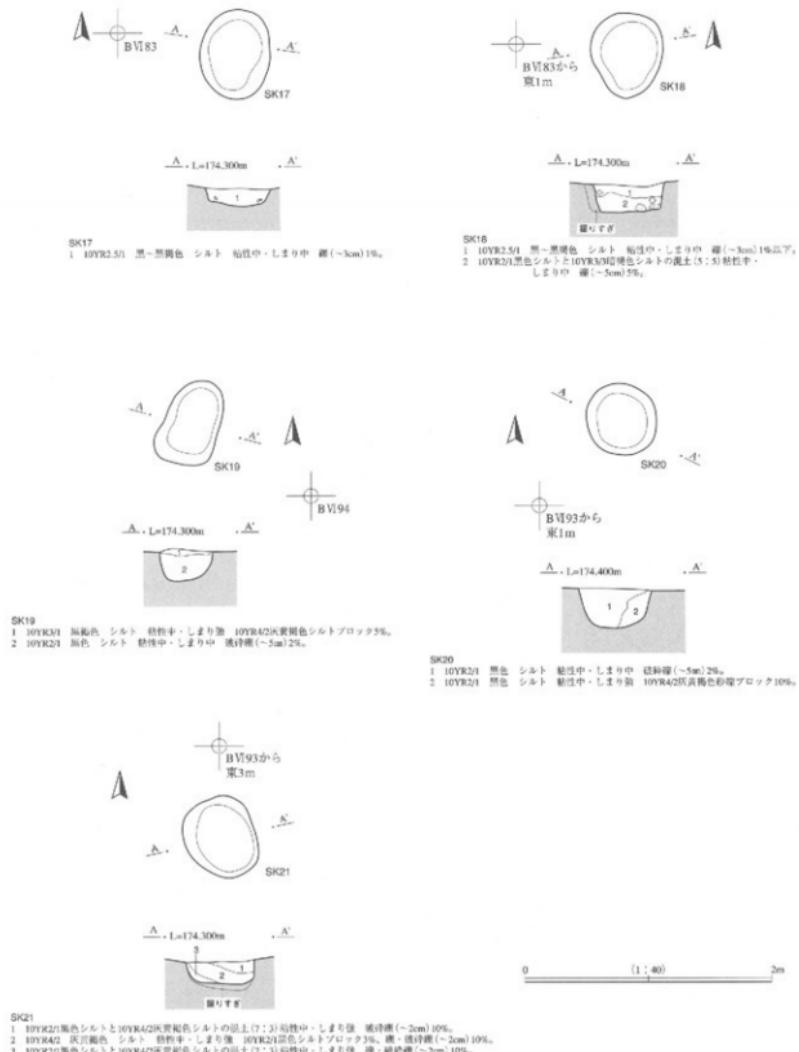
第58図 S K 01~06



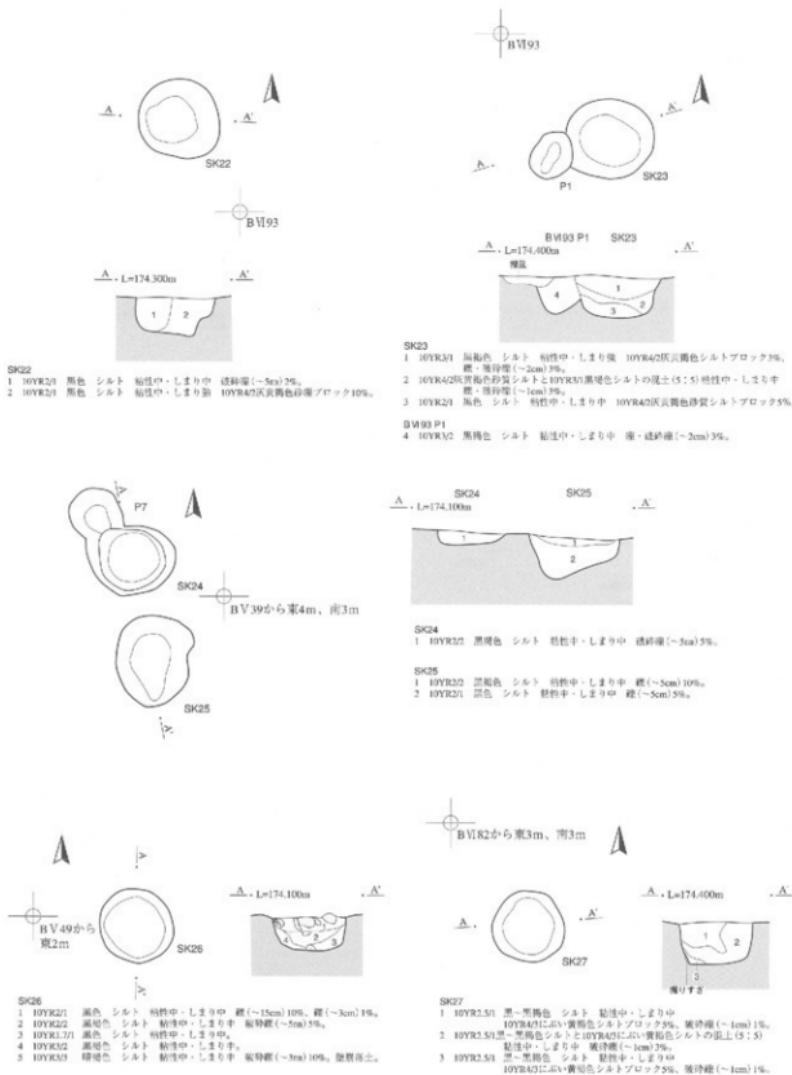
第59図 S K07~11



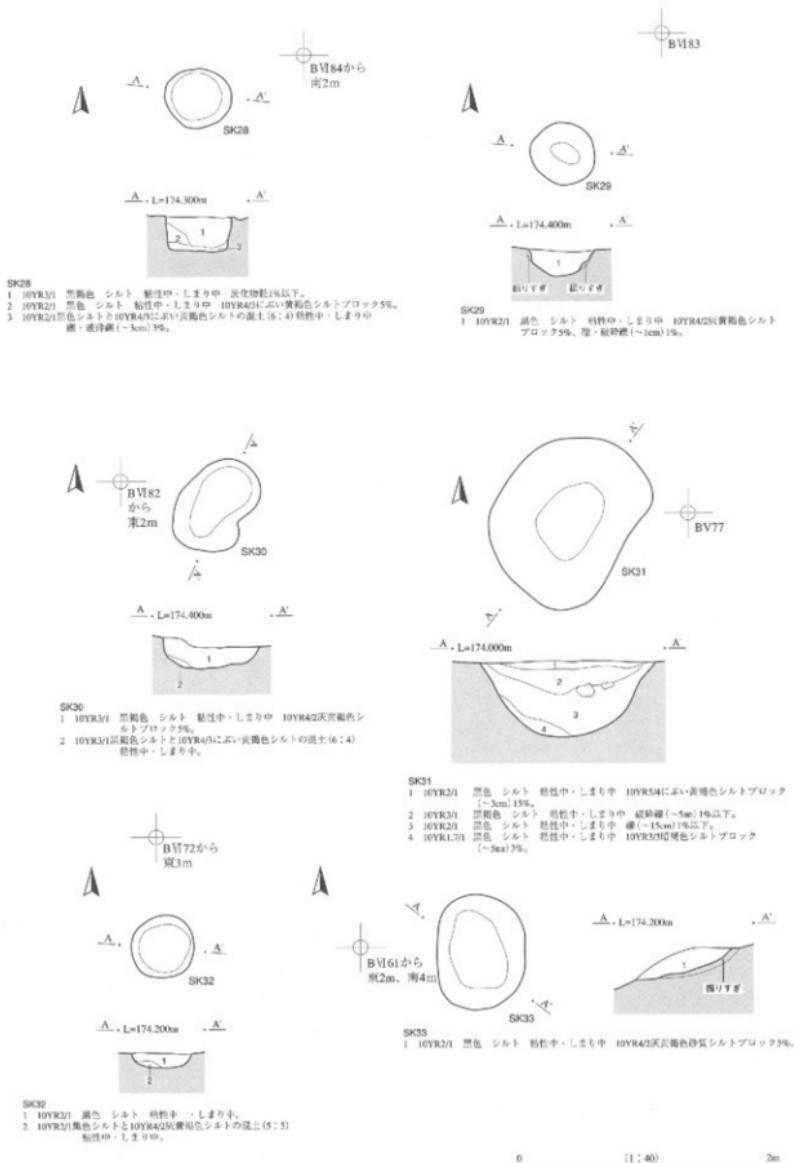
第60図 SK12~16



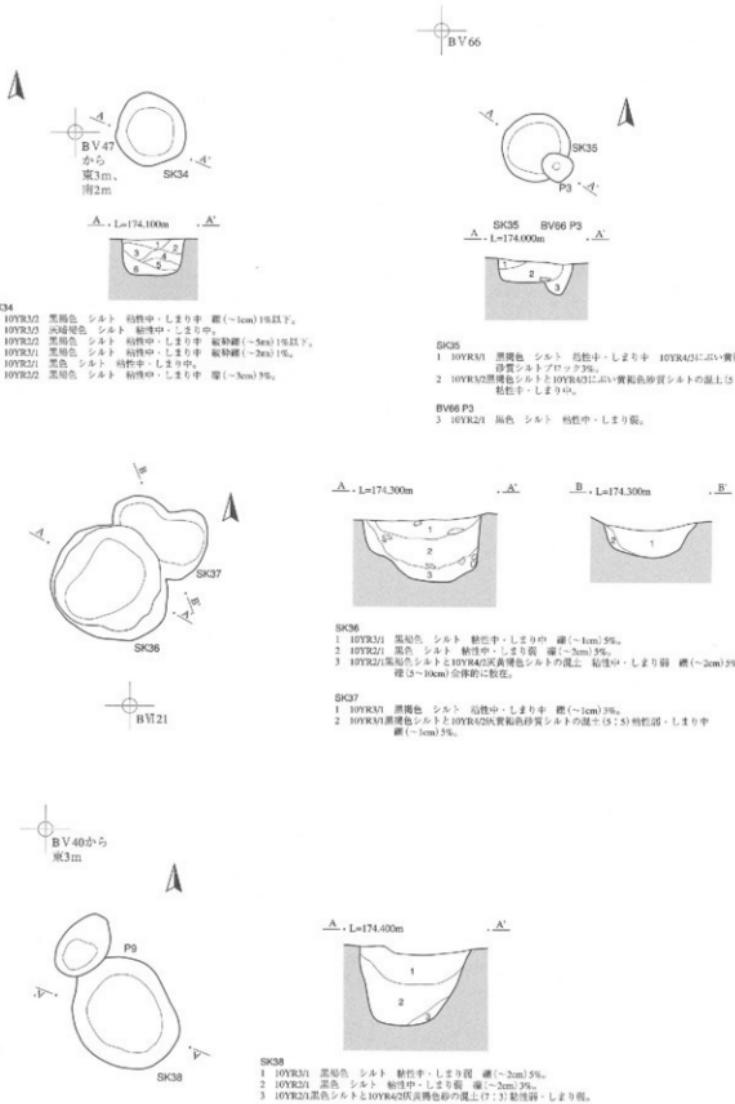
第61図 S K17~21



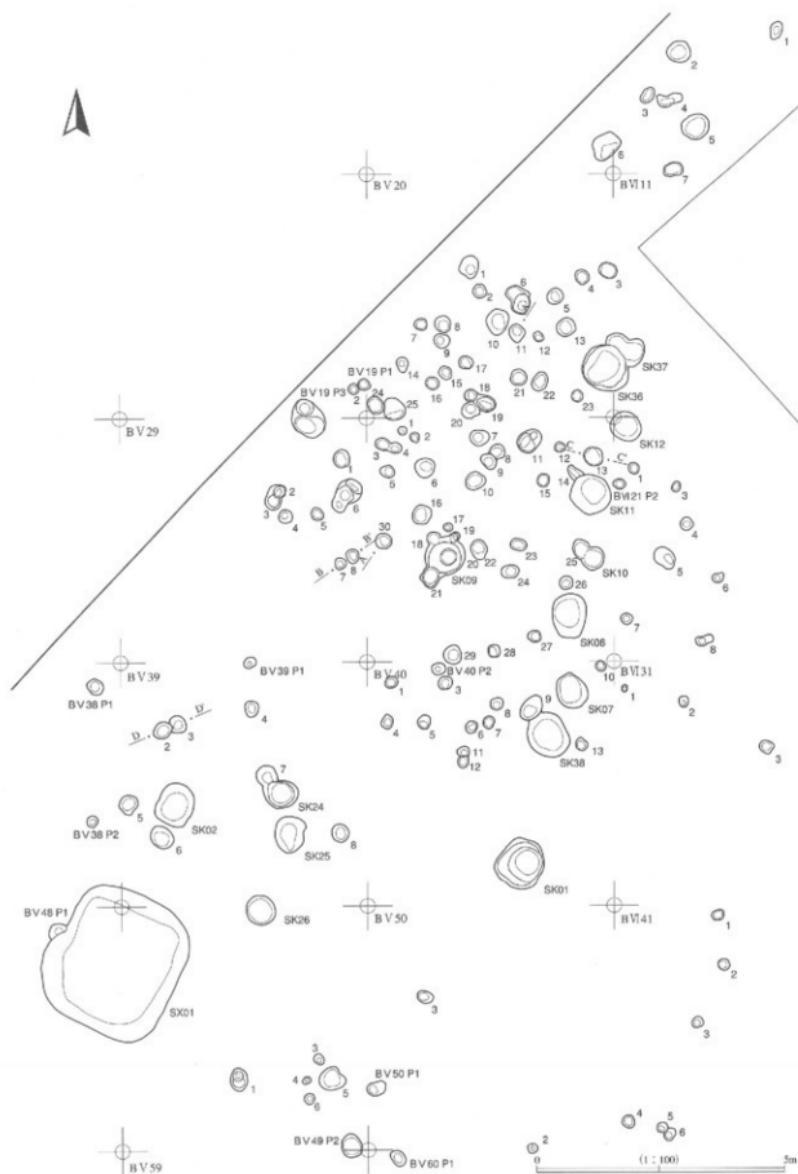
第62図 S K 22~27



第63図 S K28~33



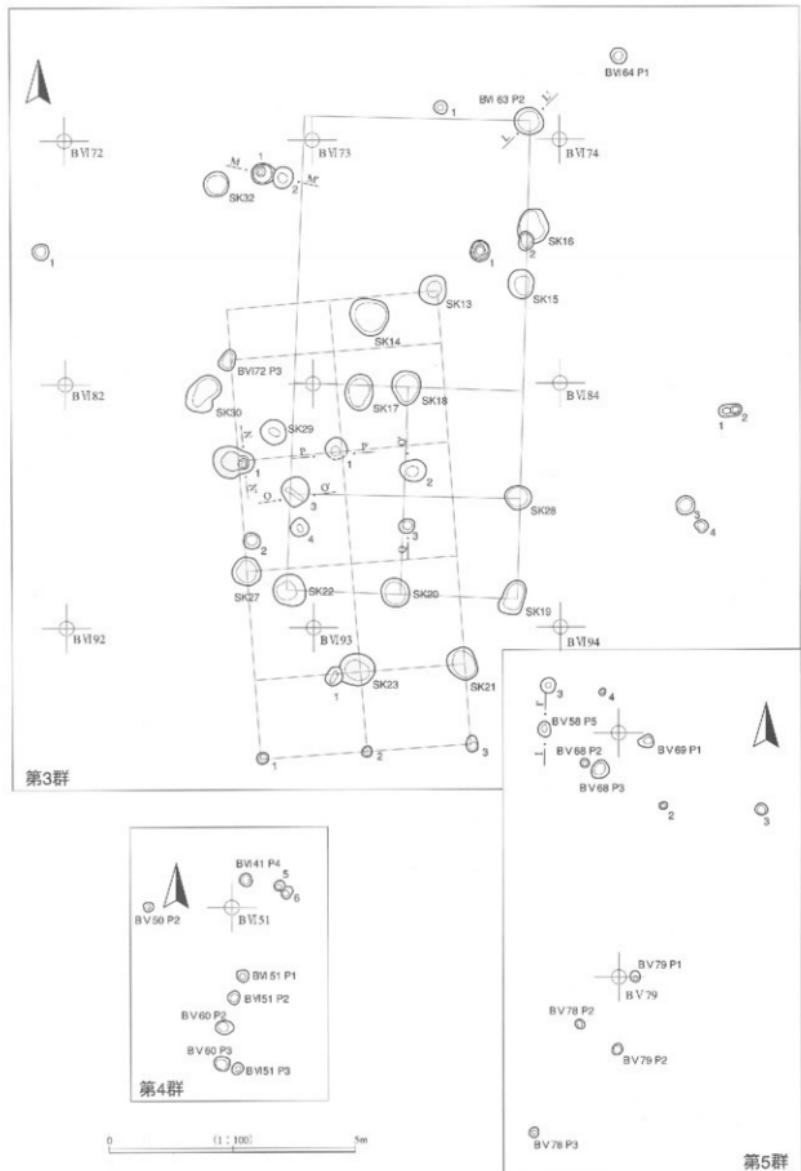
第64図 SK 34~38



第65図 柱穴状土杭 第1群

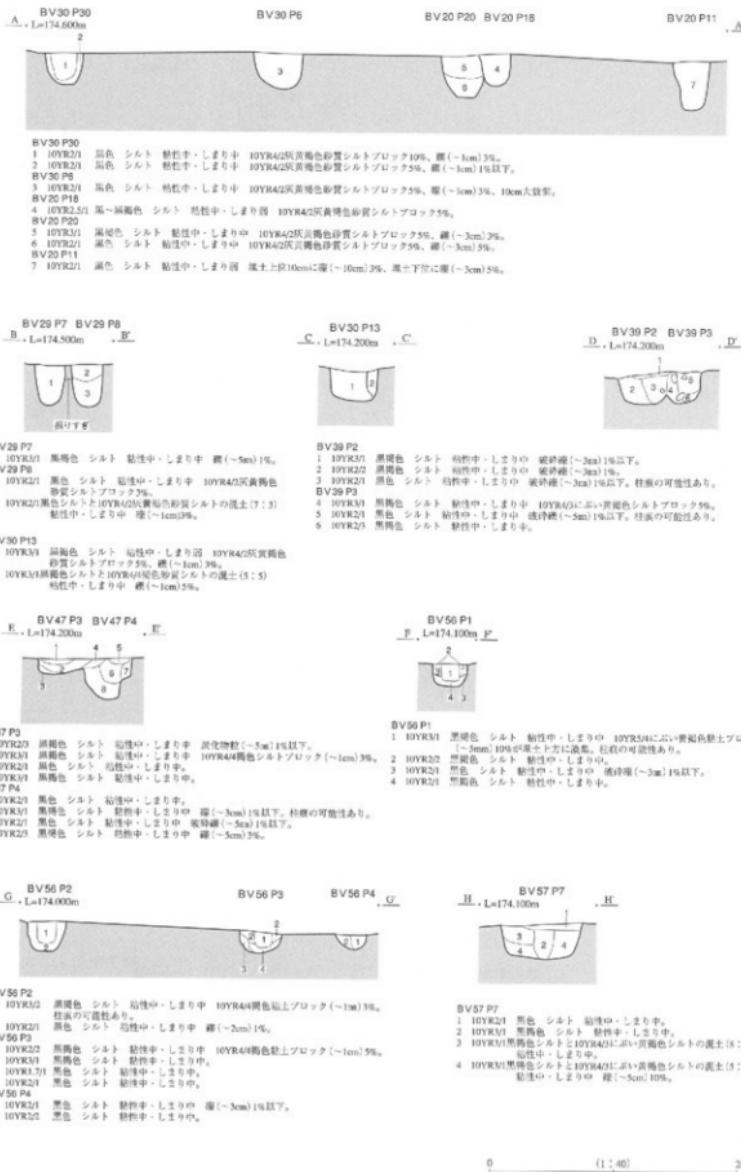


第66図 柱穴状土杭 第2群



第67図 柱穴状土杭 第3～5群

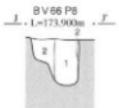
1 検出遺構



第68図 柱穴状土杭群 断面 (1)



BV58 P5
1 10YR5/2 黒色 シルト 稀性中・しまり中・粘性。
2 10YR5/3 黑褐色 シルト 稀性中・しまり中
10YR4/2灰黒褐色シルトブロック5%
3 10YR5/1 黑褐色 シルト 稀性中・しまり中
10YR4/2灰黒褐色シルトブロック10%。



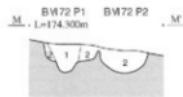
BV66 P8
1 10YR2/1 黒色 シルト 稀性中・しまり中
10YR4/2灰黒褐色シルトブロック3%
2 10YR2/1黒色シルトと10YR4/3に近い灰黒褐色シルトの混土(6:4)
稀性中・しまり中 厚さ(-2cm)1%。



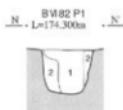
BV66 P10
1 10YR3/1灰黒褐色シルトと10YR5/0灰黒褐色の混土(6:4)粘性中・しまり中。
2 10YR3/1 灰黒色 シルト 稀性中・しまり中
3 10YR2/1 黑色 シルト 稀性中・しまり中。



BV63 P2
1 10YR2/1 黒色 シルト 稀性中・しまり中
2 10YR3/1黑褐色シルトと10YR4/2灰黒褐色シルトの混土(6:4)
稀性中・しまり中 菓子體(-5mm)1%。



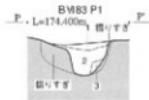
BV72 P1・P2
1 10YR2/1 黑褐色 シルト 稀性中・しまり中。
2 10YR2/1黒色シルトと10YR3/1黑褐色シルトの混土(6:4)粘性中・しまり中
3 - 砂鉄(～5mm)2%。



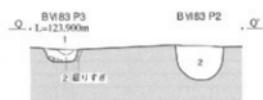
BV72 P1
1 10YR2/1 黑褐色 シルト 稀性中・しまり中
2 10YR2/1黒色シルトと10YR4/3に近い灰黒褐色シルトの混土(5:5)粘性中・しまり中。



BV82 P3
1 10YR3/1灰黒褐色シルトと10YR3/1黑褐色シルトの混土(5:5)粘性中・しまり中。
2 10YR2/1 黑色 シルト 稀性中・しまり中
3 10YR2/1 黑色 シルトと10YR4/3に近い灰黒褐色シルトの混土 稀性中・しまり中。



BV83 P1
1 10YR3/1 灰黒褐色 シルト 稀性中・しまり中
2 10YR2/1 黑色 シルト 稀性中・しまり中 10YR4/2灰黒褐色シルトブロック3%
3 10YR2/1黒色シルトと10YR4/2灰黒褐色シルトの混土(5:5)粘性中・しまり中。



BV83 P2・3
1 2.5YW6/2 灰色 鉛質シルト 稀性弱・しまり中
2 10YR2/1 黑色 シルト 稀性中・しまり中 粘粒體(～5mm)1%。



第69図 柱穴状土杭群 断面（2）

第21表 柱穴状土坑計測値と土層記註

測定点		土層記註	幅員 (m)	測定高さ (m)
B V19 P1	10YR2/1	褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-3cm) 3%.	16.6	174.17
B V19 P2	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中 種 (-3cm) 3%.	7.8	174.17
B V19 P3	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	26.0	174.87
B V20 P1	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中 2EN3/4黄褐色ブロック5%.	17.3	173.94
B V20 P2	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中 2EN3/4黄褐色ブロック5%.	12.4	174.01
B V20 P3	10YR2/1	中褐色 シルト 納性中・しまり中.	19.0	173.89
B V20 P4	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中.	24.0	173.87
B V20 P5	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中.	22.6	173.90
B V20 P6	10YR2/1	中褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1m) 5%.	27.8	173.83
B V20 P7	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中.	15.2	174.03
B V20 P8	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中.	10.6	174.06
B V20 P9	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中.	29.8	173.67
B V20 P10	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-3cm) 3%.	31.9	173.82
B V20 P11	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中.	13.3	173.99
B V20 P12	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中.	9.0	174.07
B V20 P13	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中.	28.9	173.87
B V20 P14	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中 種 (-2cm) 3%.	20.0	174.03
B V20 P15	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1m) 5%.	28.8	173.92
B V20 P16	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中.	20.3	174.02
B V20 P17	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中.	14.1	174.03
B V20 P18	実地図測量		25.9	173.95
B V20 P19	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中.	12.4	174.08
B V20 P20	実地図測量		36.4	173.83
B V20 P21	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-3cm) 3%.	23.5	173.91
B V20 P22	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-3cm) 3%.	14.1	174.05
B V20 P23	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-5cm) 3%.	13.7	174.02
B V20 P24	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-3cm) 3%.	5.2	174.15
B V20 P25	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-3cm) 3%.	24.8	173.75
D V20 P1	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中.	24.3	174.05
B V20 P2	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中.	20.5	174.03
B V20 P3	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中.	16.9	174.08
B V20 P4	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中.	5.4	174.26
B V20 P5	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中.	4.4	174.23
B V20 P6	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	14.7	174.11
B V20 P7	実地図測量		14.3	174.16
B V20 P8	実地図測量		15.2	174.13
B V30 P1	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	9.0	174.06
B V30 P2	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	13.5	174.04
B V30 P3	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	34.1	173.89
B V30 P4	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	19.6	174.08
B V30 P5	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	36.5	173.98
B V30 P6	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	25.3	173.75
B V30 P7	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	28.7	173.88
B V30 P8	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	24.6	174.17
B V30 P9	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	24.3	173.91
B V30 P10	10YR2/1	黒色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	25.1	173.98
B V30 P11	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	9.2	173.85
B V30 P12	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	17.9	173.91
B V30 P13	実地図測量		26.7	173.68
B V30 P14	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	16.9	173.98
B V30 P15	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	18.8	174.09
B V30 P16	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	36.1	173.99
B V30 P17	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	7.9	174.21
B V30 P18	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	23.5	174.18
B V30 P19	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	13.7	174.18
B V30 P20	実地図測量		13.7	174.18
B V30 P21	実地図測量		27.1	174.02
B V30 P22	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	36.0	173.93
B V30 P23	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	20.4	174.02
B V30 P24	10YR2/1	黒褐色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	17.0	174.15
B V30 P25	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	47.0	173.80
B V30 P26	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	10.0	174.14
B V30 P27	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	17.0	174.20
B V30 P28	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	16.2	174.13
B V30 P29	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	35.0	174.13
B V30 P30	実地図測量		20.6	174.14
B V38 P1	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中.	11.8	173.72
B V38 P2	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 種 (-3cm) 5%.	12.6	173.69
B V38 P3	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1m) 3%.	2.9	174.11
B V39 P2	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	26.1	173.72
B V39 P3	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中.	31.5	173.63
B V39 P4	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	21.1	173.82
B V39 P5	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 種 (-3cm) 5%.	9.1	173.81
B V39 P6	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 種 (-3cm) 5%.	30.7	173.62
B V39 P7	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 硅酸鉄 (-3cm) 3%.	8.9	173.80
B V39 P8	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 硅酸鉄 (-3cm) 3%.	13.8	173.62
B V40 P1	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中.	12.5	174.03
B V40 P2	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 1%.	20.1	173.95
B V40 P3	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 1%.	5.2	174.19
B V40 P4	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	11.5	174.09
B V40 P5	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	6.6	174.15
B V40 P6	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	9.4	174.18
B V40 P7	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 種 (-1cm) 3%.	9.2	174.17
B V40 P8	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	16.5	174.03
B V40 P9	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	19.2	173.99
B V40 P10	10YR2/1	黑色 シルト 納性中・しまり中 10YR4/2灰黃褐色砂質シルトブロック5%.	13.9	174.16

登場名	【属性記】					奥深さ (cm)	表面高さ (cm)
	性別	毛色	シルト	特徴	状態		
B V 40 P 11	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック5%	11.2	174.173
B V 40 P 12	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり少	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック5%	13.9	174.158
B V 40 P 13	10YR2/1	三色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック5%	21.9	174.009
B V 48 P 1	美鷗島雷鳴					28.4	173.563
B V 49 P 1	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 5%, 廉(～10cm) 5%	42.4	173.678
B V 49 P 2	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 7%	45.0	173.582
B V 49 P 3	10YR2/1	黒褐色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 5%	31.2	173.919
B V 49 P 4	10YR2/1	黒褐色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 3%	8.5	173.951
B V 49 P 5	10YR2/1	黒褐色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 3%	21.2	173.952
B V 49 P 6	10YR2/1	黒褐色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 3%	12.3	173.952
B V 50 P 1	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 2%	15.6	173.883
B V 50 P 2	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	8.2	173.971
B V 50 P 3	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	19.8	173.697
B V 50 P 4	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 5%, 丁度1cmほど	14.9	173.850
B V 50 P 5	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	18.5	173.893
B V 50 P 6	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 5%, 腐(～5cm) 1%	12.7	173.852
B V 50 P 7	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 5%	48.0	173.496
B V 50 P 8	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 5%	20.5	173.806
B V 50 P 9	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 5%	11.7	173.924
B V 50 P 10	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 5%, 腐(～6cm) 1%	12.2	173.684
B V 50 P 11	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 5%	36.3	173.765
B V 51 P 1	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	16.5	174.074
B V 51 P 2	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 5%	14.5	174.046
B V 51 P 3	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 5%	7.3	174.046
B V 51 P 4	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	12.1	174.052
B V 51 P 5	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	20.9	173.969
B V 51 P 6	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	8.5	174.133
B V 51 P 7	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	7.0	174.168
B V 51 P 8	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	19.9	174.010
B V 51 P 9	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	10.9	174.139
B V 51 P 10	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	12.6	174.096
B V 51 P 11	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	16.6	173.859
B V 51 P 12	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	15.6	173.860
B V 51 P 13	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	1.8	173.566
B V 51 P 14	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	22.0	173.771
B V 51 P 15	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	19.8	173.633
B V 51 P 16	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	20.5	173.845
B V 51 P 17	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	20.2	173.845
属性名	【属性記】					奥深さ (cm)	表面高さ (cm)
	性別	毛色	シルト	特徴	状態		
B V 46 P 3	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 10%, 腐(～2cm) 5%	1.9	173.901
B V 47 P 1	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～2cm) 5%	35.6	173.588
B V 47 P 2	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～2cm) 5%	28.7	173.657
B V 47 P 3	米澤周辺地					36.1	173.613
B V 47 P 4	米澤周辺地					19.6	173.798
B V 47 P 5	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黑褐色シルトブロック 10%	9.9	173.892
B V 47 P 6	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	6.2	173.953
B V 47 P 7	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 1%	16.6	173.888
B V 48 P 2	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/1 黃褐色地質シルトブロック 10%, 腐(～3cm) 5%	9.7	173.711
B V 48 P 3	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 10%	7.4	173.893
B V 48 P 4	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～20cm) 10%	17.1	173.893
B V 48 P 5	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 10%	6.4	173.855
B V 48 P 6	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	(10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 10%, 腐(～5cm) 10%)、安に人蔵成夫人。	7.7	173.872
B V 48 P 7	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 10%、安に人蔵成夫人。	13.0	173.940
B V 48 P 8	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色シルトブロック 10%, 腐(～3cm) 5%, 中央で青苔か苔を盛る。	8.3	173.876
B V 56 P 1	米澤周辺地					17.4	173.744
B V 56 P 2	米澤周辺地					5.8	173.260
B V 56 P 3	米澤周辺地					13.6	173.494
B V 56 P 4	米澤周辺地					13.1	173.689
B V 56 P 5	米澤周辺地					8.5	173.708
B V 56 P 6	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 5%	11.2	173.648
B V 56 P 7	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 5%	13.3	173.793
B V 56 P 8	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 5%	12.8	173.732
B V 56 P 9	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 5%	12.3	173.732
B V 57 P 1	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色シルトブロック 10%	4.5	173.718
B V 57 P 2	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色シルトブロック 10%	12.4	173.778
B V 57 P 3	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 5%	5.4	173.852
B V 57 P 4	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 5%	7.1	173.802
B V 57 P 5	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～5cm) 5%	13.4	173.809
B V 57 P 6	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 1%	10.2	173.841
B V 57 P 7	米澤周辺地					27.8	173.811
B V 58 P 1	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 3%	11.9	173.776
B V 58 P 2	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 3%	9.9	173.805
B V 58 P 3	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 3%	13.3	173.751
B V 58 P 4	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 10%	4.2	173.800
B V 58 P 5	米澤周辺地					5.5	173.821
B V 58 P 6	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 3%	3.2	173.880
B V 58 P 7	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 3%	10.8	173.713
B V 59 P 3	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 10%	31.2	173.509
B V 59 P 4	2WY2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 3%	7.3	173.711
B V 59 P 5	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 10%	22.6	173.526
B V 59 P 6	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 3%	26.3	173.598
B V 59 P 7	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 3%	15.3	173.699
B V 66 P 3	米澤周辺地					39.5	173.416
B V 66 P 4	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	10YR4/2 黄褐色地質シルトブロック 10%	20.8	173.581
B V 66 P 5	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 3%	1.1	173.696
B V 66 P 6	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 3%	11.7	173.549
B V 66 P 7	10YR2/1	黑色	シルト	特徴なし。しまり中	腐(～1cm) 3%	7.9	173.549

構造名	土壤試験	深さ (cm)	底面標高 (m)
B V66 P 5	実測回参照	17.5	173.604
B V66 P 9	10YR2/3 黒色 シルト 納地中・しまり中。	18.5	173.576
B V66 P 10	実測回参照	22.0	173.542
B V66 P 11	10YR2/1 黒色 シルト 納地中・しまり中。	6.2	173.211
B V66 P 12	10YR2/1 黒色 シルト 納地中・しまり中。	6.5	173.188
B V66 P 13	10YR2/1 黒色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/1 黄褐色シルトブロック10%。	15.9	173.679
B V66 P 14	10YR2/1 黒色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/1 黄褐色シルトブロック10%。	4.0	173.842
B V66 P 15	10YR2/1 黒色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/1 黄褐色シルトブロック3%。	17.3	173.683
B V66 P 16	10YR2/1 黒色 シルト 納地中・しまり中。	8.1	173.711
B V67 P 1	10YR2/1 黒色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック5%。	7.0	173.934
B V67 P 2	10YR2/1 黒色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック5%。	1.4	173.896
B V67 P 3	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。	7.0	173.893
B V67 P 4	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。	20.3	173.785
B V67 P 5	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	8.0	173.856
B V67 P 6	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/1 黄褐色シルトブロック7%。	9.5	173.890
B V67 P 7	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/1 黄褐色シルトブロック3%。	2.5	173.814
B V67 P 8	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	5.0	173.666
B V67 P 9	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	10.8	173.661
B V67 P 10	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	9.0	173.792
B V67 P 11	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	11.9	173.696
B V67 P 12	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	11.5	173.713
B V67 P 13	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	5.5	173.720
B V67 P 14	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	4.1	173.764
B V67 P 15	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	6.3	173.767
B V67 P 16	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	2.0	173.839
B V67 P 17	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	6.7	173.790
B V67 P 18	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	6.0	173.670
B V67 P 19	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。	16.8	173.823
B V67 P 20	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。	14.7	173.824
B V67 P 21	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	5.5	173.742
B V67 P 22	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。	8.5	173.832
B V67 P 23	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。	8.8	173.896
B V67 P 24	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	9.5	173.915
B V67 P 25	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/4 黄褐色シルトブロック5%。	5.2	173.966
B V67 P 26	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/4 黄褐色シルトブロック5%。	5.2	173.963

構造名	土壤試験	深さ (cm)	底面標高 (m)
B V68 P 1	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 膜 (~1cm) 5%。	14.6	173.888
B V68 P 2	実測回参照	22.8	173.811
B V68 P 3	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 膜 (~5cm) 5%。	27.3	173.837
B V68 P 4	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 膜 (~5cm) 1%.	30.9	173.886
B V68 P 5	実測回参照	29.5	173.863
B V68 P 6	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	23.3	173.804
B V68 P 7	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	28.7	173.825
B V68 P 8	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	26.0	173.935
B V68 P 9	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/1 黄褐色シルトブロック3%。	21.1	173.932
B V68 P 10	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	39.1	173.803
B V68 P 11	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	10.6	174.077
B V68 P 12	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	28.6	173.904
B V68 P 13	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/3(1) 出し 黄褐色シルトブロック3%。	12.7	174.050
B V68 P 14	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/3(1) 出し 黄褐色シルトブロック3%。	26.0	173.993
B V68 P 15	実測回参照	23.7	174.031
B V68 P 16	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	13.0	174.144
B V68 P 17	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	7.9	173.867
B V68 P 18	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 膜 (~1cm) 10%.	13.7	173.799
B V68 P 19	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 膜 (~1cm) 5%.	22.1	173.862
B V68 P 20	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 膜 (~1cm) 5%.	6.7	173.748
B V68 P 21	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	17.1	173.836
B V68 P 22	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	20.8	173.895
B V68 P 23	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	8.5	174.063
B V68 P 24	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。	17.0	173.963

構造名	土壤試験	深さ (cm)	底面標高 (m)
B V69 P 1	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック5%。	—	—
B V69 P 2	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	16.7	173.851
B V69 P 3	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。下位ほど多い。	3.6	173.844
B V69 P 4	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。下位ほど多い。	13.8	173.860
B V69 P 5	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%、D位ほど多い。	15.2	173.748

構造名	土壤試験	深さ (cm)	底面標高 (m)
B V69 P 1	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック5%。	13.8	173.799
B V69 P 2	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	10.5	173.865
B V69 P 3	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/4 黄褐色シルトブロック1%。	7.8	173.853
B V69 P 4	10YR2/2 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック (~5cm) 1%。	12.9	173.945
B V69 P 5	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	18.0	173.963

構造名	土壤試験	深さ (cm)	底面標高 (m)
B V70 P 1	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック5%。	—	—
B V70 P 2	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。	—	—
B V70 P 3	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。	—	—
B V70 P 4	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。	—	—
B V70 P 5	10YR2/1 黑色 シルト 納地中・しまり中。 10YR4/2 黄褐色シルトブロック3%。	—	—

2 出土遺物

(1) 繩文土器 (第70図、第22表、写真図版42)

遺構内から3点（1～3）、遺構外から1点（4）が出土し、調査区内から1点（5）を採集した。いずれも小片で型式を明確にする要素を欠くが、類推しえるものについては大まかな時期比定を行った。

1、2は地文のみの網部片である。3は網目状撚糸文が施されている。4は沢跡出土で磨滅が著しいが、横位の平行沈線による区画内に縄文が見える。これと大きく外傾する器形を考え合わせ、後期中葉に置いた。5は口縁部に結節回転文が施されているが、施文が不整で原体は不明である。時期は、結節回転文が盛行する前期前葉と考える。

(2) 石 器 (第70図、第23表、写真図版42)

石核を調査区内から1点（6）採集した。石材は、野里上で分類した内の頁岩2にあたる。

(3) 鉄製品・銭貨 (第71図、第24・25表、写真図版43)

鉄製品は、BV101P5から釘が1点（7）出土した。頭側の約2cmを折り曲げた角釘である。

銭貨は、遺構内から10点（8～11、15～20）、遺構外から2点（12、13）が出土し、調査区内から1点（14）を採集した。いずれも薄い、軽い等の観点から模鋳銭と考えられる。

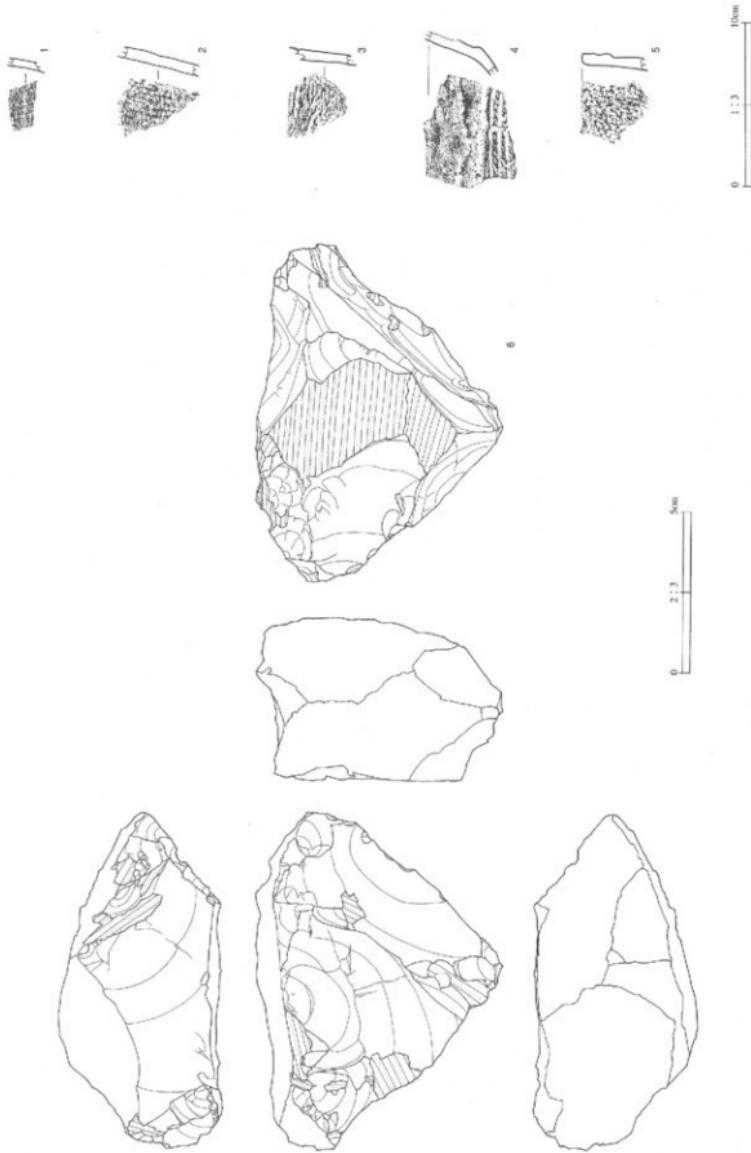
BV20P6から、11を含む7枚が一括して出土した。7枚は、ほぼ重なった状態で出土したが固着が弱く、すぐに分離してしまった。そのため、出土状態の詳細な記録は出来なかった。なお、遺存状態も不良のため、図示は11のみとし、他の6点（15～20）については写真のみの報告とした。図示した11は、初鋳年1174年の淳熙元寶である。15～19は、本澤愷輔氏の指摘する模鋳銭の特徴を有している（本澤 1998）。15は洪武通寶（初鋳年1368年）の「鑄写しビタ（鉢）銭（同）」で、銭鉢部以外に抜けがあるのは、「鉢蓋の中に溶銅が行き渡らない（同）」ために生じるという。16～19は、いわゆる無文銭である。形状、重量は「鑄写しの行程（同）」の段階により異なるという。

9、10、12～14は寛永通寶である。9、12を古寛永、13、14を新寛永と識別した。10は、鉄銭と考えられ、表面は赤褐色を呈している。鋳の進行により拓影では銭種の識別が出来なかつたが、X線撮影により寛永通寶と確認した。

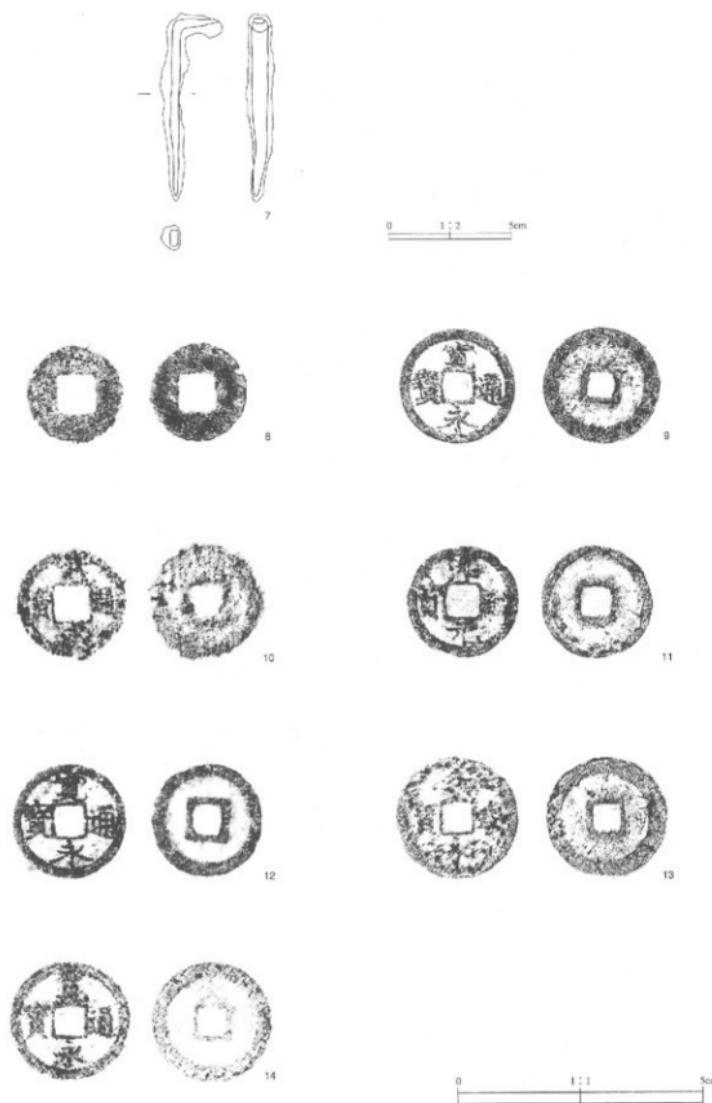
(4) 自然遺物

SX01堅穴状遺構の埋土最下位から、コムギ、ヒエの炭化種子が1点ずつ出土した。いずれも土壤サンプルのフローテーションにより検出したものである（VI章4節参照）。

（荒谷）



第70図 繩文土器、石器



第71図 鉄製品、銭貨

第22表 純文土器観察表

No.	出土	出土地点	器種	部位	文様の特徴	地紋	測量	備考	時期
1	70	42	S K18 離土	不明	無	L 形	4.64	内外面赤い 領斜か?	
2	70	42	S K20 離土 1型	不明	無	L 形	13.07		
3	70	42	B V69 P2 離土	不明	斜	細目伏巻文	底輪沿 5・只頃	11.80	
4	70	42	B V69 調査区回輪	圓錐	斜	平行伏巻文	L 形	32.90 側底裏深い	後期中期
5	70	42	表模	不明	口	筋目伏巻文	L 形	17.82 機能多量に遡入	前期前段

第23表 石器観察表

No.	出土	出土地点	器種	残存状態	位置	長さ	幅	厚さ	重量	備考
6	70	42	表模	石核	全形	貴賀 2	7.60	10.50	5.10	367.20

第24表 鉄製品観察表

No.	出土	出土地点	器種	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	備考
7	71	43	B V10 P5 離土	鉗	完形	7.3	0.5	0.7	11.43 鋸刃の内斜

第25表 銭賓観察表

No.	出土	出土地点	器種	残存状態	外径	内径	厚さ	重数	金保の種類	備考	
8	71	43	S K01 離土	無文銭	穴形	20.7	7.2	1.2	1.30	鋸	埋跡地
9	71	43	S K06 離土	東水面貫	穴形	24.1	5.4	1.3	3.42	鋸	占電火
10	71	43	S K13 1型	東水面貫	穴形	23.4	6.1	1.8	2.82	鉢	X線撮影にて鏡面確認
11	71	43	B V20 P6 離土	東水面貫	穴形	23.2	5.9	1.2	2.06	鋸	楕円鋸
12	71	43	B V29 表し中	東水面貫	穴形	23.9	5.9	1.4	3.38	鉢	古賣火
13	71	43	B V40 直輪	東水面貫	穴形	25.3	5.5	1.3	3.06	鉗	新賣火
14	71	43	表桂	東水面貫	穴形	25.2	5.8	1.3	3.67	鉗	新賣火 貨文字有りか
15	—	43	B V20 P6 離土	川式面貫	一部欠損	—	—	1.4	1.77	鉗	楕円鋸か
16	—	43	B V20 P6 離土	無文銭	穴形	21.8	7.4	0.6	1.08	鉢	楕円 鏡面鋸
17	—	43	B V20 P6 離土	無文銭	一部欠損	—	(6.6)	0.6	0.61	鉢	楕円 鏡面鋸
18	—	43	B V20 P6 離土	無文銭	穴形	16.8	9.9	0.6	0.35	鉢	楕円 鏡面鋸
19	—	43	B V20 P6 離土	無文銭	穴形	17.3	11.5	0.6	0.38	鉢	楕円 鏡面鋸
20	—	43	B V20 P6 離土	引成不能	部分欠損	—	—	0.6	0.46	鉢	15と同一鋸か

VII 自然科学的分析

1 野里上遺跡放射性炭素年代測定

株式会社 加速器分析研究所

【処理法】

- メス、ピンセットを用いて適量を採取した。この際、付着していた土をできるだけ除去した。炭化物については、内部より採取した。
- 1Nの塩酸を用いて、80°Cで数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈した。
- 0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液を用いて数時間処理した。その後、超純水で中性になるまで希釈した。
- 1Nの塩酸を用いて、80°Cで数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈した。なお、酸・アルカリ処理後の希釈の際には遠心分離法を用いた。
- 試料を80°Cで乾燥させた。
- 試料を1gの酸化銅と共に、外径9mm、長さ30cmの石英管に入れ、真空中で封じ切った。
- 6を500°C30分、850°C2時間で加熱し、試料中の炭素を二酸化炭素にした。
- 真空ライン中に冷媒を用いて、二酸化炭素を精製した。
- 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイトにした。
- 得られたグラファイトを内径1mmのアルミニウム製容器にハンドプレス機で詰め、ターゲットとした。

【測定】

測定機器は、134試料装填可能なイオン源が設置された、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。

AMS測定時には、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバッゲクラウンド試料の測定も行なう。また、測定では加速器により測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

【放射性炭素年代算出法】

- 加速器を用いて微量炭素の同位体比分析を行なう。
- 定量は¹⁴C測定の標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOxII）を用いている。
- 放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（B.P.）であり、誤差は、複数回の測定値について χ^2 検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には統計誤差を用いている。
- 暦年較正はOxCal Ver3.10を用いている。

IAA Code No.		試料種類	BP年代および炭素の同位体比	
#1112-1	試料採取場所 :	野里上遺跡 1号耕作痕跡	Libby Age (yrBP)	: 2,430 ± 40
	試料形態 :	木炭	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速度)	-22.69 ± 0.98
	試料名(番号) :	1	$\Delta^{13}\text{C}$ (‰)	-36.1 ± 3.4
	(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	pMC (%)	73.88 ± 0.34
#1112-2	試料採取場所 :	野里上遺跡 2号耕作痕跡	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	-29.7 ± 3.1
	試料形態 :	木炭	pMC (%)	74.23 ± 0.31
	試料名(番号) :	2	Age (yrBP)	2,390 ± 30
	(参考)	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し		

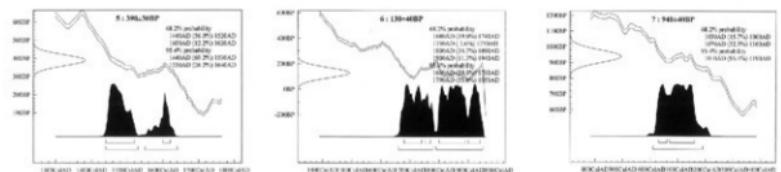
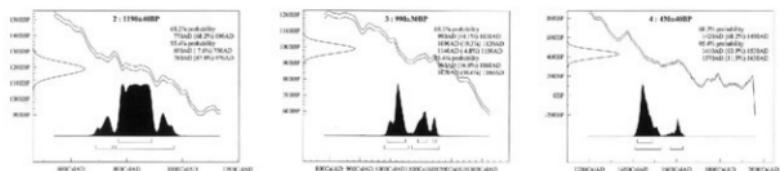
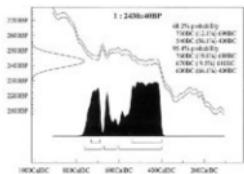
IAAA Code No.	試料採取場所 :	試料種類 :	試料番号 :	試料名:	試料採取場所 :	試料種類 :	試料番号 :	試料名:	BP年代表より炭素の当量比
IAAA-31726	試料採取場所 :	野里上遺跡	2号縄張痕跡		Libby Age (yrBP)	:	690 ±	39	
	試料形態 :	木炭	3		$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速度器)	=	-24.24 ±	0.03	
	試料名番号 :				Δ (‰)	=	-115.9 ±	3.6	
	(参考)				pMC (%)	=	88.41 ±	0.26	
					$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-114.5 ±	3.2	
					pMC (%)	=	88.55 ±	0.32	
#1112-3	(参考)				Age (yrBP)	:	982 ±	30	
IAAA-31727	試料採取場所 :	野里上遺跡	SX05		Libby Age (yrBP)	:	690 ±	39	
	試料形態 :	木炭	4		$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速度器)	=	-23.93 ±	0.03	
	試料名番号 :				Δ (‰)	=	-123.3 ±	4.2	
	(参考)				pMC (%)	=	94.77 ±	0.42	
					$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-103.3 ±	3.8	
					pMC (%)	=	94.97 ±	0.38	
					Age (yrBP)	:	410 ±	30	
IAAA-31728	試料採取場所 :	野里上遺跡	SX12		Libby Age (yrBP)	:	390 ±	39	
	試料形態 :	木炭	5		$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速度器)	=	-21.4 ±	0.05	
	試料名番号 :				Δ (‰)	=	-107.3 ±	4.0	
	(参考)				pMC (%)	=	95.25 ±	0.49	
					$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-115.1 ±	3.6	
					pMC (%)	=	95.85 ±	0.36	
					Age (yrBP)	:	340 ±	30	
#1112-5	(参考)				Libby Age (yrBP)	:	130 ±	40	
IAAA-32552	試料採取場所 :	野里上遺跡	KIV-21		$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速度器)	=	-26.47 ±	0.01	
	試料形態 :	木片	6		Δ (‰)	=	-15.8 ±	4	
	試料名番号 :				pMC (%)	=	98.42 ±	0.44	
	(参考)				$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-18.7 ±	4.0	
					pMC (%)	=	98.13 ±	0.40	
					Age (yrBP)	:	150 ±	30	
#1215	(参考)				Libby Age (yrBP)	:	940 ±	40	
IAAA-32829	試料採取場所 :	野里上遺跡	SA01 PG		$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (加速度器)	=	-29.46 ±	0.07	
	試料形態 :	木片	7		Δ (‰)	=	-11.0 ±	4	
	試料名番号 :				pMC (%)	=	88.99 ±	0.42	
	(参考)				$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	=	-17.8 ±	3.8	
					pMC (%)	=	88.19 ±	0.38	
#1248					Age (yrBP)	:	1,010 ±	40	

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】

縦軸 : Radiocarbon determination

横軸 : Calibrated date

Atmospheric data from Reimer et al (2004); OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005) radiocarbon calibration



2 野里上遺跡の耕作痕跡の花粉化石群と植物珪酸体化石群

吉川昌伸（古代の森研究会）

(1) はじめに

野里上遺跡は二ノ郡一戸町小鳥谷にあり、平鍊川左岸側の丘陵裾部に位置する。本遺跡では堅穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、耕作痕跡などが検出され、奈良時代および平安時代に居住域とされていたことが明らかになっている。このうち耕作痕跡は、十和田aテフラを掘り込む小溝が並列し畦間のような状態を呈する。ここでは耕作痕跡の用途を解明するための資料を得ることを目的に、花粉化石群と植物珪酸体化石群の調査を行った。

(2) 分析方法

耕作痕跡はTo-aテフラを含むIV層から検出された。下位のV層は暗褐色～褐色土、上位のIII層は黑色土からなる。試料は、2号耕作痕跡の小溝内と畠状の部分、4号耕作痕跡の小溝内の2地点3層準から発掘調査担当者により採取された。なお、試料採取地点と堆積物の詳細な記載は関係する項を参照されたい。

a) 花粉分析

花粉化石群の調査は3層準で行った。花粉化石の抽出は、試料約3gを秤量し体積を測定後、10% KOH（湯煎約15分）処理後に、傾斜法により粗粒な砂を取り除き、48%HF（約15分）、重液分離（比重2.15の臭化亜鉛）、アセトトリシス処理（濃硫酸1:無水酢酸9の混液で湯煎5分）の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッヂミキサーで十分攪拌後、マイクロビペットで取りグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、花粉分析層準において有機物量、泥分（シルト以下の細粒成分）、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750°Cで3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顯微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのNIH Imageで微粒炭の水平投影面の積算面積を測定した。

イネ科花粉は、彫紋の位相差像のパターンに基づきイネ属型とそれ以外（野生型）に識別した。イネ属型彫紋には、イネ、およびマコモカモジクサなどの一部の花粉粒が含まれるため、イネ属以外の花粉が混じっている可能性はある。

b) 植物珪酸体分析

分析は花粉と同じ試料を用いた。植物珪酸体の抽出は、試料約2gをトルビーカー（300ml）にとり、過酸化水素水、6N塩酸、超音波処理の順に処理し、沈底法により10μm以下の粒子を除去した。傾斜法により粗粒な粒子を除いた残渣を遠心管に移し、十分攪拌後マイクロビペットで取りカバーガラスに展開して乾燥させ、マウントメディアで封入してプレパラートを作製した。

光学顕微鏡下400倍でプレパラート全面を走査し、主にイネ科機動細胞起源とイネ科短細胞起源珪酸体の同定・計数を行った。植物珪酸体の分類は近藤・佐瀬（1986）に基づき、タケ亜科植物機動細胞珪酸体は杉山・藤原（1986）、タケ亜科植物短細胞珪酸体は近藤・大滝（1992）による。

(3) 結果

a) 花粉分析

耕作痕跡の3層準の堆積物の特性は、砂分が43～48%、泥分が42～43%、有機物量が10～13%と類

似し、いずれも砂を比較的多く含む無機物に富む堆積物からなる(表1)。また、微粒炭量は $250 \sim 430 \text{ mm}^2/\text{cm}^3$ と低い値ではあるが、砂分が多いことからすると量的には多いほうかもしれない。

出現した分類群のリストとその個数を表2に示す。表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。図1に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示し、これら標本は古代の森研究室に保管してある。

花粉化石は3試料とも極めて少なく、さらに花粉外膜の保存状態も悪い。出現した分類群は、樹木ではマツ属、スギ、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、コナラ亜属、トチノキ属のみである(表2)。このうちスギやマツ属はNo.2で幾分多いが、相対的に花粉の保存が良いこと、他の2試料で検出されていないことは、後世からの混入花粉の可能性が高い。草本類ではイネ科、キンポウゲ科、セリ科、ヨモギ属、他のキク科、およびシダ植物胞子が出現した。ヨモギ属やシダ植物胞子が多いのは、こうした分類群が分解に対し相対的に強いためとみられる。栽培植物に関する分類群としては、No.2からイネ属型花粉が僅かに検出される。

b) 植物珪酸体分析

耕作痕跡から産出した分類群のリストとその個数を表3に、植物珪酸体分布図を図2に示す。植物珪酸体の組成は2号耕作痕跡と4号耕作痕跡で異なる。すなわち、2号耕作痕跡では機動細胞起源のクマザサ属が45590ないし12420個/gと多く検出され、短細胞起源のキビ型が1740ないし4520個/g検出されるに対し、4号耕作痕跡ではクマザサ属が9370個/gと少なくなり短細胞起源のヨシ属が6330個/g検出され、キビ型も6840個/gと相対的

表1 耕作痕跡の花粉分析試料の堆積物特性

No.	造形	堆積物の特徴	堆積物の性質(重量%)	
			砂	泥炭 (有機物量)
1	2号耕作痕跡(小溝内)	墨褐色～中程度質シルト	43.4	45.4 15.2
2	2号耕作痕跡(深)	墨褐色～中程度質シルト	48.1	41.6 10.3
3	4号耕作痕跡(小溝内)	墨褐色～中程度質シルト	45.2	42.3 12.5

表2 2・4号耕作痕跡の花粉分析結果一覧表

科名	学名	2号(小溝内) 2号(深) 4号(小溝)		
		No.1	No.2	No.3
莎草科	Poaceae (Unknown)	-	3	-
マツ属(不明)	Pinus (Unknown)	-	3	-
スギ	Cryptomeria japonica (L.f.) D.Don	-	11	-
クマシデ属-アサダ属	Carpinus - Ostrya	-	1	-
ハンノキ属	Alnus	1	-	-
コナラ属コナラ属	Quercus subgen. Lepidobalanus	-	3	-
トチノキ属	Aesculus	1	-	-
草本	-	-	-	-
イネ科(イネ型)	Gramineae (Oryza type)	-	1	-
イネ科(野生型)	Gramineae (Wild type)	1	4	2
カンボウゲ科	Ranunculaceae	-	1	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	1
ヨモギ属	Arenaria	2	4	10
他のカキ科	other Tubuliflorae	-	-	1
シダ植物	-	-	-	-
ヒカゲンコクサ属	Lycopodiaceae	-	1	-
他のシダ植物	other Pteridophyta	9	2	2
樹木花粉数	Arboreal pollen	2	21	6
草本花粉数	Nonarboreal pollen	3	10	14
シダ植物孢子数	Fern spores	9	3	2
花粉・孢子数	Pollen and Spores	14	34	16
不明花粉	Unknown pollen	1	2	2
樹木花粉量(粒数/cm ³)	25	73	6	
樹木花粉量(g/m ²)	30	654	260	

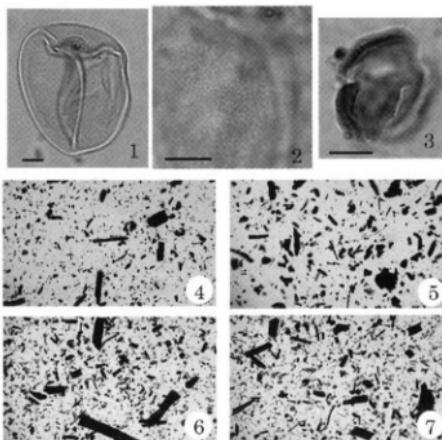


図1 耕作痕跡から産出した花粉化石とプレバートの状況
1-2.イネ属型, No.2, AFR.MY1601. 3.ヨモギ属, No.2, AFR.MY1601. 4-7.花粉プレバートの状況, No.1, No.2, 6-7. No.3. スケール=10 μm (状況=100 μm)

に多い。また、4号耕作痕跡からは機動細胞起源のイネ属とヨシ属が検出される。一方で、4号耕作痕跡No.3からは淡水性珪藻の*Cymbella*、*Diploneis*、*Eunotia*、*Pinnularia*の破片や陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*の完形が検出される。

(4) 考 察

栽培植物としては、イネ属の機動細胞珪酸体がNo.3で250個/g検出され、イネ属型花粉がNo.2で僅かに出現している。イネの機動細胞珪酸体が5000個/g以上の密度で検出された場合にはそこで稻作が行われていた可能性が高く、密度が3000個/g程度でも水田跡が検出される場合がある（杉山 2000）。ここでは250個/gと少なく4号耕作痕跡のみであるため異地性の珪酸体である可能性が高い。また、ヒエやアワが属する形態のキビ型短細胞珪酸体が検出されているが、属ないし種を特定できないことから栽培植物に由来するかどうかは不明であり、さらに機動細胞珪酸体のキビ族もヒエ属やキビ属の典型的形態（杉山ほか 1988）ではない。こうしたことから、耕作痕跡の栽培植物を特定するには至らない。

2号と4号耕作痕跡では堆積環境は異なり、4号耕作痕跡は堆積後に湿った環境にあったが2号耕作痕跡は比較的乾いた環境にあったと推定される。つまり、4号耕作痕跡からはヨシ属の機動細胞起源と短細胞起源の珪酸体が検出されるが2号耕作痕跡では稀である。また、いずれの試料においても樹木花粉は少なく花粉の保存状態も悪い。花粉の外膜は水域や湿地などの酸素の少ない還元環境では残りやすいが、風化土壤のような酸化条件では分解されるため、堆積後に乾燥化したと考えられる。また、4号耕作痕跡からは陸生珪藻の完形が検出されることから、4号耕作痕跡は堆積後に湿った環境にあり周辺にはヨシ属が生育していたと推定される。一方で、2号耕作痕跡ではタケ亜科機動細胞珪酸体が多く検出されているが、タケ亜科短細胞珪酸体の量は著しく少ない。タケ亜科植物の植物珪酸体の形態別組成は、機動細胞起源のファン型と短細胞起源のタケ型が最も多く（近藤・大滝 1992）、耕作痕跡の組成とは著しく異なる。堆積物には粗～中粒砂を含む無機物に富むため、クマザサ属機動細胞珪酸体は堆積物を構成する他の粒子と共に挙動して再堆積したことが示唆され、クマザサ属は後背地に生育していた可能性が高い。

表3 2・4号耕作痕跡より産出した植物珪酸体分析結果一覧表
(単位は1,000個／g)

分類群	2号(小溝内)	2号(第2)	4号(小溝内)
	No.1	No.2	No.3
イネ科機動細胞珪酸体	-	-	0.25
ヨシ属	-	-	0.25
キビ族	0.29	-	-
タケ型	-	-	1.27
タケ亜科クマザサ属	45.59	11.86	9.37
他のタケ属	0.58	0.56	0.25
不明	0.29	0.56	1.27
タスバ科短細胞珪酸体	-	-	-
ヨシ属	0.58	-	6.33
ウシノクサ属スキ属型	1.13	-	2.03
タケ亜科クマザサ属(ウシノクサ属)	0.58	-	1.27
ホビ属	1.74	4.52	6.84
ヒゲシバ属	0.58	-	1.27
タケ中野トサ類型	1.05	1.13	1.27
タケ亜科タケ類型	0.87	0.56	0.76

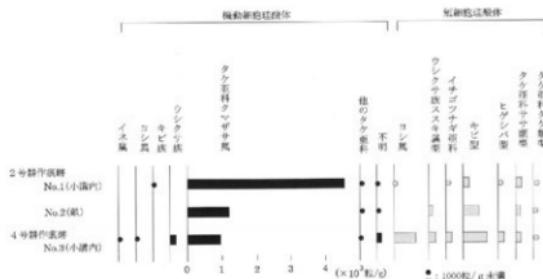


図2 耕作痕跡の植物珪酸体分布図

引用文献

- 近藤錬三・大流美代子 1992 「タケ亜科植物葉身の短細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第36号 23-43.
 近藤錬三・佐瀬 隆 1986 「植物珪酸体、その特性と応用」『第四紀研究』25 31-63.
 杉山真二 2000 「植物珪酸体（プランツ・オパール）」『考古学と植物学』（辻誠一郎編）189-213 同成社.
 杉山真二・松田隆二・藤原宏志 1988 「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用 - 古代農耕追究のための基礎資料として - 」『考古学と自然科学』20 81-92.
 杉山真二・藤原宏志 1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として - 」『考古学と自然科学』19 69-84.

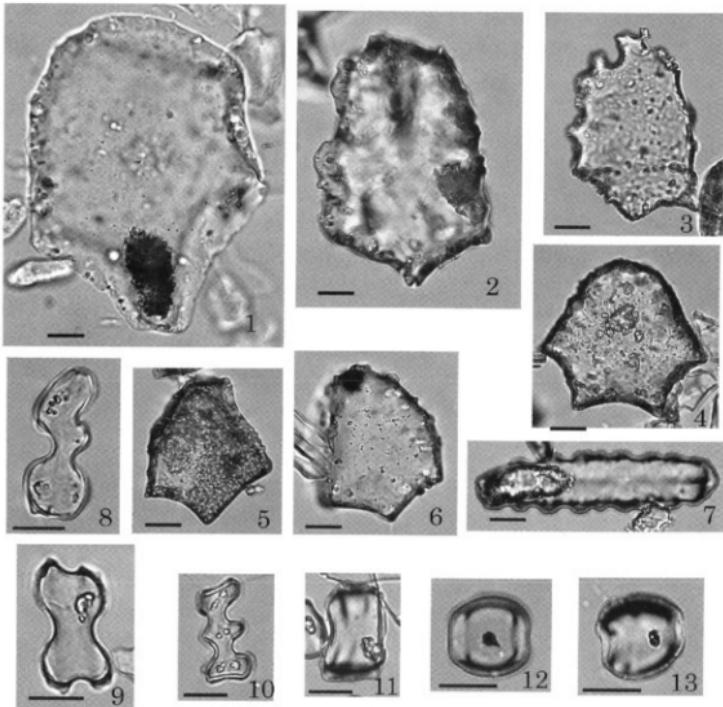


図3 野里上遺跡の耕作痕跡から産出した植物珪酸体

- 1.ヨシ属機動細胞, No.3.
 - 2.クマザサ属機動細胞, No.1.
 - 3.クマザサ属機動細胞, No.1.
 - 4.タケ亜科機動細胞, No.1.
 - 5.クマザサ属機動細胞, No.3.
 - 6.クマザサ属機動細胞, No.1.
 - 7.イチゴソウギ亞科短細胞（ウシノケグサ型）, No.1.
 - 8.キビ型短細胞, No.3.
 - 9.キビ型短細胞, No.3.
 - 10.ススキ属型短細胞, No.2.
 - 11.タケ亜科類型短細胞, No.1.
 - 12.ヨシ属短細胞, No.3.
 - 13.ヨシ属短細胞, No.3.
- スケール=10 μ m

3 野里上遺跡低湿地試掘トレンチ粘土層の植物珪酸体分析

佐瀬 隆（北方ファイトリス研究室）

(1) はじめに

本植物珪酸体分析は野里上遺跡のトレンチ壁でTo-aテフラに覆われて検出された柱状高まりが水田遺構に關わるか否かを検討する目的で実施したものである。併せてTo-aテフラ期前後の植物相などの環境についても得られた植物珪酸体群集から考察した。

(2) 試 料

低湿地試掘トレンチIIの南壁二箇所に試料採取断面を設定した。一箇所は柱状高まりが検出されたトレンチ中央部（トレンチII地点と呼ぶ）、もう一箇所はトレンチの東端部（トレンチII東端地点と呼ぶ）である。いずれの地点においても地表から100cmを超える厚さで粘土層が発達し、当粘土層の下底から約20cmに灰白色テフラ（To-aテフラ）が約5cmの層厚で認められる。粘土層の下位には層厚30cm超の砂層が発達する。試料としてTo-aテフラを基準として当テフラ上下の粘土層を約5cm間隔で採取した。なお、トレンチII東端地点では砂層上部に粘土層（厚さ5cm超）が挟まるのが認められたのでこの粘土層についても採取した。採取した試料のうちトレンチII地点については現表土（no.21）、粘土層中位層（no.9）、To-aテフラ直上粘土層（no.5）、To-aテフラ直下粘土層（no.4、no.3）、トレンチII東端地点についてはTo-aテフラ直上粘土層（no.8）、To-a直下粘土層（no.6、no.5）、砂層上部介在粘土層（no.1）をそれぞれ分析対象試料とした（図1、2）。

(3) 方 法

植物珪酸体分析の方法は近藤（2000）、佐瀬（2003）をもとに以下の手順で実施した。（1）各試料を乾上当たり1~2gを秤量。（2）過酸化水素法で有機物の分解。（3）超音波処理による土塊の破碎。（4）ジチオナイト法による脱鉄処理。（5）篩と沈底法により粒径10-100 μm 両分の分離。（6）分離した試料を50mlメスフラスコに移しメスマップ後音波処理後冷却。（7）十分懸濁させ、直ちにマイクロビペットで10 μl 採取してスライドガラスに展開、乾燥。（8）グローブ油で封入し鏡下の全珪酸体を同定する。植物珪酸体密度（粒数/乾土g）は、（7）（8）の操作を3回繰り返し行い得られた同定個数の平均から次式により算出。植物珪酸体密度 = 硅酸体の同定個数 × 5000 ÷ 分析した乾土重量。（9）同定処理後の試料は乾燥後秤量保管。なお、乾燥後の試料の一部をカナダバルサムで封じプレベラートを作製、全視野精査してイネ属タイプ珪酸体の有無を点検した。

(4) 結 果

1) 検出された植物珪酸体

本分析で検出された主要な植物珪酸体を以下に記す。

a. イネ科機動細胞起源（ファン型）

(1) I a 型（タケアキ科起源ササ属タイプ：図3の5・6）…側面長は端面高より明らかに短い。端面観では直線的あるいは上辺に従い湾曲する明瞭な底辺を有し肉厚チューブの横断面の一部を切り取った特徴的形状を示す群。

(2) II型（非タケアキ科起源）

・スキ属タイプ（図3の2）…端面観の底辺部は膨らみ上辺の一部は軽微に落ち込んで側辺は緩く内

側へ湾曲する形状を示す群。

- ・ヨシ属タイプ（図3の1）…端面観の上辺はU字形にアーチを描きヘルメット状の形状を示す群。
- ・イネ属タイプ（図3の3・4）…端面観の上辺はなめらかな弧を描き端部で鈎状に突出、上面の亀甲状紋が特徴的である。

b. イネ科短細胞起源

- (1) タケ型（タケ亜科起源）…タケ亜科を特徴づける鞍状珪酸体。
- ・I（ササ属タイプ：図3の11・12）…端部が著しく突出して内側へ傾斜し端部に収束する上面の皺で特徴づけられる鞍状珪酸体内の一群。

- ・II（メダケ属タイプ：図3の13）…端部は突出するが内側へ傾斜しない。上面端部の皺は認められる。
- (2) ヒゲシバ型（図3の14・15）…ズズメガヤ亜科、ダンチチク亜科のヨシ属を特徴づける鞍状珪酸体。タケ亜科にも見られる上面端部の皺のない鞍状珪酸体の一類。本分析で検出されたものは大部分がヨシ属タイプ。

- (3) キビ（亜科）型…キビ亜科を特徴づける亜鉛状珪酸体。

- ・フリル付き（図3の16・17）…亜鉛状本体を取り囲むフリルを有する。ヒエ属などに特徴的に見られる。

- ・その他（図3の18）…「フリル付き」以外の亜鉛状珪酸体を包括。

- (4) ウシノケグサ・イチゴツナギ（亜科）型…ウシノケグサ亜科を特徴づけるポート状珪酸体。一般に上面（より広い面）側縁に波状縁有する。

- ・ダブルライン（図3の20）…上面下面の何れも波状の側縁を有するポート状珪酸体の一類。

- ・その他（図3の19・21）…「ダブルライン」以外のポート状珪酸体群。

c. イネ科トゲ細胞起源（ポイント型）

- (1) 長形・典型（図3の7）…石錐状を呈する群

(2) 短形

- ・オカリナ状（図3の8・9）…タケ亜科を特徴づけるオカリナ状を呈する群。

- ・その他（図3の10）…石錐状、オカリナ状以外を包括。

d. 棒状型

- (1) 平滑…直線的側縁を有する群。

- (2) 鋸歯…鋸歯状縁を有する群。

- ・ムギ類穀タイプ（図3の23）…鋸歯は鋭く尖り鋸歯間は弧状に落ち込む。

- ・導管細胞起源（棒ヤスリ状：図3の22）…導管細胞に由来する棒ヤスリ状を呈する珪酸体群。

- f. 葉肉起源（図3の25）…イネ科葉肉細胞（組織）に由来する椎骨状、プロープ状、くし状、海藻状などを呈する群。

- g. スゲ種皮起源…スゲ種皮細胞に由来するホック状の珪酸体。

- h. シダ起源…刃こはれ状の側縁、気泡状空隙を有する群。

- i. 広葉樹起源（図3の27）…ブレイド状、多面体状の珪酸体。

- j. 顆粒状表面の多角形板状（図3の28）…スゲ類起源の可能性が考えられる。

- i. シルクハット状（図3の24）…起源不明。ある種の突起細胞に由来する可能性がある。

2) 各試料の珪酸体群集

各試料の珪酸体群集組成を表1に示した。また、主な珪酸体について組成図（図4）にまとめた。なお、表1に示した推定密度上限値は3回の密度測定で珪酸体が1個検出された時に推定される値で

ある。したがって、密度測定プレパラートで検出されない珪酸体が精査プレパラートで認められる場合、その密度は推定密度上限値未満と判断される。

a. トレンチII

・no.21試料（現表土）：OP密度は $4.2E+5$ 粒数/g（以下単位省略）である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが $1.5E+4$ 、イネ属タイプが $7.7E+3$ 、非タケ亞科起源不定が $9.4E+3$ 検出される。短細胞起源ではタケ型I（ササ属タイプ）が $3.7E+3$ 、同II（メダケ属タイプ）が $2.8E+3$ 、ヒゲシバ型、キビ（亜科）型その他の $2.0E+3$ 、ウシノケグサ（亜科）型ダブルラインが $8.5E+2$ 、同その他の $1.1E+4$ 検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が $1.2E+4$ 、短形オカリナ状が $2.0E+3$ 、同その他の $5.7E+3$ 、棒状型では平滑縁が $2.8E+4$ 、鋸歯縁ムギ類タイプが $2.8E+3$ 、同その他の $2.8E+4$ 、導管起源が $2.0E+3$ 検出される。葉肉細胞起源、スゲ種皮細胞起源、シダ起源、シルクハット状、多角形板状（顆粒状表面）がいずれも $8.5E+2$ 検出される。

・no.9試料：OP密度は $6.9E+5$ である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが $2.8E+4$ 、非タケ亞科起源不定が $1.9E+4$ 検出される。短細胞起源ではタケ型I（ササ属タイプ）が $8.0E+3$ 、同II（メダケ属タイプ）が $3.3E+3$ 、ヒゲシバ型が $6.1E+3$ 、キビ（亜科）型フリル付きが $1.4E+3$ 、同その他の $6.1E+3$ 、ウシノケグサ（亜科）型ダブルラインが $6.1E+3$ 、同その他の $1.1E+4$ 検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が $1.7E+4$ 、短形オカリナ状が $1.4E+3$ 、同その他の $8.0E+3$ 、棒状型では平滑縁が $4.1E+4$ 、鋸歯縁その他の $5.2E+4$ 、導管起源が $4.7E+3$ 検出される。葉肉細胞起源が $8.0E+3$ 、スゲ種皮細胞起源が $3.3E+3$ 、シルクハット状が $4.7E+5$ 検出される。精査プレパラートでは機動細胞イネ属タイプが検出されるが、その密度は $1.4E+3$ 未満と推定される。

・no.5試料（To-aテフラ直上）：OP密度は $1.2E+6$ である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが $3.1E+4$ 、イネ属タイプが $2.4E+3$ 、スキ属タイプが $2.4E+3$ 、ヨシ属タイプが $1.0E+3$ 、非タケ亞科起源不定が $2.4E+4$ 検出される。短細胞起源ではタケ型I（ササ属タイプ）が $5.9E+3$ 、同II（メダケ属タイプ）が $3.5E+3$ 、同不定 $4.5E+3$ 、ヒゲシバ型が $4.6E+4$ 、キビ（亜科）型フリル付きが $8.0E+3$ 、同その他の $2.0E+4$ 、ウシノケグサ（亜科）型その他の $5.0E+4$ 検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が $4.3E+4$ 、短形オカリナ状が $1.0E+3$ 、同その他の $1.2E+4$ 、棒状型では平滑縁が $6.7E+4$ 、鋸歯縁その他の $7.0E+4$ 、同ムギ類タイプが $3.5E+3$ 、導管起源が $1.2E+4$ 検出される。葉肉細胞起源が $1.3E+4$ 、スゲ種皮細胞起源、シダ起源がともに $1.0E+3$ 、シルクハット状が $4.5E+5$ 検出される。なお、精査プレパラートではイネ属に特徴的な葉部表皮組織片（図3の26）が認められた。

・no.4試料（To-aテフラ直下）：OP密度は $7.8E+5$ である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが $9.7E+4$ 、ヨシ属タイプが $9.7E+2$ 、非タケ亞科起源不定が $1.5E+4$ 検出される。短細胞起源ではタケ型I（ササ属タイプ）が $1.2E+4$ 、同II（メダケ属タイプ）が $3.2E+3$ 、同不定が $8.8E+3$ 、ヒゲシバ型が $1.7E+4$ 、キビ（亜科）型その他の $5.5E+3$ 、ウシノケグサ（亜科）型その他の $8.8E+3$ 検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が $6.5E+3$ 、短形オカリナ状が $1.3E+4$ 、同その他の $6.5E+3$ 、棒状型では平滑縁が $3.7E+4$ 、鋸歯縁その他の $3.5E+4$ 、導管起源が $9.7E+2$ 検出される。葉肉細胞起源が $2.3E+3$ 、シダ起源が $9.7E+2$ 、ブレイド状が $7.5E+3$ 、シルクハット状が $9.7E+4$ 、多角形板状（顆粒状表面）が $3.2E+3$ 検出される。イネ属タイプ珪酸体は精査プレパラートでは検出されたが、その密度は $9.7E+2$ 未満と推定される。

・no.3試料：OP密度は $7.0E+5$ である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが $9.8E+4$ 、非タケ亞科起源不定が $1.4E+4$ 検出される。短細胞起源ではタケ型I（ササ属タイプ）が $2.3E+4$ 、同II（メダケ属タイプ）が $9.6E+3$ 、同不定が $3.4E+3$ 、ヒゲシバ型が $3.4E+3$ 、キビ（亜科）型その他の $1.4E+3$ 、ウ

シノケグサ（亜科）型その他が $8.2E+3$ 検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が $1.1E+4$ 、短形オカリナ状が $8.2E+3$ 、同その他が $4.8E+3$ 、棒状型では平滑縁が $3.7E+4$ 、鋸歯縁その他が $2.1E+4$ 、導管起源が $3.4E+3$ 検出される。葉肉細胞起源、シダ起源、多角形板状（顆粒状表面）がともに $1.4E+3$ 、ブレイド状が $6.2E+3$ 検出される。機動細胞起源イネ属タイプ珪酸体が精査プレパラートで検出されたが、その密度は $1.4E+3$ 未満と推定される。

b. トレンチ II 東端

- ・ no.8試料（To-aテフラ直上）：OP密度は $7.7E+5$ である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが $3.8E+4$ 、非タケ亜科起源不定が $3.6E+4$ 検出される。短細胞起源ではタケ型 I（ササ属タイプ）が $1.4E+4$ 、同 II（メダケ属タイプ）が $2.9E+3$ 、同不定が $1.3E+3$ 、ヒゲシバ型が $1.1E+4$ 、キビ（亜科）型フリル付きが $4.2E+3$ 、同その他が $9.6E+3$ 、ウシノケグサ（亜科）型ダブルラインが $2.9E+3$ 、同その他が $1.7E+4$ 検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が $3.2E+4$ 、短形オカリナ状が $8.4E+3$ 、同その他が $2.1E+4$ 、棒状型では平滑縁が $6.7E+4$ 、鋸歯縁その他が $5.0E+4$ 、導管起源が $1.3E+3$ 検出される。機動細胞イネ属タイプ珪酸体が精査プレパラートでは検出されたが、その密度は $1.3E+3$ 未満と推定される。

- ・ no.6試料（To-aテフラ直下）：OP密度は $9.4E+5$ である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが $1.1E+5$ 、非タケ亜科起源不定が $1.1E+4$ 検出される。短細胞起源ではタケ型 I（ササ属タイプ）が $3.7E+4$ 、同 II（メダケ属タイプ）が $8.2E+3$ 、同不定が $7.0E+3$ 、ヒゲシバ型が $3.0E+3$ 、キビ（亜科）型その他が共に $9.1E+2$ 、ウシノケグサ（亜科）型その他が $8.2E+3$ 検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が $7.0E+3$ 、短形オカリナ状が $1.6E+4$ 、同その他が $1.0E+4$ 、棒状型では平滑縁が $2.3E+4$ 、鋸歯縁その他が $3.4E+4$ 検出される。他に、葉肉細胞起源が $2.1E+3$ 、ブレイド状が $9.1E+2$ 、多角形板状（顆粒状表面）がいずれも $3.0E+3$ 検出される。機動細胞イネ属タイプ珪酸体が精査プレパラートでは検出されたが、その密度は $9.1E+2$ 未満と推定される。

- ・ no.5試料：OP密度は $6.7E+5$ である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが $9.3E+4$ 、非タケ亜科起源不定が $8.1E+3$ 検出される。短細胞起源ではタケ型 I（ササ属タイプ）が $3.1E+4$ 、同 II（メダケ属タイプ）が $2.5E+3$ 、同不定が $3.5E+3$ 、ヒゲシバ型、キビ（亜科）型その他がともに $2.5E+3$ 、ウシノケグサ（亜科）型その他が $1.1E+3$ 検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が $2.5E+3$ 、短形オカリナ状が $9.6E+3$ 、同その他が $2.5E+3$ 、棒状型では平滑縁が $2.4E+4$ 、鋸歯縁その他が $7.1E+3$ 検出される。他に、シダ起源とブレイド状がともに $1.1E+3$ 検出される。イネ属タイプ珪酸体が精査プレパラートで検出されたが、その密度は $1.1E+3$ 未満と推定される。

- ・ no.1試料（最下部粘土層）：OP密度は $9.4E+5$ である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが $2.8E+5$ 、メダケ属タイプが $1.3E+3$ 、非タケ亜科起源不定が $8.9E+3$ 検出される。短細胞起源ではタケ型 I（ササ属タイプ）が $1.8E+4$ 、同 II（メダケ属タイプ）が $1.3E+3$ 、同不定が $3.1E+3$ 、ヒゲシバ型が $3.1E+3$ 、キビ（亜科）型その他、ウシノケグサ（亜科）型その他がともに $1.3E+3$ 検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が $5.8E+3$ 、短形オカリナ状が $2.4E+4$ 、同その他が $1.3E+3$ 、棒状型では平滑縁が $2.5E+4$ 、鋸歯縁その他が $1.6E+4$ 、導管起源が $3.1E+3$ 検出される。他に、葉肉細胞起源が $1.3E+3$ 、ブレイド状が $1.5E+4$ 、多角形板状（顆粒状表面）が $1.9E+4$ 検出される。機動細胞イネ属タイプ珪酸体は精査プレパラートでも検出されない。

（5）考 察

a. 水田造構土層の可能性

水田遺構土層の可能性が期待されたTo-aテフラ直下土層のトレンチⅡno.4、トレンチⅡ東端no.6試料のほか、To-aテフラ直上土層トレンチⅡno.5、同トレンチⅡ東端no.8からも機動細胞イネ属タイプ珪酸体が検出された。その密度はTo-aテフラ直上土層トレンチⅡno.5で乾土1g当たり2.7E+3個であり、他の土層では1.4E+3個を超えないと推定される。この値は水田耕作土の一般的な判定基準の5.0E+3個/g（杉山、2000）を満たさないが、3.0E+3個/g程度で耕作土が検出される場合もある（杉山、2000）ので、トレンチⅡno.5土層が水田耕作と関わる可能性も考えられる。水田遺構土層でないとしても、複数の土層から機動細胞イネ属タイプ珪酸体が検出されること、またトレンチⅡno.5土層からはイネ属に特有な葉部表皮組織片も検出されることから、To-aテフラ期前後に周辺域でイネ栽培が営まれた可能性は否定できないといえようか。なお、現表土試料（トレンチⅡno.21）からは基準値を上まわる乾土1g当たり7.7E+3個の機動細胞イネ属タイプ珪酸体が検出されたが、これは現表土が水田耕作上であることに対応している。

b. イネ以外の作物栽培の可能性

キビ（亜科）型フリル付き珪酸体がトレンチⅡno.9試料、同no.5試料、トレンチⅡ東端no.8で検出された。また、ウシノケグサ（亜科）型ダブルライン珪酸体がトレンチⅡno.21試料、同no.9、トレンチⅡ東端no.8で、さらに、棒状型ムギ類タイプ珪酸体がトレンチⅡno.21とno.5で検出された。キビ（亜科）型フリル付き珪酸体はヒエ属などに特徴的に認められること、また、ウシノケグサ（亜科）型ダブルライン珪酸体はコムギ属などに比較的多く認められ、棒状型ムギ類タイプ珪酸体はコムギ属などを特徴づける珪酸体であることから、これらの珪酸体はヒエ栽培、ムギ類栽培に由来する可能性が考えられる。供試土層に耕作土遺構等は検出されていないのでこれらの珪酸体は栽培種ヒエ属やムギ類起源としても異地性の珪酸体として考えるべきであろうか。当遺跡本体域では耕作痕跡が検出されているのでそこで営まれた可能性もあるヒエやムギ類の栽培との対応を検討する必要性もあるかもしれない。

c. 粘土層の年代、性格

本分析に用いた試料を採取した粘土層の下位には砂層が認められ、さらにその下位には礫層の存在が推定される。礫層から砂層、そして粘土層への層相変化から遺跡域の離水史が読み取れる。礫層、砂層は平瀬川水系の氾濫原期の堆積物、粘土層は離水後の氾濫粘土堆積物（フラッドローム）であろう。粘土層の下部にはTo-aテフラが5cm超の厚さで挟まる。当テフラの年代は平安時代AD915年とされることから、離水期はおよそ1000年前を遡る頃と推定される。

分析に供した粘土層試料の珪酸体密度は4.2E+5~1.2E+6個/gの範囲にある。このうち現表土試料（トレンチⅡno.21試料）の密度が最も低いことから、残りの粘土層試料は応分の地表履歴を有しているものと考えて良いであろう。このことから、100cmを超える厚さの粘土層は、植被の存在の下で、離水後現在までの約1000年間に繰り返し生じた洪水に伴う氾濫粘土が累積した生成履歴を有しているものと推定される。なお、粘土層試料からは例外なくヒゲシバ型珪酸体（大部分がヨシ属タイプと推定される）が検出される一方で、比較的乾性環境を好むタケア科に起源する珪酸体（ササ属タイプ珪酸体を主とする）も主要な植物珪酸体群として認められる。したがって、離水後、地下水位の高い状態で推移し、また洪水により一時的に冠水することはあっても地表面に滞水する環境が卓越することはなかったことを示している。

d. 植物珪酸体群集の時系列変動

To-aテフラ下位の粘土層はタケア科起源ササ属タイプが優勢な珪酸体群集で特徴づけられる。このことは、離水直後からササ類を主要構成要素とする植生が成立したことが推定される。このような珪

酸体群集はTo-aテフラ期を境に明瞭に変化する。すなわち、To-aテフラ期以前において極めて優勢な機動細胞珪酸体（ファン型）タケ亜科起源ササ属タイプは、当テフラ期以降になると急速に減少し、また短細胞珪酸体タケ型においても明らかな減少が見られる。これに対して非タケ亜科起源珪酸体においては機動細胞の変化は不明瞭であるが、機動細胞珪酸体に占める非タケ亜科起源の割合はTo-aテフラ期以降明らかに増加しているといえよう。また、短細胞珪酸体非タケ亜科起源についてもTo-aテフラ期以降増加する傾向が認められ、特に同テフラ直後の明瞭な極大は興味深い。To-aテフラ期の変動はトゲ細胞珪酸体（ポイント型）でも見いだされる。すなわち、To-aテフラ期直後の長形・典型的な急激な増加と当テフラ期以降のタケ亜科起源オカリナ状の明瞭な減少であり、これは機動細胞珪酸体、短細胞珪酸体における変動に対応しているものと考えてよいであろう。

このようなTo-aテフラ期におけるタケ亜科起源珪酸体の減少は植生におけるササ類の衰退を示しているといえよう。それでは、このササ類の衰退はいかなる要因によってもたらされたのだろう。ササ類の生育に適さない極めて過湿な環境に変化したのであろうか。離水後徐々に地下水位が低下する方向に進んだものと考えることが自然の道理であるが、To-aテフラ直上のトレンチII no.5試料におけるヒゲシバ型ヨシ属タイプの明瞭な増加は過湿環境の出現を示しているのかもしれない。no.5試料は暗色で有機質粘土の様相を呈していることは過湿環境と調和しているとも考えられる。なお、このヒゲシバ型ヨシ属タイプの極大はTo-aテフラから約20cm上位のno.9試料では認められないことから想定される過湿環境は一時的なものと推定されるので、タケ亜科の衰退を過湿環境のみで説明することに無理があり、別の要因の関わりも考えなければならない。一般的にササ類は繰り返される刈り取り踏みつけなどの被圧に弱いので、そのような被圧に深く関わる人為の増大に伴いササ類優勢な植生からササ類に乏しい植生へ変化することが推定される。To-aテフラ直上粘土層期で水田耕作の可能性も否定できないこと、また、遺跡本体域でTo-aテフラを切る耕作痕跡が検出されていることから、To-aテフラ期以降の人為の高まりが伺える。作物栽培を伴った人の営みがササ類の衰退に関わっているとしても無理はないであろう。なお、To-aテフラ期以前の粘土層でくまなく検出される広葉樹起源のブレイド状珪酸体が同テフラ以降の粘土層から検出されないことも人為の増大を示している可能性も考えられ興味深い。

（6）まとめ

野里上遺跡低湿地試掘トレンチII壁に粘土層中に見いだされたTo-aテフラに被覆された歯状高まりが水田耕作に関わるものか否かを検討することを主目的に植物珪酸体分析を実施し次の結果を得た。

(1) To-aテフラ直下の粘土層や同テフラ直上の粘土層からも機動細胞イネ属タイプ珪酸体が検出された。その検出密度は最大でも乾土1g当たり $2.7E+3$ 個で一般的な水田作土判定基準値を満たさないが、少なくとも周辺域での稲栽培の可能性が推定されることを指摘した。

(2) To-aテフラ上位の粘土層からはヒエ属等に見いだされるイネ科短細胞起源キビ（亜科）型フリル付き珪酸体、また、ムギ類類タイプの棒状型鋸歯縁珪酸体、コムギ属等に多く見いだされるイネ科短細胞起源ウシノケグサ（亜科）型ダブルライン珪酸体が検出された。遺跡本体域で検出されている耕作痕跡と関係している可能性を指摘した。

(3) 粘土層試料の植物珪酸体密度はいずれも現表土を上まわることから芯分の地表履歴を有していることを指摘した。粘土層の下部にTo-aテフラ（年代AD915年）が介在することから、粘土層の生成はTo-aテフラの堆積に先立つおおよそ1000年前から始まり、植被の存在の下で、離水後現在に至るまでに繰り返された洪水粘土の累積により100cmを超えるまで堆積したものと推定した。

(4) To-aテフラより下位の粘土層はササ類珪酸体が優勢な植物珪酸体群集で特徴づけられるが、当テフラ期以降、ササ類珪酸体は明瞭に減少する。To-aテフラ直上の粘土層においてはヒゲシバ型ヨシ属タイプ珪酸体をはじめとする非タケ亜科起源イネ科短細胞珪酸体の顕著な増加が認められることから、ササ類の生育に適さない過湿な環境の出現がササ類衰退の要因である可能性を指摘した。しかし、ヒゲシバ型ヨシ属タイプ珪酸体の極大はTo-aテフラ期以降継続しているわけではないので、作物栽培を伴う人為作用の増大の関わりも関係している可能性を指摘した。

引用文献

- 近藤錦三 2000 「植物ケイ酸体」「化石の研究法」 化石研究会(編) 59-63.共立出版
 佐瀬 隆 2003 「植物ケイ酸体」「地球環境調査計測事典」 陸域編(第1巻) 974-981.フジテクノシステム
 杉山真二 2000 「植物珪酸体(プラントオパール)」「考古学と植物学」 189-213.同成社

[付] 調査者によるコメント

植物珪酸体分析実施に至るまでの経緯

当初、調査区はK III 29・30グリッド以北の「北区」とK IV 74~80グリッド以南の「南区」のみであつて、その間は湧水が激しく、岩手県教委試掘の結果調査範囲外に設定されていた区域である。しかし、北区南端および南区北端に排水用の溝を掘削した際にTo-a直下から自然遺物が大量に見つかり、さらに北区南端精査時に掘り棒状木製品(128)が出土したことから同範囲外域(以降「拡張区」と呼称)に遺物分布が広がっている可能性が生じた。この確認を目的として面積比10%のトレンチ調査を実施することとなり、13本のトレンチを設定、調査した(第8図)。結果、トレンチIIの南壁2箇所でTo-a直下が盛り上がる畦畔状の高まりが確認され、周囲を拡張し平面での検出を行なった。しかし、平面的には遺構として把握できず、水田跡としての可能性を検証するため植物珪酸体分析を実施することとなったものである。なお、この他には遺構・遺物ともに検出されていない。

地形的観点から見た耕作の可能性

本遺跡付近は西側に南北に伸びる小丘陵の裾野に位置しており、野中から仁昌寺までの区間は同様な地形を呈する。この区間には小規模な扇状地が複数形成されており、拡張区付近もその1つで、扇端部分にある。この扇状地地帯は同丘陵から発生する流水の影響を非常に受けやすく、拡張区付近の土壤は各層とも程度の違いはあれ水の影響を受けていることが確認されている。また、調査期間を通して湧水が途絶えることは皆無であった。換言すれば、調整さえかなえば水の供給には事欠かない場所といえる。水田耕作実施を考えたばあい、立地的な面から見れば適地の一つに挙げられよう。

トレンチIIのTo-aテフラ直上no.5で検出された機動細胞イネ属タイプ珪酸体の密度(乾土1g当たり2.7E+3個)は、その収穫法が根刈りであったと仮定したばあいの3,000個/gという密度(杉山2000)に迫る量である。逆説的には、これだけの量が「火のない所」から出たとするには無理があろう。本層の年代はテフラ直上であることからその降下からさほど遠くないはずであり、よって平安時代に納まるを考えるのが最も自然である。佐瀬氏の指摘どおり、この分析結果からは周辺域での稲栽培の可能性が推定され、地形的特徴もそれを後押しするものとなっている。平安時代、To-aテフラ降下後のある期間、遺跡周辺で稲作が行われていた可能性が十分にあることを裏付ける結果となつたといえよう。ただ、今回の調査が「煙」の状態で終わってしまったことが非常に残念でならない。

(丸山)

表1 野里上遺跡低湿地トレンチ粘土層の植物珪酸体密度(粒数/乾土 g)

試料	イネ科特異物質(トレンチ層)										イネ科特異物質(トレンチ層)										
	全 体					ワ ン タ					クサ類					ヒ メ ラ パ					
	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	(トレンチ層)	
n-21	英-1	4.25±0.5	1.58±0.4	9.05±0.9	7.75±0.3	0.0E+00	0.0E+00	9.4E+02	2.0E+03	3.7E+03	0.0E+00	2.0E+03	2.0E+03	2.0E+03	2.0E+03	6.57±0.2	1.75±0.4	0.0E+00	8.56±0.2	その他の	
ト レ ン チ 層 中 部 下 部	n-9	6.59±0.5	2.88±0.4	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	1.9E+04	1.7E+04	8.3E+03	3.3E+03	6.1E+03	6.1E+03	6.1E+03	6.1E+03	1.1E+04	1.1E+04	0.0E+00	1.4E+03	その他の	
n-5	Te-a5上	1.24±0.5	0.0E+00	2.1E+03	2.1E+03	4.2E+04	4.2E+04	3.5E+03	4.3E+03	4.3E+03	4.3E+03	4.3E+03	4.3E+03	4.3E+03	4.3E+03	2.0E+04	2.0E+04	0.0E+00	1.5E+04	その他の	
n-5	Te-a5下	7.83±0.5	9.71±0.4	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	9.7E+02	1.3E+04	3.2E+03	8.9E+02	1.7E+01	1.7E+01	1.7E+01	1.7E+01	5.8E+03	5.8E+03	0.0E+00	8.8E+03	その他の	
II	n-3	7.68±0.5	9.88±0.4	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	1.4E+04	2.1E+04	2.7E+03	9.4E+02	2.1E+03	2.1E+03	2.1E+03	2.1E+03	0.0E+00	0.0E+00	8.2E+03	1.4E+03	4.8E+03	
ト レ ン チ 層 上 部	n-8	1.68±0.5	2.74±0.5	3.84±0.1	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	3.0E+03	5.9E+03	5.9E+03	1.1E+04	2.3E+03	1.1E+04	1.1E+04	1.1E+04	1.1E+04	1.1E+04	1.1E+04	1.1E+04	1.2E+03	
ト レ ン チ 層 下 部	n-6	9.4E+05	1.1E+05	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	1.1E+04	1.1E+04	8.3E+03	7.4E+03	7.4E+03	7.4E+03	7.4E+03	7.4E+03	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	その他の	
II	n-3	6.76±0.5	9.3E+04	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	8.1E+03	1.1E+04	3.1E+03	3.1E+03	3.1E+03	3.1E+03	3.1E+03	3.1E+03	0.0E+00	0.0E+00	1.1E+03	1.1E+03	0.0E+00	
II	n-1	9.4E+05	2.86±0.5	1.3E+03	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	8.9E+02	1.1E+04	1.1E+04	1.1E+04	3.1E+03	3.1E+03	3.1E+03	3.1E+03	0.0E+00	0.0E+00	1.1E+03	1.1E+03	0.0E+00	
イネ科特異物質(トレンチ層) 領域別																					
試料	形態	部位	子実	ナリ	リ	その他の	干葉	葉	根	茎	花	花序	花被	花被	花被	花被	花被	花被	花被	花被	花被
n-21	英-1	2.0E+03	5.7E+02	2.8E+04	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	2.8E+03	
ト レ ン チ 層 中 部 下 部	n-9	1.7E+04	1.4E+03	8.0E+03	4.1E+04	0.0E+00	0.0E+00	5.2E+04	4.7E+05	7.0E+04	3.3E+05	7.0E+04	1.2E+04	1.2E+04	1.2E+04	1.2E+04	0.0E+00	0.0E+00	4.3E+05	0.0E+00	
n-5	Te-a5上	0.5	1.2E+03	1.2E+03	6.7E+04	0.0E+00	0.0E+00	3.3E+05	5.0E+05	5.0E+05	3.0E+05	5.0E+05	5.0E+05	5.0E+05	5.0E+05	5.0E+05	0.0E+00	0.0E+00	5.0E+05	0.0E+00	
n-5	Te-a5下	0.4	6.5E+03	1.2E+04	6.3E+03	3.7E+04	0.0E+00	0.0E+00	3.6E+05	9.7E+02	2.2E+03	0.0E+00	9.7E+02	7.3E+03	7.3E+03	7.3E+03	0.0E+00	0.0E+00	3.2E+03	0.0E+00	
II	n-3	1.1E+04	8.25±0.2	4.8E+02	3.7E+04	0.0E+00	0.0E+00	2.1E+04	3.1E+03	3.1E+03	1.4E+03	1.4E+03	1.4E+03	1.4E+03	1.4E+03	1.4E+03	0.0E+00	0.0E+00	1.4E+03	0.0E+00	
ト レ ン チ 層 上 部	n-6	7.0E+03	1.4E+04	1.0E+01	2.3E+04	0.0E+00	0.0E+00	5.0E+05	5.0E+05	5.0E+05	3.0E+04	5.0E+05	2.1E+03	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	
n-5	2.5E+03	5.6E+03	2.3E+03	2.4E+04	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00		
II	n-1	5.8E+03	2.4E+01	1.2E+03	2.4E+04	0.0E+00	0.0E+00	1.2E+04	3.1E+03	1.2E+03	0.0E+00	1.2E+03	1.2E+03	1.2E+03	1.2E+03	1.2E+03	1.2E+03	1.2E+03	1.2E+03	1.2E+03	

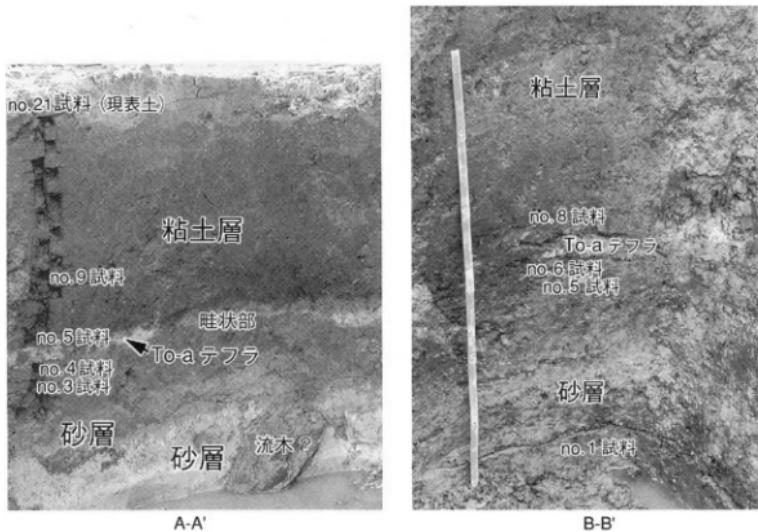
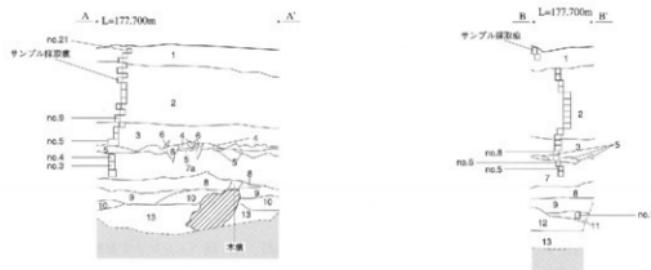


図1 植物珪酸体分析試料サンプル採取断面写真



- 動物珪酸体試料トレンチ土壤サンプル採取断面図
- 1 現代木田付土壤 基本層厚I層。
 - 2 10YR3/1 黄褐色 シート 粘性質・しまり中 基本層厚II層。
 - 3 3.5YS/5 黄褐色 シート 粘性質・しまり中 基本層厚II層。
 - 4 2.5YS/2 黄褐色 テフラ 粘性なし・しまり強 To-a, 砂土位に上層く[1~2m]一次堆積(植生)と思われる。基本層厚II層。
 - 5 2.5YS/2 黄褐色 テフラ 粘性なし・しまり強 To-a, 砂土位に上層く[1~2m]一次堆積(植生)と思われる。基本層厚II層。
 - 6 3層と5層の混土 粘性質・しまり中 露頭の飛散。
 - 7 10YR4/1.5 黄灰・灰黄褐色 粘性質・しまり強 硫化鉄斑(-10m)1%、硫化鉻スジ状に10%、基本層厚V層。
 - 8 10YR4/1 黄褐色 地上部 粘性質・しまり強 硫化鉻スジ状に10%。
 - 9 10YR5/2 黄褐色 地上部 粘性質・しまり強 硫化鉻スジ状に10%。
 - 10 2.5YS/2 黄褐色 地上部 粘性なし・しまり中 水没方向のラミテ。水成堆積、硫化鉻スジ状に10%。
 - 11 10YR6/1 黄褐色 地上部 粘性質・しまり中 水没方向のラミテ。水成堆積、硫化鉻スジ状に10%。
 - 12 10YR6/1 黄褐色 地上部 粘性質・しまり中 水没方向のラミテ。水成堆積、硫化鉻スジ状に10%。
 - 13 2.5YS/2 黄褐色 地上部 粘性質・しまり強。

図2 植物珪酸体分析試料サンプル採取断面図

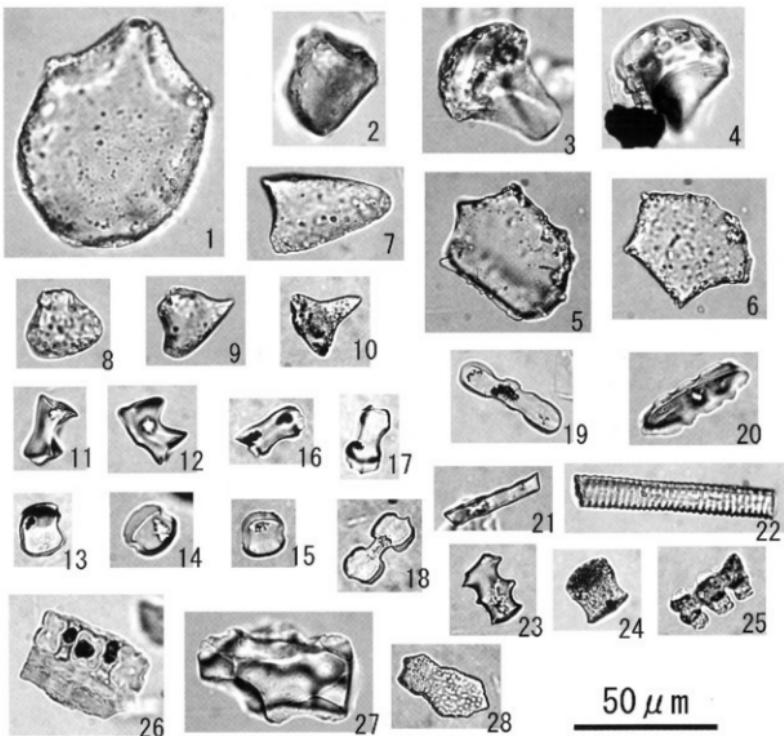


図3 野里上遺跡トレンチII粘土層から検出された主な植物珪酸体

1-6: イネ科機器細胞珪酸体（ファン型）：1.ヨシ属タイプ（トレンチII no.4），2.スキタイブ（トレンチII no.5），3.イネ属タイプ（トレンチII no.21），4.イネ属タイプ（トレンチII no.5），5.ササ属タイプ（トレンチII 東端no.1），6.ササ属タイプ（トレンチII 東端no.6）

7-10: トゲ細胞起源（ポイント型）：7.長形・典型（トレンチII no.5），8.9.短形・オカリナ状（トレンチII 東端no.1），10.短形・その他（トレンチII no.5）

11-21: イネ科細胞起源：11.タケ型I・ササ属タイプ（トレンチII 東端no.6），12.同（トレンチII 東端no.1），13.タケ型II・メダケ属タイプ（トレンチII no.4），14.15.ヒゲシバ型・ヨシ属タイプ（トレンチII no.5），16.キビ亞科型フリル付き（トレンチII no.5），17.同（トレンチII 東端no.8），18.キビ亞科型その他（トレンチII no.5），19.ウシノケグサ亞科型その他（トレンチII 東端no.8），20.同ダブルライン（トレンチII no.21），21.ウシノケグサ亞科型その他（トレンチII no.5）

22.棒状型導管起源（トレンチII no.5），23.同ムギ類似タイプ（トレンチII no.21），24.シルクハット状（トレンチII no.9），25.葉肉細胞椎骨状（トレンチII no.9），26.珪化組織片・イネ属タイプ（トレンチII no.5），27.広葉樹起源・ブレイド状（トレンチII 東端no.1），28.多角形板状（トレンチII 東端no.1）

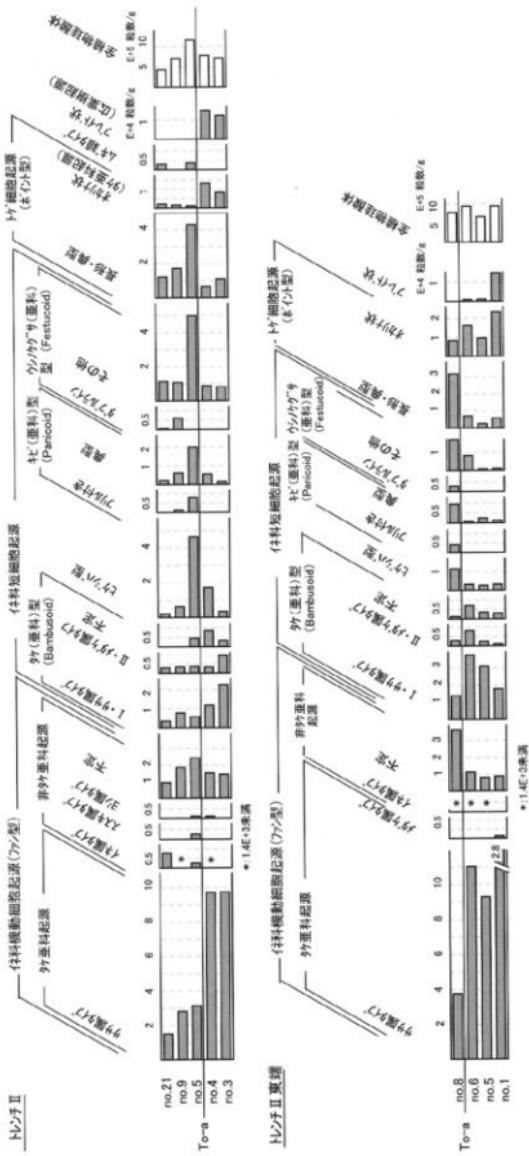


図4 野里上濃跡低湿地トレンチ粘土層の植物根體相成図

4 野里上遺跡・野中遺跡より出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究会）

(1) はじめに

野里上遺跡は一戸町小鳥谷にある古代の住居跡を中心とした遺構群である。遺跡の西は丘陵、東には平穫川が流れ、東向きの緩斜面に立地している。遺跡は竪穴住居、堀立柱建物、溝、耕作痕跡などで形成され、柱、杭などのほか土師器が出土している。試料は奈良時代前半に構築されたと考えられる竪穴住居跡、中世の15~16世紀前半に廃棄されたとみられる炭化物集中、To-a跡灰以降に作られたと推定される耕作痕跡、および隣接する野中遺跡の竪穴状遺構である。

(2) 同定結果

同定結果を表1に示す。耕作痕跡からはわずかにエノキグサと菌核を出土した。竪穴住居のカマド跡からはオニグルミ小破片、キビを数個ずつ出土し、菌核および穀類とみられる不明炭化物を出土した。中世の15~16世紀前半頃の炭化物廃棄層 S X05からはオニグルミ、トチノキの小破片と、イネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビとソバといった穀類を出土し、ほかには穀類とみられる不明炭化物を出土した。隣接する野中遺跡の竪穴状遺構からはコムギとヒエを1粒ずつ出土した。

表1 野里上遺跡・野中遺跡より出土した炭化種実

分類群	出土部位	野里上遺跡						野中遺跡
		番号	No.1	No.2	No.3	No.5	No.4	No.6
		時期	To-a跡灰以降の耕作痕跡	余良時代前半	15~16世紀前半	中~近世?		
オニグルミ	Juglans mandarinica Maxim. var. sachalinensis (Miyabe et Koidz.) Kitamura	内果皮破片				4	1	No.7
トチノキ	Dendrodoe nobilis Blume	種皮破片					3	
イネ	Oryza sativa L.	胚乳				1	1	
オオムギ	Bromus vulgaris L.	穀子				1		
コムギ	Triticum aestivum L.	穀子						1
アワ	Saintpaulia indica Beauvois	穀子						
ヒエ	Echinochloa utilis (Olivier et Yabuno)	穀子				1		
キビ	Panicum miliaceum L.	穀子				1	1	1
シロガニ類	Cicer arietinum L. c. album Linn.	穀子				3	2	
ソバ	Fagopyrum esculentum Moench	穀子				1	1	
エノキグサ	Aeschynomene austrota Linn.	種子			1			
枝条剥	Pyrenopeziza	菌核	2	2		1		
不明	Unknown					5	17	

以下に同定された炭化種実の形態記載を行う。

オニグルミ：出土した内果皮破片は緻密で不規則な曲面としばしば壁に空隙がある。

トチノキ：種子の表面は炭化しても光沢が残る場合が多く、表面には流紋状ないし指紋状の微少模様があり、不規則な形に割れことが多い。なお、トチノキは本遺跡でかなり細かい破片でしか出土しなかった。

イネ：穎がとれた胚乳(いわゆるコメの部分)を出土した。胚乳は梢円形で不明瞭ながら2本の浅い溝があり、基部には胚がとれた跡がへこんでいる。

オオムギ：種子は完形であれば紡錘形で頂部は丸みを帯び、基部は尖る。本遺跡では頂部付近の破片のみ出土した。

コムギ：種子は基部と頂部が丸い円筒形で背面の中央には溝があり、腹面の基部に穴があり、厚さが幅とほぼ同サイズである。

アワ：種子は径1mm前後のはば球形で基部には長三角形の胚があり、焼けると背腹方向に膨らむ。

キビ：種子は径2mm前後の球形で基部には短三角形の胚がある。

ヒエ：種子は径1.8mm前後の丸い菱形で焼け膨れると頂部が突出した感じになる。基部には梢円形の胚がある。

シロザ近似種：種子は円形で扁平、一端にへこんだへそがあり、そこから中心に向かって浅い溝がある。本遺跡で出土した種子は中の子葉が焼け膨れて割れている。

ソバ：種子は三角形で基部のやや上方に突出し、基部中央はややへこむ。肥料分の少ない土地でも育つため、しばしば救荒植物として栽培される。

エノキグサ：種子は丸さ1mm前後の長卵形で頂部がやや尖る。

核菌綱：菌核を出土した。内部は発泡状で無構造、枯死した材や樹皮に付着して生活する。元々黒くて堅いので炭化しているかどうか不明である。

(3) 考察

本遺跡では奈良時代前半にはイネ以外の雑穀を出土していることから、雑穀への依存度が比較的高かったと考えられる。中世の炭化物廃棄層は人骨とともに堆積しているため、特殊な目的で生成された炭化物層と見なすことができるが、内陸という立地条件をある程度反映している可能性がある。

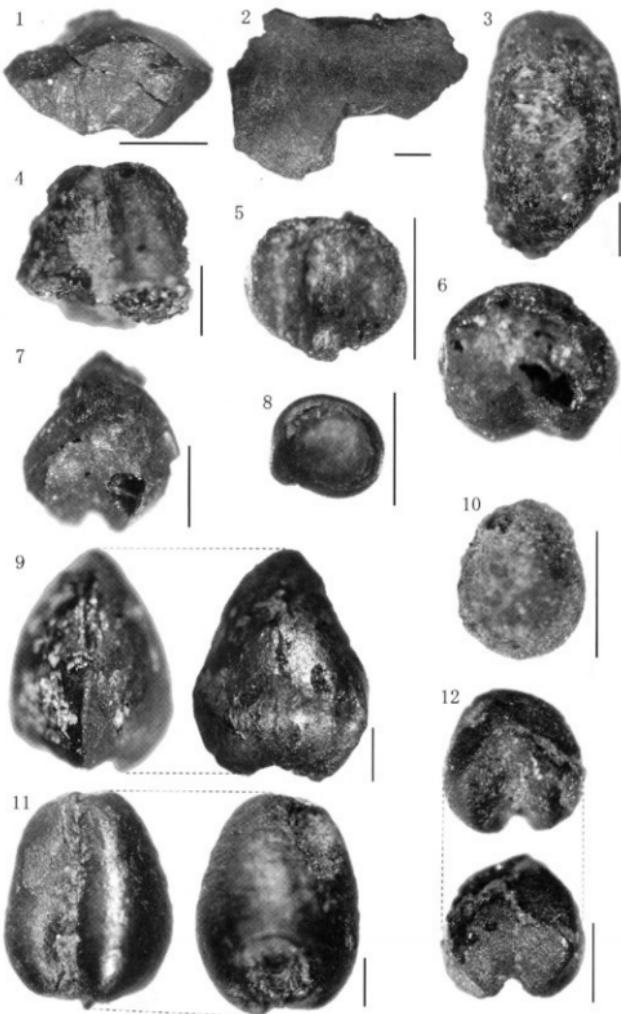
奈良時代のカマド跡からは食用植物としてわずかにオニグルミとキビを出土した。カマドはその構造上、燃焼残渣を頻繁に搔き出して燃焼効率を良く保っていたと考えられ、この清掃行為が一般的に炭化種実等の出土量が少なくなっている要因ではないかと考えられる。イネなどの主要穀類をほとんど利用していなかったと断定はできないが、キビの利用頻度が高いために炭化種子として残存したといえる。

中世の炭化物廃棄層からはイネのほかにオオムギ、アワ、ヒエ、キビといった雑穀とソバ、オニグルミ、トチノキと多様な食用植物を出土した。残渣はほとんどが炭化材の細かい破片で構成され、人骨の小破片を含むことから火葬墓の可能性が指摘されている。ただし、S X05遺構に人骨一体分が揃っているのではなく、頭蓋骨などの大きい骨は確認されていない。また、人骨の燃焼温度はかなり高いとされているが、穀類の残りは良く、比較的低い温度で炭化していると推測される。本体は別の場所に埋葬され、細かい残渣がこの遺構に埋葬あるいは廃棄されたと思われる。これら残渣に含まれている炭化種実は本遺跡周辺での一般的な主食と推測され、穀類などを少量ずつ揃えて儀式に用いたと考えられる。本地域では当時、イネや雑穀とともに補助食品としてトチノキなども普通に利用していたと考えられる。

東北地方における中世の炭化種子分析例では、青森県の十三塗遺跡の複数住居跡から大量のイネと少量のコムギ、ヒエが確認され、十三塗遺跡の集落におけるイネへの依存度が高かったと推測されている(吉川 2005、パリノ・サーヴェイ株式会社 2005)。野里上遺跡の場合には火葬という特殊条件下での出土であり、当時の利用比率をそのまま反映するものではないが、儀礼においてイネのほかに雑穀やトチなどを出土しているのは、内陸部という立地条件の食料利用状況に由来する可能性も考えられる。

引用文献

- パリノ・サーヴェイ株式会社 2005 「第4節4 十三塗遺跡出土穀米遺体の種類」『十三塗遺跡』第V分冊 青森県埋蔵文化財調査報告書第398集 青森県教育委員会 222-226.
 吉川純子 2005 「第3節 十三塗遺跡より出土した炭化種実について」『十三塗遺跡』第V分冊 青森県埋蔵文化財調査報告書第398集 青森県教育委員会 206-208.



図版1 野里上遺跡・野中遺跡より出土した炭化種実

1.オニグルミ、内果皮破片（S102カマド燃焼部東端凹み）2.トノキ、種皮破片（SX05-1層）3.イネ、胚乳（SX05-1層）4.オオムギ、穂片（SX05-1層）5.アリ、種子（SX05-1層）6.キビ、種子（S102カマド燃焼部東端凹み）7.ヒエ、種子（SX05-1層）8.シロザ近似種、種子（SX05-1層）9.ソバ、種子（SX05-1層）10.エノキグサ、種子（1号耕作痕跡サンプルNo1） 野中遺跡SX01堆土最下位 11.コムギ、種子 12.ヒエ、種子 スケール=1mm

5 野里上遺跡より出土した木製品および加工材の樹種

吉川純子（古代の森研究会）

(1) はじめに

野里上遺跡は一戸町小島谷にある奈良時代の住居跡と平安時代中～後期の耕作痕跡を中心とした遺跡である。遺跡の西は丘陵、東には平糠川が流れる、東向きの緩斜面に立地している。試料は掘り棒状木製品、柱材2点、杭である。掘り棒状木製品は先端を平らに加工してある。No.2の柱材は柱穴に入っていた残りで、柱もしくは礎盤とみられる。試料からは剃刀で横断面、接線断面、放射断面の3方向の切片を取り、ガムクロラールで封入しプレパラートを作製した。

(2) 同定結果と考察

同定結果を表1に示す。掘り棒状木製品と柱材2点はクリ、杭はムシカリであった。以下に同定された樹種の木材解剖学的記載を行う。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：年輪の最初に大きな道管が2、3列配列し、その後急に径を減じて小さな道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔板は單一で、道管内にはチロースが発達する。放射組織は単列で同性である。

ムシカリ (*Viburnum furcatum* Blume)：小さな道管が単独で年輪内に均一に散在する散孔材。晩材部で道管がやや小さくなる傾向がある。放射組織は2、3細胞幅で異性、長く翼状になる單列部を介していくつか連結する特徴がある。道管の穿孔板は段数の少ない階段状。ガマズミ属の他の種に比べて、本種は年輪はじめに道管が若干並ぶように見える。

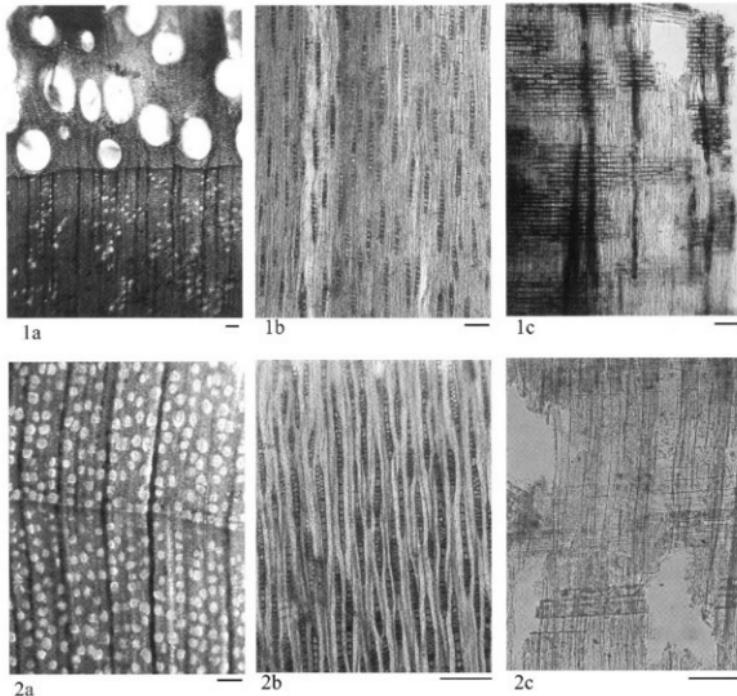
同定試料4点のうち3点がクリであり、岩手北部の本遺跡ではクリがよく使われていたと考えられる。山田(1993)によると、8～11世紀の東北地方ではクリが建築材や杭、燃料材、挽き物など様々な用途に頻繁に使われている。杭はガマズミ属のムシカリという、東北の山地に多い種類である。杭は比較的周辺に生育していた樹種を用いると考えられ、特に樹種を限定せずに様々な種類が使われていることが多い。本遺跡では周辺の植生に応じて目的にあった樹種を用いていたと考えられる。

引用文献

- 山田昌久 1993 「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史」『植物史研究』特別第1号 植生史研究会 1-244.

表1 野里上遺跡より出土した加工材の樹種

番号	部位	樹種	地點
1	掘り棒(オーバル)	クリ	K-N21
2	柱材	クリ	S-A01 P3
3	柱材	クリ	K-B50 P 2
4	杭	ムシカリ	K-B66



図版1 野里上遺跡・野中遺跡より出土した木製品と加工材の顕微鏡写真

1. クリ (No1 捩り棒状木製品) 2. ムシカリ (No4 杣)

a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面

スケール = 0.1mm

6 野里上遺跡出土骨同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

野里上遺跡(岩手県二戸郡一戸町小鳥谷字穴久保に所在)は、西側から延びる丘陵地の裾部、平穂川左岸の緩斜面上に位置し、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、柱列、土坑、耕作痕跡、溝跡、柱穴状土坑、杭、焼土遺構、炭化物集中、火葬関連遺構が認められている。

今回、発掘調査段階において出土した骨について、その動物種を明らかにし、当時の動物利用や遺構の用途等について検討を行う。

(2) 試 料

試料は、S I 02およびS X05から採取された骨である。S I 02は、出土遺物から奈良時代前半頃と推定される1辺28mを超える大型の堅穴住居跡である。カマド燃焼部手前の焚き口付近、焼成面直上から焼骨が出土した。一方、S X05は、To-a (AD 915年と推定) の直上に構築されており、覆土内に焼骨が認められた。S I 02およびS X05とも、土壤ごと採取され、ウォーターフローテーション・セバレーションによって抽出された焼骨を同定試料とした(No.1, 2)。

(3) 分析方法

一部の試料については、一般工作用接着剤で接合する。試料を肉眼あるいはルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。なお、同定・解析には、金子浩昌先生に協力をお願ひし、著名原稿として頂いた。

(4) 結 果

野里上遺跡出土骨

金子 浩昌

結果を表1に示す。奈良時代前半頃の大型堅穴住居跡(S I 02)のカマド燃焼部手前焚き口付近から出土した骨は、サケ・マス類の椎骨椎体片、魚類の鱗鱗等、鳥類/小中型獸類の破片、ニホンジカの基節骨、獸類の破片等である。これらは食用に利用されたものの残渣であったと考えられる。検出された標本が少ないので、利用状況を知るに不十分であるが、指骨まであったことを考えると最終的な利用として指骨の健とか、周辺の肉皮も利用されたのであろう。この他、加工品も1点も認められる。生活廃棄物などもカマド内に投棄されたのであろう。

To-aの直上に構築されているS X05から出土した骨は、ヒトの肋骨/四肢骨などの焼骨破片である。形質から部位を確認できないが、大きさからみて上肢骨や指骨などの破片が含まれていると思われる。

表1 骨類同定結果

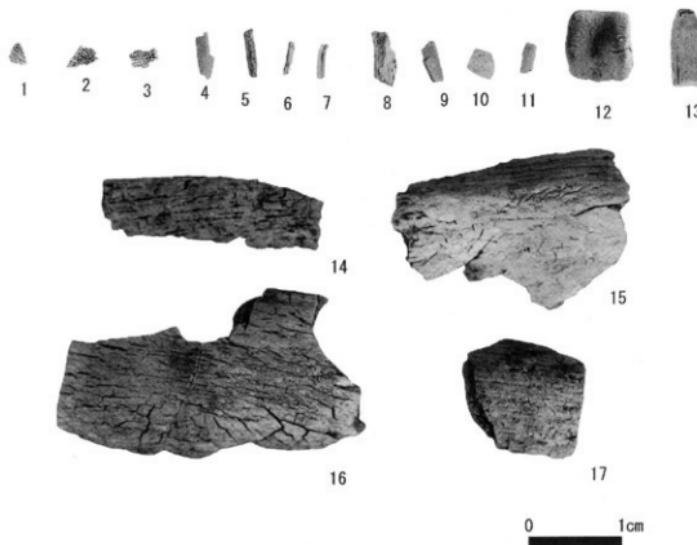
遺跡	地点	層位	試料	試料重量	分類群	部位	部分	数量	備考
S I 02	カマド燃焼部東端凹み	5層	No.1	2.35g	サケ・マス類	椎骨	椎体片	8	
					骨頭	鱗鱗等	鱗片	26	
					鳥類/小中型獸類	不明	破片	1	
					ニホンジカ	基節骨	遠位端	4	
					獸類	不明	破片	31	
							針状加工品	1	
					不明	小明	破片	多	1.1g
					ヒト	肋骨/四肢骨等	破片	47	
						不明	破片	多	21.4g
					その他	不明	破片	8	

性別不明であるが、成人個体とみられる。他の場所で火葬された後に遺構内に埋葬されたのであろう。なお、馬場ほか（1986）を参考にすると、人骨を焼いた際、600℃以下ではほとんど変化がなく、800℃付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われる等、最も激しく変化するとされている。これにしたがうと、本人骨は800℃以上で火葬されたとおもわれる。

引用文献

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治 1986 『根古屋遺跡出土の人骨・動物骨』、『雲山根古屋遺跡の研究』—福島県雲山町根古屋における再葬墓群— 福島県雲山町教育委員会 93-113.

図版1 出土骨



- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. サケ・マス類椎体 (S I 02) | 2. サケ・マス類椎体 (S I 02) |
| 3. サケ・マス類椎体 (S I 02) | 4. 魚類鱗骨 (S I 02) |
| 5. 魚類鱗骨 (S I 02) | 6. 魚類鱗骨 (S I 02) |
| 7. 魚類鱗骨 (S I 02) | 8. 鳥類／小中型獸類破片 (S I 02) |
| 9. 鳥類／小中型獸類破片 (S I 02) | 10. 鳥類／小中型獸類破片 (S I 02) |
| 11. 鳥類／小中型獸類破片 (S I 02) | 12. ニホンジカ基節骨 (S I 02) |
| 13. 獣類針状加工品 (S I 02) | 14. ヒト肋骨／四肢骨 (S X 05) |
| 15. 獣類針状加工品 (S X 05) | 16. ヒト肋骨／四肢骨 (S X 05) |
| 16. ヒト肋骨／四肢骨 (S X 05) | |

VII 総括

1 まとめ

(1) 立地

平糠川・馬瀬川合流地点付近の西岸、平糠川により形成された砂礫段丘上に立地する。西側には南北に連なる小丘陵が存在し、野里上遺跡はそこから続く東向き緩斜面とその東に広がる平坦面上に位置する。この小丘陵からは断続的に流水があり、扇状地地形を成している。また遺跡東端から国道4号付近にかけては平糠川の自然堤防が形成され、よって本遺跡平坦部分は後背湿地を呈する。野中遺跡はこの自然堤防上に位置している。

(2) 遺構

ここでは、多様な遺構が検出された野里上遺跡のみ取り扱う。検出遺構は、縄文時代の土坑1基、奈良時代（7世紀後葉～8世紀前半）の堅穴住居跡2棟、平安時代の掘立柱建物跡2棟、柱列1列、溝跡2条、耕作痕跡7区画、中世後半（15～16世紀）の火葬関連遺構10基、近世の土坑墓1基、詳細時期不明の土坑9基、溝跡18条、柱穴状土坑26個、杭1本、焼土遺構・炭化物集中6基である。

a) 堅穴住居跡

2棟は調査区西側の比較的高位な場所に近接して位置する。規模はS I 01が4m強、S I 02が8m弱で、後者はいわゆる大形住居の部類に入る。

カマド構築方位はともに斜面上方の西側である。カマドの構築は板状の凝灰岩を芯材としてこれに黄褐色粘土を貼り付けるという手法で共通している。煙道についてはS I 01が削平のため判然としないが、S I 02は掘り込み式である。煙道壁面にも板状の凝灰岩を配置している。

貼り床はS I 02にのみ認められた。カマド芯材の設置はこれと連動して実施されていたようである。

柱穴は両者とも4本である。S I 01にはこれ以外の内部施設が認められなかった。いっぽう大形住居であるS I 02では、壁溝、カマド側柱穴2個（P 1・3）から壁溝へ延びる間仕切り溝、P 3西側に構築された小ピット（P 5）が存在する。

構築時期はともに遺物から7世紀後葉～8世紀前半頃と推定される。

b) 掘立柱建物跡

S B 01はS I 01の南側、調査区西側の比較的高位な場所に、S B 02は低位部にあたる中央南寄りの平坦面に位置する。

前者は純柱式で、9個の柱穴から構成されると考える。規模は2間×2間で桁行き4.66m、梁間4.2mである。柱間寸法は210cm、256cmが用いられている。桁行きの方向はほぼ北を向く。

後者は1間×3間の8本柱で、東側中央に小穴2個が並行存在する。これとの柱間寸法は100cmである。桁行きの方向は北西を向く。また、本遺構北側に軸線を同じくしてS A 01とS D 15が存在しており、本遺構と一連の遺構である可能性が高い。同様の溝を伴う事例は秋田県の中田面遺跡、薬師遺跡などにおいても知られており、この遺構のばあいは13世紀中葉、12世紀後半～13世紀中葉の建物と推定されている（秋田県教委1980、秋田県埋蔵文化財センター2005）。

S B 01は検出層位から平安時代の構築と推定される。S B 02はTo-a面で検出されたことからその下年代とされる西暦915年以後の構築と言え、S A 01 P 3に残存していた柱材のAMS法による放射

性炭素年代測定結果を援用すれば、11～12世紀の所産といえる。

c) 土 坑

調査区全域に散在する。規模・形態ともに不定で、規則性は見出せない。縄文時代の構築と推定されるSK02は、開口部径約1.3mではば円形を呈し、断面はビーカー状を成す。

d) 耕 作 痕 跡

比較的高位部にあたる調査区中央西際斜面に2号が位置するほかは、すべて低位部にあたる中央以東の平坦面に立地している。

2号は、現地表面以下の一連の堆積を観察できる良好な断面が得られたことにより、作土層および歓・歓間が検出され畠跡と認識されるに至った。作土層にはTo-aが偏りなく細かく混入しており、人為的な攪拌作業の存在を強く感じさせる。他の6区画については作土層の検出がかなわず、「畠作に関連する擾乱痕跡」という認識に止まる。

なお、7区画のいずれもTo-aを切って掘削されており、その降下・堆積以降の所産であることが明白である。1号および7号の溝内堆積土中、2号の作土層歓間頂部付近から採取した土壤サンプルからフローテーション法により抽出した炭化物粒に対して実施したAMS法による放射性炭素年代測定の結果は、1号については層位学的年代とまったく相容れないものであったものの、2号は¹⁴C年代が 1190 ± 40 yrBP、較正暦年代が7.8%の信頼度で 690 AD～ 750 ADおよび87.6%の信頼度で 760 AD～ 970 AD、7号は¹⁴C年代が 990 ± 30 yrBP、較正暦年代が56.8%の信頼度で 980 AD～ 1060 AD、38.6%の信頼度で 1070 AD～ 1160 ADというものである。層位学的見解にこれを加味すれば、To-a降下年代を西暦915年としたばあい、2号はそれ以降～970年という10世紀初頭～後半の年代が導き出される。7号はとともに調和的であり、10世紀末～11世紀中頃あるいは11世紀後半～12世紀中頃の可能性がある。

e) 溝 跡

調査区中央から東端にかけての低位部・平坦面に位置するものが多く、SD03・04のみが斜面部にあたり標高の高い南西部に立地している。この2条はさまざまな点で他と異なる。

平面形態は、SD15が「コ」の字形を呈する以外はすべて直線である。SD15は単独造構である可能性も考慮して本遺構群に分類しているが、SB02・SA01と一連の造構である可能性が高い。種線は等高線に沿うように北一南を向くものが多く、これと異なるものでは前述のSD03・04が等高線に直交するように西一東に、SD05・14が斜行するように北東一南西、北西一南東に延びる。

規模はまちまちである。いずれの造構も実際の構築面で検出できたとはいはず、全体が確認されたものではなくいずれも途中で消失しているため単純には比較できない。その上で、SD03・04は開口部の幅が比して広く、04は1.75mを測る。横断面形も漏斗状や不整な逆台形状を呈し、深い。

構築年代は、SD15も含め低位部・平坦面に位置するものについてはSD01を除きTo-aテフラ降下以後といえる。SD01は降下直前である。SD03・04に関しては同テフラが介在せず、遺物も時期特定可能な出土状態ではないため不明といわざるを得ない。

f) 火葬関連造構

異地性の焼土・炭化物・骨片などが充填された浅い土坑と現地性の焼土造構とが近接して確認されたもので、Ⅲ層下位からⅣ層To-a面にかけて検出された。調査区中央の平坦面付近に集中して位置している。

土坑の形態は平面が梢円形、断面が浅い皿状を呈するものがほとんどで、平面規模は約1m以下である。焼土は平面規模約1.2m以下であるが、後世の擾乱のため平面形態の不明なものが多い。

土坑内堆積土中の遺物については、現地調査時に確認していた多量の炭化物と骨片のほか、堆積土

全量に対して実施したフローテーション・セバレーション法により S X05分から炭化種子が数種検出されている。これらのうち、S X05・12出土の炭化物に対しAMS法による放射性炭素年代測定を、またS X05出土骨片と炭化種子に対し分析・同定を実施した。¹⁴C年代・較正暦年代は、S X05が 430 ± 40 yrBP・83.9%の信頼度で1410 A.D.~1530 A.D.、S X12が 390 ± 30 yrBP・69.2%の信頼度で1440 A.D.~1530 A.D.で、2試料とも中世後半の15世紀~16世紀前半の可能性が高い。骨片は約800°C以上で焼かれた人骨（肋骨や四肢骨含む）、炭化種子はイネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、オニグルミ、トチノキと判明した。よって本遺構群は15~16世紀前半の火葬関連遺構と推定される。なお、本報告であえて「火葬墓」と断定的に呼称することを避け「火葬関連遺構」とした理由は、出土する人骨量が全部ではなく一部であり、主体は別の場所に埋葬された可能性が高いことに起因する。あくまでも主体的・本来的な「墓」とは一線を画す、火葬行為に関わる付随遺構の1つと捉えたからである。

g) 柱穴状土坑群・杭

S BあるいはS Aとならなかった柱穴状土坑は調査区全体で26個検出された。また、単独で杭が1本見つかっている。そのほとんどがIV層To-aテフラより上位で構築されたものである。

柱穴状土坑中で特筆すべきはK III 30 P 2で、柱材（126）が残存していた。樹種はクリである。また杭もモノ自体が残存していたことから検出できたもので（127）、樹種はムシカリである。いずれも当初は湧水量の多さから調査範囲外となっていた調査区中央部付近に位置するものであり、ぎやくにその湿地の環境の産物といえる。

2 考 察

（1）竪穴住居跡出土土師器の検討

a) 分類と時期推定

本遺跡出土の土師器については、IV章2節において形態的属性からの分類を試みた。まずはこれをまとめてみる。

壺…全体の形態が判断できる程度まで復元された個体がほとんどなく、各部位の属性を用いた分類は不可能であった。このため、部位別で最も形態的特徴が看取される口縁部を分類対象として用いることとした。結果、口縁部の残存する個体すべての共通属性として、体部から口縁部へかけて内湾する器形であること、体部外面に段あるいは沈線を有することが挙げられた。段・沈線の状態や条数は多样で、これにより細分を行っている。内面には段が付かない。また、底部については残存資料が少なく共通属性として前者と同列には捉えられないものの、体部と底部の境目の稜線が明瞭でない平底（いわゆる「平底風丸底」）と平底の2種のみが存在する。

甕…壺と同様に全体形の判断できる個体が少なく、各部位の属性を用いての分類は不可能であった。このため、形態的特徴が豊富な口縁部から胴部上半までを分類対象とした。器形は長胴型、球胴型、小型が存在するが、この形態分類ではすべて一括り取り扱っている。なお、全体形が復元された個体の特徴として、長胴型・小型に関しては体部最大径の位置が上半にあること、底径が大きく、体部最大径との比が小さめであることが言える。分類属性は、口縁部の長さ、口縁上部から口唇部にかけての形態、頸部の状態である。これらの属性のうち、口縁部の長さについては出土層位に違いが看取された。すなわち、S I 01において床面出土分はすべて長いタイプ、埋土分はすべて短いタイプであった。後者は平安期に属するとされるタイプであり、この出土状況と矛盾しない。また、分類属性の後

2者については沈線あるいは段を有する個体が卓越し、そのバリエーションも豊富である。ただし、沈線・段の施用部位は口縁上部から口唇部に限定されるという特徴を有する。

この手の土師器は「東北北部型土師器」(三浦1991、宇部2002)もしくは「沈線文土師器」と呼称されるものであるが、特に壺は「横走沈線文土器」「多条沈線文土器」(高橋1997)と呼ばれ、北東北の在地的な土器と理解されている。岩手県域および馬淵川流域における「沈線文土師器」の存在時期について、宇部則保氏は概ね7世紀前半から8世紀後半の間とし、壺のばあいは横走沈線文が7世紀中頃に見られるようになり、7世紀後葉から8世紀前半には口縁上部に限定され口縁上端が屈折して外傾したりほぼ直立気味になるものが日立ってくるとしている(宇部2000)。

ここからは、分類結果を基に他遺跡出土資料と対比することにより、本遺跡堅穴住居跡床面等出土遺物に対して若干の時間的・空間的検討を加えていく。この年代推定に当たっては、馬淵川流域の遺物を中心に論を展開している宇部氏、大野亨氏の一連の論考(宇部1989・1997・2000・2002、大野2001・2002)を軸とした。

まず、壺であるが、段・沈線の位置および底部形態から宇部氏の三段階(宇部2002)にあたると考えられるが、明瞭な丸底を呈するものが確認されず、これより若干後出の可能性がある。よって7世紀後葉から8世紀前半と捉えておく。ただし出土点数が少なく、詳述する材料は持ち合わせていない。

次に壺である。造構使用年代に関わる分類Aについて少し細かく見ていく。A Iのように口唇部を斜めに面取りする形態は短期間に限定されるものではなく、少なくとも7~8世紀を通して見られるもので、これ以降にも存在する。地域的に見れば、「壺Aの口唇部が角状あるいは沈線状にくぼむことの多いのに比べて、壺B(筆者注…壺Aは胴部上半が膨らむ壺、壺Bは胴部下半が膨らむ壺)にはそのような特徴があまり認められない点からみても壺Bが東北南部の系統であることが裏付けられている」(宇部2000)という指摘からも東北北部に顕著な形態といえるものである。また、A IIは口唇がA Iに比して先細りとなり受け口状を呈するものであるが、先端以外の形態はA Iと類似し、いずれにも外面の面取り部分が凹んで沈線状を呈するものがある等、調整動作的な差異はほとんどないに等しい。A IIと同様の形態を呈するものは、前述のように7世紀後葉から8世紀前半に認められるという(宇部前掲)。ただし、A IIの形態変化範囲は「受け口状」とされるものの中でも狭い部類に入る。

また、この口唇・口縁上端受け口状となるものには、八戸市丹後平遺跡2号墳出土分のように口唇が先細りにならず一定の厚さで推移するものも見られる。この点はA IVおよびA Vの属性と一致するものである。A IIとA IVおよびA Vを構成する各属性は、本遺跡では同時存在しながらも交わらず別々の個体に用いられているが、他方ではそれぞれの属性がさまざまな組み合わせで用いられていることがわかる。例えば二戸市中音根II遺跡の住居跡床面出土土器のばあい、50号址ではA IIとA IVがあり本遺跡S I-02と符合する壺形態も同様である。いっぽう、64号址のばあいはA I、A IIがあるに加え、頭部の段が長く、口縁上端が大きく内湾し口唇が先細るタイプが見られる。

b) 管見における当該土器出土住居の空間的広がりと内容

本堅穴住居跡群と同時期に存在した造構の空間的広がりを明らかにすること、加えてそれぞれの造物セット関係の相違点から今後の検討課題を炙り出すことを目的として、第6図で作成した本遺跡から半径10km圏内で検出された堅穴住居跡のうち、本遺跡住居跡床面・カマド出土土師器と同種のものが床面あるいはカマドで確認されているものを抽出した。

管見で確認された遺跡は、山中遺跡、北館B遺跡、上野遺跡(B・D・G地点)、小井田V遺跡の5遺跡で、造構数は12を数える。壺・壺とともに類似するのは上野遺跡B H83住居跡とA H42住居跡、小井田V遺跡S I-02住居跡の3棟で、他はほとんどが壺のみ類似する。壺の出土状況を見てみると、

上野遺跡B H83住居跡で受け口状の長胴甕2点とA VII 1点、同C B80住居跡で受け口状の長胴甕1点と口唇部形態がA IIで頸部に長い段を持つ長胴甕1点、同A H42住居跡でA IIの長胴甕と球胴甕各1点、小井田V 遺跡S I -02住居跡でA I 2点が出土している。この他は無く、各遺構における甕出土量中に占める当該遺物の割合も小井田V 遺跡S I -02住居跡を除き半数以下と低い。いっぽう、本遺跡における確認量は、S I 01・02両住居跡とも7剖を超えており、あくまでも「東北北部型土師器」が主体であったことを示している。同状況は、当該時期の大集落である中曾根II 遺跡の一部住居跡にもみられる。このようなあり方が何を原因とするものなのか、この追求が今後の課題となる。

(2) 動・植物利用…特に農耕に関わる事象

a) 検出された動・植物利用痕跡

- 今回の調査で確認された動・植物利用痕跡（遺構・遺物とも）をまとめると以下のようになる。
- ① 野里上遺跡S I 02堅穴住居跡カマド燃焼部手前焚き口堆積上から、炭化種子・実としてキビ、オニグルミ、動物遺体としてサケ・マス類の椎骨椎体片、魚類の鱗鱗等、鳥類/小中型獸類の破片、ニホンジカの基節骨。遺構所属推定年代から7世紀後葉～8世紀前半の所産。
 - ② 野里上遺跡K III～K IV グリッド低湿地における植物珪酸体分析により、基本層序IV層（To-aテフラ）直下から機動細胞イネ属タイプ珪酸体、同層直上からヒエ属等に見いだされるイネ科短細胞起源キビ（亜科）型フリル付き珪酸体、ムギ類類タイプの棒状型健齒縫珪酸体、コムギ属等に多く見いだされるイネ科短細胞起源ウシノケグサ（亜科）型ダブルライン珪酸体。所属推定年代は、それぞれTo-aテフラ降下年代（西暦915年と推定）の直前・後。
 - ③ 野里上遺跡2号耕作痕跡畠部作土層における花粉分析により、イネ属茎花粉が少量と、植物珪酸体分析により、キビ型の短細胞珪酸体、同小溝内からキビ族の機動細胞珪酸体（290個/gと少量）、キビ型の短細胞珪酸体、4号耕作痕跡小溝内からキビ型の短細胞珪酸体、イネ属の機動細胞珪酸体（250個/gと少量）。遺構所属推定年代から10世紀初頭～後半の所産。
 - ④ 野里上遺跡S X05・06埴土から、炭化種子・実としてイネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、オニグルミ、トチノキなど。遺構所属推定年代から15世紀～16世紀前半の所産。
 - ⑤ 野中遺跡S X01堅穴状遺構埋土最下位から、炭化種子としてコムギ、ヒエ。遺構所属推定年代から中世～近世の可能性あるが詳細不明。

S I 02検出例により、奈良時代の当該地域における鳥獸類、魚類など動物性資源利用の一端が垣間見られる。検出場所から見て、利用目的の第一義は食用と捉えてよいだろう。サケに関しては、平塚川に週上していたことが知られている（青森県立郷土館1997）。秋、産卵のため故郷の川に戻ってきたサケを捕獲したものと思われる。

植物性資源に関しては、奈良時代から中世（近世？）までの利用種の一端が確認された。いずれも食用種である。ただし、検出場所・場所の性格によりその持つ意味が異なる。①～③は、居住場所・遺構外・耕地という性格上、素直に食用目的の作物と考えて違和感なく、それを示す資料に加えてよからう。今回、奈良時代の耕地は検出されていないものの、周辺域における該期農耕の存在が示唆される。④は火葬関連遺構であるため事情が異なる。種子は多種類確認されているが、これらも食用が第一義で生産・採取されたものだろうから、当該地域における当時の作物と食糧を考える重要な資料になろう。加えてもう1つ、葬送に関わる儀礼的意味を有している可能性が極めて高い。儀礼に雜穀が用いられる例はさまざま知られている。本例も当該地域の中世における火葬儀礼の一構成要素と推定され、貴重な資料といえる。本件については次項で詳述する。

b) 当該地域における農耕痕跡

第6図の範囲で確認されている農耕痕跡を以下にまとめた（内容・年代は各報文による）。

- ① 田中3遺跡C G62堅穴状遺構の堆積土5層、床上、付属している溝、ピット中からイネの炭化種子が多量に出土。穂穀付きのものが多く、穗付きのものもある。平安時代（10世紀前半）とされ、炭化種子の¹⁴C年代測定結果（Libby Age）は未補正で940±80yrBP。遺構内埋土にTo-aテフラが成層しており、これより下位での検出。（一戸町教委1981）
- ② 田中4遺跡B I 56堅穴状遺構の堆積土5・6層、床上からイネの炭化種子が大量に出土。穂穀付きのものが多く、穗付き、茎付きのものもある。平安時代（9世紀後半）とされ、炭化種子の¹⁴C年代測定結果（Libby Age）は未補正で1030±70yrBP、1170±70yrBP。遺構内埋土にTo-aテフラが成層しており、これより下位での検出。（前掲）
- ③ 上野遺跡の3遺構から炭化種子が出土。9世紀後半～10世紀初頭とされるII D-2堅穴住居跡のP 4埋土最下部より多量のアワ、コムギ、少量のヒエ、オオムギ、キビ。平安時代？とされるII D 8 f土坑の底面直上から多量のイネと少量のヒエ、アワ、コムギ。15世紀末～16世紀代とされるIII D-1堅穴住居跡床面からイネ、オオムギ、マメ。（岩文理2001）
- ④ 鮎帯城跡の4遺構から炭化種子が出土。SK-05土坑より人骨片等とともにアワ、ソバ、小豆。SK-06・07・16土坑よりアワ。遺構は天正19年の落城後間もなく造られた墓塚の可能性があるとしている。（一戸町教委1999）

この中でやはり特筆されるのは田中3・4遺跡堅穴状遺構出土の大量のイネであろう。いずれもTo-aテフラの下位から出土しており、これより古いことははっきりしている。穂・茎が確認されていることからは、他地域からの搬入品ではなく在地産の可能性が指摘できよう。野里上遺跡におけるTo-aテフラ上・下位の植物珪酸体分析結果からも、10世紀初頭前後に当地域で稲作が行なわれていたといってよい。なお、④の例は本遺跡事例④と類似しており、次項で詳述する。

c) 管見における畠作関連遺構検出事例と構築時期に関する特徴

本遺跡において検出された7区画の耕作痕跡は、一戸町内における近世以前の耕作跡としては初見となるものである。これまでに本県で確認された当該遺構の帰属時期は、遺構自体の認知および検出が可能な特殊な条件下…テフラ等短期間に発達した被覆層が存在する状態でなければ非常に困難であるため、広範囲に多量の堆積を見たTo-aテフラに絡んで検出されたものが大半を占め、結果、平安時代に集中している。本遺跡付近も広く厚く同テフラに覆われており、検出には非常に好条件であった。

また、他遺跡における検出事例の大半は、同テフラに被覆されその後の変更を受けていない、つまり降下以前の痕跡であり、テフラ降下後の耕作痕跡と認知されたものは少ない（二戸市大向上平遺跡や同大向II遺跡など）。これらはテフラ降下後間もなく実施された復旧痕跡と理解されており（能登ほか2000・2001）、また同時に復旧前の、つまりテフラ降下前の「耕作痕跡」も確認されている（岩文理2000・2002）。テフラ堆積状態の有する意味は非常に重要で、テフラ降下前に放棄されたものか、テフラ降下により放棄されたものか、あるいはテフラ降下後にそれを除去・中和し耕作を継続したもののかなど、構築時期の推定だけではなく、火山噴火とテフラ降下という災害イベント時における人的動向をも示唆させ得るものである。本遺跡例はテフラ降下後に開始された畠作痕跡であるが、この「テフラ降下後のみ」、換言すれば「テフラ降下前には無く、降下後に同地が適地され開始された」と理解できることの持つ意味が非常に重要なと思われる。この意味について、次目で立地と堆積土壤の観点から述べていく。

d) 立地および堆積土壤から見た本遺構群の特徴とその意味

本遺構群は、南北に伸びる小丘陵の裾野、同丘陵からの河川堆積により形成された扇状地地形上の東向き緩斜面（2号耕作痕跡）とその東側にあたる低位部平坦面（その他すべて）に立地している。後者は、さらに東側に北流する平糠川により形成された南北に延びる自然堤防に挟まれ、後背湿地を呈する。前者は、その形成過程で堆積した複数の砂礫層の存在や、何より緩斜面地であることから排水性がよい。奈良時代、当地に住んだ人々はこの緩斜面地を居住域として選んだ。低位部にその痕跡はない。ただし、耕地（水田と仮定している）として利用した可能性があるのは前述したとおりである。

いっぽうで、平安時代中～後期の人々は、中心城がどこかは不明とはいえ、低位部に掘立柱建物を構築し、また畠作耕地として用いた。この選地の相違は何に起因するものであろうか。当然、複数の要因が作用しているであろうが、うち1つはTo-aテフラの降下と堆積にあったと見たい。

大規模なテフラ降下による影響として、光合成不良による枯死や水分を含んだテフラ自身の重みによる倒木などにより引き起こされる森林の破壊と、それに伴う保水力低下による土砂崩れ等斜面地の地形崩壊が発生することが知られる。10世紀初頭の十和田火山噴火は、日本国内で過去2,000年間に起きた噴火の中で最大級と考えられており、小鳥谷地域に降下したテフラ量も現存量をはるかに超える相当なものだったであろう。今回、佐瀬氏の植物珪酸体分析により低位部のTo-aテフラ直上層におけるタケアキ科起源珪酸体の減少とヒゲシバ型ヨシ属タイプの増加…一時的な過湿な環境出現の可能性が指摘されたが、この現象は同テフラ降下により発生した遺跡西側丘陵の森林破壊と保水力低下による低位部への流水量の増加が要因ではなかったか。また、降下テフラには流動性が高いという特徴があり、To-aも主として流水により丘陵部から河川流域へと運ばれ、後背湿地の調査区東部低位面に多く流入・堆積したことは土層堆積状態の観察から明らかである。堆積に際して同地は、一時的に前述のような過湿環境に見舞われたものの、基本的にテフラは保水性が低いため徐々に低湿状態となり、ぎやくに常時排水性は増して降下前より乾燥した環境を呈するようになったと考えられる。環境の変化した低位面の状態を認知し、畠作耕地として利用を開始したのではないだろうか。緩斜面地にある2号耕作痕跡と低位部平坦面にある7号耕作痕跡の¹⁴C年代測定結果に現れた差は、この変遷を示した可能性がある。

e) 「畠跡」と「耕作痕跡」…遺構自体の構造的特徴

今回、2号については畠跡と認定することができた。これは垂直方向に連続した土層断面で畠と畠間が確認されたためで、歓立てを実施するばあいの畠の認識には当然不可欠な点である。畠はその性格上、他の遺構に比して強度が弱く、風化による畠・畠間の平坦化が進行しやすい。また、常畠のばあい連続耕作されることから前耕作痕跡は破壊されるのが常である。さらに、作土と地山（旧地表面）は基本的に同一土壤であるからその差異の判別が極めて難しい。よって、遺構として認知されるには明瞭な被覆層や掘削層が無ければ困難な訳だが、2号のばあいは遺構下位にTo-aテフラ層が、また上位には土石流堆積物が存在したことから畠跡と認定でき、作土層や遺構下位の状態まで推定することができる。この耕起から埋没までを想定すると次のようになる。

- ①To-a降下（14層）、その後土壌堆積→②15層までの耕起と③土壌攪拌（11～13層）および歓立て（11層）→④放置（放棄？）→⑤畠間埋没（10層）→⑥土石流の堆積（8層）

耕起に関して、大半は14層（To-a）を掘り抜くが15層中で止まっている、さほど深くまではおよんでいない。14層下約10cm以内であろうか。耕起時、14層上位に土壤の堆積がどの程度あったのか不明であるが、仮に推定してみると次のようになる（注：土圧は考慮していない）。本遺構付近の削平の少ない地点における現地表面からIV層上面までの層厚は約125cmであることから、土壤の堆積スピードは $125\text{cm} \div 1100\text{年} = 1\text{年平均} 0.11\text{cm}$ となる。To-aテフラ降下年代を西暦915年として、本遺構の

¹⁴C年代測定結果を援用すれば①～②間の時間幅は長くとも 970-915=55年と算出され、0.11cm×55年=6.1cmとなる。この程度の堆積であれば、耕起は20cmにおよばないこととなる。

作土（11・12層）中のテフラは土壤とよく混合し攪拌が進んでいることから、単回ではなく複数回の土壤移動が想定される。また、平面で検出された溝状プランと畠の畠間の位置が合わないことから、耕起と畠立てが必ずしも連動したものではないこと、溝状プランの条間隔が畠間に比して狭い箇所があることから、複数回の耕起があったことなどがいえよう。以上のことから本遺構の所作として、荒起こしもししくは天地返し的耕起が成されたことと、その（前）後の耕作行為ではおもに上位土の移動、つまり畠立てや土寄せのみが複数回繰り返されたことが読み取れる。天地返し的耕起がどの程度の頻度で行なわれたかは不明だが単回ではないことから、多年度に亘る耕作の継続が示唆される。ただし、To-a未掘部分が広く残存することから、数年耕作した後放棄したものとの推定が可能である。

以上の推定を他遺構に当てはめると、その痕跡（筋状掘削痕）は平面における溝状プランと近似し、同種と捉えられることから、荒起こしもししくは天地返し的耕起痕が主であるといえる。これより上位にある作土層、畠・畠間については、その把握が難しく、認知できなかったものと考えられる。

次に、2号畠跡の畠形態（畠立て間隔）復元と、これ以外の各遺構における掘削間隔からの作業形態・頻度の推定および2号の畠立て間隔との比較による性格検証を目的として、畠間・溝間の心地距離計測を実施し第26表を作成した。なお、以下で行なう検証については、耕起を伴う畠作がある程度規則的な間隔感を持った上で行なわれていることを前提としている。

2号畠跡は畠間底部中央で計測している。これによると、2号畠跡では51～70cmにピークが認められ、これが1畠分のスパンとなる。これより間隔の広いものは、中間で1畠分検出できなかつたものと考えられる。いっぽう、下部掘削痕は51～80cmがピークで、若干ばらつくがこれに似る。

他の耕作痕跡のうち、1号は51～60cm、5号は61～70cmと121～140cm、6号は61～70cm、7号は31～70cmにピークが認められる。4号はまったくバラバラである。

ここで注目したいのが、5号の数値である。検出できた条数は6条と少ないがその間隔はきれいに2つのピークに分かれ、なおかつその数値は2倍・2分の1という規則的な関係を呈する。このどちらかを「単回の掘削間隔・1スパン」と見なしてよいだろう。その痕跡残存過程として2つ想定される。単回が61～70cm程度の間隔だったが一部の掘削が浅く121～140cmを呈したか、あるいは121～140cmの間隔で掘削し、次回作業をその中間で行なって一部が61～70cmを呈したか（2回目以降の耕起や畠立てに関しては、前回耕作時の畠頂部に鎌を入れて畠と畠間を逆転させる方法がある）。いずれかは不明である。ただ、1号および6号の数値も非常に似通っており、7号にしても31～50cmも多いものの70cmまでに1つのピークを持つ傾向は同様である。さらに、上記のとおり2号畠跡も51～70cmと同規模であることから、51～70cmもししくは61～70cm程度で一つのスパンという意識は持っていたといえよう。

いっぽうで、4号および7号は広・狭が入り乱れており一様ではない。うち、狭いものの存在は、その原因が複数回の耕起にあると見てよい。広いものについてはさまざまな原因が想起されるが、他遺構の状況から元々2mを超える間隔だったとは考えにくい。2号で実施したTo-a上位層厚の推

第26表 耕作痕跡における溝跡の心地間距離

遺構名	1号	2号 発現層 痕跡	2号 痕跡	3号	4号	5号	6号	7号
耕間 (cm)								
21～30	1	—	—	—	2	—	—	1
31～40	3	1	1	—	1	—	1	5
41～50	2	3	2	—	1	—	1	6
51～60	6	3	3	—	3	—	6	6
61～70	1	2	3	—	2	2	2	5
71～80	—	2	1	1	2	—	1	1
81～90	—	1	1	1	1	—	—	—
91～100	—	—	1	—	—	—	—	—
101～110	—	—	—	—	—	—	—	1
111～120	—	—	—	—	—	—	—	2
121～130	—	1	—	—	—	—	—	1
131～140	—	—	—	—	1	2	—	1
161～170	—	—	—	—	—	—	—	1
181～190	—	—	—	—	—	—	—	1
211～220	—	—	—	—	1	—	—	—
291～300	—	—	—	—	—	—	—	1

定を本遺構付近に当てはめると、現地表面からⅣ層上面までの層厚は約90cmで、土壌の堆積スピードは90cm÷1100年=1年平均で0.08cm、本遺構の¹⁴C年代測定結果は較正暦年代が56.8%の信頼度で980 A.D~1060 A.D、38.6%の信頼度で1070 A.D~1160 A.Dと出ており、それぞれTo-a降下後約145年または250年までとなることから、0.08cm×145・250年=11.6・20.0cmと算出される。2号の結果と比較すると2~3倍程度深かった可能性があり、部分的に掘削が及ばなかった可能性は十分にある。

最後に、耕作時期および期間の差について少し述べておく。前述のように年代測定結果の差から、2号と7号には時間的・地点的変遷の可能性がある。低位部に関しては、濃の間隔から6号付近は極めて単回に近く、4・7号付近は複数回耕起したといえ、耕作範囲の変化が看取される。

(丸山)

(4) 火葬関連遺構、中世貨幣から…中世の小鳥谷・穴久保・野中

a) 中世の小鳥谷

野里上遺跡・野中遺跡の位置する一戸町小鳥谷地区では、これまでにも発掘調査を含む調査研究が行われている。以下、本調査以前に行われた中世に関する調査成果をまとめておきたい。

野里上遺跡の南、約1.1kmに位置する仁昌寺II遺跡（岩文理2002）では、堀立柱建物、堅穴建物が検出され、15世紀代の白磁皿、線描き蓮弁文の青磁碗が出土しており、本造物と同時代の遺跡が存在することが確かめられている。また、小鳥谷地区の南、平糠川左岸に位置する「五月館」は中世城館と推測される遺跡である。平成13年に小鳥谷バイパス関連遺跡として発掘調査（岩文理2004）が行われているが、城館の主体部と推測される部分から離れた調査範囲であり、明確な中世城館を構成する遺構、遺物は検出されていない。しかし調査区外には明確な堀切や平場が確認され（調査担当者による）、具体的な内容は不明であるものの、中世城館であることは疑いない。内史署2巻（岩手県立図書館編1973）には、九戸の乱の際に姉帯城に籠城した者の中に「小治屋攝津」なる人名が記されている。岩手県中世城館分布報告書（岩手県教委1986）では「（五月館は）中世では九戸の乱で姉帯城に籠城した小鳥谷攝津の居館で、別名小鳥谷館ともいわれている」と記される。これらの記述から、五月館が「小鳥谷攝津」の居館であるか否かはともかく、小鳥谷集落における中核的な中世後半の城館である可能性を推定できる。

また、小鳥谷地区には中世の石造物が所在した可能性が指摘されている。一戸町史（一戸町史編纂委員会1982）には、宝篋印塔として「小姓堂神社前畠中墓地」に完全な組み合わせのものが1基と、「小鳥谷小学校創立の觀音堂境内、紛失、多人数の証言」と記されている。また板碑は、駒木八幡宮入口に種子を有する板碑が所在すると記されているが、「一戸町の石造文化財ーその2ー」（一戸町教委1985）では「種子の存在を確認し得なかつたため参考として掲げるにとどめた」とされている。以上のようにいずれもはっきりしない事例であるため、小鳥谷地域に限定したばかり、現状での評価は困難であるが、同地域の北に隣接する小姓堂神社における宝篋印塔の存在は、少なくとも中世の当該地域に石塔を造立できる階層の者が存在したことを示す。

b) 火葬関連遺構について

野里上遺跡において確認された、人間の焼骨片が出土した遺構（S X05・06・12）およびその近辺に点在する焼土遺構と焼土・炭化物集中（S X02・03・04・10・11・13・16）については、前述のように15~16世紀前半の火葬関連遺構と推定されるに至った。以下、本項では県内を中心とした類例との比較を行い、改めて本遺構が中世火葬墓の一形態として認識し得るかについて検討し、加えて今後の課題も抽出してみたい。なお、以下では「火葬墓」という名称を焼骨を出土する遺構の総称として

便宜的に用いていることをお断りしておく。

上記の10遺構は、調査区中央部にある標高178m前後の東側へ傾斜する緩斜面上に集中している。検出層位はIV層上面で、十和田aテフラ堆積層の上位で検出されていることから、放射性炭素年代測定で得られた年代との間に矛盾は生じない。また、周辺では複数の焼上遺構が検出されている。

県内の中世火葬墓とされている遺構を概観すると、A：焼骨と共に焼土・炭化物が伴い、火葬を主体に行なったと考えられる遺構と、B：焼骨を收拾して埋葬した遺構の2つに大別が可能である（ただし明確な差別化は困難）。②は、県内例を概観すると「墳墓」を構成する一つの遺構として報告される例が多い。墳墓自体が火葬遺構と埋葬遺構の複合体であると考えられる例（墳館遺跡・岩手県教委 1980など）もあるが、今回は「異なる地点」にて火葬された骨を埋葬した遺構として認識した。本遺跡例は、遺構形態と規模、および炭化物・骨片の出土状態の比較から、Aに該当すると考える。

Aは、盛岡市台太郎遺跡（岩文理2003）、平泉町本町II遺跡（岩文理2003）、県北部では、八幡平市（旧・安代町）水神遺跡（岩文理1985）等に報告例がある。これらの特徴として、I：大半が不整な掘り方を呈し、平面規模・深さと共に同時期とされる土坑墓より小さい、II：埋土中に炭化物が多く混入し、炭化した植物種子、被熱した錢貨が出土する例も多い、III：出土する骨はいずれも細片で、頭蓋骨等の主要部を欠く、の3点を挙げることができる。Iに関しては、周囲に存在した適当な窪地を意図的に利用したと考えられる例もある。台太郎遺跡では溝跡の堆積土上部、秋田県大仙市払田横跡では竪穴住居跡の堆積土上部で検出されている。I～IIIについて本遺跡例と比較すると、IについてはSX05・06・12いずれも平面形が1m以下の楕円形で深さが20cm以下と浅い点、IIについては埋土に多量の炭化物が混入し、SX05・06の土壤中からイネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、オニグルミ、トチノキなどの炭化種子が得られている点、IIIについてはすべて細片で特定された部位は肋骨と四肢骨のみである点、というようにそれぞれの項目で類似点が存在する。以上、現時点においては比較対象となる類例遺構自体の少なさは否めないものの、これら事例と多くの類似性を有することから、同一の性格を持つ遺構である可能性が高いといえよう。

今回得られた課題として、焼土・炭化物・骨片廐棄遺構に隣接する焼土遺構との関連性の追求がある。共に火の使用を示す遺構であり、この2つが複合して機能することで一連の葬送空間を形成していた可能性が指摘されよう。管見に触れた範囲の事例であるが、秋田県大仙市払田横跡では中世とされる火葬墓および焼土遺構群と墳墓が半径10m内の近接した範囲に近接しており、相互の関連性が指摘されている（秋田県教育庁2001）。遺物については、焼骨・錢貨ばかりでなく、共伴した炭化種子も火葬に伴う副葬品と考えられた。炭化種子に関しては本遺跡例も同様の状態を呈していたわけだが、これは本来的な副葬品であるのか、当時の葬送儀礼復元のためには重要な問題であり、複数の事例との詳細な比較、検討が必要である。そのため今後は、野外調査段階で識別可能な遺物・骨片の採取は当然のこと、土壤サンプルの採取と微細遺物の回収と分析にも留意したい。また、遺構規模と出土骨の量と大きさから、これらが主体的な埋葬施設と考えるには疑問が残る。SX05・06・12は、被葬者にとって終の安息の地であったのだろうか。この問題は、すでに墳館遺跡の報文中でも指摘できただところである（岩手県教委1980）。焼上と、焼成された人骨の一部が堆積する浅い土坑とがそれぞれ複数集合している区域。素直に見れば、「荼毘所」と言えまい。今回はその可能性を指摘し、後は今後の資料増加と分析を待ちたい。

本遺跡の東方約1.6kmに位置する姉帯城では、本遺跡例に類似した墓坑が検出されている（一戸町教委1999）。報文によると、人骨・炭化種子・被熱を受けた錢貨が出土している。ただし、人骨に被熱の痕跡は認められないという。同遺構の年代について、報告者は「九戸の戦い」による城の落城・

廃絶と前後とした16世紀後半とし、その被葬者をその際の戦死者と推定している。成因の特殊性に加え、その構築年代から本遺跡例との関連性についても注目されるものである。

c) 中世の錢貨について

中世に流通していたと考えられる錢貨（すべて模鋳錢）として、野里上遺跡から紹聖元寶（北宋錢・初鑄1094年 以下カッコ内記載方法同様）と洪武通寶（明・1368年）が、野中遺跡から淳熙元寶（南宋・1174年）、洪武通寶に加え、無文錢（輪錢）が出土した。以下、野中遺跡の柱穴と考えられるB V20 P 6から、淳熙元寶1枚、洪武通寶1枚、模鋳錢とされる無文錢（輪錢）5枚の計7枚が一括出土した事例に着目し、これを足掛かりに遺跡の年代観・性格等の諸相について考えてみたい。なお、淳熙元寶の出土事例は県南部が多く、埋蔵錢中で多く確認されている。県北部では二戸市金田一での報告例があり、これも埋蔵錢中（81枚中2枚）から確認されたものである（井上1999）。県北部の中世遺跡から多く出土する洪武通寶、永楽通寶に比べると絶対的な流通量の少ない錢である。

柱穴から模鋳錢を含む錢貨が複数枚出土する事例は、県内では軽米町上尾田の館跡（岩文埋1999）、隣県の青森県では青森市浪岡城跡（丁藤2001、浪岡町教委2001・2003）で知られる。

16世紀後半～末期に機能した城館とされる上尾田の館跡では、隣り合う5号竪穴建物跡のP 1と2号掘立柱建物跡のP 1の2造構で錢貨が一括出土した。ここで出土錢の構成は、前者では祥符元寶（北宋・1008年）1枚、洪武通寶6枚、無文錢3枚の計10枚、後者では天聖元寶（北宋・1023年）1枚、元豐通寶（北宋・1078年）2枚、開元通寶（唐・621年）1枚を含む計5枚であり、共に柱穴掘り方部分からの出土である。前者において洪武通寶が主体に構成される点は、出土錢貨168枚中62点と突出した出土割合を示す調査結果に即しており、洪武通寶と無文錢が共に出土する点は本遺跡例との共通点として挙げられる。当該遺跡の位置する岩手県北地方における洪武通寶と無文錢を含む模鋳錢との関連性の強さについてはすでに先学の指摘があり、その鑄造・流通年代については「16世紀から17世紀前半期」（本澤1998）、「中世後期で16世紀」（阿部2001）とされている。ここでは短絡的な援用は控えるが、錢貨以外に時期決定に足る出土遺物を欠く野中遺跡の年代観に対し、大きな示唆を与えるものであろう。

さて、この「柱穴から錢貨が複数枚出土する」という事象の解釈については、上尾田の館跡、浪岡城跡とともに、地鎮祭祀と関連付けて「埋納」された可能性が指摘されている。ここでは、その目的とともに、選ばれた錢種にも着目したい。野中遺跡では7枚中5枚、上尾田の館跡5号竪穴建物跡P 1では10枚中3枚、模鋳錢の中でも悪錢とされる錢名が読み取れない輪錢が混入している点が注目される。加えて、浪岡城跡では2例中2例とも模鋳錢とされる輪錢のみがそれぞれ11枚（前掲2001）、8枚（前掲2003）の出土である。類例が少なく推論の域を出ないが、錢貨を柱穴に埋める「埋納」という行為と輪錢を含む模鋳錢の間には何らかの関連性があるようと思われる。粗悪な模鋳錢である輪錢が貨幣経済を担う錢貨として流通していたかについては議論する必要も指摘されている（水井2001）。

以上、岩手県北地方における洪武通寶と模鋳錢の様相から本事象について検討したが、上尾田の館跡2号掘立柱建物跡は、5号竪穴建物跡と「連結することは確実」（前掲）とされるほど近接し、関連の強さが指摘されているものの、こちらは洪武通寶や確実な模鋳錢を含んでいない。このように、様相が一様で無いことも事実である。以上の点に留意しつつ、さらなる類例の増加を待って再度異なる視座から検討が加えられる必要があろう。

（荒谷）

引用・参考文献

- 阿部勝則 2001 「岩手県北の模鏡銭」『中世の出土模鏡銭』東北中世考古学叢書1 東北中世考古学会
- 井上雅幸 1999 「岩手県の出土貨幣」『東北地方の中世出土貨幣－東北中世考古学会第5回研究集会資料集－』 東北中世考古学会
- 宇都則保 1989 「青森県における7・8世紀の土師器—馬淵川下流域を中心として—」北海道考古学第25輯
- 宇都則保 1997 「7・8世紀の沈銀文土師器」『般夷・律令国家・日本海』日本考古学協会1997年度秋田大会
- 宇都則保 2000 「古代東北地方北部の沈銀文のある土師器」『考古学ジャーナル』462
- 宇都則保 2002 「東北北部十郎器にみる地域性」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古希を祝う会
- 大野亨 2001 「V. 考察」『酒美平遺跡II発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第88集
- 大野亨 2002 「V. 考察」『首塙浜(3)遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第92集
- 工藤清泰 2001 「青森県浪岡城跡の模鏡銭」『中世の出土模鏡銭』東北中世考古学叢書1 東北中世考古学会
- 高橋與右衛門 1997 「岩手県内の北海道系土師器」『般夷・律令国家・日本海』日本考古学協会1997年度秋田大会
- 永井久美男 2001 「模鏡銭の全国的様相」『中世の出土模鏡銭』東北中世考古学叢書1 東北中世考古学会
- H日本考古学協会 2000 『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会編
- 能登健・中村直美・菊池貴広 2000 「十和田a火山灰による災害と復旧」『紀要』XIX (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 能登健・中村直美・菊池貴広 2001 「十和田a火山灰による災害と復旧(2)」『紀要』XX (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 本澤信輔 1998 「東北地方に分布する鉄製シビタ錢について」『紀要』XIV (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 三浦主介 1991 「本州の擦文化」『考古学ジャーナル』341
- 秋田県教育委員会 1980 「綿治城跡・片沢跡遺跡II・中田面遺跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第69集
- 秋田県教育委員会 2005 「葉山遺跡」秋田県文化財調査報告書第388集
- 秋田県教育庁古出柵跡調査事務所 2001 「弘田柵跡」第117・118次年度概要「秋田県文化財調査報告書第323集
- 青森県立歴史館 1997 「馬淵川流域の遺跡調査報告書」青森県立郷土館調査報告書第40集 考古-11
- 一戸町教育委員会 1981 「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書I」一戸町文化財調査報告書第1集
- 一戸町教育委員会 1982 「一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書II」一戸町文化財調査報告書第2集
- 一戸町教育委員会 1984 「上野跡—昭和58年度発掘調査報告書I」一戸町文化財調査報告書第7集
- 一戸町教育委員会 1985 「一戸町の石造文化財—その2—」一戸町文化財調査報告書第10集
- 一戸町教育委員会 1987 「上野跡—一戸城跡—昭和61年度一戸跡跡発掘調査報告書」一戸町文化財調査報告書第18集
- 一戸町教育委員会 1999 「小井田V遺跡」一戸町文化財調査報告書第40集
- 一戸町教育委員会 1999 「始帝城跡」一戸町文化財調査報告書第41集
- 一戸町史綱要委員会 1982 「一戸町史」上巻
- 岩手県教育委員会 1980 「東北被貢自動車道周辺埋蔵文化財調査報告書II」第52集
- 岩手県教育委員会 1986 「岩手県中世城跡分布調査報告書」
- 岩手県立博物館 1973 「内史署(1)」岩手史叢第1巻 77頁
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1985 「水神道路発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書(以下、「岩文埋蔵調査」と略称)第96集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1999 「上尾田の船跡発掘調査報告書」岩文埋蔵調査第300集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2000 「大向平上遺跡発掘調査報告書」岩文埋蔵調査第335集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 「上野遺跡発掘調査報告書」岩文埋蔵調査第359集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 「人向II遺跡発掘調査報告書」岩文埋蔵調査第387集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 「上高寺II遺跡・仁高寺遺跡発掘調査報告書」岩文埋蔵調査第400集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003 「本町II遺跡 第二次発掘調査報告書」岩文埋蔵調査第410集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2003 「台太郎遺跡 第23次発掘調査報告書」岩文埋蔵調査第415集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004 「五郎館跡・仁昌寺III遺跡発掘調査報告書」岩文埋蔵調査第421集
- 仙台市教育委員会 1995 「トノ内浦遺跡 第5次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第202集
- 仙台市教育委員会 2000 「酒尚遺跡 第1・3次調査」仙台市文化財調査報告書第241集
- 浪岡町教育委員会 2001 「平成12年度 浪岡町文化財紀要」I
- 浪岡町教育委員会 2003 「平成14年度 浪岡町文化財紀要」II

写 真 図 版

写真図版凡例

1. 野外調査写真は縮尺不定である。
2. 遺物写真については縮尺を揃えるよう努めたが、厳密ではなくあくまでも概数である。各遺物種別ごとの縮尺概数は下記のとおりである。

縄文土器	1/3
剥片石器および石核	2/3
土師器	1/3
鉄製品	1/2
木製品	1/6
銭貨	1/1



調査前風景（南西から）



基本土層B（南から）



基本土層C（南から）

写真図版1 調査前風景、基本土層（1）



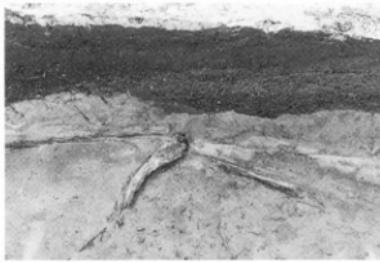
基本土層A（南から）



植物珪酸体分析試料採取土層A（北から）



基本土層D（南から）



低湿地試掘トレンチX III 植物遺体出土状況（南から）

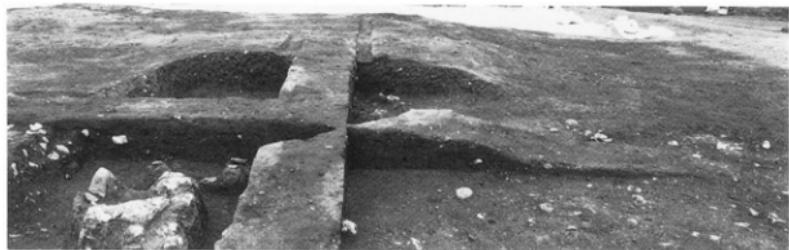


低湿地試掘トレンチX III 全景（西から）

写真図版2 基本土層（2）



平面（東から）



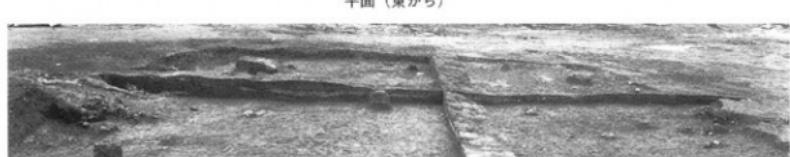
断面A-A'（西から）



カマド断面f-f'（東から）



p i t 1断面（東から）

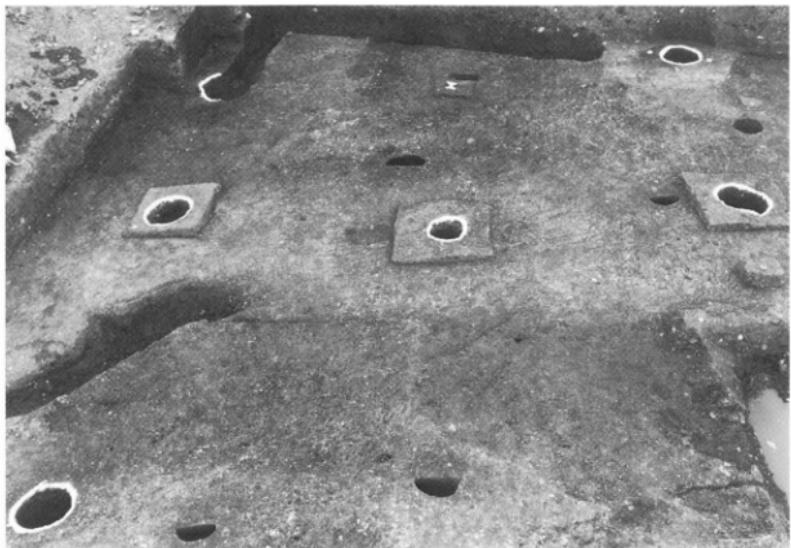


断面B-B'（西から）

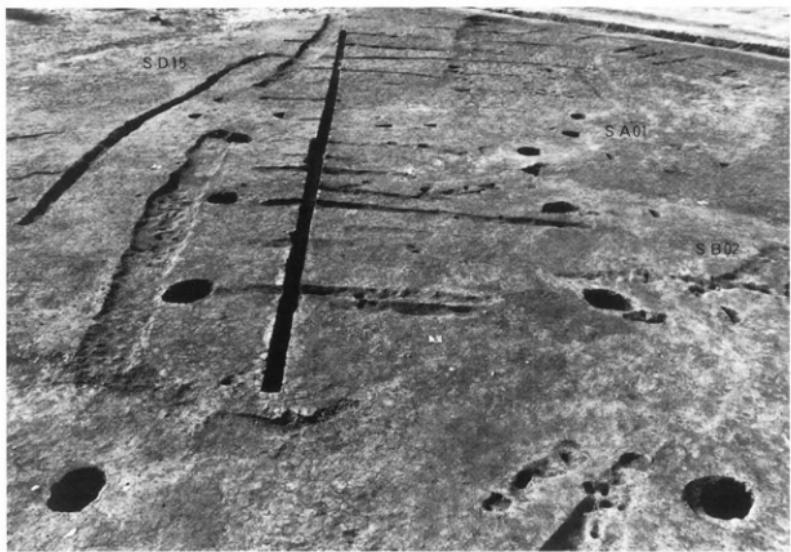


カマド平面（東から）

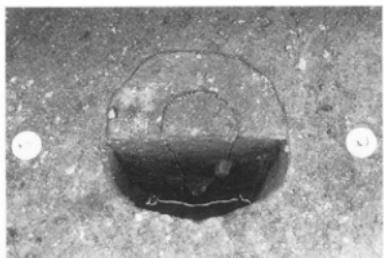




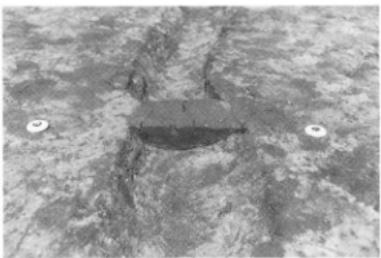
S B01 平面（北から）



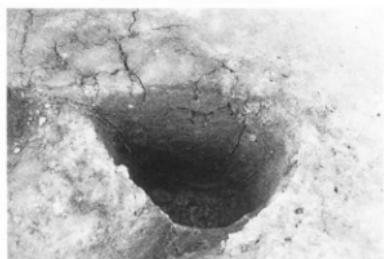
S B02、S A01、S D15 平面（南東から）



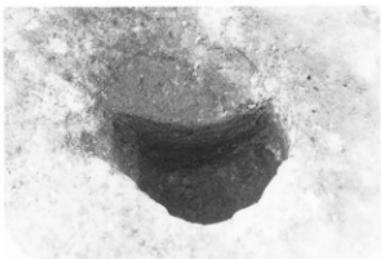
S B01 P 2 剖面 (北から)



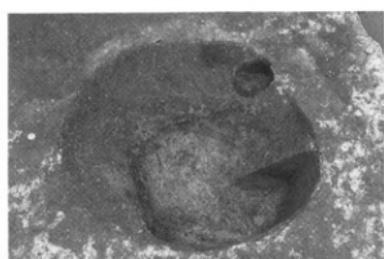
S D15 剖面 (南東から)



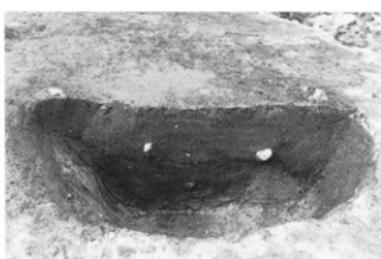
S B02 P 6 剖面 (北東から)



S B02 P 8 剖面 (北東から)

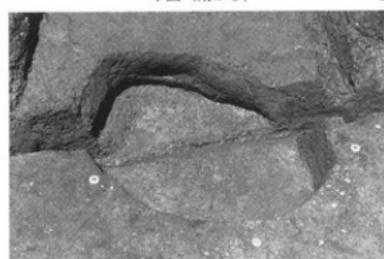


平面 (南から)



S K01

断面 (南から)

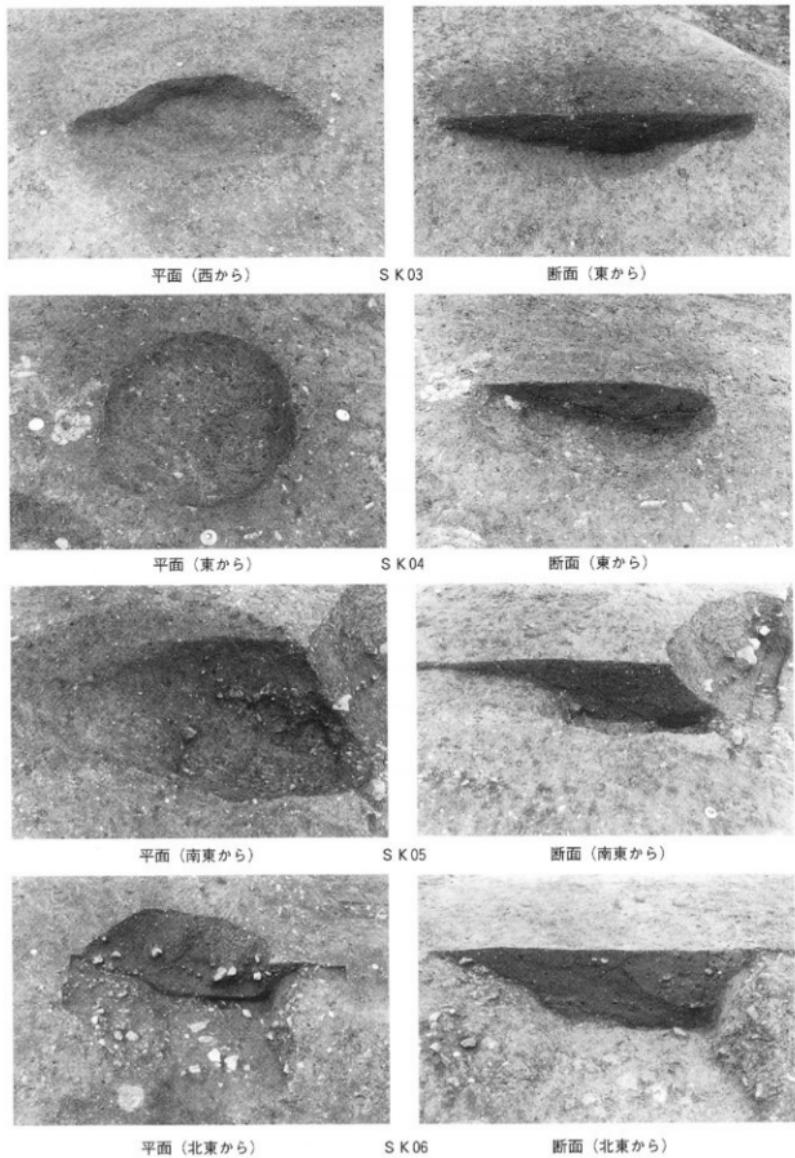


平面 (南から)



S K02

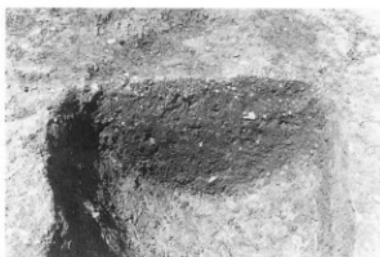
断面 (南から)



写真図版7 S K 03~06



平面（南東から）



S K 07

西面（南東から）



平面（北東から）

S K 08



断面（南から）



平面（南東から）

S K 09

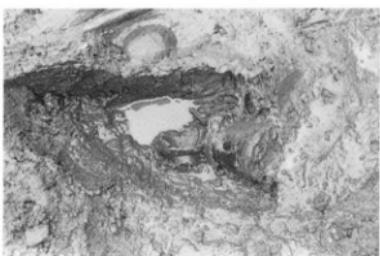


断面A-A'（南東から）



平面（南から）

S K 10



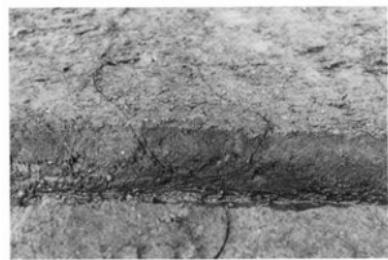
木製品等出土状況（西から）



完掘（東から）



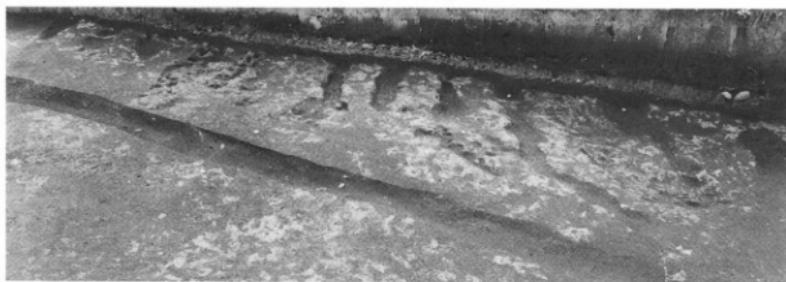
検出（東から）



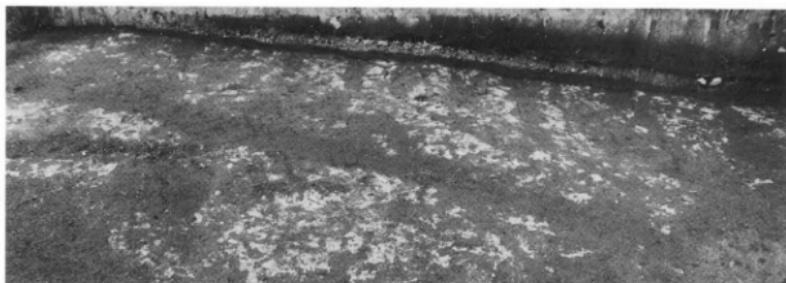
断面A-A'部分（東から）



To-a 検出状況（南端・南から）



完掘（東から）



検出（東から）



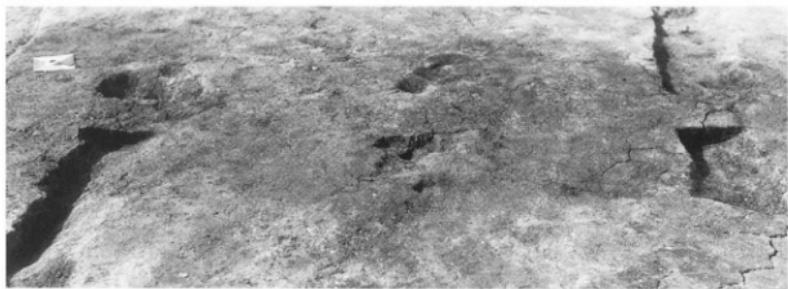
断面A-A'（東から）



断面A-A' 中央部分（東から）



14層T o-a 近写（東から）



3号耕作痕跡 断面（南から）



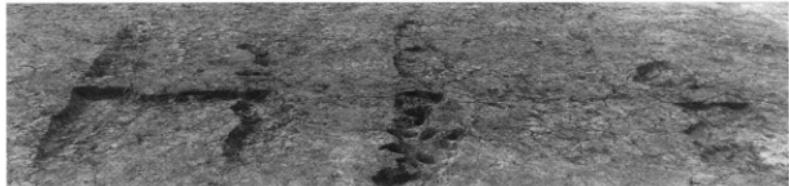
4号耕作痕跡 完掘（北東から）



4号耕作痕跡 断面中央部分（南西から）



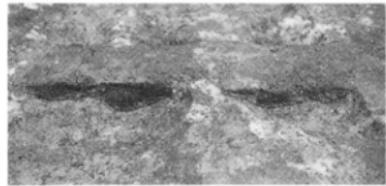
5号耕作痕跡 完掘（南から）



5号耕作痕跡 断面（南から）



7号耕作痕跡 完掘（北から）



7号耕作痕跡 断面（南から）

写真図版12 5号・7号耕作痕跡



S D01・02 平面（南から）



S D02 拡張分平面（南から）



S D01 断面A-A'（南から）



S D03・04 平面（東から）



S D02 断面A-A'（南から）



S D03 断面（東から）



S D 04 断面（東から）



S D 07~09 平面（南から）



S D 05・06 平面（南西から）



S D 07 断面A-A'（南から）



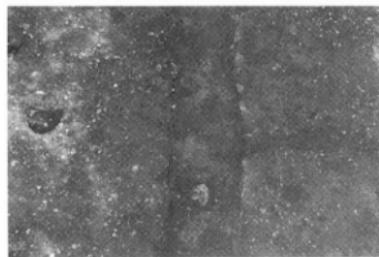
S D 05 断面（北から）



S D 08・09 断面（南から）



S D 06 断面（南東から）



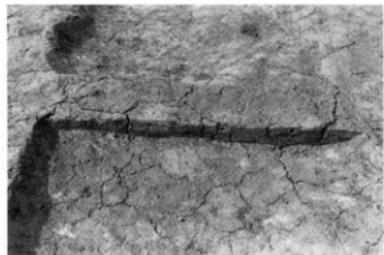
S D 07 工具痕検出状況（南から）



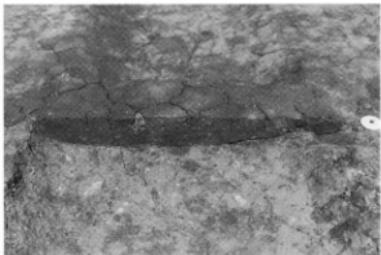
SD 10・11 平面（南から）



SD 12・13 平面（南東から）



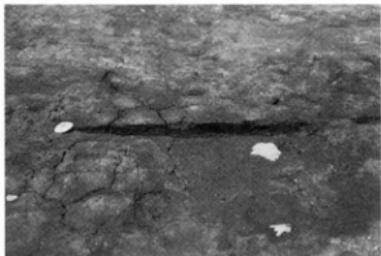
SD 10 断面A—A'（南から）



SD 12 断面C—C'（南東から）



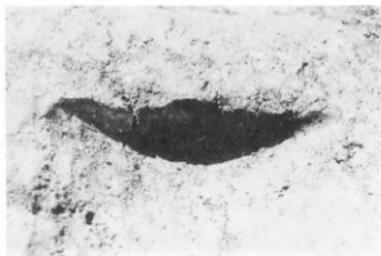
SD 11 断面A—A'（南から）



SD 13 断面（南東から）



平面（東から）



断面（東から）



SD16 平面（南から）



SD17 平面（南から）



SD16 断面（南から）



SD17 断面B—B'（南から）



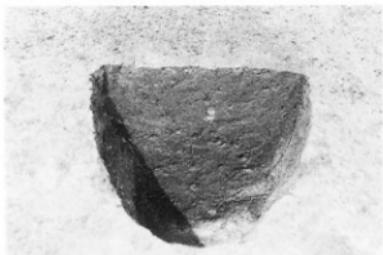
SD18 断面（南東から）



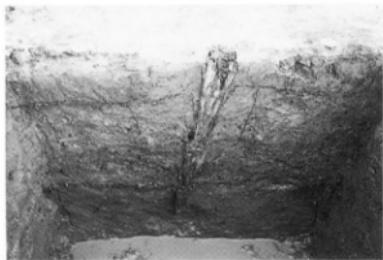
柱穴状土杭第2群 平面（北から）



K III 30 P 2 断面（東から）



K IV 01 P 2 断面（南から）



K III 60杭 断面（北から）

写真図版17 柱穴状土杭群

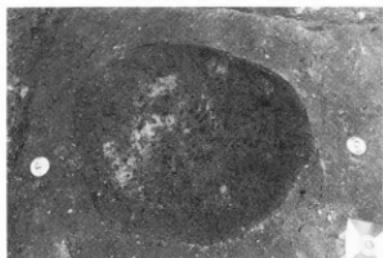


周辺断面 A-A' (北から)

S X01



平面・断面 (北から)

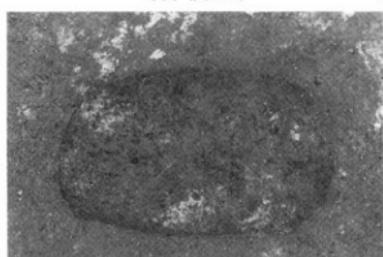


平面 (西から)

S X05

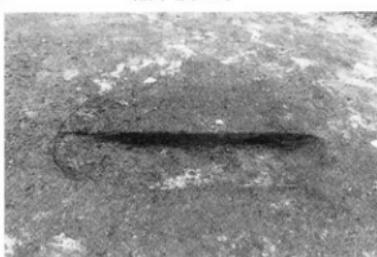


断面 (西から)

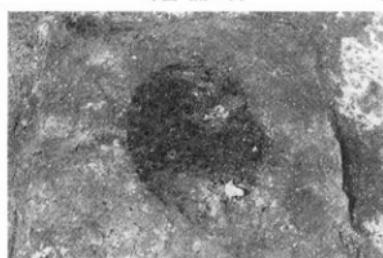


平面 (南から)

S X06



断面 (南から)



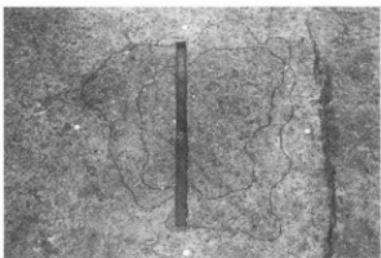
S X05 検出 (南から)



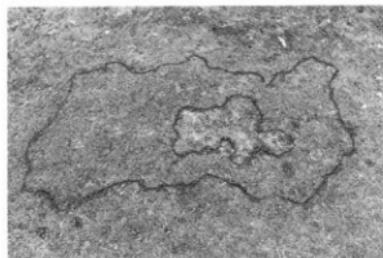
S X07 断面 (東から)



S X08 平面（東から）



S X09 平面（北東から）

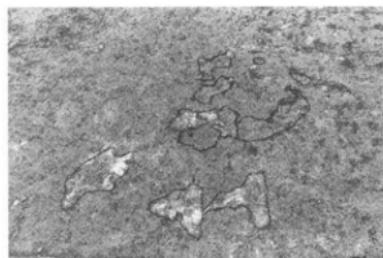


検出（北西から）



S X10

断面B-B'（南西から）



検出（北から）

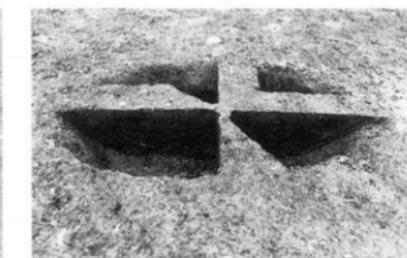


S X11

断面A-A'（北西から）

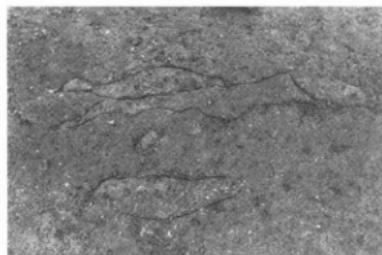


完掘（南西から）



S X12

断面A-A'（南東から）



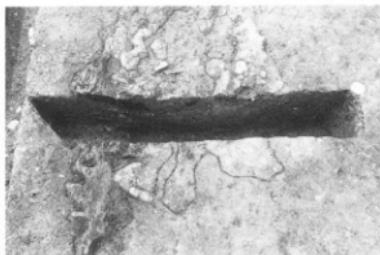
検出（南東から）



断面A-A'（北東から）



平面（北から）



断面A-A'（東から）



平面（北から）

S X15



断面（南から）

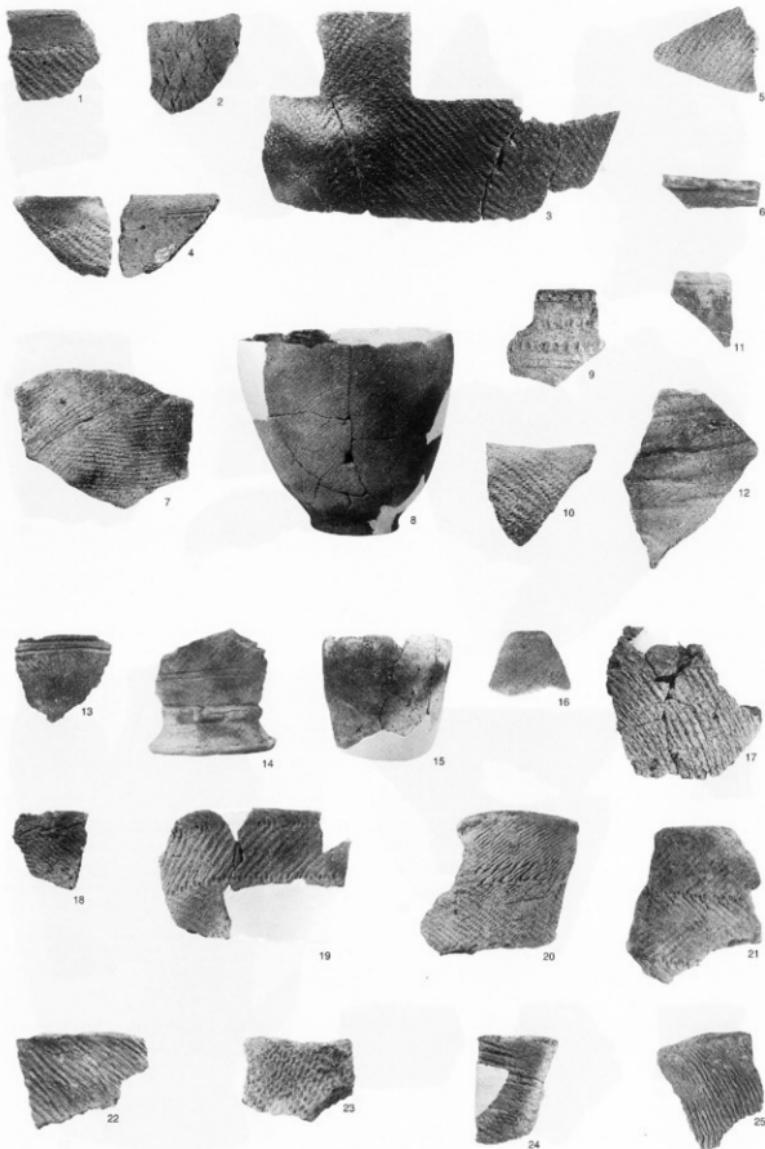


平面（南西から）

S X16



断面（南西から）



写真図版21 繩文土器（1）



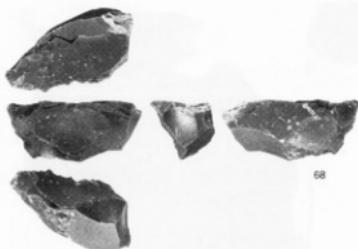
写真図版22 繩文土器（2）



写真図版23 繩文土器（3）



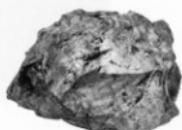
写真図版24 石器（1）



68



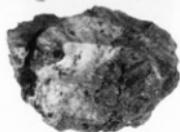
66



67



69+70



71



72

写真図版25 石器（2）



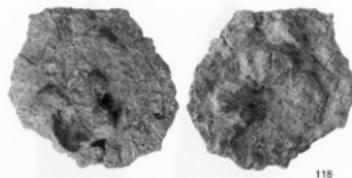
写真図版26 土器 (1)



写真図版27 土師器（2）



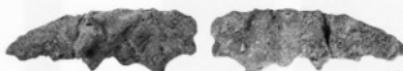
写真図版28 土師器（3）



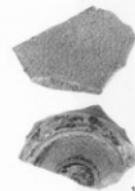
118



119



120



129



121



122



123



124

写真図版29 鉄製品、錢貨、磁器



125



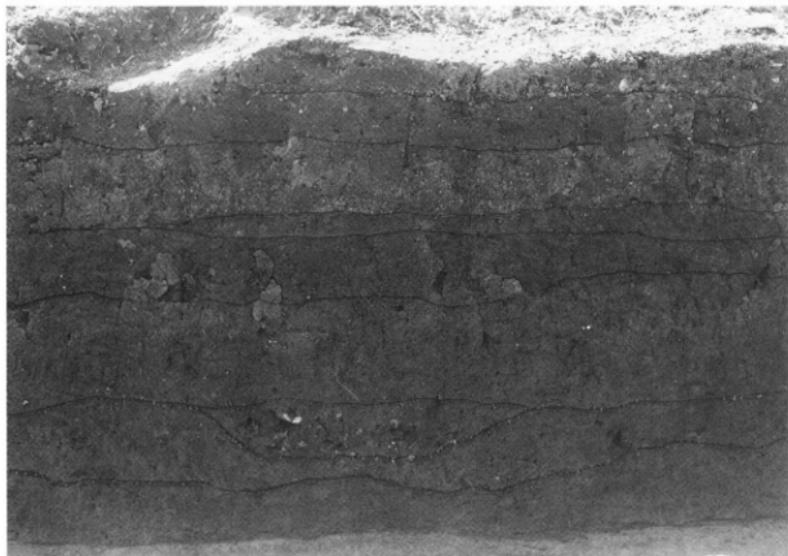
126



127



128



基本土層 D 南西壁（北東から）



基本土層 北西壁（B V 75）



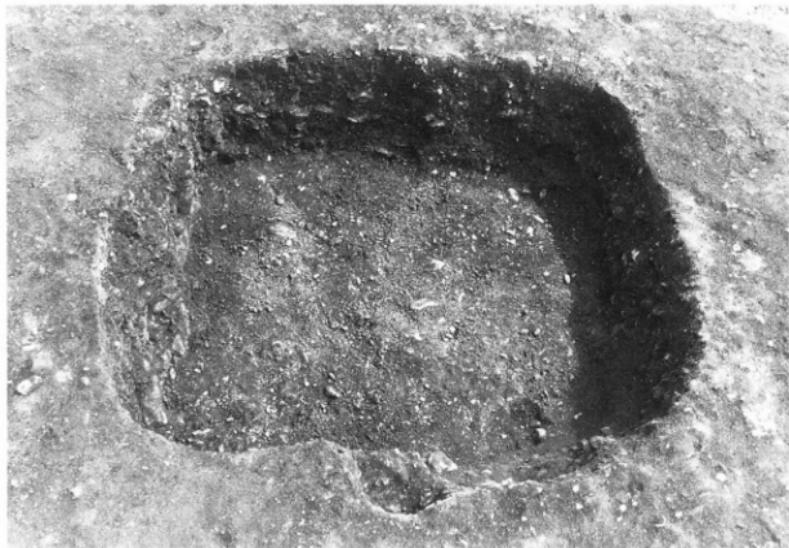
基本土層 北西壁（B V 38）



調査前風景（南西から）



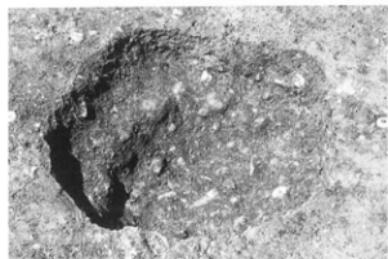
調査前風景（南から）



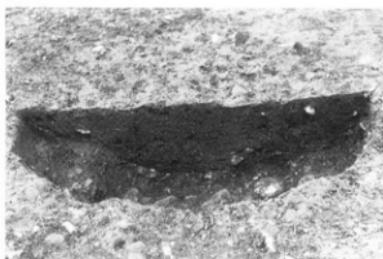
S X01 平面（西から）



S X01 断面B-B'（南から）



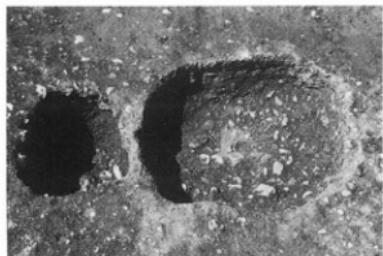
平面（東から）



S K01

断面（東から）

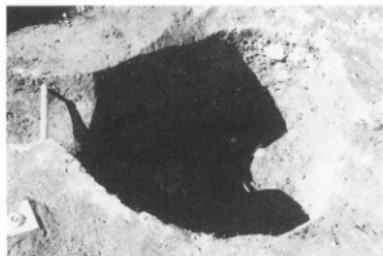
写真図版32 S X01、S K01



平面 (東から)



B V39 P 6、SK 02
断面 (東から)



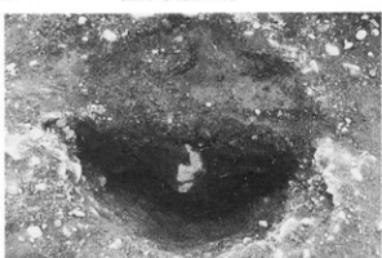
平面 (南西から)



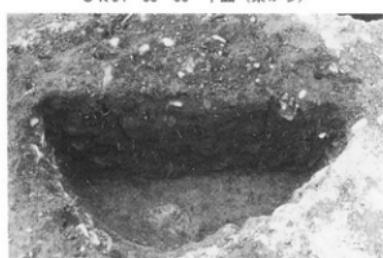
SK 03
断面 (南西から)



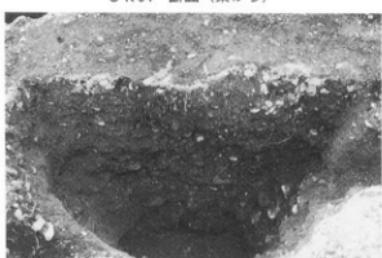
SK 04・05・06 平面 (東から)



SK 04 断面 (東から)



SK 05 断面 (東から)



SK 06 断面 (東から)



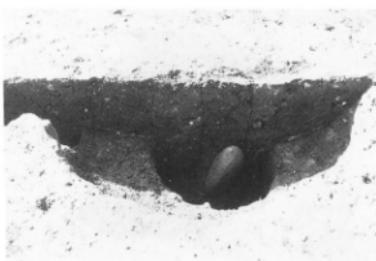
SK07 剖面(東から)



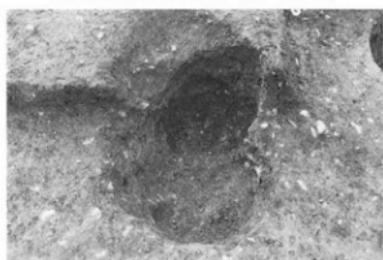
SK08 剖面(東から)



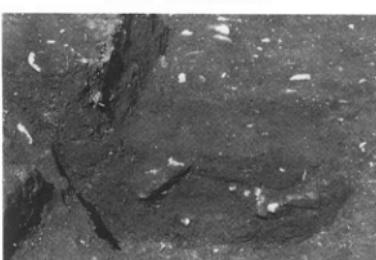
SK09、BV30P20・21 平面(西から)



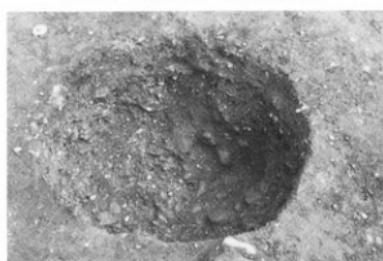
SK09 剖面(東から)



SK10、BV30P25 平面(東から)



SK10 剖面(南から)

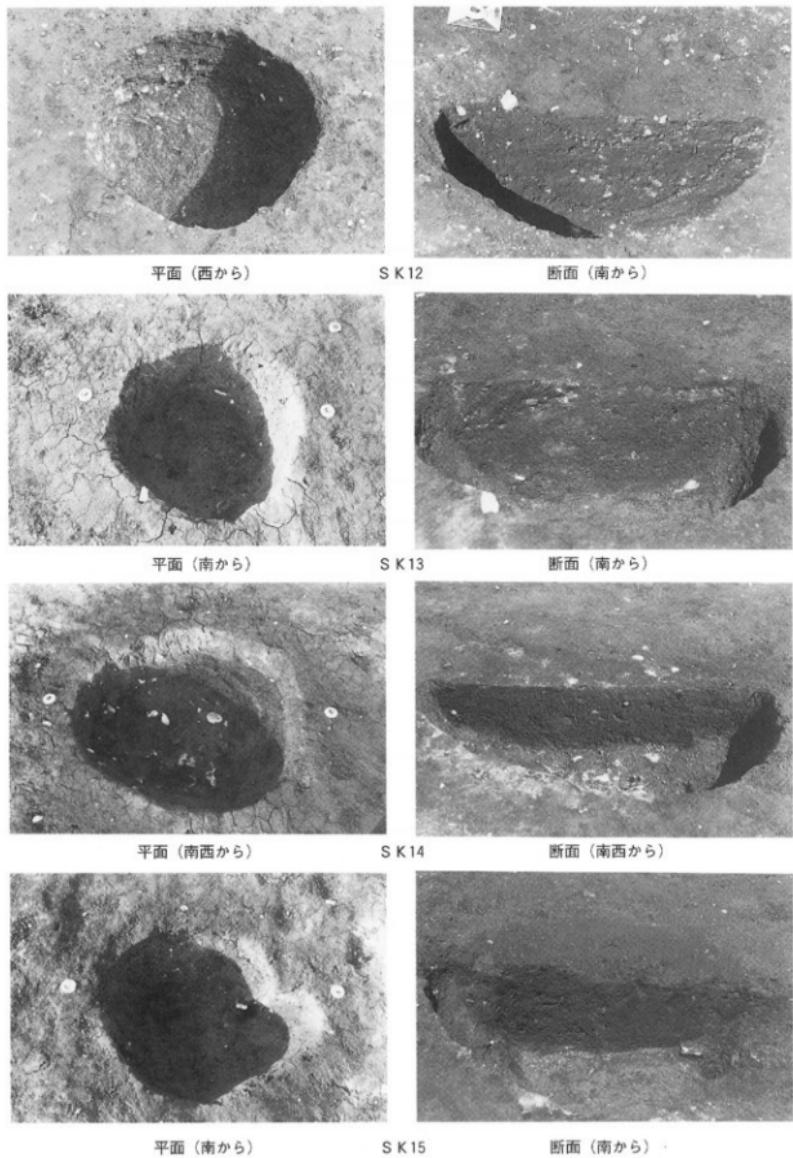


平面(西から)

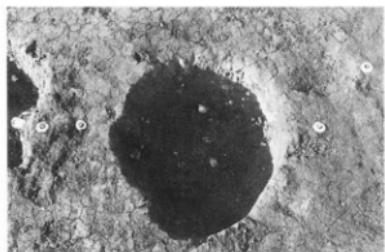


SK11

断面(東から)



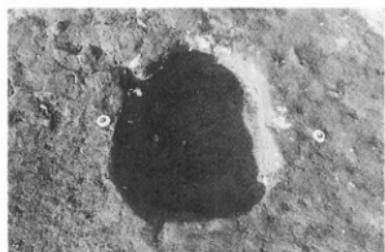
写真図版35 SK 12~15



平面 (南から)



断面 (南から)

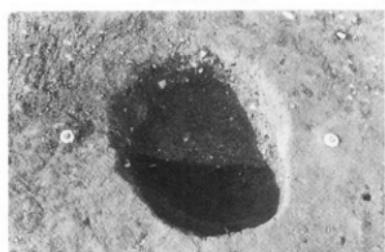


平面 (南から)

S K 18



断面 (南から)

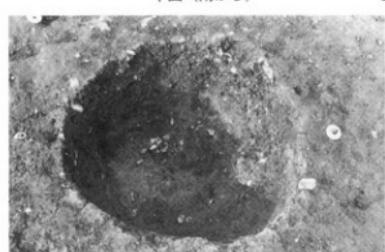


平面 (南から)

S K 19

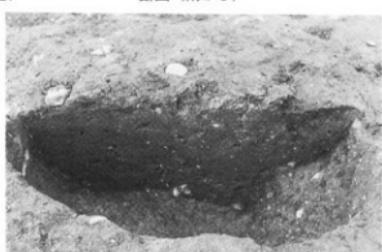


断面 (南から)



平面 (南から)

S K 21

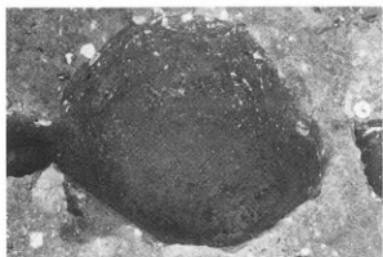


断面 (南から)

平面 (南から)

S K 22

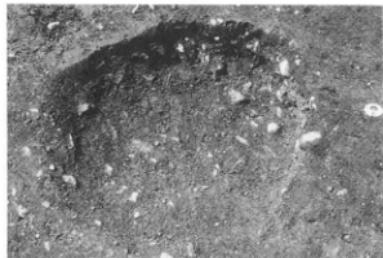
断面 (南から)



平面（南から）



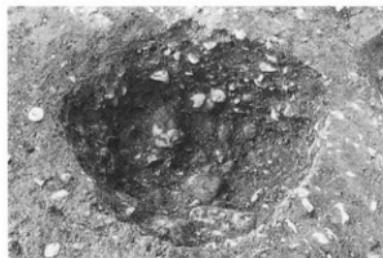
断面（南から）



平面（東から）



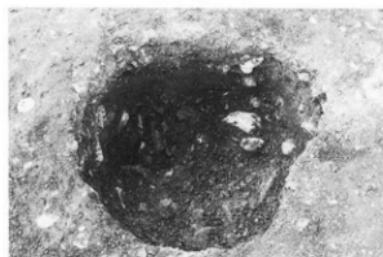
断面（西から）



平面（東から）



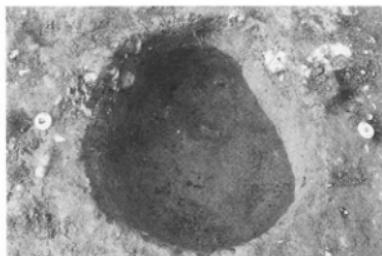
断面（西から）



平面（東から）



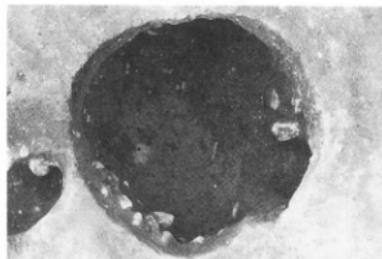
断面（西から）



平面（南から）



断面（南から）



平面（南から）



S K 28

断面（南から）

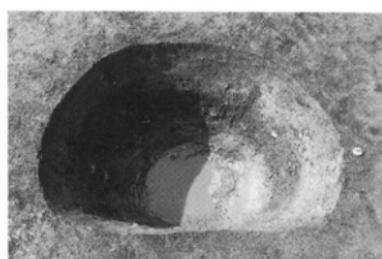


平面（北東から）

S K 30

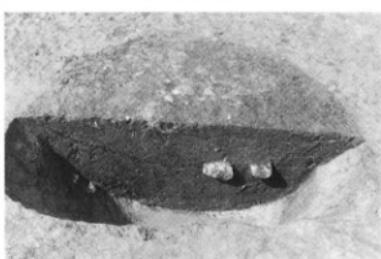


断面（西から）



平面（東から）

S K 31



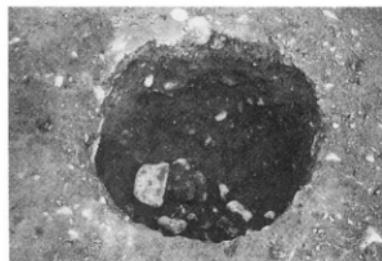
断面（東から）



平面（南西から）



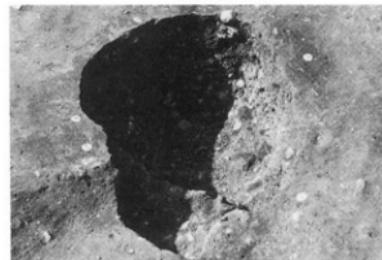
断面（西から）



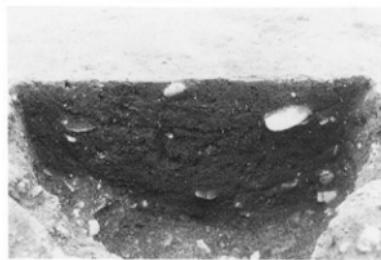
平面（東から）



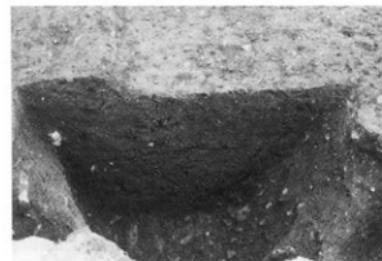
断面（南から）



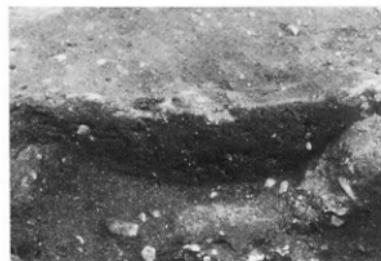
SK 36、37 平面（北東から）



SK 36 断面（北東から）



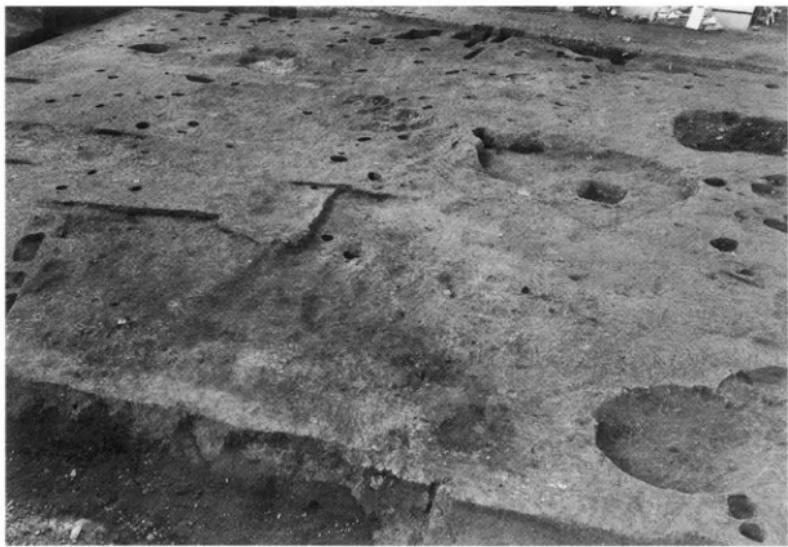
SK 38 断面（北東から）



SK 37 断面（西から）



柱穴状土杭群 第1・4群（南東から）



柱穴状土杭群 第2・5群（東から）



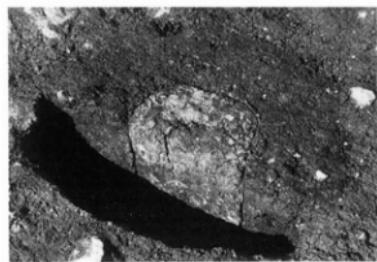
柱穴状土杭群 第3群（南から）



B V 30 P 20・18 断面（南西から）



B V 57 P 7 断面（南西から）



B V 56 P 3 断面（南から）

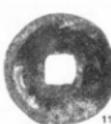
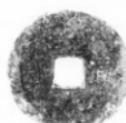
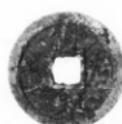


B V 66 P 2 断面（南東から）

写真図版41 柱穴状土杭群 第3群



写真図版42 繩文土器、石器



写真図版43 鉄製品、銭貨

報告書抄録

ふりがな	のざとかみいせき・のなかいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	野里上遺跡・野中遺跡発掘調査報告書							
副書名	国道4号小鳥谷バイパス建設事業関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第492集							
編著者名	丸山浩治 荒谷伸郎							
編集機関	(財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL019-638-9001							
発行年月日	西暦2007年3月5日							
ふりがな	ふりがな所	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	在地	市町村	遺跡番号	°	°			
野里上遺跡	岩手県二戸郡 一戸町字六久 保90-2ほか	03524	JF30- 1081	40° 10° 27°	141° 18° 14°	20050414 ~ 20050831	12,230m ²	国道4号小鳥谷バイパス建設事業に伴う
野中遺跡	岩手県二戸郡 一戸町字野中 117-3ほか	03524	JF30- 1033 117-3ほか	40° 10° 40°	141° 18° 17°	20050901 ~ 20050929	1,685m ²	緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
野里上遺跡	集落跡	縄文時代 奈良時代 平安時代 中世	土坑1基 堅穴住居跡2棟 耕作痕跡7区画 掘立柱建物跡2棟 火葬関連遺構10基		縄文土器・石器 土器器、鉄製品(刀子、鎌)、柱材、炭化種子 人骨片、中国産青磁皿、 銭貨(銅型元寶、洪武通寶、寛永通寶)			
野中遺跡	集落跡	中~近世	堅穴状遺構1基 土坑38基 柱穴状土坑群243個		縄文土器・石器 銭貨(淳熙元寶、洪武通寶、無文銭、寛永通寶)、 炭化種子			
要約 野里上遺跡では奈良時代前~中葉頃の堅穴住居跡、平安時代中~後半・To-aテフラ降下後の耕作痕跡(畠作)と掘立柱建物跡、中世後半の火葬関連遺構が検出された。野中遺跡では小形の土坑と柱穴状土坑が多数検出され、埋土から淳熙元寶、洪武通寶、無文銭、寛永通寶が出土している。								

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第492集

野里上遺跡・野中遺跡発掘調査報告書

国道4号小鳥谷バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

印 刷 半成19年3月1日

発 行 平成19年3月5日

発 行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電 話 (019) 638-9001
FAX (019) 638-8563

印 刷 杜陵高速印刷株式会社
〒020-0811 岩手県盛岡市川町23番2号
電 話 (019) 651-2110

